博 士 論 文

魯迅翻訳の研究とその周辺
- テクスト分析と動機付けの解明を中心に -

指導教員　盧　　濤　　教授
小柏　葉子　教授
松嶋　健　准教授

令和２年９月
広島大学大学院社会科学研究科
マネジメント専攻
単　海林

目　次

序章 …… 1
1　研究背景と問題意識 ……1
2　研究目的と研究方法 ……1
3　論文の構成 ……2

第 1 章　魯迅翻訳の先行研究 ……3
1　日本における近年までの魯迅翻訳研究 ……3
1.1　志賀の魯迅翻訳研究 ……3
1.1.1　魯迅の訳歴総説に関して……3
1.1.2　翻訳の目的に関して……6
1.1.3　翻訳の対象に関して……6
1.1.4　訳文体に関して……6
1.1.5　翻訳法に関して……7
1.1.6　翻訳の効用に関して……7
1.1.7　志賀の問題点 ……8
1.2　工藤の魯迅翻訳研究……9
1.2.1　翻訳準備時期……9
1.2.2　『哀塵』と『浙江潮』 ……10
1.2.3　日本におけるヴェルヌ作品の受容 ……11
1.2.4　魯迅と『小さなヨハネス』……11
1.2.5　工藤の問題点 ……12
1.3　山田の魯迅翻訳研究 ……14
1.3.1　梁啓超の「小説界革命」論と魯迅 ……14
1.3.2　魯迅翻訳活動の動機 ……15
1.3.3　外来思潮の受容による自文化意識の強化 ……15
1.3.4　中国文化界における魯迅の位置づけ ……15
1.3.5　「自覚なき実存」主義的思考形態 ……16
1.3.6　山田の問題点 ……17
2　中国における近年までの魯迅翻訳研究 ……18
2.1　呉の『魯迅翻訳文学研究』 ……18
2.1.1　翻訳家としての魯迅 ……18
2.1.2　魯迅各時期の訳業 ……18
2.1.3　翻訳方法・策略・動機について ……19
2.1.4　魯迅翻訳の効用及び現代における意義 ……20

2.1.5　呉の問題点 ……21
2.2　顧の『魯迅翻訳研究』 ……22
2.2.1 魯迅翻訳の位置づけ……22
2.2.2 魯迅の「硬訳」について……22
2.2.3 翻訳対象の選択……24
2.2.4 前期魯訳……25
2.2.5 中期魯訳……26
2.2.6 後期魯訳……26
2.2.7 関連刊行物と翻訳協力者……27
2.2.8 翻訳と創作の関係……28
2.2.9 顧の問題点……28
3　まとめ ……29

第 2 章　関連翻訳理論について……32
1　等価理論 ……33
1.1　「等価」の定義と種類 ……35
1.2　等価理論に基づく「翻訳」の定義 ……37
2　直訳法と意訳法の二元論 ……39
3　帰化ストラテジーＶＳ.異化ストラテジー……40
4　翻訳倫理 ……42
4.1　チェスターマンによる翻訳倫理の分類 ……42
4.2　ベンヤミンの「翻訳の課題」 ……43

第 3 章　魯訳の時期分けと初期翻訳 …… 47
1　魯訳時期の分け方 ……47
1.1　先行研究における分け方及びその問題点 ……47
1.2　筆者による分け方及びその理由 ……48
2　初期魯訳の翻訳対象 ……49
2.1　初期魯訳【Ｉ】の営み ……49
2.2　日本留学前の経歴 ……50
2.3　日本留学を通じて受けた影響 ……51
3 初期魯訳【１】の翻訳法 - 『九十七時二十分間月世界旅行』とその魯訳を中心に - 52
3.1　帰化ストラテジー ……53
3.1.1　章タイトルと章結びの「帰化」処理 ……53
3.1.2　外国人名の「帰化」処理 ……54
3.2　翻案 ……54

3.2.1　《月界旅行 辯言》のリライト ……55
3.2.2　局所的な意訳・改訳・自由訳……56
3.2.3　ＴＴ全体の再構築……59
3.3　文語の使用……59
4　初期魯訳【Ⅱ】……61
4.1　初期魯訳【Ⅱ】の営み……61
4.2　翻訳魯訳【Ⅱ】の文体・翻訳法……63
4.2.1　訳文体について……63
4.2.2　翻訳法について……64
5　初期魯訳の動機……65
6　まとめ……67
6.1　初期魯訳の文体……67
6.2　初期魯訳の翻訳法・ストラテジー・動機……67

第 4 章　魯迅の中期翻訳…… 69
1　「白話文運動」と魯訳文体の転換期……69
1.1　日本の「言文一致運動」と中国の「白話文運動」 ……69
1.2　魯訳文体の転換期……72
2　魯迅の翻訳法則の定着化（１）－『現代日本小説集』を例に－……73
2.1　外国人名の訳し方……74
2.2　欧文の訳し方……76
2.3　度量衡の訳し方……78
2.4　色あいの訳し方……79
3　魯迅の翻訳法則の定着化（２）－『断想』の外来語の訳し方を例に－……80
3.1　外来語の出現状況及びその魯訳……81
3.2　訳語の選択……82
3.3　形式の統一性……85
4　直訳手法から見る魯迅の異化翻訳 - 『羅生門』の中国語訳の比較を通して - ……89
4.1　語彙レベル……89
4.2　文構造レベル……94
4.3　表現レベル……98
4.4　魯迅の直訳・異化翻訳意識及び動機づけ……107
5　魯迅と厨川文芸論 - 『苦悶の象徴』等を例に - ……110
5.1　『苦悶の象徴』における厨川の文芸論……110
5.1.1　文芸は人間苦の象徴……111
5.1.2　文芸鑑賞の成立……111

5.1.3　文芸の役割……112
5.2　『象牙の塔を出て』における厨川の思想……112
5.2.1　『象牙の塔を出て』における文芸論……113
5.2.2　エッセイ及び現代文芸……113
5.2.3　厨川の日本批判と国民性改造論……114
5.3　『観照享楽の生活』等における厨川の観点……116
5.3.1　真の芸術家たる者とは……116
5.3.2　日本の芸術生活……116
5.4　厨川作品の翻訳動機……116
6　まとめ……117

第5章　魯迅の後期翻訳…… 119
1　梁魯論争……119
2　ソ連文芸論の魯訳……122
2.1　魯迅の「硬訳」……122
2.1.1　「的」の使用……123
2.1.2　語順の調整……125
2.1.3　訳語の採択……127
2.1.4　「死訳に近い硬訳」……128
2.2　「硬訳」にこだわる理由……133
3　小説の魯訳……135
3.1　文芸論における翻訳シフトの再確認……135
3.2　小説における翻訳シフトの確認……137
4　童話魯訳のストラテジー・翻訳法・動機……142
4.1　意訳か直訳か……144
4.1.1　《爱罗先珂童话集》の訳例…… 144
4.1.2　《小彼得》の訳例…… 146
4.1.3　《俄罗斯的童话》の訳例……148
4.1.4　《小约翰》の翻訳法……149
4.2　「童話」翻訳の動機……149
4.2.1　《爱罗先珂童话集》の翻訳動機……150
4.2.2　《小彼得》の翻訳動機……152
4.2.3　《俄罗斯的童话》の翻訳動機……153
4.2.4　《小约翰》の翻訳動機……154
5　まとめ……155

第 6 章　魯迅翻訳の再認識…… 157
1　魯迅翻訳の歴史的意義 ……157
1.1　「直訳法」・「異化翻訳」の現実的意義 ……157
1.2　現代中国語の発展への貢献……159
1.3　現代中国文学の発展への貢献……160
1.4　中国現代美術の発展への貢献……161
2　魯迅の翻訳活動とその創作活動との相関 ……162
2.1　翻訳が創作の言語表現に与えた影響 ……163
2.1.1　ゴーゴリと『狂人日記』……164
2.1.2　翻訳『沈黙』と創作『薬』……165
2.1.3　翻訳『労働者シェヴィリョフ』と創作『髪の話』等……166
2.2 翻訳が創作の内容に与えた影響 ……167
2.2.1　主語に関して……167
2.2.2　修飾語に関して……169
2.2.3　語順調整に関して……173
3　魯迅像への再認識……175
3.1　毛沢東による評価……175
3.2　魯迅のイデオロギー……177
4　まとめ……182

終章　結論と残された課題…… 184
1　本研究のまとめ ……184
2　結論……186
3　残された課題……190

参考文献…… 191

謝辞…… 197

序　章

1　研究背景と問題意識

魯迅は中国や日本、ひいては世界中においても作家として広く知られており、その創作や思想面に関する研究は極めて多い。ところが、その創作に負けないほど、400 万字に及ぶ魯迅の訳業に目を向けた研究者は今も尚少ない。それに、魯迅翻訳の研究においても、関連文献及び史実に基づいた一般論や抽象論が多く、テクスト対照分析というミクロ面での研究は皆無に等しい。

魯迅が翻訳を手がけてから約 15 年を経てデビュー作と呼ぶべき『狂人日記』を完成させたが、それは魯迅の翻訳の営みと切っても切れない関係がある。翻訳と創作は魯迅の生涯の文学活動の両輪なのである。従って、魯迅の訳業を無視し、ただその創作のみに目を向けたり、彼に対する定説を鵜呑みにしたりするだけでは、その文学活動の本当の姿を知ることはできないのであろう。

33 年の翻訳活動の中で、魯迅は 14 ヵ国 105 名の作家の約 200 の作品を日本語（大半を占めている）やドイツ語を通じて訳（重訳）している。初期段階前半の短い期間を除けば、「直訳」という翻訳方法を最期まで魯迅は貫いている。その間、彼の翻訳方法に対する批判が殺到していたにもかかわらず、魯迅はその翻訳方法を変えようとしなかった。

従って、魯迅が「直訳」法にこだわる理由は何なのか、翻訳に対する彼の認識は如何なるものなのか、翻訳という手段で何をしようとしていたのか、その訳材の選択が魯迅のどのようなイデオロギーを反映しているのか、ひいてはその翻訳法の歴史的意義があるかどうか、といった一連の疑問が浮かび上がってきた。

2　研究目的と研究方法

本研究の目的は、魯迅の翻訳法、翻訳ストラテジー、翻訳動機を考察し、各時期の魯訳の特徴、更にその翻訳思想及び魯訳の歴史的意義を究明することにある。

具体的には、魯迅の生立ちや当時の社会背景を整理しながら、魯訳の特徴によってその訳業を初期【Ⅰ】（1903～1908 年）、初期【Ⅱ】（1909～1918 年）、中期（1919～1928 年 5 月）と後期（1928.6～1936 年）に分けたうえで、各時期の魯訳を取り上げ、原文とのテクスト対照分析を行う。翻訳対象の取捨選択、訳法などを検討しながら、表層の翻訳法に対し、その深層に潜む魯迅の翻訳動機、翻訳ストラテジー、及び翻訳思想を追究してみる。また魯

迅が底本とした日本語関連資料が入手困難な場合は、コーパス及びデジタル資料も活用する。

3　論文の構成

序章では研究背景と問題意識を述べ、研究目的、研究方法について説明する。

第一章では、本研究と関連し得る日本と中国における近年までの魯迅翻訳に関する先行研究レビューを行う。

第二章では、本研究に有効と思われる翻訳理論を取り上げて概観し、魯迅翻訳との関連性に触れてみる。

第三章から第五章までは魯迅の各時期の訳業を対象に、ケーススタディとしてのテクスト対照分析を行う。

第三章では、まず魯迅の訳業を幾つかの時期に分けた上で、その理由を述べる。次に、初期魯訳の翻訳対象になった作品を提示し、その取捨選択に当たる魯迅の意図を探りながら、若き魯迅の経歴と関連付けて彼の伝統文化および外来思潮に対する態度を議論してみる。それから、初期魯訳の翻訳法やストラテジーの考察により当時魯訳の特徴を把握しておく。最後に初期魯訳の動機付けを分析する。

第四章では、まず「白話文運動」と「言文一致運動」に関連付けて魯訳文体の転換を検討し、1919 年を魯訳文体の転換年とする理由を述べる。次に、中期初め頃の『現代日本小説集』と中期終り頃の『思想・山水・人物』の原文・訳文のテクスト分析を行い、量的な統計を基に、魯迅なりの「翻訳法則」の定着化を検討する。それから、『羅生門』とその魯訳、そして他の 6 本の中国語訳との対照、対比分析を行い、魯迅の直訳法、異化ストラテジー及び抵抗式翻訳を考察する。更に、『苦悶の象徴』や『象牙の塔を出て』における厨川白村の文芸論を記述し、魯迅の思想との共通点を議論しながら、魯迅の翻訳動機を解明する。

第五章では、まず後期魯訳におけるソ連文芸論の訳業を「梁魯論争」に関連付けて議論する。それから文芸論の魯訳の特徴と、小説の魯訳の特徴を実証的に考察してみる。最後に魯迅の童話翻訳の特徴や動機についてテクスト分析を行いながら論を加える。

第六章では、魯迅翻訳の現実的意義を確認したうえで、現代中国語、現代中国文学及び現代美術の発展への貢献を検討した上で、魯迅の翻訳活動とその創作活動との相関について分析を試みる。更に、中国で神格化された魯迅のイデオロギーを議論したうえで、その訳材との関連性を提示してみる。

終章では、本研究で得られた結論をまとめた上で、残された課題と研究の展望を述べる。

第 1 章　魯迅翻訳の先行研究

すでに指摘したように、作家としての魯迅に関する研究は数多く見られるものの、翻訳家としての魯迅に対する研究は極めて少ない。

魯迅翻訳を対象とした研究の多くは、観念論的なものにとどまり、原文と訳文のテクスト対照分析に基づく実証的研究が皆無に等しく、魯迅自身の訳作の「序」における言説や、魯迅の日記、雑文の引用に基づくものが多い。そのためか、相互に重複する抽象論が大半を占めている。

例えば、次に挙げる志賀、工藤の研究においては、膨大な資料を踏まえた結論が導かれている一方、テクスト対照分析は欠けている。更に、両氏とも研究の途中でほぼテクスト対照分析を手放す状態になっており、結局研究方向を転換している。

中国における呉、顧の研究にも同様な傾向が見受けられる。両氏とも専門が日本語ではないにもかかわらず、日訳を主とする魯迅翻訳を研究している。そのため、原文・訳文テクスト対照分析が成されていないことはもちろんのこと、魯迅自身の言説に頼りすぎた結果、事実と齟齬する論述が見受けられる。

そこで、この章において、近年までの日本と中国における魯迅翻訳に関する研究について、その研究手段、分析方法、得られた結論をまとめたうえで、再検討すべき点を指摘してみる。

1　日本における近年までの魯迅翻訳研究

1.1 と 1.2 で、魯迅翻訳を研究対象とした志賀と工藤の研究、1.3 で、魯迅翻訳と緊密な関係を持つ山田の研究をとりあげて論を進める。

1.1　志賀の魯迅翻訳研究

志賀正年は「魯迅翻訳研究」という題目で、魯迅の翻訳について、訳歴総説、翻訳理論、訳品分析という三つの部分に分けて論じている。

1.1.1　魯迅の訳歴総説に関して

志賀（1955）「『魯迅翻訳研究』（一）‐訳歴総説‐」において、魯迅の歩みと翻訳は、（一）翻訳受容時代（1898～1902 年）、（二）翻訳工作時代（1902～1936 年）という二時代に大別されている。

志賀は「（一）翻訳受容時代」において、魯迅の生立ち、学歴及び読書歴といった事実を概説し、江南陸士師学堂附設の鉱務鉄路学堂への転入をきっかけに、翻訳によって伝わってきた西欧の自然科学や社会科学、いわゆる「新学」を魯迅が吸収したと述べている。そして後の魯迅自身の言説を引用しながら、当時の変法維新の失敗と為政者の無気力といった外因が魯迅に怒りや反抗の感情を抱かせたのみならず、魯迅の自民族開化への意識の芽生えの契機ともなったと分析している。その上、優れた学術に対する異常な関心と翻訳文化への胎動という内的要請で、魯迅の探索の眼が中国から海外へ、海外から中国へと向けられ始めたと論じている。またこの頃を、後に魯迅が来日後、弘文学院での約二年間、もっぱら人間性や国民性の問題に注意を払うようになった一面、日本語力を介し、後に翻訳を進める貴重な素地を築いた転換期と考え、魯迅の翻訳受容の受け身から訳業への能動化の触媒だとみている（p.71－76 を参照）。

それから、「（二）翻訳工作時代（1902～1936 年）」において、魯迅の翻訳活動を、A 日本留学時期（1902～1909 年）、B 北京工作時期（1912～1926 年）、C 厦門広州上海工作時期（1926～1936 年）に分けたうえで、その訳品を、a 日本訳品、b ロシア訳品（ソ連含め）、c その他の訳品と三別を設け、総括的な記述が行われている。

ところが、その記述には、史実に関する叙述が多く、テクスト分析に基づく体系的な論述は展開されていない。

その中で、魯迅の日本留学、北京滞在及び厦門、広州、上海の滞在によって魯訳の時期を分けることは、訳業の特徴との関連性が薄いように思われる。

また、志賀は魯迅自身の序文・跋文の言説を引用しながら、魯迅の科学小説の翻訳の理由、そしてロシア文学及びソ連文学への異常な関心を提示している。とりわけ重訳に対する魯迅の態度は、(1) 重訳と直接訳との価値判断は、もっぱら訳文自体の優劣に求めるべきである、(2) 重訳の方法によって、訳材の英文偏重を防ぐことができる、(3) 翻訳の要義は、むしろ訳材の選択にある、という三点にあると主張している。

全篇の結論としては、「魯迅の訳業は、まさしく、彼の著作と相匹敵しており、その然るゆえんは、a. 多くの外国書を読む、b. 時宜に適して必要な、しかも、さまざまな訳材を、正確に重訳する営みのまにまに、ひたすら、彼我文芸の比較向上を、意図したものに他ならない。かくて、批判と示唆〈評論〉、人生と興味〈小説・戯劇〉、理想と精神〈詩歌・童話・

随筆〉の諸要素をはらむ彼の訳歩[1]は、中国文化をして、不断に前向き――停滞から前進へ、旧態から更生への――化を促してやまなかった」というところに帰結されている。

最後に、その訳歴の総括として、志賀が次の図でまとめている[2]。

図表１－１魯迅訳業表

計	C 1926～1936	B 1912～1926	A 1902～1909	訳期別 ＼ 訳種別	
40	27	8	5	訳書	訳刊書編
58	46	8	4	訳編	
27	23	4		a.日本	訳品所属（関係）
41	33	6	2	b.ロシア（ソ連）	
30	17	6	7	c.その他	
43	35	8		評論	訳品内容
27	18	3	6	小説	
8	5		3	詩歌	
7	7			随筆	
6	4	2		童話	
5	3	2		戯劇	
2	1	1		その他	
98	73	16	9	計	

「附註」

一、訳品所属Ｃの内訳は、フランス９、ドイツ８、ハンガリー、スペイン、欧州各２、オランダ、チェッコ、英国、ルーマニア、ブルガリア、ノルウェー、オーストラリア各１となっている。

二、訳品内容の「小説」には、科学小説Ａ、c3を、「詩歌」、「童話」、「戯劇」には、それぞれ理論をも含ませ、「その他」は、Ｂ報告文とＣ薬用植物との訳である。

三、訳刊書編98については、大半が日訳、次いでドイツ訳、日訳とドイツ訳、その他よりの重訳である。

---

[1] 原文の中で志賀が「訳歩」という言葉を用いているが、「翻訳活動の道程」という意味だと考えられる。

[2] この図表の示し方は適切ではないが、原作を尊重するため、そのまま引用した。また附註も志賀によるものである。

出所　志賀（1955）p.91

「図表 1-1」と同様に、後の志賀の研究においても、統計を取りながら分析が行われているが、そのような分析は翻訳理論との関連性が薄いように思われる。

また、志賀（1956a）「魯迅翻訳研究（二）翻訳理論 - 初期 - 」、（1956b）「魯迅翻訳研究（二）翻訳理論 - 初期補・中期 - 」、(1957)「魯迅翻訳研究（二）翻訳理論-中期 - 続」、（1958）「魯迅翻訳研究（二）翻訳理論 - 後期（1） - 」及び（1969）「魯迅翻訳研究（二）翻訳理論 - 後期（2） - 」において、魯迅翻訳の理論体系を翻訳初期（1898～1926 年）、翻訳中期（1926～1932 年）、翻訳後期（1932～1936 年）に分けて経糸とし、また、横糸を各時期の、A 翻訳理論（主として、著書篇に見える理論、観点、意義、論戦など）、B 翻訳実践（主として、訳書篇に見える文体、方法、態度、経過など）に置き、究明しようと述べられている。

この５本の論文において、志賀は魯訳の対象、文体、方法、目的、効用などについて年代の順を追って魯迅自身の言説と関連付けてケースごとに論述を展開している。しかし、志賀の論述はまとまったものではなく、事実の記述の中に混在している。そこで、できるだけその論述をまとめ、「翻訳の目的に関して」、「翻訳の対象に関して」、「訳文体に関して」、「翻訳法に関して」、「翻訳の効用に関して」に大別して示す。

1.1.2　翻訳の目的に関して

志賀（1956a）において、『月界旅行・弁言』、『集外集　序言』及び楊霽雲宛ての手紙における魯迅の言説を引用し、魯訳早期の科学的な著訳は、訳法も訳文体も非個性的であるが、科学知識の紹介、啓蒙などを目指しながら、社会の歴史的進展を探求する欲求に基づき発したものだと論じている。

1.1.3　翻訳の対象に関して

魯迅の訳材観には特異な一端が窺える。即ち、定石ではなく、名作の代わりに中国に適切かつ身近な内容を具備したものがその翻訳対象となっていると、志賀（1956b）は『壁下訳叢小引』における魯迅の言説を引用しながらその訳材選択について論じている。

1.1.4　訳文体に関して

口語による訳出を提案した魯迅は、その「硬訳」の方法で外国文芸を中国に導入したり、大衆の啓発を促すと同時に、中国語の精密化を目ざす新語法を採り入れたりしている。このようにして読者の思考力及び批判力の深化によって、訳文体及び訳語句の充実と新生とを魯迅が願っていると、志賀（1957）は『翻訳についての通信』における魯迅の言説を引用して述べている。

1.1.5　翻訳法に関して

志賀（1956a）は、魯迅の雑文『拳術と拳匪』からの引用に基づき、共時的に内容を考察した上で有意義な訳材を選ぶと同時に、訳字句をよく吟味することによって、外的表現に幻惑されずに、翻訳の内的本質を把握するという魯迅の抱く翻訳態度が窺えると述べている。そして、雑文『咬文嚼字一・二』から魯迅の言説を引用し、男女平等の立場で、女性姓名の無意味な美化訳を論難すると同時に、地名訳の美化修飾にも魯迅が反対している一方、外国人名を訳す際、従来の百家姓への執着を切り捨て、妥当な音訳と原名の併用を推奨していると述べている。また、『桃色の雲　序』の魯迅の言説を引用し、動植物の訳法等を例に挙げながら、考証に立脚した科学的な翻訳姿勢に魯迅の「寧信而不順」（すらすら読めなくても忠実に）の象徴が認められると論じている。それに、『苦悶の象徴　引言』から魯迅の言説を引用し、魯迅自ら「的」と「底」の使い分けの説明の例を挙げながら、直訳法の採用、そして構文の順序面においてもいたって忠実に準拠したと評価している。

更に、魯迅の雑文『わからない音訳』における言説を引用し、国学を明確に論ずるためにも、当然外国字を当てはめ、新式標点を用いるべきであり、忠実かつ科学的な音訳の提唱によって、国学者の啓発を促している（1969a）と、魯迅のことを評価している。

志賀（1956ｂ）において、『思想・山水・人物　題記』から魯迅の言説を引用し、魯迅が原文の内容を忠実に伝達することを第一義にし、取捨の判断をある程度読者に委ねている。啓発の押し売りを避けながら、漸進的かつ多角的な成熟を読者に期待していると論じている。

1.1.6　翻訳の効用に関して

志賀（1956a）は、雑文『ふと思いついて』における魯迅の言説を引用しながら、魯迅が外観美より作品内容全体の構成を重視し、永生的な内容移植のため、読者の興味をそそる為の、一見カットしても構わない語句も略せずに訳出していると指摘した。その上で、魯迅はその視線を民族の将来へも注ぎ、事物の本質を見抜く者だと讃えている。そして、『域外小説集』

は企画・方法としては正当だとは言えるが、訳材の選択や訳文体の表現など、内容面では時勢の主流に乗りえなかった。いわば特異性はあっても、普遍性に欠けていた。しかし、魯迅のこれがロシア（及びソ連）関係訳業への口火を切る契機を生んだと、『域外小説集　序言・略例』から魯迅自らの言説を引用して論じている。また、魯迅が中国文は一面性急であり、詩的童話翻訳に不向きであり、間の保持や余情の示しにくさを巧みに指摘していると、『池辺　訳者附記』における魯迅の言説を引用しながら讃えている。それに、雑文『突然限界をわきまえて』における魯迅の言説に基づき、創作・翻訳・批評の三者は自立共存し、各自の限界をわきまえつつ、その使命達成を図るべき点に魯迅が触れていたと論じている。更に、雑文『天才の出るまえ』における魯迅の言説に基づき、世界の潮流から創作と翻訳の関係を眺めている魯迅のこと、またその訳業自体に備わっている排他独善の偏見や旧弊国粋の狭量の除去、視野拡大や異質摂取の計りを讃えている。

志賀（1956b）において、雑文『語絲差押え雑感』における魯迅の言説を引用し、ロシア文学に対する一部の知識人の食わず嫌いな態度に対する魯迅の反応を記述し、魯迅の訳業が障害を打破し、時代啓発という役割を果たしていたと評価している。また、「『近代美術史潮論』の読者諸君へ」における魯迅の言説を引用し、有益な訳材は無意味な創作に優ると考える魯迅が、内容の良否及び収益の有無に注目し、それを通して中国文芸の質的向上を図ろうとしていると論じている。更に、雑文『今日の新文学の概観』における魯迅の言説を引用し、翻訳を通じ、彼我文芸の比較進展をはかるべきであり、また現状を打破し、出版物への抑制を除く有効な方策を考えながら､魯迅が訳材範囲の拡大意義にも言及していると論じている。

以上から分かるように、志賀の研究は原文・訳文のテクスト対照分析に基づく実証的研究ではなく、魯迅の言説を引用しながらコメントを付け加えて構成されたものである。

1.1.7　志賀の問題点

志賀の魯迅に対する評価（結論）は、「後期（2）あとがき」（1969 p.69）に書いてある通りである。

「〈魯迅と翻訳〉の基調を成すものに、しっかりと中国の現代を踏まえ、現代に益する諸外国の文化遺産を幅広く訳介しつつ、終始、中国の新生を希求してやまなかった魯迅的理念を指摘することができる。そして、彼の理念を支える要素としては、（1）分析批判、（2）選択採取、（3）革新前進の三面が認められる。さらに論ずるならば、中国民族の継承する文

化遺産を現代的意義と価値において分析し批判しながら、その観点に有益な訳業に従事した面(1)、中国人民の視野拡大に資する切実な内容の訳材を選択して採取した面（2）、外国の時流を反映した進歩的かつ体系的な諸種の革新訳品を多産することによって〈以資借鑑〉中国を前進させ変革させようと願った面（3）が存し、これら三面を連結しつつ世界化すべき新責務を次掲のごとく、中国青年に負託している…」。

志賀は詳細かつ丁寧に関連資料を調べた上で論述を行っている。しかし、翻訳理論の研究とは言いながらも、すでに指摘したように、テクスト分析に触れずに魯迅自身の「訳者附記」、雑文、文通の中で言及した翻訳関連の言説を引用し、多少のコメントを加えてできたものである。主な問題点として、次の 3 点にまとめて提示しておく。

① 魯迅の滞在先によって魯訳の時期を分けるのが大きな問題である。第 3 章 1.1 と 1.2 で指摘したように、魯訳の特徴によって分けるのが適切だと思われる。

② 魯迅自身の言説の引用から導かれた見解がほとんどである。翻訳理論の研究というより、魯迅の翻訳態度の考察と言ったほうが適切である。

③ 事実の記述が多く、論述はある程度しているが、抽象的なものにとどまっており、テクスト分析は皆無に等しい。

1.2　工藤の魯迅翻訳研究

魯迅翻訳の研究者の一人として、工藤貴正氏も挙げられる。

工藤は魯迅の翻訳の意義を考察することを目的とし、「外国文学の受容と思想形成への影響，そして展開――」というテーマで、5 本の論文を出している。

1.2.1　翻訳準備時期

工藤（1989）は、魯迅の生立ちを記述しながら、魯迅が翻訳に着目する契機となった時期をその翻訳準備時期と見なし、「内」から「外」へという視点で分析を行っている。すなわち、生まれてから「三味書屋」通学までは「内」、祖父の投獄事件、父の病死、公務鉄道学堂の入学等は「外」だとみている。翻訳の面において魯迅が厳復と林紓から受けた影響は大きいものだが、その前の黎汝謙の『華盛頓傳』も無視できないと工藤は指摘している。

工藤（1991）は、周作人、許寿裳及び魯迅自身の日記等を引用しながら、厳復『天演論』と魯迅の関りを一つの視点として分析し、魯迅の翻訳の意義の考察を行った。結論としては、「魯迅の厳復『天演論』受容において重要なことは，一つに、中国民族に対する危機意識に

共感させ，魯迅独自の〈進化論〉の思想を生み出す契機となったことであり、一つに、その思想を生み出した外国文学との出会いを決定的なものとしたことであり、一つに、口語で作品を書く以前の彼への文体影響を与えたことである」（p.124）と論じられている。

工藤（1992）では、厳復と同じ桐城派である林紓の翻訳小説、そして梁啓超の創刊した『清議報』、『新小説』に掲載された翻訳政治小説『佳人奇遇』、翻訳科学小説『海底旅行』を手掛かりに魯迅との関わり、そしてそれらが魯迅の翻訳対象の選択や訳文体への影響について論じられている。また増田渋の言説を引用し、林紓の翻訳は西欧近代の思想学説を翻訳紹介した厳復と異なり、社会革新の現実的な動力という視点では評価できかねるが、文学思想という点からすると、魯迅を含む中国の知識人に世界のことを理解させることにより、中国の文学の発展に多大の功績を残したと、工藤は強調している。後に林訳に対し、魯迅は愛読から不満、そして排斥へと変わっていったが、始めは相当傾倒していたのが事実である。魯迅が林訳小説を受容したのは、ある意味では、西洋文学を理解するための道具としてだけだろうと工藤は分析している。

また、工藤は周作人の文章と日記の内容を引用しながら、魯迅が梁啓超の創刊した『清議報』と『新小説』に掲載された翻訳小説をほとんど読んでおり、多大な影響を受けたと指摘している。その中で、梁啓超の手によって訳された政治小説『佳人奇遇』は原文重視の訳文体であり、魯迅の訳文体に影響を与えたと分析している。翻訳対象の選択の面においては、初期魯訳の『哀塵』、『月界旅行』、『地底旅行』のいずれも、それらの影響を受けたものだと、工藤は述べている（p.91-111 を参照）。

1.2.2　『哀塵』と『浙江潮』

工藤（1993）では、魯迅の初訳に当たる『哀塵』を掲載した『浙江潮』という雑誌はどんな性格を持っているのか、そして『哀塵』はなぜ翻訳対象にされたのか、その訳文の特徴は何なのか、について論述を展開している。

まず、『浙江潮』は東京在住、浙江出身の留学生たちによる「浙江同郷会」の会誌であり、「滅満興漢」を意図する革命派の雑誌である。第 5 期より、魯迅の親友である許寿裳がその主編を引き継いだ。魯迅が終生師と仰いだ章太炎の詩、そして魯迅の『斯巴達之魂』、『哀塵』といった最初の作品も『浙江潮』に掲載されていると述べている。

さらに、工藤は、魯訳『哀塵』は日本でのユーゴーブームに乗って登場してきたと分析し、黒岩涙香の『噫無情』（「レ・ミゼラブル」）と時期が重なっていることから、魯迅が恐ら

く涙香の『噫無情』を読んでいたのであろうと推測している。また、涙香の翻案を底本とせず、原文重視に徹した森田思軒の日本語訳を底本としたことは注意するに値すると語る一方、『哀塵』が原文重視の、文言の直訳体であることを工藤は強調している（p. 71－88 を参照）。

1.2.3　日本におけるヴェルヌ作品の受容

工藤（1994）では、日本におけるヴェルヌ作品の受容のされ方を、時代背景、日本におけるヴェルヌ作品の翻訳状況、そして翻訳者がヴェルヌ本人への認識の程度を通して考察したうえで、日本経由で中国におけるヴェルヌ作品の受容のされ方にも触れている。

まず、『哀塵』に次ぐ魯迅の長編科学小説訳作『月界旅行』、『地底旅行』と『北極探険記』[3]のいずれもヴェルヌの作品であるが、それは当時日本翻訳界における翻訳ブームを受けた結果であろうと工藤は述べている。

当時、民族危機意識が高まると同時に、明治政府が福沢諭吉の「脱亜入欧」を採択しようとしていた。西洋の科学文明の重要性を民衆に伝え、認識させるべきだと考える日本翻訳界が、ヴェルヌ科学小説の内容そのものに魅了されている一方、ヴェルヌ本人にはあまり関心を示さなかった。その結果、フランス人のヴェルヌのことは、「米国ジュルスベルン」や「英国ジュールスベル子」というふうに紹介されている（それは底本とした英訳版による間違いであるが）。

日本語訳を底本としたため、魯迅もヴェルヌの国籍と名前を間違えて訳したが、その翻訳態度はけっしていい加減なものではなく、寧ろ日本語原文を尊重しているというべきだと工藤は述べている（p. 129－140 を参照）。

しかし、この結論は工藤の憶測によるものであろう。第 3 章の第 3 節で考察したように、当時の魯訳は「原文尊重」ではなく、むしろ意訳、改訳、翻案というべきである。

その後、「つづく」と書いてあるが、未完成のままで、工藤は「魯迅，ファン・エーデンへの共鳴 - 魯迅訳，パウル・ラッヘ『〔小さなヨハネス〕序文』とポル・デ・モント『フレデリック・ファン・エーデン』の記述を中心に - 」といった論文を発表した。

1.2.4　魯迅と『小さなヨハネス』

工藤（1995）は、魯迅の 30 年に亘って気に入った『小さなヨハネス』とその作者ファン・エーデンに対する魯迅の評価を紹介し、エーデンと当時オランダの文学状況を概説しながら、

[3] 訳文紛失。

厨川白村『苦悶の象徴』と関連付けて魯迅がエーデンに共鳴を起こす原因を分析している。

まず、工藤は魯迅が如何にエーデンと『小さなヨハネス』に傾倒しているかについて魯迅自身の言説を引用しながら論じている。

次にオランダでもっとも有名な文学機関紙『新指導』の精神的なリーダーであるとともに、詩人、精神科医としても、多岐に亘って名を馳せたファン・エーデンが如何に偉大な人物であるかを工藤はエーデンの業績を讃えながら述べている。

それから、ポル・デ・モンドの『フレデリック・ファン・エーデン』と魯迅の「『小さなヨハネス』序言」との比較を行い、両者の類似性を提示することによって、魯迅がポル・デ・モンドの『エーデン』を訳したからこそ、『小さなヨハネス』を理解できた部分もあるだろうと、工藤は分析している。と同時に、魯迅は厨川白村の「象徴の暗示性・刺激性」を論じる理論的な実作としての『苦悶の象徴』に出会ったため、催眠療法に習熟した精神科医であったファン・エーデンの「象徴と写実の童話詩」とされている『小さなヨハネス』を読み取ったと、工藤は指摘している。

さらに、「三・一八事件」発生による「愛」、「犠牲」、「死」の意味を具象化された現実として突きつけられたことによって、『小さなヨハネス』の翻訳の意義がより一層増している。それが「四・一二クーデター」と相まって、魯迅の翻訳意欲を駆り出したと、工藤は分析している。

最後に魯迅は翻訳によって、エーデンの文学運動の立場を理解し、そしてエーデンの人間性への理解と共感を一層深めたと、工藤は指摘している（p.23-31 を参照）。

1.2.5　工藤の問題点

工藤は関連資料や史実を踏まえながら、歴史的社会背景を考慮に入れていろいろな事象や出来事について丁寧に調べた上で論を進めた。しかし、その研究には、問題点がいくつか残っており、再検討する余地が十分考えられる。

① 「翻訳準備期」を除けば、理論的研究と言えるものは稀である。また、魯迅の翻訳を対象にして完全に分析を完成させたのが最初の魯訳に当たる『哀塵』だけである。その後、魯迅翻訳とつながりを持たせた研究も見受けられるが、魯迅の思想面の考察のほうに転向しているように思われる。その辺は下に示すその後の工藤の関連論文の題目で分かるであろう。

工藤（1995）「もう 1 人の自分,『黒影』の成立（上）‐魯迅『鋳剣』の形成に至る『復讐』『預言』の具象性と『影』の心象性について‐」

工藤（2002）「魯迅文学と西洋近代文芸思潮」

工藤（2003）「魯迅と唯美・頽廃主義　−板垣鷹穂『近代美術史潮論』・本間久雄『欧洲近代文芸思潮概論』と美術叢刊『芸苑朝華』を中心に‐」

工藤（2005）「魯迅と自然・写実主義　‐魯迅訳・片山孤村著『自然主義の理論及技巧』及び劉大杰著〈『賊吶』と『彷徨』と『野草』を中心に〉‐」

工藤（2006）「魯迅と表現主義‐転換期のプロレタリア文芸論受容を越えて‐」

工藤（2007）「『故事新編』と表現主義　‐前期魯迅の終焉と創作手法の変化‐」

工藤（2008）「魯迅訳・豊子［カイ］訳『苦悶の象徴』の産出と周辺」

工藤（2012）「近代文芸思潮の観点から見る『前期魯迅』の始まり」

② また、工藤（1993）は「ただ注目すべきことは，魯迅が明治を代表する黒岩涙香、井上勤等の翻案体の作品を底本とはせず、原文重視に徹する森田思軒の訳を底本としたことである」（p. 78）と述べ、魯迅が意図的に森田の底本を選択したと推測している。黒岩の『噫無情』は 1902 年 10 月から連載し始め（魯訳『哀塵』が 1903 年 6 月に『浙江潮』に掲載）、時間的にも短ければ、各号の連載より著書のほうが簡単に入手できると考えられる。また、『哀塵』に次いで、1903 年に出版された長篇科学冒険小説、2 番目の魯訳に当たる『月界旅行』は、井上勤の『九十七時間二十分間月世界旅行』を底本としたものであり、その翻訳方法も原文重視どころか、翻案に近い意訳なのである。このような事情を考慮に入れれば、日本語を勉強して一年足らずの当時の魯迅は、底本を選ぶ際にそこまで考えていたのかは、疑問に思われる（森田思軒からの影響は否定できないが）。

③ すでに触れたように、工藤は魯迅がパウル・ラッヘの「『小さなヨハネス』序文」とポル・デ・モントの『フレデリック・ファン・エーデン』を訳した上に、1924 年に厨川白村の『苦悶の象徴』も訳したため、『小さなヨハネス』に対する理解をより一層深めたとみているが、根拠が見当たらず、説得力に乏しいと思われる。

④ それから、「三・一八事件」が「四・一二クーデター」と相まって、魯迅の『小さなヨハネス』の翻訳達成のエネルギーを深める要因となった。また魯迅が自分も同じ翻訳者であるため、ファン・エーデンの文学運動上における立場、そしてエーデンの人間性への理解と共感を一層深めることとなったと述べているが、「三・一八事件」と「四・

一二クーデター」がどのように魯迅とエーデンのことに繋がっているかは、説明を行わずじまいであった。底本がドイツ語であるためか、分析が困難であろうが、これも説得力に欠けているように思われる。

⑤　最後に、既に触れたように、初期段階で底本とした日本語原文を重要視すると論じられているが、実は当時は魯訳の翻案に近い時期なのである。換言すれば、訳文が原文から一番かけ離れている時期なのである。

1.3　山田の魯迅翻訳研究

山田（2008）の著書『魯迅　自覚なき実存』は 15 章から構成されている。ここにおいて他人の結論と重複するところをできるだけ省き、翻訳に関連し得る見解だけを取り上げておく。

1.3.1　梁啓超の「小説界革命」論と魯迅

江南陸師学堂附設鉱務鉄路学堂での勉学によって、魯迅が西洋学問の受容の端緒を開き、社会改革に向けて開眼した魯迅は、南京で維新派の改革論に啓発され、その夢を実現するために日本留学を志した。しかし、東京での思想風土はほどなくその魯迅を革命論へと急激に移行させたと、山田は述べている（ p. 4、p. 43-44 を参照）。

梁啓超が『小説と群治の関係を論ず』の中で、中国最初の体系的な政治小説論『訳印政治小説序』の主旨を次のようにまとめて書かれている。

「一国の民を新たにせんと欲すれば、先に一国の小説を新たにせざるべからず。故に道徳を…政治を…学芸を…乃ち人心を…人格を新たにせんと欲するに至りては、必ず小説を新たにす。何の故を以てか。小説には不可思議の力ありて人道を支配する故なり」[4]。

この小説万能論は渡日したばかりの魯迅に決定的な影響を与えた。魯迅翻訳初期の仕事の半分は、小説革命への共鳴からの作業である。『中国地質略論』のような一見純科学的な論文にも、彼の種族的共和革命に寄せる理念が盛り込まれていた。魯迅と梁啓超はこの時点で、既に政治的立場を異にしていたが、こと小説論に関する限り、魯迅は梁の論理から一歩も踏み出るものではなかったと、山田は分析している（p. 242－244 を参照）。

---

[4] 梁啓超（1902）『新小説』創刊号

魯迅が梁啓超の「小説界革命」に共鳴しているが、梁啓超の目ざす社会（立憲君主制）と魯迅の理念（種族革命）とは異なっていた。とりわけ、後の魯迅の文学観も「小説界革命」の功利主義を批判する方向に転じたと、山田は指摘している（p.8 を参照）。

1.3.2　魯迅翻訳活動の動機

ヴェルヌの『月世界旅行』や『地底旅行』は娯楽本位の科学冒険小説として英訳され、日本語に重訳される際、訳者がさらに科学的な論述を削除し、随所に展開する現代社会への批判についても関心を払っていない。魯迅訳は、それらをさらに縮小したものである。

梁啓超が創刊した『新小説』にヴェルヌの科学小説の翻訳が連載されている。梁啓超は科学小説の翻訳を通じ、社会変革を呼びかけ、政治的な目的を実現させようとしていた。それに対し、魯迅は科学小説の訳業を、中国人の意識変革と繋ごうとしていた。それで、魯迅は自然科学にだけ興味を持っており、科学小説の翻訳を啓蒙手段として人々に知識を得させ、伝来の迷信を打破しようとしているため、原作と関係ない加筆を加えたり、改訳したりしていた。従って、ヴェルヌの原作は換骨奪胎されていたのである。魯迅の加筆した進化論への信仰や人類の進歩に対する希望は『月世界旅行』と『地底旅行』にだけでなく、初期における他の訳業にも盛り込まれていると、山田は論じている（p.103-109 を参照）。

このように、魯迅の前期翻訳、とりわけ科学小説の翻訳動機は、自らの日本語読解力の向上を意味していると同時に、故国や同胞の実状に対する魯迅の危機意識、即ち中国人の意識変革への念願にあると、山田は見ている（p.48 を参照）。

1.3.3　外来思潮の受容による自文化意識の強化

留学後期の作品群をめぐって検討したうえで、当時魯迅が西洋の新思潮を意欲的に取り込んでいたと山田は指摘している。一方、魯迅の自国古典への関心は異国文化の接触により、よりいっそう強化されていった。即ち、西洋文化の受容により、中国の民族的伝統への礼讃も強まったということである。外来思潮の受容は魯迅を再び中国の古典の世界に連れ戻したと山田は分析している（p.245 を参照）。

1.3.4　中国文化界における魯迅の位置づけ

山田は、魯迅が精神的な啓蒙者であると同時に、精神の革命家だと見なしている。日本留学時代、魯迅が許寿裳と論じた「国民性の改造」を例示し、魯迅の「啓蒙」の中身が、人々

の精神的なありように関わっているものだと指摘し、魯迅の翻訳、ひいては文学活動のすべてが中国人の精神形成に関わる内容だと、山田は見ている（p.110-111 を参照）。

山田は「魯迅は詩の世界に安住できなかった。詩の世界に足を踏み入れたが、やがて散文の世界に行った。詩情を切り捨て、雑文をもって人々を啓蒙している一方、魯迅は革命の主体となる人間の精神的有り様を絶えずに問いかけていた。そういう意味では、このような思慮こそ彼の詩魂である。その詩魂が魯迅を精神的な啓蒙者に駆り立てた」と述べている（p.352-353）。

魯迅は実際の革命活動に関与しておらず、建国の構想図さえ示していないが、孫文から毛沢東に至る革命の道程を見守りながら、革命者の育成について常に考えを重ねたのである。このような魯迅にとって、文学は現実生活で無効であり、「余裕の産物」でしかないが、無効であるからこそ、初めて精神に作用することができると、山田は分析し、魯迅が精神的な革命者として彼なりの形で革命活動に参与していたと論じている（p.356-357 を参照）。

1.3.5　「自覚なき実存」主義的思考形態

後に共産党によって神格化された魯迅を固定したイデオロギーから見るべきではなく、「自覚なき実存」主義者だと山田は主張している。

魯迅は、幼少期に康有為の変法自強説に、日本留学時代に章太炎や孫文の種族革命に、五四運動の時に進化論に共鳴していた。しかし社会改革よりも、魯迅は人々の精神の有り様を重視している。魯迅は挫折する革命活動を多く目撃し、人々の精神の変革なくして社会改革が有り得ないと見ている。日本留学を通じて吸収した近代西欧文化を翻訳を介して中国への移入に熱心に働きかけているが、翻訳対象の選択は個性的であり、その時々の彼の価値観を反映している。すなわち、それらはある時には進化論であり、自己流に解釈したニーチェイズムであり、ある時にはロマンティシズムであったり、マルキシズムであったりのようにも見える。要するにその根底には、列強の侵略に遭わされている中国をいかに救うかという発想が常に介在していた。

後に、魯迅は共産党の抗日統一戦線の政策を擁護し、無条件加入すると宣言した。一方、彼は常に妥協しない態度を持っており、当時の共産党との間に国防文学論や左聯の解散問題をめぐる激しい論争まで起こった。『革命文学論争』以後、魯迅は数多くのマルクス主義文芸理論を学びながら、中国語に翻訳した。しかし、文芸論や文芸政策に関しては、魯迅は当時の共産党の知識人に同調せず、独自の読みを示しており、実存的思考にたどり着いたと、

山田は見ている。後に魯迅は中国文化界で神格化され、マルクス主義者と見なされているが、あらゆる物事を懐疑的に見ており、自分の思想の支配者となり、いずれの主義、流派にも身売りをしない。従って、魯迅を固定したイデオロギーから理解すべきではなく、「自覚なき実存」と呼ぶべきだと、山田は論じている（p.358-368 を参照）。

1.3.6　山田の問題点

歴史的な事実、そして関係文献を踏まえた山田の研究は実に論理が通るものである。例えば魯迅は梁啓超「小説界革命」論に共感を覚える一方、目指す社会像は梁と異なっており、そして文学の力を借りてその社会を生きている「個々の人」の精神を改善しようとしていると語られている。まさにその通りだと思える。そして魯迅の中国における位置づけ、とりわけ魯迅のイデオロギーに関しては、従来の中国での定説に捕らわれずに、魯迅の本当の姿を相当復元していると思われる。

しかし、以下のように疑問に思われるところもある。

① 文学の効用については、梁の目的は社会改革にあり、それに対し、魯の目的は人々の精神の改造にあると述べている。しかし、魯迅と梁啓超の観点は異なっているというより、次元や順位の置き方が異なると思われる。魯迅自身の言説を見ても分かるように、文学を通じてまず人々の精神を改造して初めて社会改革につながるものだと魯迅は考えている。つまり、魯迅の最終の目的は梁と同じように社会改革にあるということになる。

② 「しかしそうした社会改革の理念よりも、それをになう人間精神のありように本源的な価値をみようとする」（p.358）と論じているが、これも次元と順位の置き方の問題に過ぎないと考えられる。

③ 『月世界旅行』などの魯訳によって、ヴェルヌの原作が換骨奪胎されたと論じられているが、それは山田も分析したように、そもそも英訳から日本語に重訳され、そのいずれの訳においても改訳や削除が行われており、日本語訳から中国語に重訳した魯訳にとっては、やむをえぬことである。確かに、日本語訳にある大量の科学的な叙述は魯迅の手によって削除されている。ただし、もしヴェルヌの原作にある社会批判の箇所が日本語の重訳にあるにもかかわらず、魯迅の手によって削除されたとするならば、翻訳初期の段階において魯迅がまだ社会批判への開眼はなされていないことになる。それは後の社会批判という意識に細心の気を払う魯迅の心がけとはかなり異なるということを意味する。しかし、実際

に見てみたところ、社会批判に関する箇所はそれほどカットされたとは思われない[5]。

このように、日本における魯迅翻訳に関する研究は、いずれも史実や関連資料を踏まえたものであるが、テクスト対象分析に基づく実証的研究ではないため、抽象論にとどまっており、事実と齟齬する見解が散見される。

2　中国における近年までの魯迅翻訳研究

近年、中国国内で成された魯迅翻訳に関する研究は日本の場合と同様に、それほど多くないが、その中で呉鈞（2009）の研究[6]や顧鈞（2009）[7]の研究が注目されている。いずれも魯訳の事例ごとにという形で論述を進めているものであるが、とりわけ後者の場合は全篇を通して短いコメントが文中の随所に混在するという形となっている。

そこで 2.1 において呉の研究、2.2 において顧の研究を記述していくが、それぞれにいくつかの項目を設け、重要であろうと思われるものをまとめたうえで、論を加える。

2.1　呉の『魯迅翻訳文学研究』

呉の『魯迅翻訳文学研究』（2009）において、魯迅の位置づけ、魯訳の特徴、翻訳方法及び現代における意義について論じられている。それらの観点を大まかにまとめると次の通りである。

2.1.1　翻訳家としての魯迅

魯迅は翻訳家になった後に名作家になっている。

翻訳文学は魯迅の文学活動において重要な地位を占めていると同時に、魯迅の創作にも多大な影響を与えている。そのため、魯迅の文学活動、またそれが中国現代文学への影響を理解しようと思うならば、魯迅文学翻訳の研究は不可欠である。

2.1.2　魯迅各時期の訳業

呉は魯迅の訳業をその翻訳思想や翻訳方法によって、早期（1903～1908 年）、中期（1909～

---

[5] ただし、魯訳で幾つかの章、節が完全に削除されている。むろんその中に社会批判に関するものもある。

[6] 吴钧（2009）《鲁迅翻译文学研究》齐鲁书社 p.1-337　中国語で書かれたものである。

[7] 顾钧（2009）《鲁迅翻译研究》福建教育出版社 p.1-319　中国語で書かれたものである。

1926 年）と後期（1927～1936 年）に分け、中・日・独・英語の、幾つかのテクスト対照分析を行っている。時期によって翻訳思想や翻訳手法及び翻訳興味も異なれば、特徴も違ってくると論じられている。

早期の魯訳は科学小説や科学普及読み物の改訳が主であり、科学で国を救うという発想に基づくものが大半である。翻訳法の面においては林紓の意訳を模倣したものが多く、訳文も解し難い文言から判りやすい文言、そして白話文体に切り替えている。それに対し、中期においては、「直訳法」を提唱し始め、白話文体を多く採択している。翻訳対象も世界の少数民族の文学からロシア（ソ連）の小説や論文にまで幅広く及んでいると、呉は述べている。

また、後期の翻訳はソ連文学及び文芸論が主であり、翻訳法の面においては「直訳法」がさらに強化されていると、呉は指摘した（p. 97 を参照）。

しかし、後述のように、呉の時期の分け方に問題もあれば、呉の「早期」に従えば、当時の魯訳もまだ本格的に白話文体に切り替えていないことになる。

2.1.3　翻訳方法・策略・動機について

呉は「翻訳適応選択論」（いかなる翻訳理論の価値はその実践に指導するところにある）に基づきながら、魯訳の中に改訳・意訳・直訳・意訳と直訳の結合訳・音訳・不訳・抄訳等の翻訳法が採択されているとし、決して批判された「死訳」ではない、と主張している（p. 158）。

それから、魯迅の直訳法をヴェ・ヌティの提唱した異化翻訳と比較し、前者が後者より 86 年も早いということは強調されている。

また、呉は魯迅の翻訳動機にも触れている。

魯迅が翻訳を重んじており、弱小国・民族の作品や作家を中国に紹介するのは、翻訳を通して他国の経験を中国に伝え、民衆がそれで目が覚めるようにと願っているからであろうし、直訳という翻訳法を採択するのも外国の新思潮を中国に、そしてそのような表現を中国語に持ち運ぼうとしているからであろう。外国の語彙や論理的な句法を中国語に取り入れることによって、新しい語彙が作り出され、中国語の言語及びその仕組み、ひいては中国人の思惟様式まで改善できればと魯迅が願っているのであろうと呉は述べている（p. 87、p. 108 を参照）。

魯迅はまず「立人」してから「立国」すべきだと考え、そこで翻訳という道具を利用し、中国の民衆のために、「末人」から「超人」へ、最終的に「世界人」への歩む道を探ってみていた。そういう意味では、魯迅の翻訳は民族を救うという立脚地に立っているとも言えよ

うと、呉は語っている（p. 88-96 を参照）。

しかし、呉の研究において、テクスト対照分析はある程度行われているが、その分析に使った日本語底本は魯迅が当時使ったものではなく、なんと百年ほど後の新訳なのである。例えば魯訳が底本としたのは三木愛華　高須墨浦訳（1886）『拍案驚奇　地底旅行』であるが、呉が使ったのはジュール・ヴェルヌ著　朝比奈弘治訳（1997）『地底旅行』である。即ち、日本語新訳を魯迅の訳文《月界旅行》と対照して分析を行ったことになる。従って、呉の対照分析は意味がないと思われる。

2.1.4　魯迅翻訳の効用及び現代における意義

呉は魯迅の「すべてが中間物」の哲学思想及び翻訳理念を、周易の「中」からの継承や変容、そして儒家の「中庸」との比較という視点で、中国伝統文化と関連付けて強調している。と同時に、魯迅のニーチェの「超人」理論への批判的な受容といった例を取り挙げながら、西洋哲学からの影響に関しても分析している（p. 35-58 を参照）。

また、魯迅翻訳文学の海外伝播及びその影響について次のように評価している。

中国は持ち込み式の翻訳が主流であり、送り出しはあまりないという状況に存在していた。魯迅文学の海外伝播によって、中国文化もただ受容するという一方通行だけではなく、世界に立ち向かえる可能性も語ってくれると、呉は語っている（p. 266-283 を参照）。

魯迅翻訳文学理論の歴史的価値及び魯迅の翻訳思想が現代にもたらす示唆についても言及されている。

まず、魯迅翻訳の国際文化交流における独特な貢献としては、①文言から白話、そして現代文体へのシフト、②「帰化」から「異化」へ、さらに「優化」へのプロセス、③「末人」から「超人」へ、さらに「世界人」への理想像の築く構想、という三点にまとめられている。それから、魯迅の「すべてが中間物」の哲学思想について次のようにさらに強調されている。

魯迅が人生を歴史の「中間物」と見做すだけでなく、翻訳を外国との文化交流の「中間物」とも考えており、この「中間物」である翻訳によって、中国民衆が世界に目を向けて自覚し、それで自民族意識の強化に繋がることを願っているのだろう。「中間物」思想のおかげで、魯迅が理性を持ち、両文化の間に立ち、どちらにも偏らずに観察批評しながら、その世界の本質を見出そうと努めている。中国民衆の現状や前途だけでなく、人類全体、そして個体としての人間の生存や発展にも魯迅は注目している。魯迅がその「中間物」の立場に立ち、思想面において同時代の者をリードしながら、中国が世界に立ち向かう新文化および新文学へ

の呼びかけをしていると、呉は語っている。

また、魯迅の翻訳理念の意義や役割を魯迅の民族憂患意識や人間愛に関連付けながら述べられている。魯迅にとって、翻訳が理解疎通の架け橋、価値判断の尺、道を造る砂石、創新開拓の道具だと論じたうえで、魯迅の翻訳文学の価値を「真善美」と呉は捉えている。魯訳の「真」は、人類の高尚情操や真理への追及に顕われている。中国民衆のために真の有益の翻訳材料を選択し、できる限り原作者及び原文作品に近づこうと、魯迅は直訳法で世界の進んだ思想文化を中国に持ち運んでくれた。魯訳の「善」はその「冷たい目付きや熱い涙」というところにある。魯迅は大愛を持ち、直訳の訳筆で弱い立場に置かれた世界中の人々のために悲しみ、叫び、闘っており、苦しんでいる大衆に同情している。また魯訳の「美」は、魯迅の創新意識や開拓精神に潜めている。「拿来主义」（持って来い主義）の度胸や長い目で古今中外の文学及び芸術の栄養を汲み入れ、翻訳という手段を通じて西洋小説の表現法を輸入し、中国小説の伝統と融合させながら、特色のある実存主義の小説芸術を形づけ、中国現代小説の新たなモデルを作り上げることに成功したと、呉は魯迅のことを讃えている（p. 284-300 を参照）。

2.1.5 呉の問題点

呉の研究では、前人と重複する一般論（呉だけの問題ではなく、魯迅翻訳研究における共通問題）が多い一方、有意義な見解も出されている。例えば、魯迅が翻訳家になった後作家となったことや、魯迅自身が進化論を語る際に使った「中間物」という言葉を魯迅の哲学思想、特に翻訳理念と関連付けて提示したことなどが挙げられる。

しかし、次のように問題点もいくつか残っている。

① 思想面における考察という性格が色濃い。

② テクスト対照分析は極めて少ないうえに、量的な統計が全く実施されていない。とりわけ、わずかな日中対訳が挙げられているが、既に指摘したように、その日本語底本（フランス語やドイツ語底本の場合も同様）は魯訳が当時使ったものではなく、100 年後の現代訳なのである。従って、対照分析の意味は期待できるとは思えない。

③ 翻訳論に関する論述は限られた範囲に留まっており、関連翻訳概念（例えば異化や帰化）の説明を行われておらず、その上、概念に対する捉え方や取り扱い方も絶対的な傾向（例えば二元論的）にある。音訳、結合訳といった翻訳用語は何回か出てくるきりで、本格的な分析は見当たらない。

④　翻訳の受容者、即ち読者の受容問題について言及されていない。

⑤　魯訳時期の分け方には問題がある。まず、翻訳初期が 1902～1908 年とされ、この時点で魯訳がすでに難解な文語から平易な文語、そして白話文体へとシフトしていると語られている。実際当時の魯訳はまだ白話文体にシフトしていないのである[8]。また、翻訳中期と翻訳後期の区切りが 1926 年だと設定されるのも問題である。1927 年に魯迅がロシア（ソ連）の文芸論や文学の翻訳に着手しはじめたと述べられているが、実は 1928 年 6 月までは、魯迅は関連書籍の購入をしたり、未名社の青年たちのソ連文学の関連活動に協力したりしていたが、1928 年 6 月から本格的にロシア（ソ連）の文芸論の翻訳に取り組み始めたのである。

2.2　顧の『魯迅翻訳研究』

顧（2001）の『魯迅翻訳研究』は、魯迅の翻訳研究を通し、魯迅の思想、創作ひいては生涯の文学活動を解読することを目的とし、「翻訳家としての魯迅」、「魯迅の翻訳思想」、「前期における魯迅の翻訳」、「中期における魯迅の翻訳」、「後期における魯迅の翻訳」、「翻訳と関連のある魯迅のその他の仕事」、「魯迅の翻訳とその創作との関係」から構成されている。

2.2.1　魯迅翻訳の位置づけ

魯迅の文学活動は翻訳から始まり、翻訳に終わっており、その翻訳の営みをおろそかにしては、本当の魯迅を理解することはできない。これまで翻訳家としての魯迅の業績が十分に認識されていないのは、魯迅の創作のほうに目を向けられているからだと顧は述べている（p. 9 を参照）。

中国が世界に立ち向かおうと思うのならば、自分の殻に閉じこもっていてはいけない。翻訳の力で社会を改造すべきだと主張する魯迅自らの言説を引用しながら、翻訳は魯迅の生涯を貫く重要な仕事の一つであり、創作と同じように重視されており、「国民の性格を変え、社会を改造」する道具として、終始一貫して用いられていると論じられている。

2.2.2　魯迅の「硬訳」について

---

[8] 詳しくは第 4 章 1.2 で論じることにする。

魯迅の創作が流暢に書かれているのとは反対に、訳文は読みづらい。その原因は魯迅が「直訳法」に拘っているところにあると論じられている。童話などのジャンルを除き、「意訳法」のかわりに「直訳法」を推奨している理由は、原文の形をできるだけ崩さないように、また中国語の表現を豊かにしようとする魯迅の意図にあるのであろうと、顧は推測している（p. 12-17 を参照）。

直訳の訳文は輸入国の国情に合わない場合が多いため、排斥される可能性が高い。しかし、そうした訳文を拒否すること自体こそ、文化保守主義の現れの一つでもあり、自民族の発展を妨げる行為でもあると顧は述べている。

魯迅の訳文の中において、故意に原文の表現や語法が残されている為、流暢でないことは当然である。

輸入してきたものは、思想内容、思考様式、表現方法などいずれの面においても、最初は多少の違和感があっても無理はない、さもなければ、輸入する必要はない。自分の訳作が翻訳の進化のプロセスの中で貢献さえできればそれでよい、優れた重訳が出てくれば淘汰されても構わない。

親友の瞿秋白も魯迅の「硬訳」に違和感を覚え、「絶対的な白話文」にすべきだと指摘している。それに対し、魯迅は「信」（忠実）の助言に賛成する一方、「絶対的な白話文」のような大衆文芸には反対している。なぜなら、西洋の語法や表現を不完全な中国語に取り入れるには、「硬訳」は有効な手段だからである。また、読者のレベルに応じて訳文を提供するほうが望ましい。読者の機嫌を取る為に、一途に読者の趣向に合わせ、妥協するのではなく、読者のレベルアップを念頭に置いて工夫しなければならないと魯迅は主張している。

異質文化を適切に輸入するというのは、あくまで理想であり、徹底的にできるわけがないと主張する者もいる。厳復や林紓が若き魯迅の手本のような存在であった。林紓の翻案は中国の伝統を本位としており、文字言語のレベルだけでなく、思想・文化の面においても、自民族の伝統に合わせようとしたものである。しかし、「硬訳」こそ、翻訳の面においてだけでなく、文化に対する思索や価値観の面においても、魯迅が林紓らと一線を画すものであった。それは一見ただの翻訳法の置き換えのように見えるが、実はその背後に魯迅の新たな文化に対する姿勢も垣間見える。魯迅は文化的保守主義に反対し、“拿来主义”（持って来い主義）を主張している。とりあえず中国に持ち込み、その後使用するか、温存するか、消滅させるべきかを考えれば良いと魯迅が考えているのであろう。今日においても、その主張は理にかなっていると言えよう。魯迅のそうした腐心を察し、その上、その実行性や実効性を計

るべきだと顧は語っている（p.17-28 を参照）。

責任感のある訳者たる者は自分の責務をしっかり自覚しており、原文を尊重しなければならない、翻訳は翻訳であるべき、訳者は僭越してはならない。もちろん、一身を以て二つの役を担おうとする訳者もいるが、それなりの貢献も大きいものと考えられる。しかし、その時、その者はすでに思想家になっており、翻訳者ではなくなっていると顧は主張している（p.25 を参照）。

魯迅の「硬訳」に対する批判はほとんど言語や技術の面のレベルに留まっており、文化レベルにおける魯迅の考え方には着目されていない。魯迅の翻訳に関する言説は、現代中国語を豊かにし、また発展させる上で、貴重な意見だと顧は語っている（p.16 を参照）。

要するに、魯迅の「硬訳」の主張は、外国文化をありのままに中国に導入すること、そして「硬訳」の手段で中国語の言語や中国人の思考様式を改善することという二点にあると、顧は述べている（p.22-23 を参照）。

2.2.3　翻訳対象の選択

魯迅は重訳（第三国の言語による間接訳/同一原文に対し、異なる訳文の提供）を推奨している。それは積極的に外国文化を導入するためでもあり、訳文の質に気を配っているからだと顧は論じている（p.26-28 を参照）。

また、魯迅が英米の作品をほとんど翻訳していないのは、英語がうまく使いこなせないところにあり、決してそれらを軽視しているわけではない。とりわけ中国には英語の分かる者が一番多いため、日本語経由の重訳より、魯迅以外による直接訳のほうが良いと魯迅は考えているのであろうと推測されている。

魯迅の翻訳対象は魯迅にとって興味のあるものであり、しかも当時の中国に役に立つものでもある。例えば、東欧や北欧の少数民族の作品が翻訳対象に選ばれたのは、中国も同じ弱い立場にあるからだと、顧は論じている（p.28-33 を参照）。

ロシア（ソ連）の文学や文芸論の翻訳は凡そ魯迅訳業の 6 割を占めている。魯迅はそのような作品の中に溢れる反抗精神及び人道主義を重視すると同時に、芸術性にも着目しているのであろうと語られている。

無論、魯迅の手によって翻訳されたと言っても、必ずしも魯迅がそれらの観点に完全に賛成しているというわけでもない。同じ作者の作品に対しても、価値のあると思われる作品のみを翻訳対象にし、他のものを無視することがある。このように魯迅はロシア（ソ連）の進

歩的な小説の伝統、そして中国の詩学の伝統を受け継いで発展させ、自らの創作を中国新文学の経典にすることができたと、顧は述べている（p. 39 を参照）。

最後に、社会改革・国民性改善を主張しているが、中国の伝統文化が長らく、それなりの持病も重いため、あまりにも性急すぎると、良い結果が得られないと魯迅は心得ているのであろうと推測したうえで、魯迅は決してせっかちな功利的な啓蒙者ではないと顧は語っている。

要するに、翻訳対象の選択は複雑であり、魯迅の個人の事情も、社会的な要因もそれと関わっていると顧は分析している（p. 46 を参照）。

2.2.4　前期魯訳

まず増訳や減訳が初期魯訳の特徴であるが、それは、魯迅個人の好みによるものではなく、林紓らからの影響も働いており、訳文を故意に読者の好みに合わせようとした結果であるに他ならないと顧は語っている（p. 54 を参照）。

20 世紀の初期、梁啓超の創刊した『新小説』に発表された『地底旅行』などの科学小説に、魯迅は刺激を受け、庶民の知を啓蒙するために、科学小説の翻訳紹介の仕事に取り組み始めた。

翻訳の初期において、科学小説のほか、魯迅が学術論文も何本か翻訳しているが、その目的は科学知識の紹介及び科学の重要性を強調するところにある。とはいえ、専門的な論文や具体的な科学知識より、科学に対する意識の芽生えのほうが、中国の大衆により役に立つと、魯迅は考えている。中国社会を改良しようと思うのならば、科学の普及はもちろん必要だが、それだけに頼るのは大間違いである。また、人と社会の精神改造の面においては、文学も欠かせないものであり、寧ろより大事だと魯迅は考えているのであろうと顧は述べている（p. 54 を参照）。

『域外小説集』は、ロシア、東欧、北欧の作家や作品に関心を寄せており、「五・四運動」以来、先ず弱小国・少数民族の文学に着目した作品でもあり、更に短篇という形の小説を中国に紹介する役目も果たしている。『域外小説集』に収録された作品はいずれもヨーロッパの優れた作家によって書かれた純文学であり、当時中国の読者の趣味に合わせ、機嫌を取ろうとした探偵や恋愛小説と異なるものである。この『域外小説集』の翻訳を機に、魯迅は目線を近くから遠くへ移しており、即ち帝国主義、封建制度への反抗から、「人々の精神面の改善、社会改革」のほうに着目するようになっていると、顧は語っている（p. 58-78 を参照）。

2.2.5　中期魯訳

魯迅はアルツイバーシェフの『労働者シェヴィリョフ』を訳している。その中で描かれたシェヴィリョフという主人公は典型的な無政府主義者である。顧は、魯迅の創作『文化偏至論』に関連付け、魯迅が無政府主義者のニーチェの影響を受けたが、後にそのような個人主義や「大衆蒙昧論」を切り捨てたと分析している（p. 79-90 を参照）。

魯迅はトルストイ主義の修正者でもある。すなわち、魯迅はトルストイと同じような人道主義者ではあるが、「愛」を語ってばかりいるわけではない。魯迅の翻訳動機の一つが社会反抗にあると、顧は論じている（ｐ. 88 を参照）。

厨川白村の『苦悶の象徴』や『象牙の塔を出て』の翻訳を契機に、魯迅は厨川の文芸思想を批判的に吸収しながら、唯心論と一線を画している。厨川が「人間苦」を訴えているのに対し、魯迅は「抗争、戦い」に目線を向けている。魯迅は啓蒙主義者ではあるが、決して短気者ではなく、国民性の改造には長い時間が必要だと認識していると顧は述べている（p. 120-133 を参照）。

最後に、魯迅の創作もその翻訳から示唆を得たと顧は指摘している。夏目漱石の「余裕」への共鳴や、漱石風の風刺的な筆致を例に取り挙げながら、日本文学が魯迅に与えた影響はロシア文学ほどではないが、決して少なくはないと論じられている。

2.2.6　後期魯訳

魯迅が「言いたければ、素直に言う」という魏晋の文章のほうを好むと提示し、それが鶴見著『思想・山水・人物』の翻訳動機の一つであろうと顧は推測している（p. 136 を参照）。

魯迅は中国現代文学が文学革命から革命文学へと転向している中で随筆集『思想・山水・人物』を訳出している。ここから魯迅の「革命」に対する態度も垣間見える。即ち「革命」に賛成はしているものの、目先だけに着目することに反対し、社会批判や文明批判を重要視すべきだと魯迅は考えている。

西欧の自由主義者が提唱した「改良・妥協・寛容」とは異なり、魯迅は「革命・抗争・容赦なく」と主張している。しかし、批判精神という点で、自由主義と極めて一致している。師匠章太炎の影響で、魯迅は中国で資本主義の議会民主制度を実行することに反対しているが、章の鼓吹する「君主制」にも反対し、その代わりに「人の精神の改善」を主張している。この点をもって魯迅は中国の自由主義の知識人とはっきりと一線を画していると顧は分析している（p. 140 を参照）。

20年代後半、「無産階級文学」などの問題をめぐり、魯迅と創造社、新月社や太陽社との間に論争が始まり、プロレタリア、とりわけソ連の文芸論の魯訳が目立つようになった。そのような魯訳は魯迅自らの修練でもあり、論敵に反論する為の道具でもある。そのような翻訳を通じ、魯迅はマルクス主義により一層接し、「進化論」から「階級論」への転向を成し遂げている。また、魯迅の創作の後期において、小説ではなく数多くの雑文を書いたのは、文才が枯渇したというわけではなく、当時の魯迅には最もふさわしくいことだったからである。そういう意味では、創作の面だけで言うと、小説が魯迅の「文学革命」への最大の貢献であるのに対し、雑文は「革命文学」への最大の貢献だと言えると顧は指摘している（p.152）。

ソ連の「同伴者」作家達の作品は、社会や人生に直面する際に、太平を粉飾しない、革命的とは言えないが、「人生の為」のものではある。その「同伴者」作家達に共感を覚え、魯迅がそのような作品も訳したのだと顧は述べている。ただし、日本の学者の一部の作品がソ連文芸理論などを研究する際の魯迅の手掛かりや土台となったが、重訳のためか、もしくは原作者及び原作の内容を十分に把握していないためか、魯訳が原文を一歩一歩踏んでおり、いわゆる魯迅なりの「硬訳原則」に従っていると顧は分析している（p.152-163を参照）。

更に最後の魯訳に当たる『死なせる魂』については、原文に忠実であり、文言もそれほど「硬く」なくなっていると論じられている。ゴーゴリの書法を真似て、「笑い声の中で読者に鋭い風諭を感じさせ」ようというのが魯迅の翻訳動機の一つだと顧は分析している。また、魯迅の目をロマン主義からロシア実存主義文学に向けさせる役割を果たしたのがゴーゴリだが、その実存主義の徹底しないところを魯迅は批判していると、顧は関連文献を引用しながら分析を行っている（p.170-174を参照）。

2.2.7　関連刊行物と翻訳協力者

魯迅が直接また間接的に関与した翻訳と密接な関係を持つ出版物及びその関係者についても概説されている（p.175-220を参照）。

顧は、外国文学を紹介するのを事業の中核とした『未名叢刊』をはじめとする幾つかの叢書、また「未名社」などが結社に至るまでの経緯、それによって出版された訳書、そして韋素園、台静農、李霽野、韋叢蕪、曹靖華、馮雪峰らといった中心的な働きをしたメンバー及び彼等の翻訳の業績を紹介した。

また、顧は魯迅の提案により、茅盾、黎烈文、黄源らが加盟し、1934年に発足した月刊誌『訳文』（1953年に『世界文学』という名で復刊）ができた経緯を記述し、それが優れた訳

作の提供のみならず、絵画や木版画の発展への貢献についても述べている。

更に、顧は魯迅が翻訳協力者との関係の中で、周作人との協力は中期段階において重要視すべきだと提示したうえで、斎寿山、許広平や瞿秋白との関係についても触れている。魯迅が斎に教えを請うという形となっている一方、許には指導を与えるという形となっていると顧は論じている。

また、魯迅が翻訳対象及び底本の選択、訳書の設計から販売まで、細心の注意を払いながら、翻訳事業に尽力していると、顧は語っている。最後に、自らの訳業に励むと同時に、孫伏園、孫用、柔石といった後進者達に協力するために、労力を惜しまない魯迅の姿は再び描き出して強調されている。

2.2.8　翻訳と創作の関係

魯迅は翻訳を創作と同じように重視している。中国の読者が世界的な視野が持てるように、魯迅が生涯を通して世界各国の優れた作品の翻訳に取り組んでいた。

魯迅の創作は彼の翻訳から受けた影響も大きい。『阿Q正伝』の中に散見される反語や比喩がポーランドの名作家シェンキェヴィッチの影響を受けた証である一方、雑文に出てくるネタが翻訳の示唆によるものも多い。換言すれば、翻訳は魯迅の視野を広げると同時に、雑文への素材提供という役割も果たしていると、顧は分析している（p.237-253 を参照）。

2.2.9　顧の問題点

顧は数多くの文献や関連資料を踏まえて魯迅自身の言説を引用し、魯迅の生立ち、文学教養、交友関係、思想観念等を記述しながら論を進めた。導かれた見解も多い。しかし、次のように、問題点もいくつか残っている。

① 魯迅研究の共通問題であるが、先人の結論と重なる一般論が多い。

② テクスト分析の代わりに、関連資料を踏まえた結論が多いというのは、恐らく語学分野が日本語ではないというところに起因しているのであろう。魯迅の訳業は膨大な量を成しており、その多くは日本語からの訳出である。それだけの訳業を総括的に把握するには、テクスト分析抜きでは考えられなければ、如何にバランスがとれるかも至難の業である。とりわけ語学分野が異なるため、実証的検証ではなく、関連文献に基づく思想面での分析が大半を占めることとなったのであろう。テクスト対照分析抜きでは、『魯迅翻訳研究』というタイトルに噛み合わないように思われる。

③　テクスト対照研究が行われていないため、顧の研究では、魯迅自らの言説と魯訳の実態と齟齬するところに気付かずに、魯迅の言説を鵜呑みにしているところが見受けられる。

例えば、『小さなヨハネス』をドイツ語から日本語に訳す際、魯迅は「原文の精神」を崩さないように、文の形を中国語に合わせようとせず、可能な限り折合わずに原文の形を踏んでおり、それによって欧化の句法を中国語に持ち込もうと試みた。しかし、後に魯迅は、そのような直訳法が童話にはふさわしくないと反省し、許広平と『小さいペーター』を訳す際に、意訳法を採るべきだと言っている。顧の分析では、『小さいペーター』は完全に意訳法を採っており、文言が非常にわかりやすい。想定読者が子供であるため、そのように訳されて当然だ、という結論にたどり着いた（p.209-212 を参照）。

確かに、『小さいペーター・序』の中で、魯迅が童話を訳す際に、直訳法より意訳のほうが相応しいと述べている。それに、『小さいペーター』は「意訳法」を採っているとも述べている。しかし、後述の第 5 章 4.1.2 と 4.2.2 で筆者が分析したように、『小さいペーター』の実際の出来栄えはそうとは思えない。「完全な意訳法」どころか、むしろ相変わらず直訳法だ言うべきである。それは、原文作者のミューレンの想定読者が子供であるのに対し、魯迅が子供ではなく、大人を対象にしているからである。

3　まとめ

魯迅及びその思想、創作に関する研究は枚挙に遑がないほど成されている。魯迅の小説、雑文、訳文、日記、手紙といった数多くの関連資料が公開されており、入手しやすい。それらの内容、とりわけ魯迅自身の言説などが幾度も引用されている。そのためか、導かれた結論が理にかなっているが、酷似するものは驚くほど多い。例えば、魯迅は訳作の中でも、創作の中でも人道主義、自由主義、進化論や階級論に言及している。従って、魯迅がいずれの流派にも属すとは言い難いにも関わらず、それだけの理由で〇〇主義者といったラベルを貼られることはある。

先行研究のいずれも史実を手掛かりに丁寧に調査したものだと言える。しかし、テクスト分析抜きでは、いかに自信のある結論を出されても、本当の意味での「魯迅翻訳の研究」とは言い難い。また、語学分野が日本語とドイツ語またはいずれか一方（日本人の場合は中国語または中国語とドイツ語）でなければ、魯迅翻訳の研究はその思想面にとどまるか、遠回りの方法で進めるしかないと考えられる。従って、従来の研究成果を魯訳の周辺と関係性を持たせるだけで、訳文と原文の対照研究を行わない限り、その意義が疑われる。

また、先行研究において、魯迅自身の言説を引用したりして魯迅の翻訳に対する考えや態度を論じられているものの、具体的な翻訳法や翻訳ストラテジーに関する分析が欠けている。結論が出されてもその信憑性は疑われるものとなる。

例えば、工藤の研究において、魯迅がヴェルヌの科学小説の日本語訳底本を選ぶ際に、黒岩涙香の翻案の代わりに、森田思軒の底本にしたのは、森田が原文重視に徹したからだと論じられている。そればかりではなく、魯訳は日本語原文重視だと強調されている。しかし、初期魯訳は自由訳の色を帯びており、翻案に近い意訳法や帰化ストラテジーが用いられている。すでに指摘したように、それらの推測が事実からかけ離れており、あくまで憶測に過ぎないように思われる。

また山田の研究においても、『月界旅行』のように、魯訳によって、ヴェルヌの原作が換骨奪胎されていると論じられている。それは、もとよりフランス語から英語に、また英訳から日本語に重訳された時点で、改訳や削除が施されており、まして魯迅が日本語訳から中国語に訳す際に、更に多くの内容（社会批判も含め）を削除したり、調整したりしていたため、尚更だと山田は指摘している。

魯訳『月界旅行』は、確かに改訳も多ければ、調整も多々あった。しかし、社会批判のような内容はそれほど省かれたわけでもない。早くも社会批判に開眼した魯迅は、その後もその意識を高く持ち続けたのである。

志賀は魯迅の居場所によって魯訳の時期を分けている。呉は『域外小説集』の翻訳法と文体の特徴を疎かにしている。そのため、魯訳の時期の分け方にも問題が出てきた[9]。

呉は他の研究者より、ある程度のテクスト対照分析を行っている。しかし分析に使った原文は魯迅が当時使った100年ほど前の底本ではなく、21世紀にできた日本語の新訳なのである。なおかつ量的な統計もなければ、翻訳関連概念や理論も見当たらない。

また、呉の研究において、翻訳初期の魯訳の訳文体は難解な文語から分かりやすい文語へと、そして白話文に切り替えていると語られている。すでに指摘したように、呉の時期の分け方に従えば、初期魯訳（1903～1908年）という時点では、まだ本格的に白話文（口語体）にシフトしていないのである。

魯迅自身の言説に頼りすぎた結果、結局事実と反する推論に至る場合もある。小さなヨハネス』の訳し方が芳ばしくないため、直訳より意訳のほうが童話に相応しいと、魯迅は訳作

[9] 筆者による魯訳時期の分け方及びその理由は第3章の1を参照されたい。

の『小さいペーター・序』で反省している。それに、『小さいペーター』はまさにそのような意訳法を採っているというように宣言している。そこで顧は魯迅の言説を鵜呑みにし、童話だから当然子供のためのものであろうと憶測しながら、『小さいペーター』の魯訳を意訳だと決めつけている。ところが、訳文の出来栄えは魯迅自身の主張とは異なり、直訳に当たる。それは原作者とは異なり、魯迅が読者層を子供ではなく、大人に設定していることに起因しているのである。

結局、日本側の志賀も工藤も研究の途中でテクスト分析を手放し、思想面での考察に転じている。中国側の顧と呉は専門が日本語ではないにも関わらず、日訳を主とする魯訳を分析していることになる。

このようにいずれの先行研究においても、直訳・意訳といった翻訳用語にとどまっており、翻訳理論との関連は見当たらない。その代わり志賀の研究のように、魯迅の翻訳に関する言説そのものを翻訳理論とする研究もある。また、実証的研究が成されておらず、思想面における考察となっており、抽象論にとどまっているのである。

本研究で実証的テクスト対照分析を行うため、次章において有効と思われる関連翻訳理論について概観したうえで、魯迅翻訳との関連性について論及してみる。

第 2 章　関連翻訳理論について

第 1 章では、魯迅翻訳の先行研究を概観したが、その問題点も浮かび上がった。それは即ち、いずれの先行研究においても、翻訳概念への言及も少なければ、翻訳理論に触れることも皆無だということである。翻訳の研究である以上、翻訳理論との関連付けは不可欠である。

西洋における翻訳活動は紀元前の 3 世紀に遡ることができる。古代ギリシアの優れた文化を吸収、継承するために、全盛期になったローマ帝国では盛んな翻訳活動が行われていた。後に、ギリシアとローマ帝国の文化を取り入れるために、西洋では古代、中世、ルネッサンス期、そして近代といった段階を経て翻訳活動が行われてきた。碑文、詩歌、劇、経典、文学が翻訳経由で伝播されたことにより、西洋文化は繁盛するようになり、発展してきた。

中国では、文字のない太古時代にすでに通訳の記録があった。記載のある翻訳活動は春秋戦国時代に遡ることができ、時期の早さでは西洋に遅れを取らせないものであった。その後、中国における翻訳活動は東漢から宋朝までの仏経翻訳、明朝から清朝までの科学技術の翻訳、アヘン戦争から「五・四」運動までの「西学」翻訳といった 3 つの時期を経て、中華人民共和国成立後から現在に至り、第 4 の時期に入っている。

翻訳活動が頻繁に行われる歴史的な流れにより、様々な翻訳理論が生み出されてきた。キケロ（Cicero）が訳者のことを「解釈者」と「演説家」に喩え、創造性のある翻訳と、創造性のない翻訳という二つの基本的な翻訳方法を提示している。それが西洋における翻訳理論研究の口火を切った。18 世紀に入り、シュライエルマッハー（Schleiermacher）を代表とする解釈学の立場をとる研究者が、意味合いへの追究を主張し、聖書の訳し方、いわゆる神秘主義的翻訳論に反対している。20 世紀 40 年代の末に、構造主義が現れるのを背景に、言語学派をはじめ、情報論や等価論などが登場してきた。また 20 世紀 70 年代に入り、ベンヤミンの「翻訳者の課題」への再認識によって解釈学が再び注目されると同時に、転換生成文法をめぐる議論により、脱構築主義、認知言語学、関連理論等が翻訳の研究分野に導入されている。

このように翻訳に関する研究は言語学的視点から文化へ、そして社会的転向を経てきた。

近年、翻訳学は独立な学問として認められるようになってきたものの、とかく言語学の下位概念として捉えられがちであった。実は翻訳学は言語学をはじめ、哲学、人類文化学、文学、歴史学、心理学、美学、情報学といった様々な分野に亘っている学際的な学問である。このような複雑さにより、一つの翻訳概念を異なる角度から解釈すると、二つもしくは二つ

以上の性格を持つことはよく見受けられる。

そこで本章では、関連翻訳概念の定義を確認すると同時に、ここ数十年の翻訳理論から本研究に有効と思われるものを取り上げながら論を進める。

まず１では、記号論と関連付け、ＳＴ[10]とＴＴ[11]の間に、比較の為の参照項が存在すると想定した「等価」理論について検討してみる。それから２では、「直訳法」と「意訳法」との二項対立、そして３では、「帰化」や「異化」ストラテジーを検討する。最後に４では、翻訳倫理をめぐって分析を試みながら、魯迅の翻訳思想と結び付けて論を加えてみる。

１　等価理論

「等価」理論の土台となるのが記号論である。

言語学者ソシュール(Saussure)は、「言語記号が結ぶのは、ものと名前ではなくて、概念と聴覚映像である。…われわれは概念と聴覚映像との結合を記号（signe)と呼ぶ。…われわれは、記号という語を、ぜんたいを示すために保存し、概念（concept）と聴覚映像（imageacoustique）をそれぞれ所記と能記にかえることを、提唱する。…能記を所記に結びつける紐帯は、恣意的である、いいかえれば、記号とは、能記と所記との連合から生じた全体を意味する以上、われわれはいっそうかんたんにいうことができる：言語記号は恣意的である」[12]と述べている。

このように、ソシュールは言語を一つの記号体系と見ており、記号が指すものを能記（シニフィアン）、即ち「記号表現」と、そして記号で指されるものを所記（シニフィエ）、即ち「記号内容」と定義づけた。

ソシュールの二項対立の考えに対し、パース(Charles Sanders Peirce)は、「記号表現」と「記号内容」の間に、「解釈項」という第３項を入れるべきだと主張し、記号について、「記号というのは、一方でその対象と言われる、自分以外の何物によって規定（つまり限定、特殊化）され、他方で現実の、あるいは可能な心を規定して、この解釈する心がその対象によって間接的に規定されるようにするところの、認知可能なものである。そのような心の規

---

[10]（source text の略）　起点テクストのことであり、本研究では主に「原文」のことを指す。だだ、魯訳に重訳、また重訳から重訳したものもあるため、本研究でいうＳＴがさすのは、魯迅が底本としたテクスト（それが訳本であっても）のことである。また、必要に応じ、ＳＴの代わりに「起点テクスト」や「原文」を使うこともあるが、特別な説明がない限り、「ＳＴ」と同様な意味で用いる。

[11]（target text の略）目標テクストのことであり、本研究では主に「訳文」のことを指す。

[12] フェルディナン・ド・ソシュール著　小林英夫訳（1940）『一般言語学講義』岩波書店 p.96-98

定作用を私は記号によって作られた解釈項と名付ける」[13]と述べている。

即ちパースは、意味とは、言葉とイメージとの連合であり、象徴記号の意図された解釈項だと考え、言語と非言語乃至世の中のすべてのものを常に変動しつつある解釈の「記号過程（semiotics）」と見なしており、記号、その対象及びその解釈項という三つの主体が記号過程の中で協働していると考えているのである。

記号論を初めて翻訳に導入したのがロシア人の言語学者ヤーコブソン(Roman Jakobson)である。ヤーコブソンは、ソシュールの「言語記号の恣意性」という理論に関心を示していると同時に、パースの「解釈項」を高く評価している。彼は記号論に基づき、翻訳を次の 3 種類に分けている。

「１）言語内翻訳、すなわち、言い換えは、ことばの記号を同じ言語の他の記号で解釈することである。２）言語間翻訳、すなわち、本来の翻訳は、ことばの記号を他の言語で解釈することである。３）記号法間翻訳、すなわち、移し換えは、ことばの記号をことばでない記号体系の記号によって解釈することである」[14]。

また、ヤーコブソンは、コミュニケーションにおける６つの因子を、送り手、受け手、場面、メッセージ、接触、コードと分け、下記の図表 2－１のように示している。

図表 2－１コミュニケーションの機能図式

場面（指示的）

メッセージ（詩的）

送り手（主情的）　――――――――――――――――――――――　受け手（能動的）

接触（交話的）

コード（メタ言語的）

出所　ヤーコブソン著　井上嘉彦訳（1984）『言語とメタ言語』ｐ.102

このように、ヤーコブソンは、翻訳を言語内、言語間そして記号間で成立するものとして考え、パースの説に基づき、いかなる言語学的記号もその意味は、先にある代替的記号、特

---

[13] パース著　内田種臣訳（1986）パース著作集 2『記号学』勁草書房 p. 147-148

[14] ロマーン・ヤーコブソン著　川本茂雄監修（1973）『一般言語学』みすず書房ｐ.57－58

により発達的記号に翻訳されうるところにあると見ており、翻訳が能動的に意味を創生するということを強調しており、翻訳の「等価性」という概念を提唱した。

後に、ナイダは解釈記号論に基づき、ＳＴとＴＴの間に、比較のための第3項（tertium comparationis）が存在すると想定し、ヤーコブソンの理論を発展させ、「動的等価・形式等価」という、翻訳界に多大な影響を与えた理論を発表した。

1.1　「等価」の定義と種類

「等価（equivalence）とは起点テクストと目標テクストとの間に形式、機能、あるいはその他のレベルで等価「同等の価値（equal value）」の関係性があるという考え方だ」[15]と、ピムが解釈している。

ピムが指摘したように、「等価」パラダイムは、文脈上の意味合い、いわゆるコンテクストに着目すると同時に、テクストに「機能の不変性」があると想定しており、翻訳をこの範囲の中で取り扱うべきだと主張している。等価は下記のように、更に「自然的等価」と「方向的等価」に分けられている。

「『自然的等価』とは言語Ａから言語Ｂに訳してもその逆でも同じ訳語が得られるという意味である。それは翻訳行為が行われる以前に同じ価値が存在すると想定されている。…『方向的等価』とは、両方向的に機能するのではなく、ある方向で翻訳した際に作り出される等価が、逆方向に翻訳した際には成立しない、というアシンメトリー（非対称的）な関係を指す」[16]。

翻訳理論家の方略により、方向的等価は更に二項対立的に分類されている。即ち起点テクストの形式から離れない方略と離れる方略である。

図表２－２　翻訳理論家の方略による方向的等価の二項対立性

翻訳理論家	ＳＴの形式から離れない方略	ＳＴの形式から離れる方略
キケロ	直訳主義の解釈の如く	演者の如く

[15] アンソニー・ピム著　武田珂代子訳（2010）『翻訳理論の探求』　みすず書房　ｐ.11

[16] 同上　ｐ.11、ｐ.42

シュライアーマハー	異化作用	同化作用
ナイダ	形式的	動的
ニューマーク	意味重視の	コミュニケーション重視の
レヴィー	反幻想的翻訳	幻想的翻訳
ハウス	顕在化翻訳	潜在化翻訳
ノード	記録としての	道具としての
トゥーリー	適切さ	受容可能性
ヴェヌティ	抵抗する	流暢な

出所　武田訳（2010）『翻訳理論の探求』p．55 による筆者作成

後に、ナイダ(Nida)が「自然的等価」を「形式的等価」（formal equivalence）と、そして「方向的等価」を「動的等価」(dynamic equivalence)と呼び、次のように説明している。

「…形式的等価を目ざす翻訳は、根本的には原作中心の発想をもつ。つまり、それは原作の伝達文の形式と内容をできるだけ多く表そうともくろむのである。…形式的等価を目ざす翻訳とは対照的に、他の翻訳は動的な等価を目ざす。この種の翻訳では関心の中心が、原作の伝達内容よりはむしろ、受信者の反応に向けられる」[17]。

形式的等価が起点言語を志向するのに対し、動的等価は目標言語や文化に合わせながら、起点テクストと同じ効果を持つ「自然」な表現を求めている。そのため、ナイダの動的等価は後述の「帰化」方略に近いものだと考えられよう。

カーデ（Kade）が等価を次の 4 種類に分けている。

図表 2－3　カーデによる 4 種類の等価

等価の種類	特徴
一対一	双方向性
一対複数	方向的　選択による
一対部分	方向的　近似

[17] ナイダ著　成瀬武史訳（1973）『翻訳学序説』開文社ｐ.240－243

一対ゼロ	方向的

出所　武田訳（2010）『翻訳理論の探求』p.48-49　筆者による加筆あり

ところが、ピムが提示したように、テクストにテクストを超えるものが関わっているため、ＳＴを超えても翻訳は語れるという発想もある。いかなるものの間に「等価」は存在せず、何らかのレベルで違いが出てくる。ＳＴ自身も安定したものでない限り、ＴＴがいつもＳＴと「等価」であることは当然考えられない。トゥーリー(Gideon Toury）やルフェーヴス（Lefevere）が主張した[18]ように、等価はあらゆる翻訳に存在する一つの特徴であり、それを社会的コンテクストの中で捉えるべきだとされている。

しかし、このような否定的な見方も多々あるが、「等価」は翻訳の本質を明らかにするための有効的な概念だと思われる。さもなければ、「翻訳」という言葉自体が存在する必要はなくなってしまうのであろう。

ところで、「翻訳」とは何なのであろうか。パラダイムが異なると、「翻訳」という言葉の捉え方も違ってくる。

1.2　等価理論に基づく「翻訳」の定義

等価パラダイムにおいては、翻訳について様々な定義が付けられている。

ナイダ(1969)において、「翻訳とは、言語で表現されている内容を、それに最も近く自然な受容言語で再現することであり、まず意味内容の点で、次に文体の点で原語と受容言語が実質的に対応するようにするのである」[19]と定義づけている。

それに対し、 ピムがまとめたように、オッティンガー（Oettinger）は、「言語間の翻訳はある言語の要素（中略）を他の言語の等価の要素に置き換えることだと定義できる」。そして、「翻訳とはある言語のテクスト上の構成要素を他の言語における等価の構成要素に置き換えることだと定義できる」と、キャットフォード（Catford）が考えている。また、「翻訳は起点言語のテクストから導き出されたできる限り等価に近い目標言語のテクストで、原文の内容と文体の理解を前提としている」[20]と、ヴォルス（Wolss）は解釈している。

---

[18] アンソニー・ピム著　武田珂代子訳（2010）『翻訳理論の探求』　みすず書房 p.109－111 を参照されたい。

[19] Eugene A.Nida　Charles R.Taber　Noah S.Brannen 著　沢登春仁　升川潔訳『翻訳-理論と実際』研究社 p.14

[20] アンソニー・ピム著　武田珂代子訳（2010）『翻訳理論の探求』　みすず書房　p.46

このように、等価パラダイムだけにおいても、翻訳に関する定義は様々である。

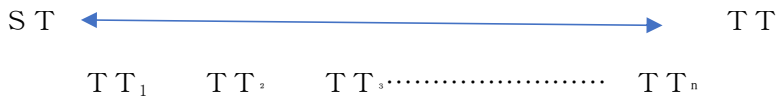
数十年前までは、翻訳を「言語文字の意味あいを別の言語文字で表すこと」のように、シンプルな概念として捉える傾向があった。しかし、多岐に亘る翻訳活動はそう簡単に取り扱われるべきではない。そこで、本研究では、「翻訳」の定義について、次のように捉えている。

翻訳（translation）[21]とは参照テクストのあり、人々が目的を持って行われる社会コミュニケーションにおける異文化・異言語的行為及び活動である。その対象やプロセスは訳者の意志や社会ニューズによって異なってくる。

ヴィネイ(Vinay)とダルベルネ(Darbelnet)が、一般的翻訳手順を①借用（loan）②語義借用（calque）③直訳（literal）④転位（transposition）⑤調整（modulation）⑥対応（correspondence）⑦適合（adaptation）と分けている[22]。

そうであれば、ＳＴとＴＴの間に、理論上、ＳＴと距離の異なる無限のＴＴが成り立つことになる。図にすれば次の通りになる。

図表２－４　ＴＴの無限産出



出所　方（2011）『中国訳学大辞典』p.8　筆者による一部加筆あり

「図表２－４」のように、ＴＴ$_1$はＳＴに一番忠実であり、右に行くと、その忠実さが次第に減り、ＴＴ$_n$はＳＴから一番離れており、つまり一番忠実でないＴＴだ、ということになる[23]。換言すれば、一番左が最もＳＴに近くて直訳、異化的であり、右に行くと次第に再創造的になり、最も意訳、帰化的だと言える。

---

[21] translationは日本語の「通訳」も包含するものである。本研究においては「翻訳」を概念、術語として取り上げる場合は、特別な説明がない限り、「翻訳」の片方を指すことにする。

[22] アンソニー・ピム著　武田珂代子訳（2010）『翻訳理論の探求』　みすず書房 p.23-24

[23] 方梦之主编(2011)《中国译学大辞典》 上海外语教育出版社　p.8を参照されたい。

2　直訳法と意訳法の二元論

直訳と意訳は、翻訳方法としても翻訳ストラテジーとしても捉えることが可能である。

翻訳方法（methods of translation）とは、訳者が翻訳の任務や要求に基づき、特定の目的に達する為に採った具体的なルート、ストラテジー、手法、テクニックなどを指す。

一口に翻訳方法と言っても、広義的意味と狭義的意味に分かれている。

広義的な意味は、原作の内容や形式を伝達するために、翻訳プロセスにおける設計図の想定、ルート、ストラテジー及び美学態度などを指す。例として、帰化・異化・抵抗・直訳・意訳・音訳・語義翻訳・語用翻訳・逐次訳等が挙げられる。

狭義的な意味は、翻訳プロセスの中における、具体的問題を解決する対策を指す（「翻訳技法/テクニック」等と呼ばれる場合も多い）。例として、加訳（増訳）・減訳（略訳）・反訳（裏返し訳、すなわち、否定的な表現を肯定的な表現にしたり、またその逆にしたりする訳し方）・分訳（「拆訳」とも。すなわち、一つの文を崩して二つもしくは二つ以上の文にしたりする訳し方）合訳（「併訳」とも。すなわち、二つもしくは二つ以上の文を一つの文に訳したりする訳し方）・代替などが挙げられる[24]。

また、（広義的）翻訳方法の下位概念として、翻訳ストラテジーがある。翻訳ストラテジーとして、異化、帰化のほか、ＳＴの選択、訳法の定め、リライト、抵抗、文化移植などが挙げられる。

「ストラテジー（strategy of translation）とは、最適な方法で、ある特定の目標に到達するために用いられる一連の目的論的行動を意味する」[25]。

今では、翻訳ストラテジーを文化面の視点で捉えているのに対し、（狭義的）翻訳方法をテクストレベルの視点から捉える傾向がある。そのため、文化視点でのストラテジーを全体的なストラテジーと、そしてテクスト視点でのストラテジーを局所的なストラテジーと見なす研究者もいる[26]。

このように、翻訳ストラテジーは翻訳方法と複雑に絡み合う関係を持つものである。その

---

[24] 同上 P. 94-95 を参照されたい。

[25] モナ・ベイカー　ガブリエラ・サルダーニヤ編　藤濤文子監修・編訳　伊原紀子・田辺希久子訳（2013）『翻訳研究のキーワード』研究社　p. 210

[26] 方梦之主编(2011)《中国译学大辞典》 上海外语教育出版社 P. 110 を参照されたい。

ため、この術語に定義を下す研究者達自身もよく混同して使用している。

同じように、直訳法と意訳法は、訳作のデザインの視点、つまり広義的翻訳方法としてとることができる一方、操作面における具体的な訳し方、即ち狭義的翻訳方法として捉えることも可能である。

直訳（literal translation）の定義について、様々な意見や異論があるが、一般的に「訳文の形式も内容も原文に合うのが直訳だ」とされている。

「（直訳とは）1 語ずつ語順を再現する逐語訳より緩やかであり、2 語以上（3 語以上の句や節などのまとまりごとの訳出も含まれる）を単位とし、起点テクストの語順を再現しようとする訳出法である。ある訳出が直訳かどうかはその都度、判断する者によるが、ぎこちない目標テクストになることがあるため、敬遠される場合もある。しかし、芸術的なテクストなどでは表現の形が重要なことがあり、そういった場合には語順の再現を意識した直訳がふさわしいとされる」[27]。

意訳（semantic translation）の定義も直訳と同じように、様々な見解があるが、一般的に「訳文の形式が異なるが、内容が原文に合うのが意訳だ」とされている。

直訳と意訳は二項対立の概念のように捉えがちであるが、ＳＴの言語文化をＴＴの言語文化の中で取り扱われるため、その境界線は明確に引くことができない。

ところで、テクストレベルの「翻訳方法」としての「直訳」と「意訳」の二項対立をめぐる議論は、1990 年代に入り、次第に文化レベルの「翻訳ストラテジー」としての「帰化」と「異化」の二項対立をめぐる議論に替えられてきた。

3　帰化ストラテジー VS. 異化ストラテジー

帰化と異化はヴェヌティ（Venoti ）が提唱した翻訳ストラテジーである。

帰化(domesticating)翻訳は目的文化を終着点としており、できるだけ翻訳シフト（差異）を消し、それを読者に意識させない翻訳のことである。それに対し、異化（foreignizing）翻訳は起点言語文化を終着点としており、できるだけ翻訳シフトを保ち、それを読者に意識

[27] 鳥飼久美子編著（2013）『よくわかる翻訳通訳学』　ミネルヴァ書房 p. iv

させる翻訳のことだとされている[28]。

異化翻訳の類義語として、「抵抗式翻訳」（resistant translation）もある。ただ、「帰化」と「異化」は訳者の原文テクスト及び当該国文化に対する道徳態度を指す。それに対し、「流暢」と「抵抗」は読者の認知プロセスに関わる、訳者の言葉遣いの取捨選択の策略を指す。要するに、ヴェヌティは「抵抗式翻訳」と「異化」ストラテジーを推奨し、翻訳における欧米大国の文化覇権主義に対抗する態度を示すと同時に、翻訳によって異質なものを目的言語・文化に批判的に取り入れるべきだと主張しているわけである。

しかし、直訳と意訳と同じように、異化とはいえ、あくまで目標言語文化でテクストを取り扱うため、異化も帰化の一種として見ることができると、ヴェヌティは見ている。

ところで、ヴェヌティの発想は、ドイツのルドルフ・パンヴィッツ(Rudolf Pannwitz)（1917）の『ヨーロッパ文化の危機』における、翻訳の方向性に関する言説と酷似するものである。

「我が国の翻訳は、最良のものであっても、誤った原則から出発している。これらの翻訳は、ドイツ語をインド語やギリシア語や英語にするのではなく、インド語やギリシア語や英語をドイツ語にしようとする。また、外国の作品の精神に対してよりも、自国語の言葉の使い方に対してはるかに多くの畏敬の念を抱いている。…翻訳者の根本的な誤りは、自国語を外国語によって激しく揺り動かすのではなく、自国語の偶然的な状態を固持するということだ。翻訳者は、とりわけ非常に離れた言語から翻訳する場合には、言葉とイメージと音とが一体となる言語そのものの究極的な要素へと立ち戻らなければならない。翻訳者は、自分の言語を外国語によって押し拡げ、深めなければならない」[29]。

これは即ち、訳文は目的言語・文化に寄り付くのではなく、起点言語・文化に近づくべきだということである。

魯迅の直訳、異化翻訳の実践はヴェヌティの理論よりはもちろん、ルドルフ・パンヴィッツや後述のベンヤミンの主張よりも早いことになっている。しかし、その翻訳思想は酷似するものである。自国言語文化を固持するのではなく、翻訳を通じて自国語を押し広げ、熟し

---

[28] 郭建中（2000）《翻译中的文化因素：异化与归化》中国对外翻訳出版公司 P.276 と、アンソニー・ピム　武田　珂代子訳（2010）『翻訳理論の探求』みすず書房を参照されたい。

[29] 三ツ木道夫編訳（2008）『思想としての翻訳　ゲーテからベンヤミン、ブロッホまで』白水社

たものにするには、訳者が自覚しなければならないという点においては、魯迅と同時代のパンヴィッツとの間に、驚くほど共通しているのである。

ところで、翻訳作業に当たり、直訳と意訳そして帰化ストラテジーと異化ストラテジーのどちらを選ぶか、即ちＳＴをどのように取り扱うべきかは翻訳倫理の問題に関わっている。

4　翻訳倫理

翻訳倫理（translation ethics）学では、訳者が原文作者や訳文読者並びに訳文の質に対して責任を持ち、できる限り翻訳交流にある各方面からの信頼を得るべく最善を尽くすべきだと強調されている。

翻訳の最終的な目的は異なる民族文化間の理解や疎通を促すところにあり、原文を正確に理解、伝達することこそ翻訳の本来あるべき姿であり、翻訳の主要となる本質的な特徴でもある。それに対し、翻訳における誤読やリライトなどは翻訳の副次的な特徴である。

4.1　チェスターマンによる翻訳倫理の分類

翻訳倫理をめぐる議論が諸々であるが、ここでチェスターマン（Chesterman 2001）が提唱した再現的倫理・サービス的倫理・交際的倫理・規範に基づく倫理という四つの分け方を提示しておく。

再現的倫理とは、訳者が原作及び原作者の意図を正確に再現させ、増減無し、そしてリライトのないように自覚することによって、忠実さを追い求めることである。

サービス的倫理とは、翻訳をビジネスサービスと見なし、翻訳が最終的に、クライアントの要請や、依頼人と訳者が共同で定めた目標を実現させなければならない、ということである。

交際的倫理は、他文化への叙述の代わりに、コミュニケーション機能を強調している。協力によって双方にメリットをもたらすとともに、さらに異文化間の協力を促すというのが、異文化コミュニケーションの目標であるため、訳者は自分の職業に忠実し、異文化コミュニケーションの達成に尽くすべきだという。

規範に基づく倫理は、叙述的パラダイムに属する翻訳規範理論に由来している。目標文化の規範が代表として、目標文化が訳文に期待することを意味している。訳者の道徳は規範に

合い、特定文化の期待を満たすものであるべきだ、ということである[30]。

チェスターマンの倫理論でいうと、後述のように、魯迅は再現的倫理を最も重視すると同時に、サービス的倫理、交際的倫理をある程度で配慮しながら、許される範囲において規範に基づく倫理を打ち破ろうと試みていたと思われる。

4.2　ベンヤミンの「翻訳者の課題」

ベンヤミン（Walter Benjamin）が 1923 年に発表された「翻訳者の課題」は、翻訳界において重要な一席を占めている。ベンヤミンはその中で翻訳の本質や翻訳者の課題について論じている。中に「霊知」的な部分もあるが、その見解や理由をまとめると次のようである。

①　原文の翻訳可能性は、原文自身に翻訳される価値の有無による。

いかなる芸術は人間の身体的・精神的本質を前提とする。従って、特定の受容者を考慮に入れることは本来の道から足を踏み外れてしまうことになる。

文学にとって、本質的なものは伝達でも意味内容でもなく、啓示、つまり意図された志向である。従って、媒介を目的としている翻訳は伝達を、即ち非本質的なものを媒介することしかできない。

翻訳は原作へと立ち返らなければならない。従って、原作の中にこそ、翻訳の可能性が含まれているのである。換言すれば、翻訳可能性は作品の中にある本質的なものである（p.88－89 を参照）。

②　翻訳とは、意味を訳すのではなく、形式を訳すものである。

相互に補完されていない言語では、意図されたものは常に変転するものとして捉えられている。

諸言語の親縁性は、二つの文学作品の表面的で定義できない類似性においてよりも、翻訳において、はるかに深くそして明確に証明されるのである。

翻訳は一つの形式であり、原作から生まれたものである。その為、原作は翻訳の中において生き続け、更新されていくと同時に、最も包括的な発展に向かっているのである。翻訳は、二つの不完全な言語等式からかけ離れている。従って、多言語の追熟に留意するという役割、そして自国の言葉の産出に留意するという役割が翻訳の固有の特質なのである。

異なる言語間において、個々の単語や文が相いれないのに対し、志向そのものが相互に補

---

[30] 方梦之主编(2011)《中国译学大辞典》 上海外语教育出版社 P.42 を参照されたい。

完し合う。最終的にその意図されたものは、各言語において調和された形式となり、純粋言語[31]として姿を現すことになる（p. 88-96 を参照）。

③　一番理想的な翻訳法は行間逐語訳である。

形式の再現が意味の忠実さを困難なものとする。意味を保つことは、訳者に無規律な自由を与えてしまう。真の翻訳は原作を覆い隠したりすることではなく、翻訳の固有の媒質により、純粋言語の創出に留意しながら、より完全的な形で原作を更新すべきだ。ところで、文が原作の言語の前に立つ壁であるため、それを可能にするのが、シンタックスを置き換えるときの逐語性である。

聖書では、意味は言語と啓示の複合体である。聖なるテクストはもはや何かを媒介する意味をもたず、逐語的な形をとりながら、真の言語、真実、あるいは論理に属している為、翻訳可能なものになる。聖なるテクストには、その潜在的な翻訳が最高度に行間に含まれているのである。

真の翻訳も、逐語性と自由をもちつつ、行間逐語訳という形で、言語と啓示が何の緊張ももたず必然的に合一するように要求されている。従って、聖なるテクストの行間逐語訳があらゆる翻訳の原像、あるいは理想なのである（ｐ. 103-109 を参照）。

④　翻訳の効用

翻訳は、あらゆる言語結合の最終的、究極的、決定的な段階に向かっているのである。原作は翻訳においてこそ、より高次でより純粋な言語へと成長していく（ｐ. 96 を参照）。

即ち、翻訳の効用は、本質を意味から解放し、象徴するものを象徴されるものにし、形成されたものの形で純粋言語を言語運動に取り戻すことにあると、ベンヤミンは見ている（p. 105 を参照）。

⑤　翻訳者の課題

翻訳者の課題は、目標言語への志向ではなく、翻訳先の言語へと向かう志向を見出すことにある。その志向により、翻訳先の言語の中で原作のこだまが呼び起こされる。それが文芸作品とは完全に区別されるべき翻訳の特徴だとベンヤミンは述べている（p. 99 を参照）。

「異質な言語のうちに呪縛された純粋言語を、自分自身の翻訳の言語のなかで救済するこ

---

[31] ベンヤミンの解釈によると、「純粋言語は、もはや何も意図せず、何も表現しないが、表現を欠いた創造的な言葉となって、あらゆる言語において意図されたものそのものである。この純粋言語のなかで、最終的には、あらゆる伝達、あらゆる意味、あらゆる意味、そしてあらゆる志向が一つの層に達する。そこではそれらがすべて消滅すべく定められている」。p. 105 - 106

と、作品のうちにとらわれた言語を作品の改作において解放すること、それが翻訳者の課題なのである。この課題のために、翻訳者は自分自身の翻訳の言語の朽ちてもろくなった障壁を打ち壊す」（p.106）。

これはすなわち、諸々の言語を純粋言語へと統合するように努めながら、自分自身の欠陥を補うというのが、翻訳の役割であり、そして翻訳者の課題でもある、ということを意味している。

このように、ベンヤミンは言語を翻訳という手段により豊かにし、優れたものにするだけではなく、「純粋言語」の成立を最終的な目的としている。換言すれば、世界共通語のような「真の言語」の夢を翻訳に託しているのである。

しかし、「純粋言語」に究極的なコミュニケーションを求めるわけだが、ベンヤミンの論述の一部は霊知的な色を帯びており、あくまで一種の理想に過ぎない[32]。

魯迅はそこまで野心を持っておらず、より冷静な態度をとっている。彼は翻訳を通じて外国語にある異質なものを取り入れ、中国語を改良しようと主張しながら、実践を試みた。

意味を訳すのではなく形式を訳すのが翻訳の取るべきことだとベンヤミンは主張しており、行間逐語訳を推奨している。

魯迅も原文を尊重するという志向を示しており、原文の構文をできる限り変えずに、必要に応じて語彙、語法、表現の輸入により、目的言語や文化を改造しようとしており、「直訳」法、そして「抵抗・異化」ストラテジーを堅持しているのである。

ベンヤミンに比べると、魯迅の思慮はより現実的である。最終的な目的というところで、魯迅はベンヤミンと一線を画すことになっているものの、翻訳方法、翻訳思想に関しては、ベンヤミンと酷似している。

本章においては、ナイダの「等価」理論を記号論との繋がりを議論し、「直訳法」と「意訳法」、またヴィヌティの「帰化」と「異化」、そして「抵抗式」ストラテジー、並びにチェスターマンやベンヤミンの翻訳倫理論を概観した上で、魯訳との繋がりについても言及してみた。

続いて第３章から第５章までは、実証的なテクスト対照分析を行い、魯迅がＳＴをどのように取り扱い、どのように訳しているかを検討しながら、魯訳の訳法や翻訳ストラテジーを考察してみる。更になぜそのように扱っているかを魯迅に関する事項や社会的背景と関連付

---

[32] 簡単にいうと、宇宙の有形、無形なモノ・コトに対する人間の認知が限られている以上、その夢は実現不可能なものとなる。

けて分析を展開し、翻訳の表面的な現象を通じ、深層にある魯迅の翻訳動機を追究してみる。

第 3 章　魯訳の時期分けと初期翻訳

この章においては魯迅の初期翻訳をめぐって分析を展開していく。1 において、魯迅の訳業を時期ごとに分けた上でその理由を述べる。2 において、初期魯訳の翻訳対象となった作品を提示し、ＳＴ選択に当たる魯迅の意図を検討すると同時に、時代背景や若き魯迅の経歴に関連付けて彼の伝統文化及び外来思潮の受容状況を分析してみる。3 において、初期魯訳の翻訳法やストラテジーの分析を行い、当時魯迅の翻訳の営みの特徴を把握しておく。4 において、初期における魯迅の翻訳動機を追究してみる。

1　魯訳時期の分け方

論述を展開する前に、先行研究の魯訳の時期の分け方の問題点を再度確認し、魯訳の各時期の特徴によって、筆者の分け方及びその理由について説明しておく。

1.1　先行研究における分け方及びその問題点

志賀の研究においては、魯迅の翻訳活動を日本留学時代（1902～1909 年）、北京工作時期（1912～1926 年）、厦門広州上海工作時期（1926～1936 年）に、更に理論体系という名のもとで、初期（1898～1926 年）、中期（1926～1932 年）、後期（1932～1936 年）というふうに分けられている。しかしそうなると、問題がいつくか出てくる。

まず、魯迅の訳業が 1903 年に始まったのにもかかわらず、魯迅が渡日の 1902 年からスタートしたとされている。それから、その分け方では、『域外小説集』の特別な存在としての意義、即ち、1909 年を境にして魯訳が完全に意訳から直訳へ転向したことを見落とす恐れが出てくる。さらに、1919 年を境にして魯迅の訳文体が主とした古文から本格的に白話文へと転換したことも、1928 年 6 月あたりから魯迅の訳業がソ連（ロシア）文芸論、文学へと転換したことも明確されずじまいであった。

呉の研究においては、『域外小説集』の特別な存在としての意義を十分意識されており、魯訳の初期を 1903～1908 年に設定されている。その反面、魯迅の滞在先に合わせ、中期を 1909～1926 年に、後期を 1927～1936 年に設定されている。しかしそうすると、志賀と同様に、魯迅の訳業が 1928 年 6 月からソ連（ロシア）の文芸論及び文学への転向は明確されないままになっている。

顧の研究において 1903～1918 年を魯訳の初期に設定されているが、それによって、翻訳法

と訳文体の転換の区切りにはずれが出てくる。一方、1928 年に発表された鶴見祐輔の『思想・山水・人物』の中国語訳を魯訳の中期ではなく、その後期にされている。それによって、先述した両氏の研究と同様に、中・後期魯訳の区切りを混乱させている。

上述の理由により、筆者による魯迅の訳業の分け方を下に示す。

1.2　筆者による分け方及びその理由

①初期翻訳【Ⅰ】（1903～1908 年）

『哀塵』の発表から『裴彖飛詩論』の発表までの間である。

科学冒険小説が多訳され、文語が多用されている。意訳、編訳、帰化ストラテジーの雰囲気が極めて強く、魯迅の訳業の中で、一番翻案に近い翻訳方法を採った時期である。

②初期翻訳【Ⅱ】（1909～1918 年）

『謾』の発表から『察羅堵斯徳羅緒言』の発表までの間である[33]。

訳文体が相変わらず文語である一方、『域外小説集』を皮切りに、意訳法から直訳法に転換した時期である。また、勤務関係で長い空白期ができるほど訳出が激減した時期でもある。そのため、この時期を「魯訳の空白期」と呼びたい。

③中期翻訳（1919～1928 年 5 月）

『ある青年の夢』の魯訳の発表から『思想・山水・人物』の魯訳の発表までの間である。

訳文体は文語から本格的に白話文に転換した。それが触媒ともなり、直訳法も魯訳の特徴として顕著になった。翻訳のジャンル別の面において実に豊富であり、小説や童話もあれば、雑文や論文もある。また、国別の面においても英・米・日・露・独のものもあれば、東欧や北欧の少数民族のものもある。中期は後期と同様に、魯訳の多産期である。

④後期翻訳（1928.6～1936 年）

『文芸の領域における党の政策について』の魯訳（後に『文芸政策』に収録）の発表から『死せる魂』の訳出の未完成のまま、魯迅が亡くなる三日前までの間である。

ソ連文学、そしてプロレタリア文芸論の翻訳が目立つようになり、やがて文芸論の翻訳が多くなると共に、「硬訳」と言われるほど、訳文体がより一層直訳の傾向を強めているが、1932 年から文芸論翻訳を手放し、再び小説翻訳に転向し、「直訳」の雰囲気が些か薄まった

---

[33] 実は『裴彖飛詩論』と『謾』（『域外小説集』）の間に、二葉亭四迷の日本語訳『血笑記』からの重訳『紅笑』もあったが、魯迅によると、何頁か訳出して、途中でやめたという。また訳文紛失の上に、未発表であるため、対象にしないことにした。

時期である。

このように、初期魯訳を二分化し、意訳から直訳への転向までを「初期Ⅰ」とする。また翻訳法が直訳にシフトしたが、訳文体は相変わらず古文を主とする時期を「初期Ⅱ」とする。それから、訳文体を本格的に白話文に乗り換えた 1919 年を魯訳中期の始めと見なし、『思想・山水・人物』を訳了した時点を中期の終りと設定する。更に本格的にソ連の文芸論及び文学に取り掛かった 1928 年 6 月を魯訳後期の始めと見なす。と同時に、再び小説翻訳へと転向した 1932 年から 1936 年までを「硬訳」が緩和した時期とする。

無論、筆者の分け方に対し、異論が出てくる可能性も考えられるが、述べてきたように、魯訳の特徴の各面を考慮したうえで時期分けをしたほうが適切ではないかと思われる。

では、各時期の魯訳はどのように成されているのか、どのような翻訳法を採り入れられているのか、そのような翻訳法がその翻訳動機とどのように関わっているのか、このような意識を念頭に置きながら、具体的に分析を展開していくが、次節では、初期魯訳の対象を記述すると同時に、若き魯迅の経歴を検討してみる。

2　初期魯訳の翻訳対象

2.1　初期魯訳【Ⅰ】の営み

初期【Ⅰ】における魯迅の訳業は、「図表 3-１」の通りである。

図表 3-1　初期魯訳【Ⅰ】リスト[34]

発表年別	訳品	SL 国別	著者	ジャンル別	出版社
1903	哀尘	仏	ユゴー	小説	《浙江潮》5

[34]《摩罗诗力说》と《中国地质略论》を魯迅の翻訳とされる学者もいるが、載せないことにした。それは、後に出版された魯迅翻訳集にこの二篇が収録されていない上に、魯迅自身の話から判断しても、その二篇が関連論文を読み漁り、翻訳を交えて書かれた論文である可能性が高いからである。その辺は《集外集 序言》《魯迅全集》（2005）第７巻 人民文学出版社 p.3-5 を参照されたい。また魯迅によると《斯巴达之魂》と《说镭》も「盗作」（ＳＴに沿っての編訳という意味）らしいという。前者は今では改作と確定されたため、後者だけを取り上げることにする。

	说镭	仏	キュリー	化学論文	《浙江潮》8
	月界旅行	仏	ヴェルヌ	小説	東京進化社
	地底旅行	仏	同上	小説	《浙江潮》10～
1904	物理新诠	不明	不明	物理学論文	未出版
	世界史	独	不明	歴史学	未出版
	北极探险记	仏	不明	小説	未出版
1905	造人术	米	ルイス・ストーロン	小説	《女子世界》4、5
1907	《红星佚史》译诗	英	ハガード	詩歌	商务印书馆
1908	裴彖飞诗论	洪	ペトフィ	詩論	《河南》7

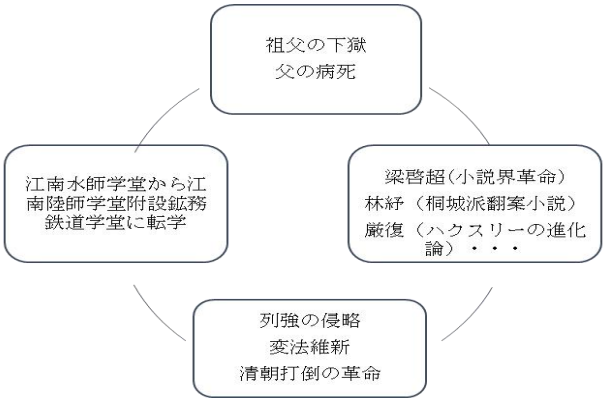
出所　筆者作成

「図表 3-1」で分るように、科学冒険小説、科学論文そして科学普及の読み物が初期魯訳の大半を占めている。では、なぜこのような作品が魯迅の翻訳対象に選ばれているのか。以下、若き魯迅やその翻訳の営みに関わり得る事情を検討しながら、それを明らかにしてみる。

2.2　日本留学前の経歴

幼児期、比較的に裕福な生活を送った魯迅は、家庭の事情で貧窮生活を余儀なくされ、「科挙」受験を諦め、学費を要しない新式学堂への進学を選択した。当時の中国では、欧米列強の圧力に屈した清政府に対する不満や反発が高まっており、中国の諸問題の解決を改革に求めようとした有志達が次々と登場していた。そのいずれも、若き魯迅に多大な影響を及ぼしたと考えられる。

図表 3-2　若き魯迅の生い立ち



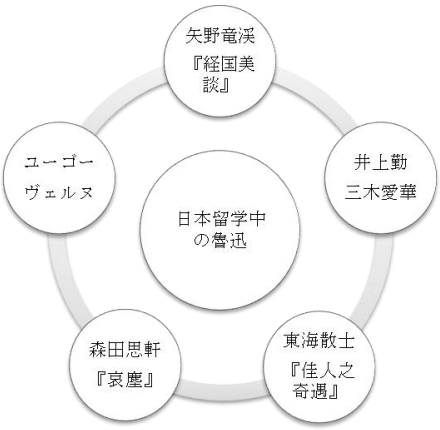
出所　筆者作成

「図表 3-2」で分かるように、魯迅が 13 歳の時に、祖父周福清が息子周鳳儀のために、賄賂事件に巻き込まれ、投獄されたのが契機で、周家が没落し始めた。禍はそればかりではなく、何年も経たないうちに、周鳳儀は病に臥せったあげく藪医者にかかり、適切な治療を受けることができずに亡くなった。その間、魯迅は父親の長い看病生活を余儀なくされたのだが、その体験が後の医学志向の一因にもなり得たと考えられる。要するに、周家の没落により、若き魯迅は祖父や父親の選んだ「科挙」への道を諦め、当時あまり良しとされない西洋の科学技術を教える新式学堂へ進学した。最初に入学したのが江南水師学堂であったが、「いい加減なところ」だと魯迅は考え、江南陸師学堂附設鉱務鉄道学堂に転学した。列強侵略や変法維新という時代を背景にしながら、魯迅はそこで西洋の近代科学や新思潮に触れ始めた。と同時に、康有為、梁啓超、厳復、林紓といった、いわゆる「先駆者」たちや同志からの影響も受けた。ちなみに、このような体験が後の「民衆の文明への開眼」という魯迅の願いに繋がるものだと考えられる。

2.3　日本留学を通じて受けた影響

周作人によると、魯迅は漱石をはじめとする少数の日本作家以外の日本文学にはあまり興味を示さなかったという。しかし、8 年近くも日本に留学し、日本語という道具を生かし、日本文学は言うまでもなく、数多くの西欧文学にも魯迅が触れることができた、というのも事実である。そういう意味では、魯迅が目を向けたのは世界中の文学であったが、最初の入り口はやはり日本文学であった。

図表 3-3　初期魯訳【1】の「日本」とのかかわり



出所　筆者作成

「図表 3-1 初期魯訳【1】リスト」を「図表 3-3 初期魯訳【1】の『日本』とのかかわり」と照合すれば分かるように、魯迅の《月界旅行》（1903）、《地底旅行》（1903）そして訳文紛失の《北极探险记》はいずれも日本語訳からの重訳であり、科学冒険小説である。また、魯迅の早期翻案小説《斯巴达之魂》（1903）も矢野竜渓の『経国美談』の中の一つの物語と関わっており、《哀尘》（1903）も森田思軒（竜渓の弟子）の日本語訳『哀史』（ユーゴーが原作者）からの重訳である。東海散士の『佳人の奇遇』も直接的に訳していないものの、「小説で革命」と提唱した梁啓超がそれを訳しているため、魯迅への影響も大きいものだと考えられる。即ち、日本留学を通じて魯迅は日本と西洋の思潮の両方の影響を大いに受けた、ということになる。それが翻訳対象の採択に深く関わっていると考えられる。

ところで、初期段階の魯訳において、科学小説の翻訳は圧倒的に多い。では、魯迅はＳＴをどのように訳しているのであろうか。

3　初期魯訳【1】の翻訳方法 - 『九十七時二十分間月世界旅行』とその魯訳を中心に -

科学小説の翻訳が圧倒的に多い初期段階においては、魯迅の翻訳法やストラテジーは中後期と異なるものである。

ここで翻訳に関する魯迅自身の言論に関連付け、まず魯訳の科学冒険小説《月界旅行》[35]を中心にＳＴ・ＴＴの対照分析を行い、魯迅の翻訳技法やストラテジーを検討してみる。また、当時魯迅の訳文体についても分析し、初期魯訳【１】の特徴を考察する。

---

[35]《月界旅行》（1903）は魯迅の手によって、井上勤の日本語訳（1885）から重訳された中国語訳であるが、日本語訳のタイトルは『九十七時二十分間月世界旅行』である。原作は 1865 年に科学小説の作家として世界に名を馳せたフランス人ヴェルヌによって書かれており、天文、地理のような科学的な話が多いものである。後に英訳され、また英訳から日本語に、日本語訳から中国語に、というふうに重訳されている。本研究は和文中訳のみを問題とするため、魯迅が底本とした井上の日本語訳をＳＴと見なす。また、内容の粗筋は次の通りである。

アメリカ南北戦争が終わり、ある廃れかけた砲銃会社の社長が奇想天外、巨砲を造り、月に弾丸を発射しようとした。それに対して、社員を始め、全国及び世界中の人々も応援した。そしてフランス人の冒険者の一人が自らその弾丸に乗り、探検に行きたいと要請した。結果として、その大事業は皆の協力のもとで成功したという。

ところで、以下より本研究の最後まで、ＳＴとＴＴの用例を取り上げながら論を進めるが、中国語の読解に困難な日本人読者のために、必要に応じて中国語訳文の下にその日本語回訳（以下「回訳」と略す）を付す。脚注がない限り、その「回訳」は筆者によるものである。また、必要に応じて筆者による「試訳」とその試訳の「回訳」も添えておく。ただし、中日両言語のシステムが異なるため、回訳を付けたところで、形式といったレベルで完全に対応することは有り得ない。

3.1　帰化ストラテジー

当時の中日両国の翻訳界では、改訳、編訳、翻案という傾向が極めて強かった。魯迅はまだその影響から抜け出られていないため、中国の言語文化に合わせながら、翻訳の試みをしていた。従って、帰化翻訳はＴＴの至るところに見受けられる。

3.1.1　章タイトルと章結びの「帰化」処理

（1）ＳＴ　第一回　砲銃社[36]（p. 4）

ＴＴ　第一回 悲太平会员怀旧 破寥寂社长贻书[37]（p. 6）

回訳　太平を悲しみ、会員が旧事を偲ぶ。寂寞を打ち破り、社長が書簡を贈る。

（2）ＳＴ　第二回　社長珍事報告（p. 13）

ＴＴ　第二回 搜新地奇想惊天 登演坛雄谭震俗（p. 11）

回訳　新地を探し、奇想が天外より落つ。演壇に立ち、語が世を驚かせる。

上記の例のように、ＳＴは章ごとに地味なタイトルが付けられている。それに対し、読者の関心をひくことを配慮してか、ＴＴの章タイトルは中国旧小説の「章回体」に合わせたものであり、派手に訳されている。

（3）正是：壮士不甘空岁月，秋鸿何事下庭除。究竟为着甚事，且听下回分解（p. 10）。

日本語訳　壮士が歳月を甘んじない、秋の雁が何故庭に来たるか。詳細を知りたければ、次回で話をお待ちください。

（4）正是：莫问广寒在何许，据坛雄辩已惊神；要知以后情形，且听下回分解（p. 15）。

---

[36] 井上勤訳（1885）『九十七時二十分間月世界旅行』（以下『月世界旅行』と略す）東京進化社

[37] 魯迅訳（1903）《月界旅行》《魯迅译文集》第 1 巻（以下《月界旅行》と略す）人民文学出版社 1958

日本語訳　月の宮殿がいずこにあるかを問わず、壇上での演説は既に神を驚かせた。

以後のことを知りたければ、次回で話をお待ちください。

(3) と (4) のように、章の結びにおいても、もともとＳＴになかった、中国章回体によく現われる決まり文句は加筆されている。このような対処法は「帰化」ストラテジーでもあり、後述の「翻案」にも当たる。

3.1.2　外国人名の「帰化」処理

(5) ＳＴ　マーチソン

ＴＴ　马起孙

(6) ＳＴ　モルガン

ＴＴ　穆尔刚

例のように、初期の魯訳において外国人名を訳す場合は、中国の「百家姓」に適合させ、「帰化」ストラテジーで取り扱われた。興味深いことに、後に魯迅自身がこのような方策を強く批判するようになったのである。

3.2　翻案

翻案(adaptation)とは、「原作が翻訳される過程で、異文化的な要素が変更されたり省略されたり、あるいは新たな表現が追加されたりすることがある。その程度によっては、本来の『翻訳』と呼ぶには抵抗があるようなグレーゾンとなる。そうした翻訳の周辺部にあるのがこの adaptation である。本来の『翻訳』に入りにくい領域ではあるが、捉え方によってはどの翻訳にも含まれるものである。

翻案とは、一般的には翻訳とは認められないものの、ＳＴを再現する一連の介入であると考えられている。この用語には、専有化、同化、模造訳、リライトといった多くの曖昧な概念も含まれる」[38]。

また、adaptation を「意訳」とする翻訳辞典もある。ここから、術語に対する見解が如何に異なるかは分かる。

---

[38] モナ・ベイカー　ガブリエラ・サルダーニヤ編　藤濤文子監修・編訳　伊原紀子・田辺希久子訳 (2013)『翻訳研究のキーワード』研究社　p.2

魯迅の《月界旅行》は全体からすると翻案に近い訳出である。

3.2.1　《月界旅行 辯言》のリライト

魯迅は井上勤の『序』を参照しながら《辯言》を書きまとめた。それは引用のようなものでありながらも、書き直したり、または自らのコメントを付け加えたりしてできたものである。

(7) ＳＴ　夫長空雲ナク万里蒼茫一環ノ寒月高ク清空ニ懸リ玲瓏玉磨クカ如ク人ヲシテ快爽タラシム余歓シテ曰く嗚呼彼ノ月宮誰カ能ク其ノ闥ヲ排シ嫦娥ノ眠リヲ奪フ者有ント昔歴山王謂ヘルアリ曰ク人智ニ究極ナシト雖モ其小ナル時ハ以テ一ヒヲモ造ル能ハス其ノ大ナル時ハ以テ一カ國ヲ我カ掌中ニ納ルヘシテ宜哉論者或ハ謂ハントス是レ妄且誕一時ノ奇言ヲ以テ世ヲ欺ムクモノト是レ尋常必然ノ勢ヒナリ然レトモ決シテ然ヲサルアリ試ミニ譬ヲ引カン始メ蜘蛛漂葉ニ托スルヲ観テ舟ノ理ヲ悟リ木を剖ヒテ片トシ瓜形ノ舸茲ニ成ルモ今タ行進スルヲ得ス就テ棹檝ヲ製シタルモ其遅且鈍猶ホ足ルヲ覚ヘス随ツテ櫓帆ヲ製シ風ニハ櫓シ風ニハ帆シ終ニ能ク千里ノ遠キニ達スルヲ得タリ是ニ於テ舟檝ノ理漸ク全キニ至レリ…[39]。

ＴＴ 在昔人智未辟，天然擅权，积山长波，皆足为阻。递有刳木剡木之智，乃胎交通，而桨而飄，日益衍进。惟遥望重洋，水天相接，则犹魄悸体栗，谢不敏也…（ｐ.3）。

回訳　人智が開けていなかった古代には、自然は猛威をふるい、連山大河は障害であった。そのうちに刳木剡木の智が生まれ、往来が始まった。そして櫂から帆へと日ごとに進歩した。しかし大海原の遥か彼方で海と空があい接するのを望むと、なお心も身体もふるえ、不敏を恥じたのであった（丸山昇訳『月界旅行　解説』ｐ.209）。

(8) 我国说部，若言情谈故刺时志怪者，架栋汗牛，而独于科学小说，乃如麟角。盖智识荒隘，此实一端。故苟欲弥今日译界之缺点，导中国人群以进行，必自科学小说始（ｐ.4）。

日本語訳　我が国の小説には、愛情、講談、諷刺、怪奇もののようなのは汗牛充棟のおもむきがあるが、科学小説だけは稀有である。知識の混乱の一端は、実にここにあるのだ。その意味でもし現代翻訳界の欠点を補い、中国の群衆を導いて前進させよう

[39]『月世界旅行　序二』より。便宜上以下より、ＳＴにおける歴史的な仮名遣いの一部を現代的仮名遣いに変更しておく。

とするならば、かならずや科学小説より始めるべきなのである（丸山昇訳『月界旅行解説』ｐ.211）。

例（7）はＳＴの意味を踏んでリライトされたものであるが、例（8）はもともとＳＴになかった加筆であり、中国の小説に対する魯迅の述懐である。

3.2.2　局所的な意訳・改訳・自由訳

初期段階の魯訳において、ＳＴの字句を追ってＴＴを文ごとに忠実に訳すのではなく、「意訳」や「改訳」、そして気の向くままの「自由訳」が多く見受けられる。

（9）ＳＴ　亜墨利加合衆国独立戦争最中の時とかや合衆国の内「マリーランド」と云へる國の首府「バルチモール」と云へる處ありこの處に於て新たに最も人心を感動せしむべきの一社を結成せり抑も當時の如き人心洶々挙て一撃を試みんをし（p.1）

ＴＴ　今且不说，单说那独立战争时，合众国中，有一个麦烈兰国，其首府拔尔祛摩，是个有名街市。真是行人接踵，车马如云。这府中有一所会社，壮大是不消说，一见他国旗高挑，随风飞舞，就令人起一种肃然致敬的风景（p.6）。

回訳　それはそうと、独立戦争のとき、合衆国の中にマリーランドという国の首府「バルチモール」は有名な町である。まさに通行人が踵を接し、馬車が雲のようである。その中に一社があり、壮大さは言うまでもなく、国旗が高く掲げられ、風になびく。人々に粛然として敬わせるものであった。

例（9）の下線のような気の向くままの訳し方は、中後期の魯訳では見当たらなくなる。

また、《辯言》と同様に、魯迅はＴＴの中においても自らのコメントやＳＴになかった内容を数多く加筆している。例えば、例（10）はＳＴにはなかった、アメリカ独立戦争の話だが、ＴＴの中に盛り込まれている。このように、魯迅は普及させるべきと思うことを、翻訳の中に加筆しているのである。

（10）凡读过世界地理同历史的，都晓得有个亚美利加的地方。至于亚美利加独立战争一事，连孩子也晓得是惊天动地；应该时时记得，永远不忘的（p.6）。

日本語訳　世界地理や歴史を読んだ者であれば、誰もがアメリカという所を知ってい

る。アメリカ独立戦争に至っては、子供すらその偉大さを知っているはずだ。それを常に覚えておくべきで、忘れてはならない。

(11) ＳＴ　斯くてハ無謀の如くなれども亜墨利加人民ハ奮然欧羅巴の舊友に敵対し彼等の常に他国に勝ちを得たるが如く兵器弾薬金銀人命を無量に浪費したるの力に據り遂に勝利を全ふするに至れり而して亜墨利加人民が勝利を全ふせし根元を尋ぬるに只単に砲術の学精なるに依るのミ是れハ米國の火器が十分精巧にして欧州人の器械を優れたると云ふにもあらず唯未曽有の大砲を発明し其弾力極めて長距離に達し況んや斜面水平鉛直等の射法に至てハ精且妙英佛普等の遠く及ばざる處あるが如し且や英佛の大砲「ホウ＃ツル」[40]砲臼砲等を以て之れを米國の一見寒膽すべき大砲に較ぶれバ恰も「ボツケツト・ピストル」袖砲の如しと云ふべし斯く説き来れば詭言なるが如きも其實世人の知る所にして猶且米人ハ地球上最も第一とする機械製造の学に優れ（p. 2-3）

ＴＴ　尔后，费却许多兵器弹药，金资人命，遂占全胜，脱了奴隶的羁轭，造成了一个烈烈轰轰的合众国。诸君若问他得胜原因，却并无他故；古人道，工欲善其事，必先利其器；美国也不外自造兵器，十分精工，<u>不比不惜重资，却去买外国废铁，当作枪炮的，与他相比，也同僬侥国遇着龙伯一般，免不得相形见绌了</u>（p. 6）。

回訳 後に、兵器弾薬や金銀人命を大量に費やし、勝利に全うに至って奴隷の桎梏から脱出し、凄まじい合衆国を作り上げた。諸君がその勝利の訳を問うならば、ほかならない。古人曰く、ことを上手くこなせようと思うなら、まずその道具を磨かねばならない。アメリカも自ら兵器を精巧に製造しているからにほかならず、<u>大金を使って外国の鉄鋼のクズを銃砲のごとき購入する国とは違う。その国がアメリカに比べても、小人が巨人に出食わすように、見劣りがするということにほかならない。</u>

例（11）のＴＴからは、当時中国の統治者である清の政府への揶揄や批判も読み取れる。ＳＴの内容が中国とは全く関係がないにも関わらず、である。

(12) ＳＴ　故に該砲銃會社の人名簿の如き今にして之れを見るに多くハ屍を戦場に曝し血を草野に灑ぎ己に鬼籍に入れり又幸ひに生命を全ふして帰社したる者の如きも勇戦奮

[40] 原文では、そのようになっている。

闘形骸を定ふせず或ハ挺枝を以て僅かに身を支えるものあり或ハ樹膠を以て顋を補なふものあり恰も不具の集會所の如く有名なる政治学者「ピツトケルン」氏が砲銃會社中四人を合はすも一つの満足なる腕なく六人を合ハすも二箇の満足なる脛なしを云へるとありき而して此社員の如き猶且つ勇気に富み身体不具の如きハ恰も意に介せざる如く却って之れを自負するの勢ひなり實にむりなりき（p.5）。

ＴＴ　若把这会社社员题名簿一翻，不是写着战死，就是注着阵亡；即偶有几个生还，亦复残缺不完，疮痍遍体：有拄着拐杖的，有用木头假造手足的，有用树胶补着面颊的，有用银嵌着脑盖骨的，有用白金镶着鼻子的，蹒跚来往，宛如一座废人会馆。从前有名政治家卑得刻儿曾说道：“把枪炮会社中人四个合在一处，没一条完全臂膊；六个合在一处，没一双满足的腿。”可想见这些社员情形了！虽然，老骥伏枥，志在千里；他们虽五体不全，而雄心未死，常抚着弹创刀痕，恨不得再到战场，将簇新大炮对敌军一试。晋人陶渊明先生有诗道：

精卫衔微木，将以填沧海；

形天舞干戚，猛志固常在（p.7-8）。

回訳　この会社の名簿をめくったら、戦闘死と書いてなければ、陣地死と記してある。たとい何人か生き残されていても、胴体が不完全であり、怪我だらけである。杖を突く者もいれば、木の義肢をつけた者もいる。樹脂で頬を補う者もいれば、頭に銀を嵌めた者も、白金で鼻を鏤めた者もいる。よろよろして行き来しており、あたかも廃人の会館のようである。かつての政治家ピツトケルンが、「砲銃会社の四人を合わせても完全なる腕が一つもない。六人を合わせても満足の足が一足もない」。そこからこれらの社員の状況は容易に想像がつくであろう。しかし、年老いた駿馬が馬小屋に伏せながらも、千里を駆ける志を捨てていない。彼らは五体が不完全でありながら、雄壮な心はまだ死んでいない、常に怪我を撫でていながら、すぐにでも再び戦場に赴き、新しい大砲をもって、敵に試そうとしている。晋の詩人陶淵明が詩で曰く、

精衛は微木を銜み、

滄海を填めんとす。

形天は干戚を舞わし、

猛志固より常に在り。

例（12）のＴＴは尚更である。読者に興味をそそらせることを一途に意識してか、一時的

な気まぐれのためか、中国の古詩までＳＴに持ち込まれているのである。

上のような改訳、自由訳はＴＴにはよく見受けられるのである。

3.2.3　ＴＴ全体の再構築

ＳＴ『九十七時二十分間月世界旅行』が二十八章から構成されているのに対し、ＴＴ《月界旅行》は十四章にとどまっている。それは単に内容上での短縮、省略だけではなく、一つの章が全て省かれたり、二つの章が一つに統合されたり、ＳＴになかった内容が加筆されたりしているのである。例としては、第5章や第6章の完全カット、第7章と第8章の統合などが挙げられる。それについて、魯迅は次のように説明している。

「ここでは長いところは削り、短いところは補って十四回とした。最初は俗語で訳して少しでも読者に分かりやすくしようと考えたが、俗語だけを用いると煩雑冗漫となるので、文語も用いて紙幅を縮めた。味がなく、我が国の人に適さぬ言葉遣いは、多少削り改めた。文章が雑駁であるという批判を逃れることはできないであろうと思っている」（丸山昇訳『月界旅行　解説』p.211）。

このような傾向は、《地底旅行》においてより一層強まっている。『地底旅行』もヴェルヌの作品であるが、魯迅は日本語訳から重訳し、日本語訳者三木愛華と高須墨浦の漢文で書かれた『序』を略した。三木の日本語訳は十七章のほか、全書の三分の一の分量を占める、科学的な説明である『地球の出生及び沿革』や『地球の沸熱流液躰を説く』といった六の項目で構成されている。それに対し、魯訳ではその十七章を十二章に短縮、統合され、その百頁近くの科学的な説明に当たる後半部がすべて省かれている。後述のように、それは難解な科学的な説明より、民衆の科学文明への開眼こそが大事だと魯迅が考えたからであろう。

このように、翻案は『月界旅行』だけではなく、初期魯訳の主な特徴の一つとなっているのである。ちなみに、この時点において、魯迅はすでに読者を啓蒙する意識を持っており、読者の受容問題を考えている。しかし、その考えはまだ単純であり、周到なものではない。

3．3　文語の使用

翻訳法やストラテジーのほか、訳文体に関する分析も初期魯訳の特徴を把握する上で不可欠だと思われる。偏った見方のないように、初期魯訳からそれぞれ始まりの一文だけを取り

上げ、読み比べてみよう。

（13）惠克德尔嚣俄既于前土曜日（礼拜六）举学士院会员，经两日，居辣斐的街支席拉覃夫人折简招嚣俄，而飨以晚餐[41]。

（14）疏林居中，与正室隔。一小庐，三面围峻篱。窗仅一，长方形，南向，垂青缟幔。光灼然，常透照庭面。内燃劲电。无间昼夜，故然[42]。

（15）雄矢浩唱兮声幽佇，玄弧寄语兮弦以音[43]。

（16）摩陀尔多文士，如吉斯福庐提（Kisfaludy C.）…,胥艺苑之俊也。愿情辞洵耀艳矣。而相其文质，大都以冯依得美，或局囿于一国性情[44]。

（17）溯学术初胎，文明肇辟以来，那欧洲人士，皆沥血剖心，凝神竭智，与天为战，无有已时，渐而得万汇之秘机，窥宇宙之大法，人间品位，日以益尊[45]。

例（13）～（17）を見てわかるように、初期魯訳において、程度の差が見て取れるが、文語が大半を占めている。

ただし、興味深いことに、『月界旅行』の序が難解な文語で書かれているのに対し、本文は白話文に近い文言（『地底旅行』も同様である）で書かれているのである。それはなぜだろう。

実は魯迅が底本とした三木愛華・高須浦高の日本語訳『拍案驚奇・地底旅行』の章タイトルは、完全な漢文風のものである。魯迅はそれをなぞりながら、分かりやすい文言にリライトした。章タイトルの二例だけを取り上げて下に示す。

ＳＴ　第一回　開一世智推万古心　創絶代業博千歳名

　　第二回　割愛情才子別佳人　賭身命英雄離郷国[46]

ＴＴ　第一回　奇书照眼九地路通　流光逼人尺光电谢

　　第二回　割爱情挥手上征途　教冒险登高吓游子[47]

---

[41] 鲁迅（2008）《哀尘》《鲁迅译文全集》第８卷　福建人民出版社　p.1

[42] 鲁迅（2008）《造人术》《鲁迅译文全集》第８卷 福建人民出版社 p.5

[43] 鲁迅（2008）《红星佚史 译诗》《鲁迅译文全集》第８卷 福建人民出版社 p.7

[44] 鲁迅（2008）《裴彖飞诗论》《鲁迅译文全集》第８卷 福建人民出版社 p.15

[45] 鲁迅（2008）《地底旅行》《鲁迅译文全集》第１卷 福建人民出版社 p.67

[46] ジュール・ヴェルヌ著　三木愛華　高須　墨浦訳（1886）『拍案驚奇　地底旅行』　九春堂　p.1、p.16

[47] 鲁迅《地底旅行》《鲁迅译文集》第１卷（以下《地底旅行》と略す。人民文学出版社 1958　p.97、p.102

因みに、三木愛華らの「序」（1886）は井上勤の「序」(1885)より一年書き遅れたにもかかわらず、井上の序文とは異なり、中国人でも読めるほど、完全に漢文で書かれたものである。冒頭の一節（魯訳では『序』が省かれている）を下に示しておく。

ＳＴ　地底旅行一書意想天外。旁度学術。本邦既刊之稗史小説中。未見奇書也。翻訳已成印刷亦成矣[48]。

ここからは、和漢混交の状況に臨み、訳文のデザインを如何に設定するか、魯迅自身も戸惑っていたと推測できよう。当時、魯迅はまだ林紓の桐城派の古風の訳し方の影響から抜け出ていない一方、日本翻訳界での風潮、そして言文一致という両方の影響を受けているため、動揺していたのであろう。

1934 年に書かれた『集外集　序言』の中において、魯迅は若い頃の自分の未熟を語りながら、編訳だったかどうか覚えていない幾つかの作品を故意に自分の文学の営みから除外した事実を述べている。それは当時、自分の語学力の問題もあれば、厳復や章太炎から影響を受けたため、文言も変わっているからだと反省している[49]。

要するに、科学冒険小説の多訳、文語の多用、そして改訳、意訳法及び翻案、帰化ストラテジーの採択が、初期魯訳【Ⅰ】の特徴だと言えよう。

では、初期【Ⅱ】に入ると、いかなる変化が生じたのであろうか。

4　初期魯訳【Ⅱ】

最初の訳作『域外小説集』を除けば、1909 年 9 月から 1919 年 8 月（『ある青年の夢』の訳業に着手）までは、就職活動や勤務上の原因で、魯迅は翻訳にあまり力を入れなかった。従って、この時期は魯訳の空白期だと言える。ただし、魯訳の特徴を語るには、『域外小説集』が欠かせないものだということに留意すべきである。

4.1　初期魯訳【Ⅱ】の営み

---

[48] ジュール・ヴェルヌ著　三木愛華　高須　墨浦訳（1886）『拍案驚奇　地底旅行　序一』　九春堂

[49] 魯迅（2005）《集外集 序言》《魯迅全集》第 7 巻 人民文学出版社 p. 3-5 を参照されたい。

初期【Ⅱ】における魯迅の訳業は、「図表 3-4」の通りである。

図表 3-4　初期【Ⅱ】の魯訳リスト

発表年別	訳品	SL 国別	著者	ジャンル別	出版社/所収
1909	红笑	露	アンドレーエフ	小説	未出版
	谩	露	同上	小説	《域外小说集》第 1 輯
	默	露	同上	小説	《域外小说集》第 1 輯
	《灯台守》译诗	波	シェンキェヴィチ	詩歌	《域外小说集》第 2 輯
	四日	露	ガルシン	小説	《域外小说集》第 2 輯
1913	艺术玩赏之教育	日	上野陽一	論文	《编篡处月刊》第 1 期
	社会教育与趣味	日	同上	論文	《编篡处月刊》第 1 期
	儿童之好奇心	日	同上	論文	《编篡处月刊》第 1 期
1914	Heine 的诗	独	ハイネ	詩歌	《中华小说界》第 2 期
1915	儿童观念界之研究	日	高島平三郎	論文	《全国儿童艺术展览纪要》
1918	察罗堵斯德罗绪言	独	ニーチェ	序言	未発表

出所　筆者作成

1909 年 7 月に『域外小説集』が発表され、同年 8 月に魯迅は日本を離れて帰国し、二年半ほどの教職を経て南京臨時政府教育部に転職した。

1909 年 9 月に就任後、1913 年 5 月に『芸術玩賞之教育』が発表されるまで、魯迅は一作も出さなかった。

1913 年から 1915 年まで、魯迅はハイネ（Heine）の百字ほどの短詩一篇のほか、児童教育に関する仕事関係の論文の訳作を 4 本だけ出している。また 1916 年から 1917 年まで一作も出しておらず、1918 年に文語で訳した『察羅堵斯徳羅緒言』の 2 章だけを出している。

4.2　初期魯訳【Ⅱ】の文体・翻訳法

結論から言うと、初期魯訳【Ⅱ】は、文体が依然として文語を主としているが、『域外小説集』を皮切りに、意訳法から直訳法にシフトしたのである。以下よりそれを検証してみる。

4.2.1　訳文体について

『域外小説集』の文体は相変わらず文語であり、しかも章太炎の影響で一層古くなっている。極端に言うと、林紓の桐城派の古文よりも古いものに戻っている。では、本格的に文語から白話文への切り替えを遂げたのはいつであろうか。

それを明らかにするために、初期魯訳【Ⅱ】の文体を見比べる。偏らずに客観的に比較できるように、《鲁迅译文全集》（2008）から、各訳作の始まりの一文だけを取り上げる。また、明確化のために、そのタイトルと発表年別を文末に記しておく。

（18）吾曰：“汝谩耳！吾知汝谩。”曰：“汝何事狂呼，必使人闻之耶？”此亦谩也。吾固未狂呼，特作低语，低极耳耳然，执其手，而此含毒之字曰谩者，乃尚鸣如短蛇（《谩》1909）。

（19）五月之夜，仓庚和鸣枝上，月光皎然，牧师伊革那支时则居治事之室。其妇趋进，色至惨苦，持小灯，手腕战动，比近其夫，乃引手触肩际，呜咽言曰“阿父，盍往视威洛吉伽矣！”（《默》1909）。

（20）吾辈趋经大野，铳丸雨集有声，树枝为动，复入棘林，宛延而进，吾今兹犹记之也（《四日》1909）。

（21）余故园烈兮跋兮，猗尔其若康豫也，彼康豫之为大祥兮，顾非郁瘢者不之悟也（《镫台守》1909）。

(22) 美的态度，有制作方面与玩赏方面。小学教育中，主属于制作方面之学科，为图画唱歌体操（舞蹈）作文（原名缀方）（《艺术玩赏之教育》1913）。

(23) 今世之文明进步，非吾人之大幸乎？顾吾心苦矣，吾神劳矣！在昔往事，仅借口碑相传。虽远不越吾祖以上（《社会教育与趣味》1913）。

(24) 好奇心云者，为心之动作。致意于新异之谓。若就发达具足之状言之，其界域颇极显著（《儿童之好奇心》1913）。

(25) 余泪泛澜兮繁花，余声悱亶兮莺歌。少女子兮，使君心其爱余，余将捧花而献之。流莺鸣其嘤嘤兮，傍吾欢之罘罳（《Heine 的诗》1914）。

（26）儿童观念界之研究，殆为儿童研究最初之一事，盖此种研究，为教育上所必要，又较简而多端（《儿童观念界之研究》1915）。

（27）察罗堵斯德罗行年三十，乃去故里与故里之湖，而入于重山，以乐其精神与其虚寂，历十年不倦，终则其心化（《察罗堵斯德罗绪言》1918）。

後に『域外小説集』の文語の使用について、魯迅は『墳　題記』の中で、「近年だったら、多分あんな風には書くまい。その上、好んで奇怪な文句を作り、古字を使っている。これは当時の『民報』の影響を受けたのである」[50]と、述べている。即ちその後もまた、1906 年に『民報』の編集者を務めたその師匠章太炎から影響を受けた。

見比べるとわかるように、初期魯訳【Ⅱ】は相変わらず文語で訳されており、中に分かりやすい文語もあるが、極めて少ない。従って、魯迅の訳文体が本格的に白話文に切り替えたのが、1913 年というより、中期に入った直後の 1919 年だと言うべきであるが、それについて第 4 章の 1.2 で検証する。

4.2.2　翻訳法について

『域外小説集』を皮切りに、魯迅は直訳法を主張するようになった。従って、1909 年は魯訳にとって、極めて重要な年だと言うべきである。

『域外小説集　略例』において、人名・地名の音訳、注記の付け方、といった翻訳技法について、魯迅は自分なりの見解を述べている。ここで留意すべきは、この『略例』の書き方は三木愛華らの『拍案驚奇・地底旅行　凡例』に酷似しているということである。三木の「凡例」の箇条書きは「一、二、三」ではなく、「一、一、一」の形を取っている。魯迅の「略例」もＳＴを踏んで「一、一、一」という形となっている。即ち「複写」という翻訳法を採っているわけである。因みに、後の 1922 年に発表された魯訳『桃色の雲　登場人物の訳名について』においては、箇条書きの形は「一、二、三」と変わったのである。

ところで、この時期の魯訳は、直訳法に転向したにもかかわらず、文言が相変わらず文語であるためか、中後期の魯訳と読み比べると、それほど抵抗感が感じ取れない。そういう意味では、文語の使用も帰化ストラテジーとして捉えることもできよう。

では、初期魯訳の翻訳法に、魯迅のどんな翻訳動機が隠れているのであろうか。次節において、それをめぐって論を進める。

---

[50] 松枝茂夫訳（1956）『墳　題記』『魯迅選集』第 5 巻 岩波書店　p.5 を参照されたい。

5　初期魯訳の動機

すでに触れたように、新式学堂に入ったのを契機に、魯迅は西洋の学問に触れることができ、厳復の手によって中国に導入された「物競・天択」というハクスリーの進化論の啓発を受け、そして日本留学を機に西洋文明に本格的に開眼した。長年穏やかに暮らしてきた中国大衆が伝統文化の旧弊や西洋文化からの衝突に気付かず、大中華と自惚れている情勢を憂慮している魯迅は、圧迫への反抗精神、そして科学技術の重要性を大衆に訴え、集団無意識の状態を変えようと考えている。

《月界旅行 辯言》の中で、魯迅は次のように語っている。

「そもそも、科学を羅列的に述べると、一般の人々は厭きやすく、全篇を読み終えぬうちに眠気を起してしまうが、…それ故、学理を取り上げ、堅苦しさを取り去っておもしろくして、読者の目に触れさせ、理解させれば、思索を労せずとも、かならずや知らず知らずの間に一斑の知識を得、遺伝された迷信を打ち破り、思想を改造し、文明を補うことができる。その力の大きさたるや、これほどのものなのである。…その意味でもし現代の翻訳界の欠点を補い、中国の群衆を導いて前進させようとするならば、かならずや科学小説より始めるべきなのである」[51]。

西洋の進んだ科学技術に感心した魯迅は、梁啓超の鼓吹した「小説界革命」から示唆を得て、翻訳の力を借りて世界情勢や科学思潮を中国に紹介することによって、民衆の意識を変えようと願っている。ただし、すでに指摘したように、科学的知識の普及より、先ず民衆の科学意識を向上させることが重要だと魯迅は考えている。この点は、『月界旅行』における難解な科学的な話の省略や、『地底旅行』の後半における大量の科学的な議論の省略からみても明白である。

このような意図は、山田敬三（2008）が指摘したように、魯迅がＳＴと関係のない述懐を、小説ばかりでなく、科学史的な叙述文《中国地质略论》や科学知識の啓蒙文《说镭》の訳文にまで盛り込んだ事実[52]から見ても一目瞭然であろう。

1904 年に医学を手放して文学活動に身を投じようと思った時点で、実は「立人」という思想はすでに魯迅の生涯に亘り一貫したものとして、魯迅の中に根差した。個々の人間が独立

---

[51] 丸山昇　訳（1985）『訳文序跋集』『魯迅全集』12 巻学習研究社 p. 210-211

[52] 山田敬三（2008）『魯迅　自覚なき実存』p. 243 を参照されたい。

性を持つ者として、常に考え、豊かに育っていくことによって、「民魂造り」ができるようになるだろうと、魯迅は願ってやまないのである。

初期【Ⅰ】と【Ⅱ】の分水嶺となる周氏兄弟の『域外小説集』の中に、魯訳の3篇が収録されており、ほかは周作人の訳作である。

当時、少数民族の文学を中国に紹介しようと、周作人と合意に達し、魯迅はアンドレエフ『嘘』と『沈黙』、そしてガルシンの『四日間』を訳出している。章回体の長い伝統小説より、短篇のほうが手間もかからなければ、より効果的だと考え、周氏兄弟が意図的にそれらを翻訳対象に選出し、中国人に紹介しようとした。また、訳作のいずれも、一途に読者の好みに合わせる従来の探偵、才子佳人を主題とした中国小説とは異なり、人間の各面をリアルに描写することによって、人々に人間性について考えさせるものである。その『序言』において、翻訳方法や翻訳動機について次のように語られている。

「『域外小説集』という書は、文辞においては朴訥であり、現代の名人による訳本には及ばない。ただ作品の選択には慎重を期し、翻訳も原文の趣を失わぬように心がけた。異域の文学新流派は、これより始めて中華の地に伝わるのである。もし、俗世間にとらわれぬ卓絶した人物があれば、必ずや慄然とその心をうたれ、祖国の時代を考えて、その心声を読み、想像力の所在を推し測るにちがいない。すなわち本書は大海の一雫であるにしても、天才の思惟はまさにここに籠められている。中国の翻訳界も、これによって時代に落伍した感がなくなるであろう」[53]。

ここから外来の異質なものを採り入れ、自国の言語文化に融合させる発想や、自国翻訳界の発展を促す思いも読み取れる。

ところで、当時の語学力の問題や取り巻く事情の関与など、さまざまな要因が働いていると考えられるが、『域外小説集』が発表される前は、当時の魯迅にまだ具体的な方法論が形成されておらず、当然それなりの「方針」や熟した「翻訳理念」も形成されていない。そういう意味では、当時日本語学習歴の短い魯迅にとって、翻訳が日本語力アップを図るものでもあり、その訳文も「模倣訳」の色を帯びていると言わざるを得ない。

従って、初期魯訳の翻訳動機は大まかに、①語学力のアップ、②勤務上の都合、③異質な

---

[53] 丸山昇　訳（1985）『域外小説集　序言』『魯迅全集』第12巻　学習研究社 p. 215

ものの導入④「民魂造り」への念願、の四つに大別できると思われる。

ただし、「民魂造り」こそ、そのメイン動機であろう。「圧迫への反抗精神」、「民衆の科学への意識アップ」、「個々の人間としての成長」「集団無意識への反省」などがすべてこの「民魂造り」の中に包含されていると考えられる。

ところで、文言は相変わらずの文語ではあるものの、『域外小説集』を皮切りに、魯迅は態度を一変させ、直訳法や異化ストラテジーを主張するようになった。特に中期段階に入るや、訳文体を白話文に切り替えた。以後、不自然だと知りつつも、その「直訳」法を変えようとしなかった。むしろ場合によっては、その傾向がより一層強まる一方であった。後に、魯迅は「若いころは自惚れて、直訳しようとしなかった、今考えれば非常に後悔している」[54]と語っている。それこそ興味深いところである。

6　まとめ

本章では、魯迅の訳業を時期ごとに分けてその理由を述べた。そして若き魯迅の経歴等と関連付けながら彼の文学思想や文化の受容のされ方について分析を試みた。さらに訳作から用例を抽出し、その翻訳法やストラテジーを検討した上で、初期魯訳の特徴及び翻訳動機を明らかにした。

6.1　初期魯訳の文体

初期魯訳の文体は文語がメインであるが、白話文に近い文言も試用されている。『月界旅行』と『地底旅行』の長篇 2 部の本文、そして 2、3 本の論文が白話文に近い文言で訳されているのに対し、ほかは文語で訳出されている。文語訳の中に比較的に分かりやすいものもあれば、難解なものもあるが、あくまで程度の差に過ぎないのである。

6.2　初期魯訳の翻訳法・ストラテジー・動機

まず、初期魯訳【Ⅰ】においては、操作レベルの視点からいうと、加訳、減訳、編訳、パラフレーズ、適合といった翻訳法が多用され、意訳の傾向は極めて強い。

策略レベルの視点からいうと、科学小説がメイン翻訳対象であり、帰化、翻案といったストラテジーは採られている。しかし当時、魯迅の中にまだ熟した翻訳理念が成されていないた

---

[54] 魯迅（2005）《魯迅全集》第 13 巻 人民文学出版社 p. 99 を参照されたい。

め、初期魯訳【Ⅰ】の訳業はあくまで一種の「模倣訳」に過ぎない。

初期【Ⅱ】に入ると、『域外小説集』を境に、魯訳は意訳法から直訳法に乗り換えており、原文志向の傾向を見せ始めた。それを機に、魯迅は当時の翻訳界の風潮と袂を分かち、それまでの自分の翻訳観を見直すようになっている。

ところで、直訳法を採っているものの、文言が相変わらず文語であるため、「抵抗式・異化翻訳」という傾向はそれほど強くない。また『域外小説集』以外、勤務関係の訳業がメインとなっており、初期魯訳【Ⅱ】は魯訳の空白期だと言える。

このような翻訳法やストラテジーを、魯迅の経歴、そして文学思想や文化の受容のされ方と関連付けて考えれば、初期魯訳の動機を覗うことができよう。

民衆の開眼を願っている魯迅は科学小説などを翻案に近い意訳法、そして自言語・自文化寄せの帰化ストラテジーを用いて多訳している。初期【1】の時点において、魯迅は中日両国の翻訳界から受けた影響で、原文忠実という意識がなかったが、とにかく翻訳で自分の目的に達成させようとしたのである。

「語学力アップ」、「勤務の都合」、「翻訳界の欠点を補うこと」、「異質言語・文化の輸入」のいずれも確かに魯迅の初期翻訳動機に入る。例えば、世界情勢や思潮の紹介、文学表現の導入といった意識が高いものであった。しかし、「民魂造り」こそ、魯迅の初期翻訳のメイン動機である。後にそれが魯迅の生涯の願いともなり、その訳筆によって訴えられていた。

ところで、中期段階に入ると、魯迅の訳文体も翻訳方法も変わってしまった。次章で魯迅の翻訳にどのような変化が生じたのか、またその原因について引き続き分析を展開していく。

第 4 章　魯迅の中期翻訳

この章において魯迅の中期翻訳をめぐって分析を展開していく。1 において、中国での「白話文運動」と日本での「言文一致運動」に関連付けて魯訳文体の転換を検討しながら、1919 年を魯訳文体の転換年と提言した上で、その理由を述べる。2 と 3 において、中期の始め頃の『現代日本小説集』と終り頃の『思想・山水・人物』のＳＴ・ＴＴテクスト分析を行い、量的な統計の結果を踏まえて魯迅なりの翻訳法則の定着について検証する。4 において、『羅生門』とその魯訳、更に他の 6 本の中国語訳と対照、対比分析を行い、中期魯訳の翻訳法やストラテジー、および翻訳動機を検討する。5 において、『苦悶の象徴』や『象牙の塔を出て』における厨川白村の文芸論を議論しながら、魯迅思想との繋がりを探り出し、その翻訳動機を追究する。

1　「白話文運動」と魯訳文体の転換期

翻訳中期に入ると、中国での「白話文運動」の影響で、魯訳の文体は本格的に白話に切り替えられている。「白話文運動」は西洋からの影響が大きいとされているが、実は日本での「言文一致運動」からの影響も無視できない。

1.1　日本の「言文一致運動」と中国の「白話文運動」

19 世紀の後半に入ると、日本をはじめとするアジアの人々が西洋の文明に感銘を受け、西洋の科学技術や思想観念を導入しようとしていた。と同時に、西洋言語にある異質なものや新たな文学形式も翻訳経由で移植されている。

日本では、明治から大正にかけて、口語と文語の違いによる不便を解消させ、また新しい言葉を創出し、普及させるために、文筆家によって、言文一致運動が行われており、書き言葉を話し言葉に近づけようとしていた。1866 年に前島密が「漢字御廃止の議」を徳川慶喜に提出し、漢字を廃止して平仮名を国字にすべきだと主張した。これが「国語改良運動」の端緒とされている。後に前島は同じ趣旨の「国字国文改良建議書」（1899）も出している。福沢諭吉が 1866 年に『西洋事情』を、また 1872 年に『学問ノススメ』を発表した。その中でわかりやすい文章表現を推奨すべきだと提唱されている。矢野竜渓は小説の文体を改良するために、様々な実践をしていた。彼は 1883 年に『経国美談』の序文に「文体論」を付記し、「漢文体」、「和文体」、「欧文直訳体」、「俗語俚諺体」を取り上げ、それぞれの特徴を

分析し、様々な文体を統合して新しい文体を作り出すべきだと主張している。1885 年に坪内逍遥は『小説神髄』を発表し、リアリズムを唱え、小説改良を呼びかけている。彼の実践はのちに発表された『当代書生気質』に反映されている。逍遥の思想を受け継いだ二葉亭四迷は落語の速記法を参考し、「だ調」を作り出した。1887 年に、「言文一致」の試しと呼ぶべき小説『浮雲』を発表した。1888 年に、山田美妙が『言文一致概略』を発表したうえで、翌年「ですます調」で書いた『胡蝶』を出した。山田美妙と硯友社を設立した尾崎紅葉が 1892 年に発表された『二人女房』という作品から実験を重ね、1896 年の『多情多恨』をもって「である調」をほぼ完成させた。1895 年に上田万年は『国語論』を発表し、漢字や漢語を否定し、中国語の影響から脱出して日本独自の国語を作り出すべきだと主張した。後に新仮名遣いの表記法を提唱し、旧仮名遣いによる混乱を正そうとしていた。1896 年から、森田思軒の数多くの西洋の探偵・冒険小説の邦訳により、漢文、和文と欧文が混在した「周密文体」は作り出されている。1906 年に、日本政府は東京の方言を土台にした共通語で国語教材を編纂し始めた。

「言文一致運動」の目的について、山田正秀（1972）が「…これを単に口語文と同義語と解するのは浅く、厳密には明治以後に起こった近代の口語文のことである。いったい『言文一致』の名称は、近世末期から明治初期にかけて、西洋先進国の言文一致的事実に気づいた洋学者らが、自国日本における旧来のあまりにも隔絶した言文二途をやめて、言と文とを一致させやさしい口語的な文章にしなければならないという、当初の事情に基づいて発生したものである。すなわち言文一致は、その発生条件に『漢文くづしか、和文くづしか、戯作しかなかった』『徳川期の旧文章』（坪内逍遥『柿のへた』）の言文不一致の事情が前提として存し、次に西洋近代文明諸国の言文一致的事実に誘発され、そして自国の生きた現代の言語によって新しい近代的な思想や感情を的確自在に表現できる近代口語体を完成することを究極の目的としたものであったわけだ」[55]と述べている。

それはすなわち、西洋の先進国のように、話し言葉と書き言葉の差を縮めることにより、大衆がより自由に自らの思想や感情を表現できる新たな文体を創出することを意味している。この山田の指摘は、中国での「白話文運動」の目的にも合致するものだと言える。

中国では、南宋時代に「話本小説」の流行を契機に、文語と口語との融合が顕著になってきており、1000 年あまり続いた。1860 年に「八ヵ国連軍」が中国に侵入した際に、「白話文運動」の前兆がすでに現れてきた。1868 年に、厳復や林紓らの桐城派文章の難解さを痛感し

[55] 山本正秀『言文一致の歴史論考』（1972）桜楓社ｐ.41-42

た黄遵憲は、「言文一致」を提唱し、「我が手もて口を写す」と宣言した。清の末期に入ると、西洋諸国や日本との異文化接触が頻繁に行われ、外来の思想や文化、そして科学技術を中国語に翻訳する必要が出てきた。しかし外国語の形式や表現及び文法を訳すのにも、翻訳される内容を受容者の大衆に理解してもらうためにも、文語は相応しくない。

1897 年に黄遵憲や裘廷梁が関与した「演義白話報」は創刊され、全国各地に影響を及ぼしている。翌年、裘廷梁は新聞紙『無錫白話文』の編集長を務め、古文を廃止し、白話文を唱え始めた。同じ頃、梁啓超は桐城派の古文体に反対し、現代中国語に近いわかりやすい文語の実践をしながら、日本の政治小説や科学小説を参考に中国独自の文体を作り出すことを唱え続けていた。1902 年に、呉汝綸は日本での見学を終えて帰国し、科挙制度を廃止して西学を勧めるべきだと主張した。そして、1905 年に科挙制度は廃止された。1912 年に、梁啓超の「小説界革命」は発表された。同年、清が滅び、中華民国は誕生した。1915 年に、陳独秀は『新青年』を創刊し、伝統文化の旧弊を切り捨てようと呼びかけている。

このように、中国では全面的変革に迫られると同時に、論理的で分かりやすい言葉も求められている。それで、一部の留学経験のある知識人の提唱により、「白話文運動」は 1917 年をもって本格的に幕を開いた。

1917 年に『新青年』に掲載された胡適の「文学改良芻議」と陳独秀の「文学革命論」は「文学革命」の口火を切った。胡適、陳独秀、魯迅、銭玄同、劉半農を代表とする知識人は従来の封建文化、文学、思想を批判し、民主や科学を勧めると同時に、庶民の智を啓蒙するために、知識人にしか分からない難しい文語に反対し、庶民でも読める白話文を推奨している。1918 年から『新青年』で全面的に白話の文章を掲載するようになった。1920 年に白話は北洋政府の法律により国語として位置付けられた。

当時の中国は日本と同様に、我が身を反省すると同時に、西洋の「論理的」な言語、進んだ科学技術、新たな文芸思潮に関心を寄せながらその影響を大きく受けた。ただし、上述の年代順から見ても、提唱者[56]の経歴を見ても、「白話文運動」は日本での「言文一致運動」とも密接な関係を持っており、日本の足跡を一歩一歩踏んでいたと言っても良かろう。即ち「白話文運動」は西洋からの影響と「言文一致運動」の影響の両方を受けていると同時に、日本経由という形で西洋のものを取り入れていたのである。

ところで、「白話文運動」を提唱する主将とは言えないが、実践者としてそれに大きく寄

[56] 「白話文運動」を推奨する代表者の中に、日本と深い関係を持つ者が圧倒的に多い。

与したのは魯迅である。何故なら、「白話文運動」の成果はそのような作品により反映されているからである。その代表作は 1918 年に発表された魯迅の『狂人日記』である。

1.2　魯訳文体の転換期

当時、魯迅は胡適と同じように『新青年』の編集者を務めており、胡の主張を擁護している。

実は、「白話文運動」以前に、在日留学生であった魯迅はすでに日本での「言文一致運動」からの影響を受けた。その点は魯迅と「言文一致運動」の関係者との繋がりを見れば分かる。

矢野竜渓と森田思軒師弟が「言文一致」の擁護者であるが、魯迅は二人の作品を翻案、翻訳していた。

また、二葉亭四迷の『浮雲』が「言文一致」の代表作と見なされているが、すでに述べたように、魯迅の『狂人日記』は「白話文運動」の代表作とされている。実は魯迅は二葉亭四迷とも繋がりを持っているのである。魯迅はかつて二葉亭の訳作『血笑記』の一部を重訳したことがある（途中でやめた）。また、魯迅の翻訳思想が二葉亭四迷と酷似しているというところは特筆に値する。二葉亭が「余が翻訳の標準」で語った翻訳理念は、その見解にせよ言葉遣いにせよ口調にせよ、魯迅の言論と極めて合致しており、同じ人に書かれたものと思わせるほどであった。魯迅は二葉亭から大きく影響を受けたと推測できよう。

このように、「言文一致運動」からの影響とあいまって、庶民の智を啓蒙しようと考える魯迅は断固に白話文を励行するようになった。彼は「白話文運動」の中堅でもあり、実践者の中で最も有名な人物でもある。

ただし、第 6 章 1.2 で述べたように、現代中国文学の発展に魯迅の翻訳が大きく寄与したものの、現代中国語の形成に与えた影響は主に借用語のような語彙レベルにとどまっており、梁啓超のような人物ほどではないのである。

ところで、『狂人日記』が発表された翌年の 1919 年に、魯迅は武者小路実篤の戯作『ある青年の夢』の中国語訳を出した。それを皮切りに、魯迅の訳文体は本格的に白話文にシフトされたのである。

1918 年から 1920 までは、魯迅は５つの訳作を出している。下記（１）～（5）はそれぞれの始まりの一文である。以後の訳作は完全に白話文にシフトされているため、例示しないことにする。この５つの例を見て分かるように、魯迅は 1918 年に文語で《察罗堵斯德罗绪言》を訳したが、1920 年に《察拉图斯忒拉的序言》というテーマで白話を用いて再び訳出してい

る。その間の 1919 年に訳されたのが《一个青年的梦》である。

（1）察罗堵斯德罗行年三十，乃去故里与故里之湖，而入于重山，以乐其精神与其虚寂，历十年不倦，终则其心化[57]（1918）。

（2）夜间的寺院模样的一间房屋，青年向着大桌子，在洋灯下读书。不知从什么地方进来了一个不认识的男子[58]（1919）。

（3）察拉图斯忒拉三十岁的时候，他离了他的乡里和他乡里的湖，并且走到山间。他在那里受用他的精神和他的孤寂，十年没有倦。但他的心终于变了，[59]（1920）

（4）楼梯上面，当黄昏时候，从地下室一直到屋顶上，满包了黑暗不透明的烟雾；梯盘上的窗户，都消融在暗地里了。这时候，在一所住宅的前面，正有一个人拉那门铃[60]（1920）。

（5）自从妓女赛加霉掉了鼻子，伊的标致的顽皮的脸正像一个腐烂的贝壳以来，伊的生命的一切，凡有伊自己能称为生命的，统统失掉了[61]（1920）。

即ち、1919 年の《一个青年的梦》を境とし、魯迅は本格的に古文体を切り捨て、白話文に切り替えたのである。そこで、1919 年を魯訳「文体転換の年」と提言しておく。

では、訳文体の転換を成し遂げた後、魯訳の姿はどのようになっているのであろうか。続いて中期魯訳のテクスト対照分析を進めながら考察してみる。

2　魯迅の翻訳法則の定着化（1）-『現代日本小説集』を例に-

この節において、『現代日本小説集』に収録された、20 年代初期にできた魯訳の 10 篇[62]を

---

[57] 魯迅（2008）《察罗堵斯德罗绪言》《鲁迅译文全集》第 8 卷 p. 72

[58] 魯迅（2008）《一个青年的梦》《鲁迅译文全集》第 1 卷 p. 307

[59] 魯迅（2008）《察拉图斯忒拉的序言》《鲁迅译文全集》第 8 卷 p. 76

[60] 魯迅（2008）《工人绥惠略夫》《鲁迅译文全集》第 1 卷 p. 141

[61] 魯迅（2008）《幸福》《鲁迅译文全集》第 1 卷 p. 253

[62]『現代日本小説集』は魯迅と周作人の共著であり、うち魯訳が 11 篇。計夏目漱石 2 篇、森鴎外 2 篇、有島武郎 2 篇、江口渙 1 篇、菊池寛 2 篇、芥川龍之介 2 篇。江口煥の『峡谷の夜』の原文入手は困難であるため、本研究ではそれを割愛することにした。また、日本語原文は青空文庫 http://www.aozora.gr.jp/によるものであり、魯訳の用例抽出は《现代日本小说集》《鲁迅译文集》第 1 巻人民文学出版社（1958）によるもので

対象に、外国人名・外国語センテンス・度量衡及び色彩の訳し方を分析しながら、翻訳テクニックの特徴を検討し、中期の時点において魯迅の中にそれなりの「翻訳法則」が定着されているかどうかを考察してみる。

2.1　外国人名の訳し方

人名の翻訳に関しては、魯迅は音訳を推奨している。早くも 1909 年に発表された『域外小説集　序言』の中において、魯迅は次のように、理由を語っている。

「人名、地名はすべて原音に従い、省略を加えなかったのは、音訳であれば、もとより異国の言語に変わっても同じ音をとどめるが、気の向くままに短縮、変更すると不正確になるからである」[63]。

それは、できる限りＳＴの情報を正確に読者に伝えよう、という当時の魯迅の配慮であろう。では、10 数年後の翻訳中期となり、外国人名の翻訳にどのような現象が見受けられるのであろうか。

下記「図表 4-１」のように、中期においては、外国人名（とりわけ作家の名前）の魯訳は、ほぼ「音訳＋欧文の綴り」というパターンとなっている。ＳＴの表記に不統一がある場合は、魯迅はすべてＳＴの形に従うのではなく、自分なりの判断によって調整した[64]。

ある。

また、本節とは関連がないが、『日本現代小説集』の 11 篇はそれぞれ特徴を持ったものである。原作者が 5 人もいる上に、題材も異なっている。例えば、漱石の『掛物』と『クレイグ先生』はエッセイに近い小説であり、鴎外の『沈黙の塔』はもともとニーチェの散文詩の和訳の序言であり、菊池寛の『三浦右衛門の最後』、『復讐の話』と芥川龍之介の『鼻』と『羅生門』は昔話のリライトである。従って、本格的な小説とは言えないものも小説として魯迅は訳出しているということになる。ここから魯迅の訳材取捨の特徴を垣間見ることもできよう。

[63]　丸山昇 訳（1985）『域外小説集　序言』『訳文序跋集』『魯迅全集』第 12 巻学習研究社 p.217

[64]とはいえ、魯迅は外国人名をすべて直訳しようと主張するわけではなく、「直訳法」を推奨している一方、一途にそれにこだわるのではなく、ジャンル別で訳語を選択すべきだと考えている。例えば、『小さなヨハネス序文』（丸山昇 訳 p.328）では、次のように語っている。

「文章は直訳に近づけようと心掛けたのと反対に、人名のほうは意訳した。それが象徴だからである。小人の妖精 Wistilk を去年は相談して「蓋然」と決めたが、「蓋」は推量の言葉であり、少し不適当なので、

図表 4-1　外国人名の訳し方（1）

	日本語原文	魯訳	備考
1	クレイグ	克莱喀（W.J.Craig）	『クレイグ先生』夏目漱石
2	Tolstoi （トルストイ）	托尔斯泰(Tolstoi)	『沈黙の塔』　森鴎外
3	ニイチェ	尼采(Nietzsche)	『沈黙の塔』　森鴎外
4	Stirner（スチルネル）	思谛纳尔(Stirner)	『沈黙の塔』森鴎外
5	Max Stirner （マックススチルネル）	思谛纳尔	二回目
6	スチルネル	思谛纳尔	三回目

出所　筆者作成

ところで、「図表 4-2」から分かるように、「音訳＋欧文の綴り」でないパターンも、そして定番訳でない訳語も見受けられる。

図表 4-2　外国人名の対訳（2）

	日本語原文	魯訳	備考
7	王若水	王若水	『掛物』　夏目漱石
8	スウィンバーン	斯温朋(Swinbume)	二回目からアルファベット略 『掛物』　夏目漱石
9	ゴルキイ	戈里基(Gorki)	『あそび』森鴎外
10	ゴルキイ	戈里奇(Gorki)	『沈黙の塔』森鴎外 （翻訳後期、「高尔基」に変わった）。
11	Angra Mainyu （アングラマイニュウ）	Angra Mainyu	『沈黙の塔』森鴎外 注：拜火教里的恶神
12	ミネルバ	米纳尔伐	『小さき者へ』　有島武郎
13	クロムウェル	克灵威尔	同上
14	ナイティンゲール	那丁格尔	同上

出所　筆者作成

「7」の「王若水」は同じ漢字圏に属する中国人の名前である為、論じないことにする。

「8」のように、一回目は音訳の後に欧文の綴りが付されているものの、二回目からは省かれている。それはスムーズに読めるように、読者に余計な負担をかけないようにという、魯迅の配慮であろう。また、一回目は必ず欧文を付しておくのは、興味のある読者や研究者が、すぐに調べられるように、という魯迅の腐心の証だと思われる。

今回はいっそ独断で「将知」と改めることにした」。

また、「ゴルキイ」は、ロシア人の名作家ゴーリキーのことであり、現在では「高尔基」という定番訳となっている。 「9」と「10」は鴎外の『あそび』と『沈黙の塔』から出た例であるが、それぞれ「戈里基(Gorki)」、「戈里奇(Gorki)」と訳されている。ところが、1930年に発表した『ロシアの童話』小序でゴーリキーに言及した際に、魯迅は「高尔基」という表記を採っている。

一見混乱するように見えるが、『春の夜の夢』訳者附記において、魯迅は次のように述べている。

「作者の姓を埃羅先珂と訳したが、その後『民国日報』の『覚悟』欄に転載されて、第一字を愛に改められたのは良かったので、今回からそのようにすることにした」[65]。

直接的に「ゴルキイ」の訳し方の説明にならないが、それは、より適切な訳語が現れると、古いものを切り捨ててもよいということを意味しているのであろう。

それから、「11」の Angra Mainyu（アングラマイニュウ）だけは「Angra Mainyu 」と、そのまま漢字訳抜きで複写されている。恐らく広く知られた固有名詞ではないという理由で、混淆を避けるために、魯迅はあえて訳さなかったのであろう。その代わりに、「拜火教里的恶神」という訳注を付けておいた。

また、「12」、「13」、「14」は漢字訳だけとなっており、欧文の綴りは付されていない。それは無論、訳し漏れという可能性も考えられる。ただし、有島の『小さき者へ』の趣旨は鴎外の『あそび』や『沈黙の塔』と異なり、思潮を語るものではない。たまたま壁にかけてある絵のことである為、漢字訳で十分であり、欧文を付さなくても構わないと、魯迅が判断していた可能性も考えられる。

因みに本節との関連が薄いが、ここで言及しておきたい。魯迅は「訳者付記」といった手段で、夏目漱石、森鴎外、有島武郎、芥川龍之介といった原文作者、そしてＳＴに登場した諸国の文学者について詳しく紹介している。これも、外国人名の音訳の理由であり、また魯迅の翻訳動機の一つになろう。

2.2　欧文の訳し方

「図表 4-3」と「図表 4-4」は、典型的な例の一部であるが、10 篇の作品の中に、欧文の

---

[65] 丸山昇 訳（1985）『春の夜の夢　訳者附記』『魯迅全集』第 12 巻　学習研究社 p.266

語句が約 30 箇所ある。注付きの 2 箇所を入れると、「欧文の綴り＋中国語訳」というパターンが 25 箇所も占めている。

図表 4-3　欧文の対訳（1）

	日本語原文	魯訳	備考
15	極aputhique（アバチック）な表情	极Aputhique(漠然)的表情	『あそび』森鴎外
16	indéfinissable（アンデフィニッサアブル）	indéfinissable（不可言说）	同上
17	Vagabondage（ワガボンダアジュ）	Vagabondage（放浪）	同上
18	Propagande par le fait（プロバガントバアルルフェエ）	Propagande par le fait（为这事实的枢机传道所）	『沈黙の塔』森鴎外
19	Aphorismen（アフオリスメン）	Aphorismen(警句)	同上

出所　筆者作成

図表 4-4　欧文の対訳（2）

	日本語原文	魯訳	備考
20	「ヒヤ、サー」	Here sir	『クレイグ先生』夏目漱石
21	ドラアム	剧曲	
22	ジレッタント	Dilettante(游戏于艺术的人)	『あそび』森鴎外
23	Resignation	Resignation(觉悟)	『小さき者へ』有島武郎
24	business as usual	business as usual（买卖照常）	『三浦右衛門の最後』菊池寛
25	miss	Miss（觉得有缺少）	同上
26	Toile(トアル)	服饰	『沈黙の塔』森鴎外
27	amoral（アモラル）	无道德的	同上
28	「Malabar hill（マラバアヒル)でしょう」	“Malabar hill罢”	注：马剌巴岡，马剌巴是地名，在印度。同上
29	「Parsi（パアシイ）族の死骸です」	“Parsi族的死尸。”	注：派希是一种拜火神教。同上
30	「Nothing at all!」	“Nothing at all!”	同上
31	Sentimentalisma	Sentimentalisma	『羅生門』芥川龍之介

出所　筆者作成

(6) ＳＴ　危険なる洋書が海を渡って来たのは Angra Mainyu の神の為業である。危険なる洋書を読むものを殺せ。（森鴎外『沈黙の塔』）

ＴＴ　危险的洋书渡过海来，是 Angra Mainyu①所做的事。杀却那读洋书的东西！[66]

回訳　危険なる洋書が海を渡っていたのは、Angra Mainyu①の為業である。危険なる洋書を読むものを殺せ！

例（6）の「Angra Mainyu」のように、読者がＳＴの雰囲気や原文作者の言葉遣いなどをリ

[66]「①拜火教里的恶神，译者注」という魯迅の原注である。

アルに感受し、または関連情報を正確に把握できるように、魯迅は異化ストラテジーで原文の形をそのまま移植している。と同時に、読者に手間を取らせないように訳注を付した。ここでの「欧文の綴り＋中国語訳」は、外国人名の訳し方（「音訳＋欧文の綴り」）の場合と逆順となっているわけであるが、同じ発想に基づく手法だと思われる。即ち、読者へのサービスを心がけると同時に、形式上、音韻上でＳＴとの「等価」を留めることができるように、魯迅は自らの「法則」で帰化、異化ストラテジーの両方を採用しているのである。

2.3　度量衡の訳し方

図表 4-5　度量衡の対訳

	日本語原文	魯訳	備考
32	一尺ほど	一尺见方	『掛物』夏目漱石
33	長さ一尺五寸幅一尺ほど	长约一尺五寸阔约一尺	『クレイグ先生』夏目漱石
34	広さ一寸長さ二尺	广一寸长二尺	『鼻』芥川龍之介
35	二、三里	二三里	『三浦右衛門の最後』菊池寛
36	四分	四分	『鼻』芥川龍之介
37	四畳半	四席半	『掛物』夏目漱石
38	三畳	三张席子的小屋	『お末の死』有島武郎
39	五六丁	五六町	同上
40	四、五町	四五町	『三浦右衛門の最後』菊池寛 注：三百六十尺为一町．合中尺三十四丈；三十六町为一里
41	十八貫（の鉄の棒）	十八贯（铁棒）	同上　注：一贯約中国六斤四两
42	半間	三尺	『三浦右衛門の最後』菊池寛

出所　筆者作成

「図表 4-5」のように、度量衡に関する語彙は 10 篇の日本語原文に 20 個ほどあるが、「尺・寸・分・ 里・畳・貫・町（丁）・間」の 8 種類だけである。同じ漢字圏に属するため、その大半は同形語に訳されている。

ただし、「畳」は「席子」と訳されており、中国人の馴染んだものに置き換えられていない。「貫」は訳語として採用されているが、訳注を付して中国人の馴染んだ「斤」に換算されている。

ところが、同類のものが異なる対処法で扱われていることもある。

(7) ＳＴ　右衛門はこれを聞いて顔色を変えた。実際彼は主君を捨てて逃げて来たのである。府中を落ちて二、三里も行った時、彼らの一群を追いかける織田家の甲冑が四、五町後の街道に光るのを見た時に、彼は死を恐れる心よりほかの考慮は何もなかった。（菊池寛『三浦右衛門の最後』）

ＴＴ　右卫门听到这话，便失了色，他委实是舍了主人逃走的；遁出府邸走了二三里，望见追赶他们的织田君的鍪兜，在四五町之后的街上发光的时候，他除了恐怖心之外，再没有别的思想了。

回訳　右衛門はこの話を聞いて顔色を失った。彼は実際主君を捨てて逃げて来たのである。府中を落ちて二、三里も行って、彼らを追いかける織田家のかぶとが四、五町後の街道に光るのを見た時に、彼は恐怖心よりほかの考慮は何もなかった。

例 (7) のように、「町」は訳語としてそのまま採用されており、置き換えはされていない。しかし、同類のものにも関わらず、「間」は直接中国語の「尺」に換算されている。それは、「町」のほうが受容されやすいため、中国語に移植してもよいと、魯迅が考えていたのであろう。このように、魯迅は移植、適合、パラフレーズ[67]といった翻訳方法を用いて、訳語の受容の可能性を考慮しながら訳している。

ところで、魯迅の言葉使いに「和臭」が付いたものが多い。無論それは日本語からの干渉も考えられるが、使い分けの混同とは思えない。むしろ、魯迅は適切と思われる一部をあえて不訳し、異化ストラテジーで意図的に中国語に移植しようとしたのであろう。

2.4　色あいの訳し方

(8) ＳＴ　女中が手を拭き拭き出て来て、雨戸を繰り開ける。外は相変らず、灰色の空から細かい雨が降っている。（森鴎外『あそび』）

ＴＴ　使女一面拭着手，出来开雨屏。外面照旧是灰色的天空中，下着微细的雨。

回訳　女中が手を拭き出てきて、雨戸を開ける。外は相変わらず灰色の空から、細かい雨が降っている。

例 (8) のように、「色」に関する語彙は 10 篇の中に 50 個所以上もある。「白・黒・紅（赤）・

[67] パラフレーズとは、語の対応より意味の対応を重視し、分かりやすく言い換えるのは良いが意味合いの変更はすべきでないということである。従って、意訳と同様に捉える場合もあるが、ここでは、訳注における説明も包含させることにする。

灰色・紫・緑」はほぼ同形同義語に訳されている。

例外は 15 箇所にとどまっている。訳し方は下記の「図表 4-6」の通りである。

図表 4-6　色あいの対訳

	日本語原文	魯訳	備考
43	煤竹	红黑	『掛物』夏目漱石
44	煤色によごれた戸棚	黧旧的书架	『遊び』森鴎外
45	鼠色（の帽）	灰色（帽）	『沈黙の塔』森鴎外
46	鼠色	灰色	『三浦右衛門の最後』菊池寛
47	柑子色の（帽子）	橙黄的（帽子）	『鼻』芥川龍之介
48	檜皮色	桧皮色	『羅生門』芥川龍之介
49	青（表紙）	蓝（面的簿子）	『クレイグ先生』夏目漱石
50	晴れ渡った青空	晴朗的天空	『お末の死』有島武郎
51	青い光	青色的光	同上
52	朱色	红色	『三浦右衛門の最後』菊池寛
53	紺の水干	乌的绢衣	『鼻』芥川龍之介
54	洗いざらした紺の襖	洗旧的红黑袄子	『羅生門』芥川龍之介

出所　筆者作成

特例ではあるが、魯迅はここで「煤竹」、「鼠色」を中国語の“烟煤色”、“鼠灰色”と訳さなかった。その代わりに、一般化という手法で特殊概念を一般概念に置き換えた。

ここで時代環境が翻訳に与える影響を強調しておきたい。一つの訳語は誕生した後に、その社会の中で検証されながら使われる。認められたものは生き残り、そうでないものは淘汰されて消える。「ゴルキイ」の中国語訳のように、「戈里奇」や「戈里基」から最後の「高尔基」となってきたが、それは個人の嫌悪によったのではなく、その社会の音訳の定型化のプロセスの力も無視できない。

ところで、前述した訳し方は魯迅が自らの取捨選択によるものであるが、中期のはじめ頃という時点においては、魯訳の中に彼なりの「翻訳法則」がすでに形成されていると思われる。次節で続いてそれを検証してみる。

3　魯迅の翻訳法則の定着化（2）－『断想』の外来語の訳し方を例に－

本節において前節と同様に、鶴見祐輔著『思想・山水・人物』に収録された『断想』とそ

の魯訳[68]を対象に、外来語の訳し方を射程に納めて検討し、前節で得られた結論を検証してみる。

3.1　外来語の出現状況及びその魯訳

『思想・山水・人物』は中期における最後の魯訳に当たり、『苦悶の象徴』と同じように、魯迅の重要な訳作である。その中の『断想』は 79 ページから成っており、人名、地名及び書名といった一部の固有名詞を除けば、外来語の異なり語数が 26 個、延べ語数が 84 個となる。魯迅の訳語を付け加えてまとめると、「図表 4-7」の通りになる。

図表 4-7 『断想』における外来語の出現状況及びその魯訳

	外来語（一部固有名詞含まず）	出現回数	魯訳
1	アングロ・サクソン	2	盎格鲁撒逊
2	イマジネーション	1	Imagination
3	オムレツ	5	烙鸡子
4	キャスチング・ヴォート	1	casting vote(决定投票)
5	ギルド社会主義	1	基尔特社会主义
6	ギルド・ホール	1	基尔特会堂
7	クリチカル・ミセレニース	2	《评论杂集》（Critical Miscellanies）/《评论杂集》
8	グレートネス	4	伟大
9	セクレタリー	1	书记
10	ダンス	1	跳舞

[68] 鶴見著『思想・山水・人物』が出版された直後に、魯迅は 1925 年 2 月 13 日にそれを購入し、早くも中の『空しき篤学』を中国語に訳し、同年 4 月 21 日に投稿した。それを皮切りに三年間に亘って『思想・山水・人物』を続々と訳出している。《断想》は最初に 1927 年 6 月 27 日に投稿済み、同年 9 月から翌年の 1 月までの間に《北新》週刊に連載され、後に 1928 年 5 月末に出版された《思想・山水・人物》の一冊に収録されている。

11	チャーチスト	1	急进党徒(Chartist)
12	デモクラシー	7	民主政体　6/全民政治 1
13	トインビー・ホール	1	吞啤会堂
14	ナショナル・リベラル倶楽部	1	全国自由党俱乐部
15	ナップキン	1	桌布
16	ビジネス	1	商务
17	ヒューマン・グランヂュアー	1	人性的伟大
18	フェビアン（協会、等）	33	菲宾（Fabian Society）1/菲宾 32
19	フェアープレー	4	“费厄泼赖”（Fair play）1/费厄泼赖 1/“费厄泼赖”2
20	ボーイ	1	侍役
21	ミアー・リテレーチュアー	1	《不外文章》（Mere Literature）
22	ミキスド・エッセイス	1	《杂糅随笔》（Mixed Essays）
23	モデレーション	3	moderation(中庸) 1/moderation　2
24	ユーモア（一）	6	幽默
25	ユーモリスト	1	幽默家
26	レッド・ライオン・スクエア—同人	1	红狮广场同人
計　異なり語数 26　　延べ語数　84			

出所　筆者作成

3.2　訳語の選択

魯迅は訳語の選択にあたり、「2」のような移植、「4」のようなパラフレーズ、そして「22」のような意訳といった諸々の手法を採っているが、音訳を多く採用している。

(9) ＳＴ　この点は、アングロ・サクソン文化の特徴であろう[69]（p. 35）。

ＴＴ　这一点，是盎格鲁撒逊文化的特征罢（p. 139）。

回訳　この点は、アングロ・サクソン文化の特徴であろう。

ＳＴ　やがて米国の人口が一億から二億に増すときは、もう今迄のようなアングラ・サ

[69] 本節に用いるＳＴとＴＴの例文は、それぞれ鶴見祐輔（1925）『思想・山水・人物』『断想』と魯迅(2008)《魯迅译文全集》から抽出したものであり、便宜上、頁数は文末に記しておく。以下同様。

クソン系の農民だけではない（p. 139）。

ＴＴ　一到美国的人口从一亿增到二亿的时候,便已经不是先前似的单是盎格鲁撒逊系的农民（p. 144）。

回訳　やがて米国の人口が一億から二億に増すときは、もう以前のようなアングラ・サクソン系の農民だけではない。

「アングロ・サクソン」は2回出現したが、いずれも“盎格鲁撒逊”と音訳されている。当時、西洋語を音訳する傾向が強まっている上に、魯迅自身も出来れば言語の音を留めたほうがよいと主張しているのである。

(10) ＳＴ　それは詮ずるにフェビアン協会の人々の四十年の努力の結果である（p. 53）。

ＴＴ　这要而言之，是菲宾协会（Fabian Society）的人们的四十年努力的结果（p. 147）。

回訳　それは要するに、フェビアン協会の（Fabian Society）人々の四十年の努力の結果である。

ＳＴ　フェビアン協会は、英国労働党の頭脳である（p. 54）。

ＴＴ　菲宾协会是英国劳动党的头脑（p. 147）。

回訳　フェビアン協会は英国労働党の頭脳である。

「フェビアン」は33回も出現しているが、一律に“菲宾”と音訳されている。ただし、読者のことを配慮し、魯迅は一回目にだけ、英訳を付けた。

(11) ＳＴ　これは、英国は、フェアー・プレーの国であるからである。競技の新諦に悟入したる英国人は、競技のフェアー・プレーを、あらゆる社会の生活に応用している（p. 8）。

ＴＴ　这就是因为英国是“费厄泼赖”（Fair play）的国度的缘故。参透了竞技的真谛的英国人，便也将竞技的“费厄泼赖”，应用到一切社会的生活上去（p. 147）。

回訳　これは、英国はフェアー・プレー（Fair play）の国であるからである。競技の真諦に悟入したる英国人は、競技のフェアー・プレーを、あらゆる社会の生活に応用している。

「フェアー・プレー」の中国語訳も同じように音訳されており、一回目だけは英文が付けられているが、ほかの数回は、「“”」を付けられ、「“费厄泼赖”」という形となっている。

(12) ＳＴ　この点、彼は全くウィルソンと異曲同工である。ウ氏も亦、ユーモアの悟道に入っていた（p. 19）。

ＴＴ　这一点，他完全和威尔逊异曲同工。威尔逊是也已经入了幽默的悟道的（p. 132）。

回訳 この点、彼は全くウィルソンと異曲同工である。ウィルソンも亦、ユーモアの悟道に入っていた。

ＳＴ　モーレーは、グラッドストーンと同じようにユーモアの分からなかった人である（p. 19）。

ＴＴ　穆来卿也如格兰斯敦一样，是不懂幽默的人（p. 132）。

回訳　モーレーは、グラッドストーンと同じように、ユーモアの分からなかった人である。

「ユーモア」が 6 回出ているが、すべて“幽默”と音訳されている。

因みに、“幽默”は、1924 年に林語堂の手によって英語の「humour」から訳された新語である。その時、林も魯迅も雑誌《语丝》の中堅の投稿者であり、まだ親友であった。

語彙レベルにおいては、外来語は音訳に次いで、意訳される場合も多い。

(13) ＳＴ　そこで、卵を三つか四つずつ割って、大きいオムレツをつくって、食べさすのである。労働党に同情ある学者たちが、毎水曜日の一時を期して落ち合って、一皿のオムレツと一緒に一杯の珈琲を啜って、四方山の話をする会合場所である（p. 72）。

ＴＴ 就在那里打开三四个鸡卵来，做烙鸡子给人吃。是凡有对于劳动党有同情的学者们，以每水曜日一点钟为期，在这里聚会，和一盘烙鸡子一起，啜着一杯加啡，纵谈一切的处所（p. 155）。

回訳　そこで卵を三つか四つを割って、オムレツを作って食べさすのである。労働党に同情ある学者たちが、毎水曜日の一時を期してここで落ち合って、一皿のオムレツと一緒に一杯の珈琲を啜って、四方山の話をし放題している場所である。

ＳＴ　彼は肉附のよい赤々とした頬をして、にこにこ笑いながら、黙ってオムレツを食べ出した（p. 74）。

ＴＴ　他有着腴润的红红的面庞，微笑着，默默地吃起烙鸡子来了（p. 156）。

回訳　彼はふっくらしてみずみずしくて赤々とした頬をして、にこにこ笑いながら、黙ってオムレツを食べ出した。

「オムレツ」が 5 回出現しているが、すべて“烙鸡子”と訳されている。これは、食物の

特徴からの意訳だと捉えることができよう。

（14）ＳＴ　なんと言っても、大隈侯の晩年には、一種のグレートネスがあった（p. 2）。

ＴＴ　无论怎么说，大隈侯的晚年，是有着一种伟大的（p. 124）。

回訳　なんと言っても、大隈侯の晩年には、一種のグレートネスがあった。

ＳＴ　しかしそういう人生の決算期に這入った人でなくとも、中道に於て、既に我々にグレートネスを感ぜしめる人もある（p. 2）。

ＴＴ　然而虽然还没有进入这样的人生的决算期的人在中途时，也有已经是我们感到伟大的（p. 124）。

回訳　しかしまだそういう人生の決算期に這入った人でなくとも、中道に於て、既に我々にグレートレスを感ぜしめる人もある。

「グレートネス」が 4 回現れているが、同じように“伟大”と意訳されている。魯迅が直訳法を推奨しているが、外来語の場合は、両言語の表記に違いが出てくるため、音訳以外、意訳を採用するのが一般的だといえよう。

ところで、「図表 3-7」の「出現回数」2 回以上のものを統計してみたところ、「17」の「デモクラシー」だけは、6 回が“民主政体”、１回が“全民政治”と訳されているが、ほかの訳語はすべて統一されている。このように、採択された訳語は安定しているのである。

ところが、訳語に欧文の注釈、または補足的な注記が付された場合は、順序の乱れや形式の不統一が見受けられる。なぜそのようになっているのか、またそれは何を意味しているのであろうか。

3.3　形式の統一性

原文の形にもよるが、定番化された、または解釈する必要がないと判断した場合、魯迅は訳語を一つ採択し、欧文表記をつけないようにしている。ところで、漢字訳と欧文表記が同時に振られる場合は、「漢字訳+欧文表記」というのが普通である。しかし、魯訳において、「欧文表記+漢字訳」という逆順も散見される。また、漢字訳抜きで、外来語がそのまま移植される場合もある。即ち訳語の形式上の不統一が見受けられるということである。

（15）ＳＴ　ウィルソン氏は、想像力――イマジネーション――というものについて面白い

研究をしている（p.40）。

ＴＴ　威尔逊对于想象力――imagination――曾有有趣的研究（p.141）。

回訳　ウィルソン氏は想像力――imagination――についての面白い研究がある。

鶴見は「想像力」をカタカナ語の「イマジネーション」で解釈している。魯迅はＳＴの形を踏んで“想象力”と訳した上で、「イマジネーション」を略せずに、“imagination”で英語の形を再現させている。ここから、形式上でＳＴとの「等価」を求めながら、読者へのサービスを考慮に入れた魯迅の翻訳姿勢が窺えるのであろう。

（16）ＳＴ　十九世紀初頭のチャーチストの運動は姑らく置くも、初めて二名の労働者議員を議会に送ってから、丁度今年で五十年目である（p.51）。

ＴＴ　十九世纪初头的急进党徒（Chartist）的运动姑且勿论，最初送两个劳动者议员到议会去，距今就正是五十年（p.146）。

回訳　十九世紀初頭のチャーチスト（Chartist）の運動は姑らく置くも、初めて二名の労働者議員を議会に送ってから、これまでちょうど五十年目である。

ＳＴにないにも関わらず、魯迅は読者の立場を配慮し、あえて“急进党徒”という訳語の後に、その手掛かりとしての英文“Chartist”をつけている。前述したように、欧文表記を付ける場合は、それを中国語訳の後ろに置くのが一般的でもあり、魯迅のやり方でもある。しかし、例（17）では、漢字訳と欧文表記が逆順となっている。

（17）ＳＴ　一九二二年の選挙において、米国の上下両院における共和党の多数が減少するや、彼の率ゆる第三党は隠然として米国政界のキャスチング・ヴォートを握ってしまった（p.48）。

ＴＴ　到一九二二年的选举，在美国上下两院的共和党的多数一减少，他所率领的第三党，遂隐然握了美国政界的 casting vote（决定投票）（p.145）。

回訳　一九二二年の選挙において、米国の上下両院における共和党の多数が減少するや、彼の率ゆる第三党は隠然として米国政界のキャスチング・ヴォートを握ってしまった。

「キャスチング・ヴォート」を訳す際に、まだ定番の訳語がないためか、もしくはこの言葉自体が当時の中国人にはあまり知られていないと判断したのか、魯迅はこのカタカナ語を英語“casting vote”と再現させ、さらにパラフレーズとして、その後ろには“决定投票”と付け加えた。

こうなると、中国語訳と欧文表記の順序は「例 8」と正反対になる。それは何故であろう。

魯迅は、例（16）の“急进党徒”を正式な訳語として採用して英文の前に置いたが、例（17）の“决定投票”を正式な訳語として採用せずに英文の後に置いた。“急进党徒”という言葉は当時ある程度知られており、もしくは訳語として適切だと魯迅は判断したのであろう。それに対し、“决定投票”いう言葉はまだ知られていないため、もしくは訳語として適切かどうか、魯迅にはまだ疑念を抱いているのであろう。

換言すれば、読者の立場に立っているからこそ、このような逆順が現れているのであろう。形式上では不統一であるが、ストラテジーは変わらないのである。

（18）ＳＴ　その理由は色々あろう、しかし自分の眼に最も大きい理由として考えられることは、英国人が中庸の道徳に悟入しているからである。モデレーションということが、英国民の新性格である（p.52）。

ＴＴ　原因该有种种罢。但在我的眼中，以为最大的理由者，乃是因为英国人已经悟入了中庸的道德。所谓 moderation(中庸)，是英国民的新性格（p.146）。

回訳　その原因はいろいろあろう。しかし自分の目に、最も大きい理由として考えられることは、英国人が既に中庸の道徳に悟入しているからである。Moderation(中庸)ということが、英国民の新性格である。

ＳＴ　今仔細に英国労働党内閣出現の跡を見ると、茲にまた英国人の通性たるモデレーションの発露が窺われる（p.52）。

ＴＴ　现在详细看英国劳动党内阁出现之迹，也就可以窥见英国人的 moderation 的发露（p.147）。

回訳　今詳細に英国労働党内閣出現の跡を見ると、また英国人の通性たる moderation の発露が窺われる。

鶴見が初めて“moderation”に言及したとき、「中庸」という言葉を用いたが、その後、すべてカタカタ語の「モデレーション」としている。それに対し、魯迅は鶴見の言う「モデ

レーション」が「中庸」のことだと心得ていながらも、一回目に限って“中庸”という中国語注釈を追加したが、二回目以降は中国語訳抜きで、「モデレーション」を一律に英語の“moderation”に復元した。鶴見の「モデレーション」＝「中庸」という見解に、魯迅は疑問を抱いているのであろう。とはいえ、翻訳者として原文を勝手に歪曲せずに、できる限り忠実に訳すべきだと魯迅は考え、折衷案として一回目だけ、原文を踏んで「moderation(中庸)」という形を採り、あえて“中庸”を省かずに処理したのであろう。

従って、(18) と (17) の中英訳の順序は同じであるが、その理由は異なる。読者への「配慮」、いわゆる「サービス的翻訳倫理」を念頭に置きながら、著者や原文への忠実、いわゆる「再現的翻訳倫理」を魯迅は重視しているのである。《思想·山水·人物》の《題记》において、魯迅は次のように述べている。

「…やはり世の中には何から何まで満足のいく文章というものは存在しないのである。…しかし一旦翻訳するとなれば、全体の中に、自分の意に沿わぬ箇所があっても、削ったりはしない。なぜならば、私の考えでは、本来の姿を変えてしまっては、著者だけでなく、読者にも失礼だと思うからである。

…私は細かいことにはこだわらないので、翻訳するものを選ぶのにも、これまでそれほど厳密ではなく、もし完全な本を求めれば、読むべき本は天下におそらく絶無であろうし、完全な人を求めれば、生きるに値する人物も天下にいくらもなくなってしまうと考えてきた。どの本も、欠点もあるのは、現在の時点ではどうしても避け難いことである。この本の読者が、私が以上述べたことを鋭意汲み取られるよう希望する」[70]と。

また、魯迅は「個人的にはある作家の主張にはよく違和感を覚えるが、できるだけ原文に近づけようと、彼らの作品を訳しているのだ」とも語っている。そういう意味では、「意訳法」から「直訳法」へとシフトした理由の一つは、ＳＴの情報を歪曲せずに読者に伝達し、読者がそれによって世界中の情勢や新しい情報をより正確に把握できればと魯迅が願っている、と判断しても差し支えないのであろう。

ところで、用例を抽出し、統計を取ってみた結果、訳語そのものが安定しており、初期魯訳に散見される気の向くままのような訳し方が見当たらなくなったことはわかった。また、その「翻訳法則」は以前にもまして固まっていると思われる。

---

[70] 丸山昇 訳（1985）『古籍序跋集・訳文序跋集』『魯迅全集』第 12 巻 p. 344－345

ところで、「翻訳法則」が形成されている中で、「直訳法」や「異化翻訳」は魯訳の主な特徴として顕著になっている。次節でそれについて分析を展開していく。

4　直訳手法から見る魯迅の異化翻訳 -『羅生門』の中国語訳の比較を通して -

後に、魯迅の翻訳は梁実秋に中国語らしくない「硬訳」[71]、「死訳」だと指摘された。では、文学的素養の高い魯迅が、なぜそのような翻訳法に執着し、そういった「硬訳」や「死訳」を生み出したのであろうか。

本節において、魯迅の翻訳法及びその裏にあるストラテジーを分析すると同時に、魯迅の翻訳観を検討する。具体的に、芥川龍之介の『羅生門』とその魯迅訳、そして他の 6 本の中国語訳[72]を考察対象にし、語彙、文構造、表現といった三つのレベルに分け、ＳＴとＴＴの対照分析、またＴＴとＴＴの比較分析を行う。

ところで、魯迅の言葉遣いは 100 年ほど前のものであるため、当時の社会環境と切り離せないものである。従って、現代を生きている者が、魯訳に抵抗感を覚えることも考えられる。ただ、ほかの 6 名の訳者には、楼適夷のように、魯迅と同時代の者もいる。ここでは、訳文の流暢さや自然さより、どれがＳＴに一番近い、即ちどれが一番ＳＴに忠実していることを念頭に置きながら分析を展開していく。

4.1　語彙レベル

語彙レベルにおいて、魯迅は増・減訳、意訳をできる限り控え、「再現的倫理」を意識しながら、言葉の綾も考慮に入れ、形式上、そして意味合いでの「等価」を求めながら訳語を選択している。

(19) ＳＴ　羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男の外にも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人はありそうなものである。それが、この男の外には誰もいない。
魯訳　这罗生门，既然在朱雀大路上，则这男子之外，总还该有两三个避雨的市女笠和揉乌帽子[1]的。然而除了这男子，却再没有别的谁。

---

[71] 硬訳（servile translation）は、魯訳が硬くて読みづらいと指摘した梁実秋が使った言葉である。自国の受容者の立場を配慮せずに、起点言語の語法、構文や表現に従う訳し方だとされている。

[72] それぞれ楼適夷、文潔若、呂元明、聶双武、魏大海、林少華の 6 氏の訳文であるが、紙幅のため、7 つの訳文を全部例示するのは困難であり、必要に応じて挙げることにした。また便宜上、それぞれの訳文における原注「[1]、①」などはそのまま残すが、注釈そのものを略すことにした。

回訳　この羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男の外にも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子がもう二三人はありそうなものである。それが、この男の外には、誰もいない。

楼訳 罗生门正在朱雀大路，本该有几个戴女笠和乌软帽的男女行人，到这儿来避雨，可是现在却只有他一个。

回訳　羅生門がちょうど朱雀大路にあり、市女笠や揉烏帽子を被った通行人の男女が何人かがここで雨やみをするはずだったが、今は彼一人しかいない。

図表 4-8「市女笠や揉烏帽子」の対訳状況

ＳＴ	魯訳	楼訳	文訳	呂訳	聂訳	魏訳	林訳
市女笠や揉烏帽子	市女笠和揉乌帽子（注付）	戴女笠和乌软帽的男女行人	戴市女笠或软乌帽子的人（注付）	戴市女笠或软乌帽的庶民（注付）	戴市女笠或揉乌帽子的庶民（注付）	（有的）头戴仕女斗笠，（有的）顶着揉乌礼帽	头戴高斗笠或三角软帽的（避雨）男女

出所　筆者作成

警察官のことをその帽子、“大盖帽”で呼ぶというような代替法は、文学作品によく散見される。魯迅の創作の中にも次のA、B、Cのような用例も見受けられる。

A 红眼睛原知道他家里只有一个老娘，可是没有料到他竟会那么穷，榨不出一点油水，已经气破肚皮了[73]。

B “义哥是一手好拳棒，这两下，一定够他受用了。”壁角的驼背忽然高兴起来[74]。

C “阿义可怜----疯话，简直是发了疯了。”花白胡子恍然大悟似的说[75]。

「赤い目をしている人」、「猫背の人」、「ごま塩の髭の人」の代わりに代替法で「赤い目」、「猫背」、「ごま塩の髭」を用いることによって、話しぶりが軽やかで、ユーモラス

[73] 魯迅（2005）《药》《鲁迅全集》第1巻 人民文学出版社 p.469

[74] 同上

[75] 同上

になっている。

因みに、翻訳においてだけでなく、創作においてもこのような用例が見受けられるということは、魯迅の創作がその翻訳と繋がっているものだと語っているのであろう。その点に関しては、第六章の第1節で取り扱うことにする。

ところで「図表4-1」で分かるように、魯訳は注付で逐語訳しただけでなく、ＳＴと同様に、代替法で“市女笠”と“揉烏帽子”を用いて「人」のことをさしている。それによって、増・減訳、いわゆる翻訳シフトをできる範囲で控えることに成功した。それに対し、他の訳文は「市女笠」と「揉烏帽子」に当たる訳語の後ろに「庶民」や「男女」を加筆した。それによって中国人読者にとって馴染んだ表現となっているわけだが、魯訳と比べると、ユーモラスが失われた上に、ＳＴからかけ離れたことになる。

(20) ＳＴ その上、今日の空模様も少からず、この平安朝の下人の Sentimentalisme に影響した。

魯訳 况且今日的天色，很影响到这平安朝［2］家将的 Sentimentalisme 上去。

回訳 その上、今日の空模様も、少なからずこの平安朝の家来の Sentimentalisme に影響した。

楼訳 而且今天的天气也影响了这位平安朝（注释）家将的忧郁的心情。

回訳 その上、今日の天気もこの平安朝の家来の憂鬱の気持ちに影響した。

図表4-9「Sentimentalisme」の対訳状況

ＳＴ	魯訳	楼訳	文訳	呂訳	聂訳	魏訳	林訳
Sentimentalisme	Sentimentalisme	忧郁的心情	感伤	多愁善感的情绪	多愁善感的情绪	Sentimentalism（心情）	Sentimentalisme（注：感伤，感伤主义）

出所　筆者作成

ＳＴは日本語ではなく、フランス語「Sentimentalisme」をそのまま用いている。おそらく、芥川が何らかの理由であえて注抜きでそのまま使ったのであろう。その理由はともかくとして、読者がそれを読むと、新鮮さや異質性を感じ取り、文脈に沿ってその意味を推測するであろう。しかし、「図表4-9」のように、ほとんどの訳文は中国語に当たる訳語にし、その

「外国臭」、いわゆる異質性を吹き払った。何の手も加えずに扱ったのは魯訳だけである。

(21) ＳＴ　己は検非違使の庁の役人などではない。

魯訳　我并不是检非违使［3］的衙门里的公吏；

回訳　己は検非違使の庁の役人ではない。

文訳　我不是什么典史①衙门里的官吏，

回訳　己は「典使」の庁の役人などではない。

図表 4-10「検非違使」の対訳状況

ＳＴ	魯訳	楼訳	文訳	呂訳	聂訳	魏訳	林訳
検非違使	检非违使（注付）	巡捕厅	典使（注付）	典使（注付）	检非违使（注付）	衙门	按察使

出所　筆者作成

魯迅は異質性の保持を考慮し、「検非違使」を注付でそのまま訳文の中に移植している。それに対し、他の訳文の多くは「帰化」ストラテジーでそれを「巡捕厅」、「典史」、「按察使」と訳し、古代中国の呼び名に適合させている。ただし、「庁」の訳語としては、魯訳も含め、一律に“衙门”と訳されている。

(22) ＳＴ　広い門の下には、この男の外に誰もいない。唯、所々丹塗の剥げた、大きな円柱に、蟋蟀が一匹とまっている。

魯訳 宽广的门底下，除了这男子以外，再没有别的谁。只在朱漆剥落的大的圆柱上，停着一匹的蟋蟀。

回訳　広い門の下には、この男の外に、誰もいない。ただ丹塗りの剥げた大きな円柱に、蟋蟀が一匹とまっている。

楼訳 宽广的门下，除他以外，没有别人，只在朱漆斑剥的大圆柱上，蹲着一只蟋蟀。

回訳　広い門の下には、彼の外に、誰もいない。ただ丹塗りの斑な大きな円柱に、蟋蟀が一匹しゃがみこんでいる。

図表 4-11「とまっている」の対訳状況

ＳＴ	魯訳	楼訳	文訳	呂訳	聂訳	魏訳	林訳
とまっている	停着	蹲着	落着	停着	停落着	趴着	伏在

出所　筆者作成

魯訳は「とまっている」を中国語の「停着」と訳した。それに対し、幾つかの訳文は「蹲着」、「落着」、「趴着」、「伏在」と訳している。確かに「停着」より、「蹲着」というような表現は、擬人法の使用によりその画面をリアルに表すことができ、生き生きとした効果が得られている。ところが、そのような手法に長じているのにもかかわらず、魯迅は意図的にそう訳さずに、その代わりにＳＴに合わせて素朴な「停着」という訳語を選び取っている。これは翻訳が翻訳であり、創作ではないという魯迅の考えを裏付ける証拠でもあろう。

（23）ＳＴ　その代わり又鴉が何処からか、たくさん集まって来た。

魯訳　反而许多乌鸦，不知从那里都聚向这地方。

回訳　その代わりたくさんの鴉が、何処からかここに集まって来た。

楼訳　倒是不知从哪里，飞来了许多乌鸦。

回訳　その代わり何処からか、たくさんの鴉が飛んできた。

図表 4-12「集まって来た」の対訳状況

ＳＴ	魯訳	楼訳	文訳	呂訳	聂訳	魏訳	林訳
集まって来た	聚向	飞来了	聚来了	飞来	飞来，群聚于	汇聚于	飞来

出所　筆者作成

同じように、魯訳は「集まって来た」を「聚向」と訳した。それに対し、幾つかの訳文は「飞来」と訳している。

動詞を訳す場合は、用例（22）と（23）のように、訳語の許容度が名詞の場合より多少高いように見えるが、魯迅は言葉の綾をできる限り原作に合わせようとし、最も一般的な訳語を採択したのである。

以上の用例分析から、語彙翻訳のレベルにおいて、名詞であれ動詞であれ、魯迅が意訳ではなく、直訳か直訳に最も近い翻訳法を採っていることが分かる。

4.2　文構造レベル

文構造レベルにおいても、魯迅は同じように「再現的倫理」、形式上の「等価」を重んじており、それによりいっそう原文志向の姿勢を見せている。流暢さを求めるために忠実さを切り捨てることに、魯迅は抵抗している。形式上の対応を重視し、語順の調整を出来る範囲で控えているため、「抵抗式翻訳」の傾向が頗る強いのである。

(24) ＳＴ　或日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。

魯訳　是一日的傍晚的事。有一个家将，在罗生门下待着雨住。

回訳　或日の暮方の事である。一人の家来が、羅生門の下で雨やみを待っていた。

呂訳 一天傍晚时分，站在罗生门下的一个仆人等着雨住下来。

回訳　或日の暮方の頃、羅生門の下に立っている一人の使用人が雨やみを待っていた。

(25) ＳＴ　それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子を窺っていた。

魯訳　于是是几分钟以后的事了。在通到罗生门的楼上的，宽阔的梯子的中段，一个男子，猫似的缩了身体，屏了息，窥探楼上的情形。

回訳　そうして何分かの後のことである。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息をひそめながら、楼の上の容子を窺っていた。

聂訳　几分钟之后，通往罗生门楼上那宽敞的楼梯中段，一个男子像猫一样缩着身子，屏住气息，朝罗生门城楼上窥视着。

回訳　何分かの後、羅生門の楼の上へ出るその幅の広い梯子の中段に、一人の男が猫のように身をちぢめて、息をひそめながら、羅生門の楼の上を窺っていた。

(26)　ＳＴ　暫、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起したのは、それから間もなくの事である。

魯訳　暂时气绝似的老妪，从死尸间挣起伊裸露的身子来，是相去不久的事。

回訳　暫死んだような老婆が、死骸の中からその裸の体を起こしたのは、それから間もなくの事である。

聂訳　过了一会儿，好像昏死过去倒在尸骸堆中的老太婆，从尸骸中赤身裸体地站起

身来。

回訳　暫すると、死んだように死骸の中に倒れていた老婆が、死骸の中から裸で体を起こした。

例（24）～（26）では、魯訳はＳＴの形を踏んで調整せずに、下線の部分を「文」レベルに保っている。それに対し、他の訳文は中国語の慣習に従い、時間的連用修飾節に置き換えたりしている。その結果、下線のついたところが「文」レベルではなく、「句」レベルに変貌してしまった上に、判断文は陳述文に変わっている。魯迅はそのような訳し方に抵抗している。その理由は、かつて魯迅自身の説から分かるであろう。

「…さて文芸の翻訳についていえば、もし甲類の読者を対象とするならば、私は直訳を主張するものです。私自身の訳し方は、たとえば『山背后太阳落下去了』（山の背ろに太陽は落ちて行った）とします。すらすら読めないけれども、しかしこれを『日落山阴』（日は山かげに落ちた）というふうに改めたりしません、なぜかといえば原文の意味は山を主としているが、「日落山阴」と改めたら太陽を主とすることに変わってくるからであります。創作であっても、私は作者はこのような区別はしなければならないと考えます」[76]。

例（26）は『羅生門』の始まりの一文である。「或日の暮方の事である」は主語省略の判断文であり、「（これは）或日の暮れ方のことである」の省略の形である。このような前置きは物語の前口上としてよく使われており、特別な効果を持つものである。魯訳の「是一日的傍晚的事」は中国語としては違和感が感じられる。日本語において、明示化する必要がない場合は主語などがよく省略される。それに対し、中国語では主語がよく明示されている。この意味では、そのような違和感が出てきたのは両言語システムの差異によるが、「这是一日傍晚发生的事」のように、省略された主語「这」を付け加えて少しだけ調整すれば、自然な中国語となる。にもかかわらず、魯迅はＳＴとの「形式的等価」を求め、原文再現という翻訳倫理を自覚しながら、ＳＴを踏んで調整をできる限りの範囲に控え、増減訳を最小限に絞るように努めている。その結果「抵抗式翻訳」となっているのである。それが「硬訳」の原因なのではないだろうか。ところが、それは魯迅にとって、承知の上での選択であり、意

[76] 魯迅　増田渉訳(1956)『翻訳についての通信』『魯迅選集』岩波書店 p. 247－p. 250

図的に「硬訳」を採っているのである。

そういう意味では、規範な中国語を好み、型を破ってはいけないと主張する梁実秋と、規範は規範を破るから生まれ、とにかくチャレンジしてみようと主張する魯迅との間にどうしても越えられない壁が横たわっていることになる。

(27) ＳＴ　その時、その喉から、鴉の啼くような声が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ伝わって来た。

魯訳　这时从这喉咙里，发出鸦叫似的声音，喘吁吁的传于家将的耳朵里：

回訳　その時、その喉から出された、鴉の鳴くような声が、喘ぎ喘ぎ家来の耳へ伝わって来た。

呂訳　这时，仆人听到老太婆喘吁吁从喉咙发出好象乌鸦叫似的声音：

回訳　その時、使用人が老婆が喘ぎ喘ぎの、喉から出された鴉の鳴くような声を聞こえた。

(28) ＳＴ　選ばないとすれば――下人の考えは、何度も同じ道を低徊した揚句に、やっとこの局所へ逢着した。

魯訳　但不拣，则――家将的思想，在同一的路线上徘徊了许多回，才终于到了这处所。

回訳　だが選ばないとすれば、――家来の考えは、何度も同じ道を低徊した挙句に、やっとこの局所に至った。

楼訳　倘若不择手段哩――家将反复想了多次，最后便跑到这儿来了。

回訳　もし手段を選ばないとすれば――家来が何度も考えて、最後にここに走って来た。

(29) ＳＴ　しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩う事を忘れていた。

魯訳　然而那手，在其次的一刹那间，便忘却了掩住鼻子的事了。

回訳　しかしその手は、次の瞬間には、もう鼻を掩う事を忘れていた。

林訳　但下一瞬间却令他忘了捂鼻：

回訳　しかし次の瞬間は、彼に鼻を掩うことを忘れさせていた。

(30) ＳＴ　下人の眼は、その時、はじめて其死骸の中に蹲っている人間を見た。

魯訳　那家将的眼睛，在这时候，才看见蹲在死尸中的一个人。

回訳　その家来の目は、その時、初めて其死骸の中に蹲っている人間を見た。

楼訳　这时家将发现尸首堆里蹲着一个人，

回訳　その時、家来は死骸の中に蹲っている人間を見た。

上記のいずれにおいても、魯訳は原文と同じように、主語を「声音」、「家将的思想」、「那手」、「家将的眼睛」としている。それによって、「鼻を掩うこと」を「手」が「忘れる」、といったようなＳＴの表現はうまく再現されている。それに対し、他の訳文は「家将」や「仆人」といった主語を置き換えたため、ＳＴの風味を失わせてしまう。

ここでは、翻訳によって新しい表現を中国語に取り入れようという魯迅の姿が微かに窺える。それに対し、他の訳者にはこのような意識がないように思われる。

(31) ＳＴ　檜皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のような老婆である。

魯訳　是穿一件桧皮色衣服的，又短又瘦的，白头发的，猴子似的老妪。

回訳　檜皮色の服を着た、低くて痩せた、白髪の、猿のような老婆である。

林訳　一个身穿桧树皮色衣服的白发老太婆，又瘦又矮，浑如猴子。

回訳　檜皮色の服を着た白髪の老婆が、痩せていて低くて、まるで猿のようである。

例 (31) のように、多項目連体修飾語を用いることによって、魯訳はＳＴの判断文の形を留めている。それに対し、林訳はそれを中国語の慣習に合わせ、文を崩して再構成させ、描写文にしている。従って、林訳のほうが中国語としてはより自然的かつ流暢に見えるが、文構造、そして描写の仕方の面においては、既にＳＴからかけ離れていることになる。

訳文の良し悪しはともかくとして、語彙レベルのみならず、文構造レベルにおいても、魯迅はＳＴの形をできる限り留めるように努めている。では、魯迅は何故そこまでこだわっているのであろうか。

魯迅はかつて翻訳について「日本語は、欧米の言語とは大へん『ちがって』いる、しかし彼ら日本人はだんだん新しい句法を加えて行って、昔の文章と比べたら、一そう翻訳に適するように、しかも原文の力強い語気を失わないものにした。いうまでもなく最初は人々を大へん『愉快』でなくしたが、しかしさぐるのと習慣とが、今ではもう同化して、自分のものになってしまった。中国の文法は日本の古文よりも不完備であるが、それでも多少の変化はあった…当時としては『文法、句法、語法』の多くが生硬な造りものであったが、それを使いなれているうちに、必ずしも手さぐりでたどるまでもなく、わかるようになったのである。

今日ではまた『外国文』が入ってきた、いろいろな句法は、新しく作る――悪くいえば、無理に作る必要がある。私の経験からいって、こういう硬訳のほうが幾つにも句切って説明的に訳すより、原文の力強い語気は一そう保てると思う、ただし中国文が新しく作られることに待つというのは、今までの中国文には欠陥があるのだからである」[77]とのように論じている。

即ち、分かり易さを求めるために、ＳＴの構造を崩したり、内容を帰化したりする翻訳方法に、魯迅は反対している。ＳＴの形の保持を考慮に入れながら、その異国情緒、つまり異質性を保つべきだと魯迅は主張している。無論、異国情緒を保持することと分かり易さを求めることと矛盾する場合は当然ある。しかし、見慣れていないからこそ、輸入する必要がある。輸入してきて、優れたものを残し、そうでないものを切り捨てればよい。それによって中国語の文法、表現が改善されるはずだと、魯迅は考えている。

4.3　表現レベル

表現レベルにおいても、同じような傾向が見受けられる。意訳法や帰化ストラテジーに抵抗しながら、魯迅は異質性を保つために、直訳法や異化ストラテジーを採用しており、ＳＴを自国の言語表現と文化に合わせることを意図的に控えている。

(32) ＳＴ　洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨てて顧る者がなかった。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸が棲む。盗人が棲む。

魯訳　都中既是这情形，修理罗生门之类的事，自然再没有人过问了。于是趁了这荒凉的好机会，狐狸来住，强盗来住；

回訳　都内がその状態であるから、羅生門の修理などは、元より誰も顧る者がなかった。するとその荒れ果てたのを好機にして狐狸が棲む、盗人が棲む。

文訳　京城里尚且落到这步田地，整修罗生门等事，根本就被弃置不顾。于是，墙倒众人推，狐狸住进来了，盗贼住进来了。

回訳　首都もこんな状態になったから、羅生門の修理等は、元より放置されている。すると、倒れかけの壁を、人々がそれに乗じて押し倒そうとするように、狐狸が棲んで来る、盗人が棲んでくる。

---

[77] 魯迅　増田渋訳(1956)「『硬訳』と『文学の階級性』」『魯迅選集』岩波書店 p. 139- p. 140

(33) ＳＴ　唯、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞が、点々と白くこびりついているのが見える。

魯訳　只见处处将要崩裂的，那裂缝中生出长的野草的石阶上面，老鸦粪粘得点点的发白。

回訳　唯所々崩れかかった、その崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞が点々と白くこびりついているのが見える。

聂訳　看到的只是到处都将断裂、并且裂缝中长出老高青草的石阶上，乌粪斑斑点点，犹如白瓜子一般。

回訳　唯所々崩れかかった、そして崩れ目に高くて青い草のはえた石段の上に、カラスの糞が点々とこびりついて、まるで白い瓜の種のようである。

例（32）と（33）では、ＳＴに忠実な魯訳に反し、適合というストラテジーを採った文訳の「墻倒众人推」と聂訳の「犹如白瓜子一般」は「翻訳」というより、寧ろリライトというべきである。この時点においては、文訳や聂訳は受容の易さを求めるために、目標文化の期待に合わせようとしていたのであろうが、「再現的翻訳倫理」への自覚がないように思われる。

(34)　ＳＴ　そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪がって、この門の近所へは足ふみをしない事になってしまったのである。

魯訳 于是太阳一落，人们便都觉得阴气，谁也不再在这门的左近走。

回訳　そこで日が沈むと、人々が気味を悪がって、この門の近所へは足を運ぼうとしなかった。

文訳　所以太阳西坠后，人人都感到毛骨悚然，不敢越雷池一步。

回訳　そこで日が西に沈むと、人々が身の毛がよだって、雷池を一歩とも越えようとしなかった。

ＳＴの一般的な表現を踏んだ魯訳に対し、文訳は「不敢越雷池一步」という比喩法を採っている。「雷池」が中国の古い川であったため、文訳はここで帰化ストラテジーを採ったのみならず、一般表現を特殊化にしたことになる。

(35) ＳＴ　前にも書いたように、当時京都の町は一通りならず衰微していた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波に外ならない。

魯訳　上文也说过，那时的京都是非常之衰微了；现在这家将从那伺候多年的主人给他遣散，其实也只是这衰微的一个小小的余波。

回訳　前にも言ったように、当時の京都は非常に衰微していた。今この家来が長年仕えていた主人から暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。

林訳　前面已经说了，京都城当时已衰败不堪。眼下这仆人被多年的雇主打发出门无非是这衰败景象的一小片落叶而已。

回訳　前にも既に言ったが、京都の町は当時衰えてならなかった。今この下人が長年の雇主から暇を出されたのもこの衰退の光景の小さな一枚の落葉にほかならない。

「余波」という言葉は中国語にも日本語にも存在する。そこで魯訳を含む六つの訳文はそのまま「余波」に訳している。しかし、林訳はそれを「落叶」と置き換えている。林氏はかつて「文学翻訳」に関して見解を述べている。彼が言うに、「文学翻訳」である以上、先ず「文学」のほうを重要なポイントとして捉えるべきだという。それは、原作を文学的に翻訳すべき、換言すれば美的に翻訳すべきだというような見解であろう。しかし魯迅は、「文学」を「翻訳」するという原点に立っている。即ち、原作をできる限り忠実に訳すべきだと、魯迅は考えているのである。

ところで、翻訳の「美」とは何であろう。それについていろいろと議論されているが、翻訳の「美」を文学の「美」と間違えて捉える者が多い。場合によっては、意図的にそれに従う訳者もいる。例えば、林少華が村上春樹の『ノルウェーの森』を中国語に訳し、日本語原文の読めない読者の間で好評を博している。しかし、林氏の翻訳は「文学美」という傾向が強く、翻訳の本質からすでにかけ離れたものだと思われる。ここで、村上春樹の『ノルウェーの森』及びその頼明珠訳と林少華訳を見比べてみよう。

A　村上　梢の葉がさらさらと音を立て、遠くの方で犬の鳴く声が聞こえた。まるで別の世界の入口から聞こえてくるような小さくかすんだ鳴き声だった。

頼訳　树梢的叶子发出沙啦沙啦的声响，远方传来狗吠的声音。简直像从别的世界的入

口传来似的微小而模糊的叫声[78]。

回訳　梢の葉がさらさらと音を立て、遠くから犬の鳴く声が伝わって来た。まるで別の世界の入口から聞こえてくるような小さくかすんだ鳴き声だった。

林訳　树梢上的叶片簌簌低语，狗的吠声由远而近，若有若无，细微得如同从另一世界的入口处传来似的。

回訳　梢の上の葉がザワザワ囁いて、犬の鳴く声が遠くから近くに来て、あったりなかったりして、まるで別の世界の入口から伝わってくるほど微かだった。

B　村上　僕は顔を上げて北海の上空に浮かんだ暗い雲を眺め、自分がこれまでの人生の過程で失ってきた多くのもののことを考えた。失わした時間、死にあるいは去っていった人々、もう戻ることのない想い。

賴訳　我抬起头眺望浮在北海上空的阴暗乌云，想着自己往日的人生过程中所丧失的许多东西。失去的时间，死去或离去的人，已经无法复回的情感。

回訳　僕は頭を上げて北海の上空に浮かんだ暗い雲を眺め、自分がこれまでの人生の過程で失ってきた多くのものを考えた。失わした時間、死にあるいは去っていった人々、もう戻ることのない想い。

林訳　我扬起脸，望着北海上空阴沉沉的云层，浮想联翩。我想起自己在过去的人生旅途中失却的许多东西——蹉跎的岁月，死去或离去的人们，无可追回的懊悔。

回訳　僕は顔を上げて、北海の上空のどんよりと暗い雲の層を眺め、次々と思いが湧き起った。自分がこれまでの人生の旅で失わした多くのものを思い出された

——蹉跎たる歳月、死にあるいは去っていった人々、もう取り戻せない悔い。

下線のところを見比べて分かるように、村上の筆致を保つことに努めている賴訳が原文志向であるのに対し、林訳は「文学志向」の傾向を見せている。

ＳＴが地味であればＴＴもそれに従う、逆にＳＴが派手であればＴＴも派手に訳されるのが、真の「翻訳美」ではなかろうか。「美化」、つまり美辞麗句で原文の質素な表現を書き換えるのが、真の「翻訳美」とは思えない。魯迅はこのような「美化翻訳」に抵抗しているのである。

---

78 用例は賴明珠訳（1997）《挪威的森林》と、北京日本学研究センターの中日対訳コーパス（2003）林少華訳《挪威的森林》から抽出したものである。

(36) ＳＴ　勿論、下人は、さっき迄自分が、盗人になる気でいた事なぞは、とうに忘れていたのである。

魯訳　不消说，自己先前想做强盗的事，在家将自然也早经忘却了。

回訳　無論、さっき迄自分が盗人になる気でいたことなぞは、家来はとうに忘れていたのである。

林訳　当然，刚才自己本身还宁肯为盗的念头早已忘到九霄云外。

回訳　無論、さっき迄自分がいっそ盗人になる気でいた考えはとうに九霄の雲の外に忘れていたのである。

(37) ＳＴ　その時のこの男の心もちから云えば、飢死などと云う事は、殆、考える事さえ出来ない程、意識の外に追い出されていた。

魯訳　从这时候的这人的心情说，所谓饿死之类的事，已经逐出在意识之外，几乎是不能想到的了。

回訳　その時のこの人の心もちから云えば、餓死などと云う事は、殆、考える事さえできないほど、意識の外に追い出されていた。

呂訳　从这时候的仆人的心情来说，他根本不去想饿死的问题，把它完全扔到脑后去了。

回訳　その時の下人の心もちから云えば、彼は餓死などと云う問題をちっとも考えようとしない、完全に頭の外に放り出した。

例（36）と（37）では、林訳などはほぼ意訳法を採っている。しかし、地味な直訳法を採った魯訳のほうがＳＴの内容をより忠実に再現していると思われる。

(38) ＳＴ　「何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ。」下人は、老婆をつき放すと、太刀の鞘を払って、白い鋼の色を、その眼の前へつきつけた。

魯訳　“在做什么？说来！不说，便这样！”家将放下老妪，忽然拔刀出了鞘，将雪白的钢色，塞在伊的眼前。

回訳　「何をしていた。云え。云わぬと、こうだぞ。」家来は、老婆を放すと、突然鞘を払って太刀を抜いて、白い鋼の色を、その目の前へつきつけた。

楼訳　“你在干么，老实说，不说就宰了你！”家将摔开老婆子，拔刀出鞘，举起来晃

了一晃。

回訳　「何をしていた。正直に云え、云わぬと殺してやるぞ。」家来は老婆を突きつけると、鞘を払って刀を抜いて、持ち上げてちょっと振った。

楼訳は「これだぞよ」を「宰了你」と訳し、意味あいを明示化した上に、「白い鋼の色を、その眼の前へつきつけた」という表現をパラフレーズという手法で書き換えている。それに対し、魯迅はＳＴの表現を再現させるために、意図的に明示化しなかった。即ち、原文作者への「忠実」という義務、そして読者への「原作の筆致を再現させる」責任感を念頭に置きながら、訳していると考えられる。その訳文が中国語らしくないと思われるであろうが、魯迅にとって、それは承知上での選択であり、読者の好みに合わせ、それを意図的に流暢化、そして美化しないようにしているのである。

(39) ＳＴ　下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺の襖の尻を据えて、右の頬に出来た、大きな面皰を気にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。

魯訳 家将将那洗旧的红青袄子的臀部，坐在七级阶的最上级，恼着那右颊上发出来的一颗大的面疱，惘惘然的看着雨下。

回訳　家来は七段の石段の最上段に、洗いざらした紺の襖の尻を据えて、右頬に出来た、大きな面皰を悩みながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。

楼訳 家将穿着洗旧了的宝兰袄，一屁股坐在共有七级的最高一级的台阶上手护着右颊上一个大肿疱，茫然地望着潇潇寒雨。

回訳　家来は洗いざらした紺の襖のを着て、七段ある石段の最上段に座り込んで、手で右頬に出来た大きな面皰を覆ってぼんやりそぼ降っている寒い雨を眺めていた。

「～に尻を据える」は下人の行動をリアルに描き出し、「座る」より実在感を醸し出した表現だと言えよう。それを簡単に「座る」と置き換えずに、ＳＴを踏んで特別に扱ったのが魯訳だけである。

(40) ＳＴ　下人は、大きな嚏をして、それから、大儀そうに立上った。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しい程の寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。

魯訳　家将打一个大喷嚏，于是懒懒的站了起来。晚凉的京都，已经是令人想要火炉一般寒冷。风和黄昏，毫无顾忌的吹进了门柱间。

回訳　家来は大きな嚏をして、それから大儀そうに立上った。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しい程の寒さである。風と夕闇は門の柱の間を遠慮なく吹き込んでいる。

魏訳　仆人打了个大大的喷嚏。尔后无精打采地站起身。晚间寒冷的京都，已经是围聚火盆的季节。薄暮之中，寒风在罗生门的门柱间无情地穿行。

回訳　下人は大きな嚏をした。それから大儀そうに立上った。夕冷えのする京都は、火鉢を囲む季節である。夕暮れの中で、冷たい風が羅生門の柱の間を容赦なく走り回っている。

魯訳はほかの訳文と異なり、中国語としての自然的な表現にするのではなく、「火桶が欲しいほどの寒さ」を「令人想要火炉一般寒冷」と逐次的に訳した。それに、「風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける」を「风和黄昏，毫无顾忌的吹进了门柱间」と訳し、原作の個性的な表現を忠実に再現している。何故なら、「風が吹き抜ける」であれば普通の表現になるのに対し、「夕闇は吹き抜ける」と言うと、特別な雰囲気が出てきており、個性的な表現だと言えるからである。

(41) ＳＴ　下人は、頸をちぢめながら、山吹の汗衫に重ねた、紺の襖の肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風の患のない、人目にかかる惧のない、一晩楽にねられそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思ったからである。

魯訳　家将缩着颈子，高耸了衬着淡黄小衫的红青袄的肩头，向门的周围看。因为倘寻得一片地，可以没有风雨之患，没有露见之虑，能够安安稳稳的睡觉一夜的，便想在此度夜的了。

回訳　家来は頸を縮めながら、淡黄色の肌着に重ねた、紺の襖の肩を高くして門のまわりを見まわした。風雨の患のない、人目にかかる惧のない、一晩安らかに寝られそうな所があれば、そこで夜を明かそうと思ったからである。

楼訳　家将缩着脖子，耸起里面衬黄小衫的宝兰袄子的肩头，向门内四处张望，如有一个地方，既可以避风雨，又可以不给人看到能安安静静睡觉，就想在这儿过夜了。

回訳　家来は頸を縮めながら、中の淡黄色の肌着に重ねた紺の襖の肩を高くして門の

中を見まわした。風や雨を避けられる、人目にかからない、静かに寝られそうな所があれば、そこで夜を明かそうと思ったのである。

ＳＴは、「雨風の患のない、人目にかかる惧のない」という、文章全体の文体とは異なる、やや古風的な表現をとっている。魯迅もそれに応じ、「没有风雨之患，没有露见之虑」というやや古い表現に訳出している。それに対し、すべてではないが、楼を含むほとんどの訳者は、現代的口語に訳している。

古風な訳筆は魯迅の得手であり、初期魯訳の特徴の一つでもある。後に魯迅は反省し、それと決別したが、ここではＳＴの繊細なところまで読み取り、まさに「得手に帆を揚げる」という言葉通り、ＳＴに合わせながら巧みに取り扱っている。それに対し、肝心なところに目を向けず、逆に肝心でないところで訳筆を振り回す訳者も少なからずいる。

(42) ＳＴ　「成程な、死人の髪の毛を抜くと云う事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、皆、その位な事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。現在、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりづつに切って干したのを、干魚だと云うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。疫病にかかって死ななんだら、今でも売りに往んでいた事であろ。それもよ、この女の売る干魚は、味がよいと云うて、太刀帯どもが、欠かさず菜料に買っていたそうな。わしは、この女のした事が悪いとは思うていぬ。せねば、飢死をするのじゃて、仕方がなくした事であろ。されば、今又、わしのしていた事も悪い事とは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、飢死をするのじゃて、仕方がなくする事じゃわいの。じゃて、その仕方がない事を、よく知っていたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるであろ。」 老婆は、大体こんな意味の事を云った。

魯訳　“自然的，拔死人的头发，真不知道是怎样的恶事呵。只是，在这里的这些死人，都是，便给这么办，也是活该的人们。现在，我刚才，拔着那头发的女人，是将蛇切成四寸长，晒干了，说是干鱼，到带刀［4］的营里去出卖的。倘使没有遭瘟，现在怕还卖去罢。这人也是的，这女人去卖的干鱼，说是口味好，带刀们当作缺不得的菜料买。我呢，并不觉得这女人做的事是恶的。不做，便要饿死，没法子才做的罢。那就，我做的事，也不觉得是恶事。这也是，不做便要饿死，没法子才做的呵。很明白这没法子的事的这女人，料来也应该宽恕我的。”老妪大概说了些这样意思的事。

回訳　「成程な、死人の髪の毛を抜くと云う事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、皆、その位な事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。現在、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりづつに切って、干したのを、干魚だと云うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。疫病にかかってなんだら、今でも売りに往んでいた事であろ。それもよ、連中もよ、この女の売る干魚は、味がよいと云うて、太刀帯どもが、欠かさず菜料に買っていたそうな。わしは、この女のした事が悪いとは思うていぬ。せねば、飢死をするのじゃて、仕方がなくした事であろ。されば、わしのしていた事も悪い事とは思わぬぞよ。これとてもやはり、せねば飢死をするのじゃて、仕方がなくする事じゃわいの。その仕方がない事をよく知っていたこの女は、大方わしのする事も許してくれるであろ。」　老婆は大体こんな意味の事を云った。

林訳　“不错，拔死人的头发的确算不得正经勾当。可话又说回来，这些死人个个都是罪有应得的。我现在拔头发的这个女人，就曾把蛇一段段切成四寸来长说是鱼干拿到禁军营地去卖。要不是得瘟疫死了，怕现在也还在干那种营生。听说禁军们都夸她卖的鱼干味道鲜美，竟顿顿买来做菜。我不觉得这女人做的是缺德事。她也是出于无奈，要不然就只有饿死。同样，我也不认为我正在干的有什么不妥，也是因为没有别的办法，不这样就只能坐着等死。所以，这个深知事出无奈的女人想必也会原谅我这种做法的。”以上就是老太婆说的大致意思。

回訳　「そうじゃ、死人の髪の毛を抜くと云う事は確かにまともな事とは言えぬ。じゃが話に戻るが、この死人どもは皆罰が当たってもいいんだぞよ。わしが今髪を抜いた女は、蛇を四寸ばかりづつに切って干魚だと云うて太刀帯の陣へ売りに往んだわ。疫病にかかって死ななんだら、今でもそういう事を続けている事であろ。この女の売る干魚は味がよいと云うて、太刀帯どもが欠かさず菜料に買っていたそうな。わしはこの女のした事が悪いとは思うていぬ。その人も仕方がない、じゃないと飢死をするのじゃ。同様、今わしのしていた事も適切じゃないとは思わぬぞよ。これもやはり仕方がなくする事じゃ、せねば飢死をするのを座って待つことじゃ。じゃて、その仕方がない事をよく知っていたこの女は大方わしのする事を許してくれるであろ。」以上は老婆の話の大体の意味だった。

ＳＴにおける老婆の話は途切れ途切れであり、口調もその身分に相応しい。魯迅は老婆の言葉遣いと口調だけでなく、話の区切り、即ちその辿たどしさにまで細心の注意を払ってい

ながら扱っている。それに対し、文訳や林訳は、それを流暢なものにした。のみならず、「缺德带冒烟儿」（文訳）のような、いかにも中国語の俗語らしい表現や、「深知事出无奈」（林訳）のような、老婆の身分に相応しくない表現を加えたりしている。それによってＳＴを変貌させてしまうことになる。

考察を通じ、言葉の時代性とは関係なく、『羅生門』の７本の中国語訳の中で、魯訳が最も「原文志向」だということが分かった。「原文志向」であるため、魯迅は意訳法の代わりに、直訳法を採っているのであろう。では、魯迅は何故「原文忠実」にこだわっているのであろうか。

4.4　魯迅の直訳・異化翻訳意識及び動機づけ

翻訳のプロセスにおいては、情報量を勝手に増減しながら自己流にするというより、むしろ「硬訳」のほうが逆に情報伝達の精度を保つことができる。換言すれば、「硬訳」のほうがより忠実に情報の中身を伝達できると魯迅は考えている。それは彼の翻訳に対する見解を見ても分かる。

「筆を執る前に、まず一つの問題を解決しなければならなかった。つとめてそれを帰化させるか、それともできるだけ外国臭を保存するかということである。日本語の訳者上田進君は、前者の方法を主張している。彼は、諷刺的な作品は、第一に分かり易さを求めるべきで、分かりやすければ易いほど、その効果も広く大きくなると考えている。だから彼の訳文は時には一句を数句に訳し、解釈といったほうがよいような場合もある。しかし私の意見は反対だ。分かり易さだけを求めるならば、創作もしくは翻案をして、事件を中国の事件にし、人物も中国人にしてしまった方がよい。やはり訳をするという以上、その第一の目的は、外国の作品を広く読ませてやる、少なくとも何時何処でこんなことがあったということを知らせなければならない。ちょうど外国を旅行するのと、よく似ている。それには何よりも異国情緒、つまりいわゆる外国臭がなければならない。とはいえ、世界には完全に帰化した訳文というものもあり得ない。仮にあったとしても、それは容貌はそれらしくても精神は違ったもので、厳格に区別してみれば、それは翻訳とはいえない。大体翻訳は、必ず両面を考慮に入れなければならない。一つはいうまでもなく、つとめて分かり易さを求めること、もう一つは、原作の面影を保存することである。ところでこの保存というのは、常にわかり易さと矛盾する。見なれないからである。しかし、それはもともとが毛唐なのであるから、誰だって

見慣れないのは当然である。多少ともなじみやすくさせるためには、せいぜい彼の着物を換えることはできようが、彼の鼻を削ったり、眼玉をえぐったりするわけにはゆかない。私は鼻を削り眼をえぐることを主張しない方なので，場所によっては，むしろ読みづらいような訳し方さえする」[79]。

魯迅の言説から分かるように、魯迅は「異化」という言葉そのものを使わなかったが、事実上、「抵抗式・異化」ストラテージを推奨している。既に述べたように、1995 年にヴェヌティが異化翻訳という理論を打ち出したが、実はヴェヌティより 90 年近くも早い時に、魯迅はすでにそれを主張しながら絶えずに実践を試みたのである。

ヴェヌティが主張したように、度の過ぎた帰化の訳文は保守主義の傾向を帯びており、言語文化間の差異を抹殺することによって、本来ならば気付かれるはずだった原文作者の筆致、作品の本来の姿、或いは異質的なものを読者の知らずのうちに埋めてしまう。従って、訳者が読者の学力を信用せずに、勝手に読者の知る権利や学ぶ意欲を巧妙に奪ってしまう恐れが出てくる。

魯迅はこのような帰化翻訳に反対し、直訳法を選んでいる。後にそれが「硬訳」と言われているが、魯迅は次のように理由を述べている。

「人はよく神話の中のプロメチウスを革命家に比べる、火を盗んで人間にあたえ、神の虐待を受けても悔いなかった、その博大なる忍苦は革命家と同じだという。しかし私がほかの国から火を盗んできたのは、その本意は自分の肉を煮るためで、それによって味が一そうよくなれば、それを咀嚼する者もどこかで一そう多くの利益を受けることになろうし、私も自分の身柄を無駄にしなかったことになると思ったからだ。…だが私は故意に間違えた訳し方はしてないと自分では信じている、私の感服しない批評家の痛い処をついているところでは私は一笑し、私の痛い処をついているところでは、じっと痛みをこらえて、訳筆には決して加減するようなことはしなかった。これが結局は『硬訳』になった一つの原因である。もちろん、世の中には、よりすぐれた翻訳家がいて、誤訳でない上に、また『硬』ではなく、あるいは『死』でもない文章として訳す人がいるはずだ、その時には私の訳本は当然、淘汰されるだろうし、私はただ『無』から『よりすぐれたもの』までの空間をうずめさえすればい

---

[79] 魯迅　松枝茂夫訳（1956）『題未定・草』『魯迅選集』 岩波書店 p. 196-p. 197

いのである」[80]と。

それから、『翻訳についての通信』では、受容者によって、異なる訳本か別のものを提供すべきと主張するとともに、「直訳法」や抵抗式・異化ストラテジー（無論、当時は「抵抗式翻訳・異化」などの用語はないが）採用の理由などを魯迅は説明している。

「…甲類の読者に供給する訳本は何はともあれ、私は今日でも「むしろすらすら読めなくても忠実な」ものを主張します。…ここに一つの問題がおこります、それはどうして完全に中国化して、読者のために無益な骨折りを省いてやらないのか？…この訳本というものは、単に新しい内容を輸入するばかりでなく、新しい表現法をも輸入することです。中国の文章あるいは言葉は、その法則が実際あまりにも不精密です、…この語法の不精密ということは、思考方法の不精密ということ、…この病気を治療するためには、私はただ続けさまに苦労をしながら、異様な句法を詰め込んで行く、古いものでも、他省や他府県のものでも、外国のものでも詰め込むより仕方がないと思います、後になれば、それが自分自身のものとなるのです。…私はまた、たとえ乙類の読者のために訳す本でも,常に若干の新しい言葉や新しい語法をその中に加えるべきだと思います。…必ずこのようにやっていけば、大衆の言葉は豊富になってきます。…さて文芸の翻訳についていえば、もし甲類の読者を対象とするならば、私は直訳を主張するものです…。一方ではどしどし輸入すると共に、一方ではどしどし消化し、吸収し、使用できるものを伝えてゆく、渣や滓はそれを過去の中にとどこおるままにしておくのです。だから現在「多少のぎこちなさ」を容忍するということは、決して「防衛」とはいえないので、実はやはり一種の『進攻』であります。…だがこの状態はもちろん永遠に続くものではなく,その中の一部分は〈ぎこちない〉ものから『すらすらした』ものになって行くでありましょうし、一部分は、結局『ぎこちない』ために淘汰され、蹴とばされてしまうでしょう。この場合、最も大事なことは我々自身の批判であります」[81]。

米国の翻訳理論家のナイダは「等価」理論をもって世界に名を馳せた。一方、同じ翻訳理論家であるニューマークは、訳文を「交際型翻訳」（概ね、訳文を成す場合は読者のことを配慮する、という意味）「語義型翻訳」（概ね、訳文を成す場合は原文作者の立場に立ち、

---

[80] 魯迅　増田渋訳(1956)「『硬訳』と『文学の階級性』」『魯迅選集』岩波書店 p. 152- p. 154

[81] 魯迅　増田渋訳(1956)『翻訳についての通信』『魯迅選集』岩波書店 p. 247－p. 250

できる限り忠実に、という意味）と分けるべきだと提唱している。それから、チェスターマンは翻訳倫理を再現的倫理・サービス的倫理・交際的倫理・規範に基づく倫理に分けている。また最近ドイツの「翻訳目的論」が話題となっているが、上記の魯迅の読者に対する論説から分かるように、前世紀の 20 年代ごろに、魯迅はすでにそのようなことを問題にしていたのである。捉え方に多少の異なりが見受けられるが、論理的には変わらないものである。

魯迅は批判されていながらも、絶えず手探りをし、粘り強く実践を続けていった。その結果、産みの苦しみに堪え、「立人」、「碰壁」、「学棍」、「看客」といったような造語や表現を作り出してくれた。その一部は今でも我々が使っているものである。そういう意味では、白話文がかなり熟した現代を生きている私たちは、魯迅の一部の「ぎこちないもの」を歴史的な立場で客観的に見るべきであろう。魯迅自身の言葉でいうと、それらはただ「結局〈ぎこちない〉ために淘汰され、蹴とばされてしまう」ものにすぎない。歴史的背景と切り離れ、偏った批判の態度をとるのではなく、魯迅の鋭い先見性と見識に対し、客観的に批評する必要があるように思われる。

未だに翻訳界で翻訳超越論を唱えながら、母語の語学力や文学の教養を誇示しながら何気なくＳＴを書き換えて自己流にしている翻訳者もいる。それは、再創作の面において評価に値するが、極端な場合を除き、翻訳の意味での訳文としては評価する価値が高いとは思えない。

自国の言語・文化に陶酔せずに、外来の優れたものを積極的に取り入れ、それによって中国語が改善され、民衆の思想も豊かになる。魯迅の直訳法、異化ストラテジーは、このような魯迅の「翻訳豊饒観」を物語っているのである。

5　魯迅と厨川文芸論 - 『苦悶の象徴』等を例に -

翻訳初期・中期前半においては、小説を代表とする作品の翻訳が魯迅の主な訳業だと言える。それに対し、中期後半から、文芸論の翻訳が目立つようになっている。本節では『苦悶の象徴』や『象牙の塔を出て』を中心に、厨川の文芸論思想を検討したうえで、魯迅の思想との共通点を探り出し、魯迅の翻訳動機を考察してみる。

5.1　『苦悶の象徴』における厨川の文芸論

一言でまとめて言うと、「生命力がよく抑圧を受けるところに生ずる苦悶懊悩が文芸の根

柢であり、そしてその表現法が広義の象徴主義である[82]」というのが厨川の文芸に対する考えだと言えよう。

5.1.1　文芸は人間苦の象徴

厨川は我々人間の中に二つの葛藤の力が存在すると考えている。一つは自分の本能を満足させたいという欲求（創造生活の欲求）であり、もう一つは社会規範など、外部よりの強制抑圧、そして、自らの道徳意識などによる自己抑圧、という力である。

このような方向を全く異にした二つの力の相互作用により、我々に生の悩み、苦痛（人間苦）が生ずるものである。しかし、それらがあるが故に、人生の生き甲斐があるのである。

燃える生命の力がその「人」を通じて現れる時、個性となって活躍する。生命の力が個性として発揮されるとき、即ち自己の個性を表現しようという内的要求に迫られて動くときこそ、本当の創造創作の生活が成立するものだと厨川は述べている（p. 7－8 を参照）。

創造のないところに進化はない。人が利害の打算をしたり、羊のように権威に服従し、因襲ばかりに束縛されたりしては、人生の醍醐味も味わえないし、真の創造創作も生まれない。社会全体からみても、若し人々が銘々泥人形のように自分の個性を殺し、放棄してしまえば、換言すれば、いつも外的要求にのみ動かされ、妥協降服の生活をする奴隷根性の人間ばかりいるのならば、真の文化生活は成立しないものである（p. 3、p. 8－16 を参照）。

人生の行路を進んでいく際、諸々の苦悩を経験したり、様々な戦いをしたりするとき、我々は呻いたり、叫んだりするが、その放つ声こそ文芸である。つまり文芸は人間苦の表れだと、厨川は語っている（p. 44 を参照）。

5.1.2　文芸鑑賞の成立

文芸は純然たる生命の表現で、外部からの強制抑圧を離れて、自由の心境に立って個性を表現できる唯一の自由世界である。奴隷根性を捨て去り、利害打算、つまり名利を忘れ、一切の束縛から放たれてはじめて、文芸上の創作が成立するのである。

人間同士に生命に対する共感がある。その共感を呼び起こすだけの共通内容が存在するのである。そのため、作家や読者の間に、作品という刺激性、暗示性のある媒介物の作用によって、そのような共鳴共感が起きるものであるが、そこには芸術の鑑賞がやがて成立すると、

---

[82] 厨川（1924）『苦悶の象徴』p. 35

厨川は考えている（p.84 を参照）。

5.1.3　文芸の役割

1.2 で述べたように、読者と作家との心境が完全に合致するところに共鳴共感が起きる際、芸術の鑑賞は初めて成立する。そのため、読者が作家から受けるものは、科学者や歴史家哲学者からのと違い、単なる知識ではなく、自己発見そのものである。換言すれば、文芸は知識 information というより、喚起作用 evocation を持つものである（p.96－98 を参照）。

作家の作品は鏡のようなものである。読者はそのような鏡によって、自分の生活をじっくりと見ることができ、またそれについて思索するようになり、わが身を反省したり、改善したり、豊かにしたりすることができるのである。

上記の理由で、文芸上の、ただ美しいだの、面白いだのという快楽主義的芸術観を排斥し、文芸は人間苦の象徴であるため、ただの玩弄物ではなく、「人生のためのもの」でなければならないと、厨川は考えている。

『苦悶の象徴』における厨川の文芸論を読むと、「個性の解放」そして「反抗精神」を唱える厨川像が見えてくる。その像は魯迅と重なるところが多いように思われる。中国の伝統文化に個性を抑圧する旧弊が存在することに気づいた魯迅は、医学を辞め、文学の道を志した。この文化的危機に如何に直面すべきかについて魯迅が真剣に考えを重ねた。そしてニーチェ「超人」のような、西洋の哲学を批判的に受け入れながら、1908 年に発表された『文化偏至論』で「立人」（個々の人間を中身のある者にする）を唱えるようになっている。このように、医学が肉体の病は治せるものの、精神的な患いは治せない、メスより筆のほうだと覚悟した魯迅の中に、強い個人意識ができるようになり、中国社会をよくするためには、一人ひとりの国民を啓蒙しなければならないと魯迅は考えている。これまで痺れた者が目を覚まし、意識的に自らのことを豊かにするようにならなければ、社会は良い方に進むことはないと魯迅は見ている。

このように、人に自らのことを反省させる役割を果たすことができる「文芸」の喚起機能を利用し、「文芸」を「人生のためのもの」としている厨川と魯迅の間に共通するところが多いように思える。

5.2　『象牙の塔を出て』における厨川の思想

『象牙の塔を出て』[83]において、厨川は文芸の役割を強調しているばかりでなく、日本の抱えている社会問題などを指摘したうえで、現状に対して猛烈な批判を加えている。

5.2.1　『象牙の塔を出て』における文芸論

『苦悶の象徴』と似た言説が大半を占めているが、以下のようにまとめておく。

世の中のいずこにか欠陥があるものである。欠陥のあるところに、二つの力の衝突や葛藤が現れる。それを描いたものが戯曲や小説である。そのような欠陥がなければ、人生の面白みもなければ、生き甲斐もないものである。

欠陥があるからこそ発達がある、悪があるからこそ善は貴い、善と悪の衝突がなければ、進化がないと同じように。人がすべてのことに満足した時、生命の泉は枯れ果ててしまう。同じように、完成した芸術にはあらがない代わりに、生命がない、死あるのみである。

生命力のないところに、深い思想生活はない。故に大きい文学や芸術は生まれない。思想は財布と異なり、出せば出すほど中身が豊かになるものである。

文学者たるものは「象牙の塔」を出て、芸術のための芸術だけでなく、人生のための文芸をなすべきで、即ち社会問題などに関わるべきだと、厨川は論じている。

5.2.2　エッセイ及び現代文芸

まず、厨川はもっと素直に、自然のままにものを言ったり、書いたりすればよかったのだが、飾り気なくものが言える作品が少なく、ありもしない学問を振り回して利口ぶったりするものが多い。これは世界共通の問題でもあるが、日本ではなおさらのことだと述べている。

更に、エッセイという体裁については、厨川は以下のように考えている。

エッセイは、筆者が自分の個人的人格の色彩を濃厚に出すことができ、自己告白の文学には最も便利な文体であるが、よほど詩才学殖が豊かな上に、人生の色々の現象に対して奇警な鋭敏な洞察力がなければ書けない。読者側の問題から言っても、一見いかにも楽に面白く

---

[83] 「象牙の塔」及び「象牙の塔を出て」の意味については、厨川が「巻頭に」において、次のように語っている。「象牙の塔」とは、いわゆる芸術至上主義、即ちすべての芸術の芸術自体のために存在するもので、ほかの問題とは一切関係しない、ということである。「象牙の塔を出て」とは、現在では芸術は呑気なことばかりをいうわけにはいかず、現実生活における様々な生存の問題に密接な関係を持たなくてはならない、ということである。

書いてあっても、作者の思索体験世界を巧みに織りいっており、繊細な注意力を持つ者にしか読み取れないし、人並みの頭脳しか持たない凡人がただ速読したくらいで、鑑賞はできないのである。

日本では、エッセイが歓迎されないと厨川は見ており、その理由について次のように述べている。

日本人にはユーモアの真価が解る者がいない。難しそうな言葉とかで、解りきったことを解らないように書かれたものを読んで、自分も偉くなったようである。また、統一かつ系統的な組織的の頭脳は新聞や雑誌によって得られるものではないが、日本の読者は新聞雑誌とかによって知識を手に入れたがっている。従って、深邃な思想や感情を巧みに暗示の力で飲み込まそうとするエッセイが、日本の読者の気に召さないと、厨川は見ている（p.7－17 を参照）。

また、近代の文芸について、厨川は次のように述べている。

古典派には絶対美の理想があった。それに反対して起った浪漫派は一切の法則や権威を認めず、自由な奔放な芸術を主張している。浪漫派よりもっと一歩進めた近代派は、欠陥そのものを貴いものとしている。

最後に、文芸家たる者は、罪悪や欠陥のような臭いものが味わえないようでなければ、人間を語る資格に足りない、今の役人だの教育家だの連中は、修業してからでないと、文芸に口を出す資格がないと、厨川は猛烈に批判しているのである（p.28－32 を参照）。

5.2.3　厨川の日本批判と国民性改造論

日本の抱えた問題について、厨川は下記のようにコメントしている。

今の日本には、生命力の泉が枯れ果てて、創作衝動の力の乏しい者も多いし、口先だけのことを言い、なかなか実行に移さないという尚早論者も多い。小手先の利く、技巧に優れた小器用な人間、上の者の顔色を窺って、鼠のように行動し、物事を済ませる人間、そういう深い反省もなければ思索もない、浅薄なものばかり溢れている。

世界は馬鹿力によって改造されていく。ここでいう馬鹿ものは利害の打算をせず、妥協しておいたり、誤魔化して済ませたりすることのできない人のことである。日本にはそういう馬鹿ものがほぼいなく、利口な者ばかりいると厨川は語っている（p.32－45 を参照）。

また、日本人は文学のような無用な本を読まない傾向がある。そのため、本当の意味での読書をしないことも、思想生活の貧弱の一原因だと厨川は指摘した上で、「沈黙は金」のよ

うな考え方も、公開演説に適しない日本語そのものも改造すべきだと述べている（p.63）。

フランス「都人」やロシア「田舎者」とは違い、先進国の真似をしようと、生煮えの学問を振り回し、解らないのに、解っているように生意気に語り、なんでも中途半端で、木に竹を接ぐようなやり方というのが今の日本人のやり方である。日本人は内的生命の火の熱度が足りない。割り箸、紙障子のような、耐久性のないものを好むと同じように、する事すべてが不徹底で微温である。それに日本に昔から真の宗教も哲学もないため、世界を動かす大思想が生まれなければ、人類の幸福に作ってあげる大発明や大発見が出ないのである。日本人はこれ以上このような繰り返しをするべきではないと、厨川は論じている（p.53－54 を参照）。

我々の生活を律し得るような道徳や法律や制度や宗教はまだできていないし、永久にできないかもしれない。よって、それより人間そのものを改造してからでなければ、物にはならないだろう。

素直に悪を働いて罪に陥られる者は、重役に当たり、名流と呼ばれる偽善の政治家や富豪よりずっと善人だと言える。

内的生命の火の熱度が足りない、馬鹿ものの存在を許さない日本においては、根本的に国民性を改造せず、表の社会問題の改造だけを呼びかけるのは本末転倒である。自己反省、自己改造をしない限り、日本は前途がない、というふうに厨川が見ている（p.64－65）。

魯迅も同じように少数派的な存在であり、厨川の論調に共感を覚え、『苦悶の象徴』を大学での教材として使っている。魯迅は厨川の文芸観のすべてに賛同するわけではないが、厨川とその作品を高く評価している。魯迅自身の言葉でいうと、科学者のような独断も哲学者の玄虚もなければ、一般の文学論者の煩雑さもない、作者自身の独創力があり、文芸に対する独創的な見地と深い理解に溢れているという。

ところで、雑文（エッセイ）が後の魯迅の創作のメインとなったのは、魯迅にはもう文才が枯れてしまったからだという者もいる。しかし、寧ろ雑文こそが「人生の為のもの」として、魯迅の使いこなせる道具の一つだと言うべきである。

「五・四」運動以降、個人主義、無政府主義、マルクス主義といった西洋の思潮が中国に浸透している。魯迅が「個性の解放」を主張する西洋の思潮に共感を覚える一方、自惚れの「大中華主義」に反対している。自分自身も含め、すべての物事を常に懐疑心を持っていながら中国が抱える問題に目線を向けている魯迅は、日本の微温、中道、妥協、保守、虚偽、自惚れなどの世相に辛辣に批判した厨川の言説共感を覚え、「痛快」と言っている。このように厨川の自国批判に同調し、魯迅は人々の個性を抑圧する為に、儒学といった伝統文化を

利用する当時の中国、そして痺れた国民性を批判しているのである。

5.3　『観照享楽の生活』等における厨川の観点

5.3.1　真の芸術家たる者とは

真の芸術家たる者は、芸術そのものだけを愛し、人生に対して傍観の態度をとって何もしないのではなく、「人生」そのものを完全に享楽しようとした努力の人たちである。「観照享楽[84]の生活」と言った意味の根底には、人生への熱愛があり、生活現象の一切を肯定する勇猛心があると、厨川は語っている（p. 106 を参照）。

5.3.2　日本の芸術生活

厨川は日本での旅館のお茶代とか、師弟関係、親族関係といった例を挙げながら、あくまで表の温情で物質的な要素を抹殺しようとする、日本社会の現象を批判している（p. 121－148 を参照）。

また、忙しい生活を送っている日本人は、ただ物事の表面だけをかすっていく。ちょっと考えたり、味わったりするだけの余裕もないようで、何かあった場合は、だれでも思いつくような理屈や常識で済ませる。五十年来、慌てて先進国の外部だけを模倣し、追い付こうとしたため、今の日本はすべてが浮足で、上調子になった。日本人は今自分の生活を反省し、それに改造を加える必要があると、厨川は見ているのである（p. 110－121 を参照）。

5.4　厨川作品の翻訳動機

魯迅によると、原稿料獲得のために、出版社の好みに合わせて『魔羅詩力説』を編訳する際、わざと長くしたという[85]。エロシェンコ童話の魯訳も、何篇かは原作者エロシェンコの要請で訳出したものである。

このように、魯訳の翻訳動機に外的な要因によるものもあり、厨川作の魯訳も例外ではない。魯迅が『苦悶の象徴』などを教材として大学で使っていたが、ここでは内的な要因のみ

---

[84] 「観照」と「享楽」とは、厨川の解釈によると、人間の為すべき芸術生活には二つの面があり、一つは自然や人生一切の現象を、真摯な態度で理解しようとすること。それが「観照」である。もう一つは理解したものをさらに味わい、鑑賞し、自分の官能や感性を鋭くし、生命の力を豊かにして、「我」の中に溶かし込もうとする態度である。それが「享楽」である。

[85] 魯迅（2005）《坟 题记》《魯迅全集》第 1 巻 人民文学出版社　p. 3

を追究してみる。

厨川は作品の中において、夏目や島村といった日本人作家の文芸に対する態度や行動に触れたばかりでなく、ベルクソンやフロイトといった西洋人の思想に関しても例も取り上げて自分の言説の立証として用いている。

本章第二節で既に触れたように、訳者及びＳＴに登場する知識人に関する紹介は、従来の魯訳によく見受けられるものである。場合によっては、ＳＴにおいて作家の名前そのもののみ出ているのに対し、魯迅は「訳者附記」という手段で、紹介する価値のある各国の知識人の経歴、とくに彼らの文芸論や意識観念などを入念に中国の人々に紹介している。

また、厨川の文芸論や自国批判精神に共鳴共感を覚え、厨川が日本のために調合した「良き薬」を一服の下剤として、当時様々な問題を抱え、精神的に患っている中国の持病を治してくれればと魯迅は考えている。

自らの翻訳ひいては文学活動で中国の人々が世界を知り、開眼するようになり、それで社会変革に繋がって行けばという魯迅の念願、そしてそのために絶えずに努める彼の姿が微かに見えてくる。

6　まとめ

1917 年に、「白話文運動」は西洋と日本での「言文一致運動」の両方の影響を受けて幕を開いた。魯迅は「白話文運動」の提唱者に当たらないが、その中堅である。実は「白話文運動」の前に、魯迅は既に日本での「言文一致運動」から大きな影響を受けていた。1918 年に、白話文運動のシンボルとされた創作『狂人日記』を出した魯迅は「白話文運動」の実践者の第１人者とされている。翌年の 1919 年に、『或る青年の夢』の中国語訳を発表したのを皮切りに、魯訳は本格的に白話文体へと転換した。自分なりの翻訳法則が徐々に形成されると同時に、初期のような自由訳が見られなくなり、直訳法、抵抗・異化ストラテジーといった特徴も顕著になってきた。魯迅は増・減訳、改訳、語順調整、帰化策略といった翻訳方法をできる限り控えるようにしており、「再現的翻訳倫理」を重んじると同時に、受容者のことを配慮し、「サービス的倫理」も自覚している。その直訳法は「形式的等価」を重視するものであり、原文志向」という傾向が極めて強い。魯迅は直訳法や異化ストラテジーで外国文にある異質なものを中国語に取り入れ、中国語の語彙、文法、表現を豊かにしようとしている。その翻訳法は筆者の指摘したように、魯迅の「翻訳豊饒観」を反映している。

魯迅は翻訳を通じて世界の作家や文学作品及び新たな文芸思潮を中国に紹介している。

『苦悶の象徴』や『象牙の塔を出て』における厨川の見解に魯迅は共感を覚えている。厨川は「人間苦」を語ると同時に、文芸が文芸のためではなく、人生のためのものでなければならないと主張している。それと同時に、厨川は妥協、虚偽、保守、自惚れといった日本の国民性を猛烈に批判している。厨川の自国批判精神に感心すると同時に、同じような問題は中国も抱えていると痛感した魯迅は、厨川の下した「良き薬」で、中国の抱えた持病を治してくれればと考えているのである。

このように、文芸作品の翻訳により、世界事情や文芸思潮はもちろん、人々の精神を改造し、民衆の陳腐な思想観念を変え、国民性を改善することによって社会改良につなげようと、魯迅は苦心しているのある。

病んでいる社会諸相、いわゆる社会文明批判を、訳筆を通じてリアルに写して訴えている一方、他人の「自己」を尊重しなければならないという、魯迅の「国際人」の姿も伺える。このように、「自由」、「博愛」、「自己批判」を主題とした訳作が魯迅の筆によって続々と生まれてきたのである。

ところで、1926 年 8 月に当局の加害を避ける為に、魯迅は北京を背にして厦門、広州へ転々と短期転職したが、同年 10 月に上海に到着した。まもなく上海にある「新月社」、「創造社」、そして「太陽社」といった文学社団との間に論争が起こった。その有名な論争をきっかけに、1928 年 6 月に、魯迅がソ連（ロシア）の文芸論や小説の翻訳に本格的に取り組み始めた。魯迅翻訳は後期段階に入っている。

第 5 章　魯迅の後期翻訳

本章において、魯迅の後期翻訳をめぐって分析を展開していくと同時に、魯迅の童話翻訳について論を加える。1 において、魯訳が後期段階に入ろうとする直前に起った「梁魯論争」の経緯を記述する。2 において、『無産階級文学の諸問題』、『マルクス主義芸術論』、『文学と批評』とその魯訳を手掛かりにテクスト対照分析を行い、ソ連の文芸論における後期魯訳の特徴を考察する。3 において、『バクス牧歌調』に収録された小説のＳＴとその魯訳との対照分析をしながら、小説における後期魯訳の特徴を検討してみた上で、文芸論魯訳と小説魯訳を比較してみる。4 において、童話翻訳における魯訳の特徴を検証してみる[86]。

1　梁魯論争

かつて梁実秋は北京八道湾にある周家の住宅の様子について語ったことがある。そこからすれば梁が周家と付き合ったことがあると推察できよう。ところが、後に梁が魯迅と長々と口論をした。

1926 年に梁実秋は『現代中国文学のロマンチシズムの趨勢』を『晨報副刊』に発表し、当時の新文学運動への不満を示し、文学が社会的功利性を有するべきではないと主張している。それに対し、魯迅は文学が文学のための文学だけではなく、社会的効用を有するべきだと主張し、後に『革命時代の文学』、『文芸と政治の岐路』というテーマで行った演説で、人々を差別し、優越感に浸り、雪月花の文学に陶酔し、下流社会を軽蔑視していると言って、新月社及び梁のことをほのめかし批判した。

魯迅の『革命時代の文学』の一節を取り上げて見よう。

「数年前に『新青年』に寒い土地での罪人の生活をかいた小説が幾つかのったことがありますが、それを読んだ大学教授は不愉快だといいました、彼らはそういう下流人のことは読みたくないというわけです。もし車夫のことを詩に歌ったりすると、それは下流な詩ということになり…彼らの芝居に出てくる人物は才子と佳人だけで、才子は状元に及第し、佳人は一品夫人に出世する。才子や佳人自身にとってはうれしいことだし、それを読む上流人たちにもうれしい、下流人も仕方がないので、彼らと一緒になってうれしがるばかりです」[87]。

---

[86] 魯訳の童話翻訳は 1921 年から 1934 年に跨っている。その翻訳方法やストラテジー、動機、とりわけ魯迅の童話翻訳に対する主張と実態を確かめるには、時期ごとに分析するのが難しいと判断した。そのため、この章で総括して扱うことにした。

[87] 増田渉　松枝茂夫　竹内好訳（1956）『革命時代の文学』『魯迅選集』第 7 巻 p. 114

ここで言った「大学教授」とは新月社のメンバーである梁実秋のことである。梁は驚愕を覚えると同時に、不本意ながらそれに対応しなければならなかった。それが引き金となり当時有名な論争へと発展し、8 年も続いた。それをめぐり、教育、文芸、翻訳といった多分野に亘り、約 40 万字を数え、100 篇に及ぶ文章が生まれた。

1927 年に梁はまた『時事新報　学灯』に『北京文芸界の派閥の争い』[88]を、そして『時事新報　書報春秋』に「『華蓋集続編』を評す」を発表し、その中で魯迅の文章が風刺的でとげとげしく、取るに足らないものだと批判し、周氏兄弟が文壇の盟主になれたのは孫伏園らの持ち上げであり、魯迅が『晨報副刊』の特約選者だったからだと語り、魯迅が共産党側の者だと仄めかしている[89]。

それに対し、魯迅は『香港を略談す』を発表し、自分が『晨報副刊』の特約撰者でもなければ、共産党員でもないと弁明している。

当時国民党当局の反共活動が進んでおり、共産党側の者だと見られると投獄される恐れがあった。それで魯迅は梁が邪悪な下心を持って発言したと暗示している。このように徐々に互いに恨みを抱くこととなっていった。

ここまでは間接的な接戦とは言えるが、直接的な接戦はルソーが原因であった。

フランス啓蒙期の思想家・小説家のルソーは『民約論』[90]という傑作を出したにもかかわらず、生前も死後も四方八方から批判、非難を浴びていた。それに対して魯迅は不平を感じている。当時、米国から帰国したばかりの梁実秋が「ルソーの女子教育論」という文章を『復旦旬刊』に再刊した。ルソーの思想に共鳴している魯迅はそれを読んで憤慨し、三日間で『ルソーと胃口』と『文学と汗』という二篇の雑文を綴り、梁の偏ったところを批判した。後にまた『予言にまねて』という雑文の中で皮肉を込めた口調で当てこすり、梁のことを揶揄した。

梁が気にしていたのは魯迅の態度である。魯迅が現状に不満を抱いており、とかくの他人の観点を否定し、人の主張に異論を唱えがちだが、自分なりの対策を正面から出さないと、梁は反撃している。

---

[88] 中国語原題は《北京文艺界的分门别户》であり、上の日本語タイトルは筆者によるものである。

[89] 魯迅が歿後、梁実秋が別の文章で魯迅が共産党でもなければ、共産党の同伴者でもないと、自ら言い直した。実は梁だけでなく、魯迅の論敵である胡適も徐志摩も魯迅と対立しながらも、魯迅はどちら側のものでもないと言っている。無産階級の闘士として神格化された経緯は次章で論じることにする。

[90] 『社会契約論』が日本語の定番訳である。

このように、論争の起点は教育問題であったが、やがて人間性、プロレタリア文学、文芸論へと広がり、階級問題、翻訳法にも及んだ。

1929 年 9 月に、梁実秋が『新月』に『文学には階級性があるか？』と「魯迅氏の『硬訳』について」という二篇を発表した。「魯迅氏の『硬訳』について」で梁が『マルクス主義芸術論』と『文芸と批評』の魯訳から三段を取り上げ、「死訳に近い硬訳」と批判するとともに、後記で「力不足」と書いた魯迅自らの謙遜のくだりを取り上げて、まさにそれが「力不足」だと暗示している[91]。

また『文学には階級性があるか？』で、梁は「…まったく天書よりもまだむずかしい。…中国人が読んで分かる表現で、われわれに無産文学の理論とは結局どのようなものであるかを、説明してくれる文章を書いた中国人は現在まだ一人もいない」[92]と語り、魯訳を批判する一方、文学には階級性がないと主張している。と同時に、当時無産文学の理論の書物も無ければ、理論そのものが分かる翻訳者もいないと嘲笑った。

それに対し、1930 年 3 月に、魯迅は上海の『萌芽月刊』に「『硬訳』と『文学の階級性』」を発表し、反撃した。

実はこの前の 1929 年 11 月に、梁実秋は『新月』に『魯迅氏にこたえる』という文章も発表し、自分ならソ連を擁護してルーブルをもらうようなことはしないと語り、国民党政府の言うことに合わせ、魯迅が××党からルーブルをもらっていると、巧妙に世間に思わせている。

このように、最初は文芸思想の衝突であったが、徐々に感情的なものも混じってきた。論争がエスカレートするうちにイデオロギーのほうへと転じ、やがて 1930 年 5 月に『萌芽』に発表された魯迅の「『家をなくした』『資本家の貧弱な走狗』」で論争の山場を迎えた。その経緯は次の通りである。

1930 年に結ばれた「左翼作家連盟」のメンバーである創造社の馮乃超[93]は、梁実秋の『文学には階級性があるか？』での観点を筋の通ったものではないと考え、1930 年 2 月の『拓荒者』に掲載された『文芸理論講座（第 2 回）・階級社会の芸術』という文章の中で、国民党寄りの梁のことを「資本家の走狗」と呼んでよいと言っている。それに対し、梁は 1929 年

---

[91] それについて、本章の第 3 節で詳しくテクスト分析を行う。

[92] 増田渉　松枝茂夫　竹内好訳（1956）「『硬訳』と『文学の階級性』」『魯迅選集』第 8 巻 p. 135 を参照されたい。

[93] 創造社に属するプロレタリア革命文学理論家である馮乃超が 1928 年の初め頃から、周氏兄弟を人道主義者であると同時に、小資産階級文人と見ており、批判していた。後に魯迅と和解した。

11 月の『新月』第 2 巻第 9 期に「『資本家の走狗』」という文章を発表し、馮の考えが二元対立的なものであり、自分は「資本家の走狗」ではなく、寧ろ無産階級というべきだと反撃した。すると魯迅はあのあまりにも有名な「『家をなくした』『資本家の貧弱な走狗』」という一文を綴り、1930 年 5 月の『萌芽月刊』の第 5 巻第 1 期に発表し、馮の肩を持ち、ロジック的かつ巧みに梁の頭にその「家をなくした資本家の貧弱な走狗」という帽子を被らせることに成功した。

このように、論争の中で二人とも感情的になり、結局梁が「家をなくした資本家の貧弱な走狗」となり、魯も××党からルーブルをもらっているということになってしまう。

山場を迎えた後も論争がある程度続いたが、魯迅の没によって幕を閉じた。

要するに、新月社や創造社と魯迅の間に起きた論弁がきっかけとなり、魯迅はソ連文学や文芸論の翻訳に本格的に着手した。また「梁魯論争」の時点において魯訳が「硬訳」だと批判されたが、自分なりの翻訳方針を堅持しながら魯迅は訳業の後期段階に入った。

2　ソ連文芸論の魯訳

翻訳初期【1】の終り頃から、魯迅が「直訳」手法を推奨し始めたことは既に述べた通りである。翻訳後期に入っても、梁実秋を代表とする者に「硬訳」、「死訳」とまで非難されているにもかかわらず、魯迅はその翻訳方法を変えようとしなかった。それどころか、学術論文のような魯訳は、より一層「硬訳」の傾向を見せている。

では、その劇化した「硬訳」は如何なるものなのか、その特徴は何なのか、また、批判されるだろうと知りながらも、魯迅が「硬訳」にこだわる理由はどこにあるのであろうか。

本節では、片上伸の『無産階級文学の諸問題』[94]とその魯訳を手掛かりに、そしてルナチャルスキイの『マルクス主義芸術論』と『文芸と批評』の魯訳から梁実秋に「死訳に近い硬訳」と指摘された訳文の三段を取り上げ、その周辺の事情を踏まえてテクスト分析を行い、魯迅の関連言説を裏付けにしながら、この一連の疑問を明らかにしてみる。

2.1　魯迅の「硬訳」

文芸論の魯訳は難解なところが多いように思われる。その原因はいろいろと考えられる。

[94] 魯訳において、『現代新興文学の諸問題』と改題されている。それは当時の政治環境を考慮し、当局からの審査を通るためであろう。魯迅自ら『小序』で「…しかし表題はいくつか文字を変えた。それはこの国の私、あるいは他人の神経衰弱症の痕跡を留める為である」、と当局の抑圧を避ける為だと、暗示している。また、「2.2.1～2.2.3 の用例は、すべて片上伸（1926）『無産階級文学の諸問題』『文学評論』新潮社 p.38-96 及び魯迅（2008）《现代新兴文学的诸问题》《鲁迅译文全集》第 4 巻 p.157-187 から抽出したものである。

例えば、当時の中国語と現代中国語との差異もあれば、言葉遣いの個性の問題もある。しかし、翻訳方法その中でもっと働いていると思える。以下より、用例を取り上げて分析を試みるが、比較のために、2.2.1～2.2.3 において筆者による試訳を付けておく。ただし、筆者の試訳は分析の必要に応じ、できる限り「直訳法」を意識して作ったものである。即ち、そのように取り扱えば、その難解さが緩和するだろうと提示するものであり、訳出の良し悪しを議論する意図はない。

2.1.1　「的」の使用

長文を訳す場合、原文の形式を保つために、魯迅は“的”、特に修飾関係を表す“的”を多用している。

(1)　ＳＴ　無産階級文学の問題が、文壇当面の題目となったあの頃の評論主張のかぎりでは、まだまだそれに就いて考察せられねばならない多くの要点を残したままで、いわば一時中絶の形になっていると見るのが至当である。

ＴＴ　无产阶级文学的问题，成为文坛当面的问题的那时的评论和主张，是很有限的，还剩下应该加以考察的许多的要点，也就是成着一时中断的情形，这是至当的看法。

回訳　無産階級文学の問題が、文壇当面の問題となったあの頃の評論と主張の限りがあり、まだまだそれについて考察せられねばならない多くの要点を残したままで、いわば一時中絶の形になっていると見るのが至当である。

試訳　无产阶级文学的问题，从成为目前文坛论题的、当时所提出的评论及主张来看，仍留下诸多要点尚待考察，即，将其视为一时断裂的状态最为妥当。

回訳　無産階級文学の問題が、文壇当面の論題となったあの頃の評論と主張の限りでは、まだまだそれについて考察せられねばならない多くの要点を残したままで、いわば一時中絶の形になっていると見るのが至当である。

(2)　ＳＴ　およそ昔から今に至るまで、文学上の考究評論というようなものの始まってこの方、今尚問題としての意義を失っていない主要な文学論上の問題は決して少なくないのだが、その中でも、この無産階級文学の問題の如きは、恐らくもっとも新しく提出せられたところのものであろう。従って、今後も尚久しきに亘って、文学論上の問題としての興味と意義とを豊富に含有して、幾度も論弁批判の対象となって行くべき性質を多分に有しているものであるに相違なかろう。

ＴＴ 从古至今，自文学上的考究评论那样的东西发生以来，现在尚未失其作为问题的意义的主要的文学论上的问题，还是很不少，然而其中，如这无产阶级文学的问题者，恐怕是提出得最新的了。因此也就有着今后多时，还将作为丰富地含有文学论上的问题的兴味和意义，作许多回论辩批判的性质。

回訳　昔から今に至るまで、文学上の考究評論というようなものの始まって以来、今尚その問題としての意義を失っていない主要な文学論上の問題は決して少ないないのだが、その中でも、この無産階級文学の問題の如きは、恐らくもっとも新しく提出せられたところのものであろう。従って、今後も尚久しきに亘って、文学論上の問題としての興味と意義とを豊富に含有して、幾度も論弁批判の対象となる性質を有しているものであろう。

試訳　自古至今，自文学批评产生以来，作为课题、至今尚未失去其意义的文学论层面为主的问题绝非少数。但这其中，如无产阶级文学的问题，恐怕是最新提出来的吧。因此，今后恐怕在相当长的一段时间内，作为富含文学性论题和意义的无阶级文学，仍将成为反复论辩批评的对象。

回訳　昔から今に至るまで、文学批評が始まって以来、課題として今も尚その意義を失っていない主要な文学論上の問題は決して少なくないのだが、その中でも、無産階級文学の問題の如きは、恐らくもっとも新しく提出せられたものであろう。従って、今後も尚久しきに亘って、文学的論題の問題としての興味と意義とを豊富に含有している無産階級文学は、幾度も論弁批判の対象となろう。

(3) ＳＴ その社会学部と文学部との連合主催で開かれた革命文学展覧会は、恐らくはその組織的な仕事の最初の試みとみるべきものであったろう。

ＴＴ 由那社会学部和文学部的联合主催而开的革命文学展览会，恐怕是可以看作那组织底的工作的最初的尝试的罢。

回訳　その社会学部と文学部との連合主催で開かれた革命文学展覧会は、恐らくはその組織的な仕事の最初の試みとみるべきであったろう。

試訳　由其社会学部和文学部联合举办的革命文学展览会，或许应该视为其具有组织性工作的初次尝试吧。

回訳　その社会学部と文学部が連合で主催された革命文学展覧会は、恐らくはその組織的な仕事の最初の試みとみるべきであったろう。

上の例でわかるように、ＴＴでは“的”が多用されている。例（1）では“的”が 9 個、例（2）では 11 個、より短めの例（3）でも 6 個使われている。“的”の多用による修飾関係の重層化が読解に支障をもたらしていると考えられる。

筆者による試訳においては、“的”の数は例（1）で 4 個、例（2）で 7 個、例（3）で 2 個までに減った。それでも、意味としては通じるものではないかと思われる。

白話文が推奨されるなかで、論理的とされた西洋言語の句法を中国語に取り入れるべきだと思われていた。従って、当時「精密化」した欧文を模倣した結果、“的”の多用が氾濫していたのである。その時代背景の中において、魯迅も大きな影響を受けたのである。

2.1.2　語順の調整

中国語は不精密であり、それが思想の混乱の表れだ[95]と魯迅は考えている。それで、魯迅は中国語化翻訳、いわゆる帰化の翻訳に抵抗し、忠実さと分かりやすさの両立が困難な場合は、「宁信而不顺」（すらすら読めなくても忠実に）を主張し、直訳法を勧めている。直訳の目的は、ＳＴの内容、筆致、表現をＴＴに反映させながら、外来の文芸思潮を中国に紹介し、中国語の言語表現を改良することにある。従って、魯迅はＳＴの語順調整をできる限りしないようにしている。

(4) ＳＴ 無産階級文学の問題が、再び一層切実な興味を以て論議の題目となり批評の対象となるためにも、更に一層広範な範囲に亘つての深き地ならしが必要であろう。

ＴＴ 为无产阶级文学的问题，以更加切实的兴味，成为论议的题目，批判的对象起见，则涉及更广的范围的锄掘，是必要的罢。

回訳　無産階級文学の問題が、再び一層切実な興味を以て論議の題目となり批評の対象となるためにも、更に一層広範な範囲に亘つての深き地ならしが必要であろう。

試訳　即便是为了使无产阶级文学问题再一次以更加切实的兴味成为议题及评论的对象，也需要在更广泛的范围内使之扎根适应吧。

回訳　無産階級文学の問題が、再び一層切実な興味を以て論議の題目や批評の対象となるためにも、更に一層広範な範囲に亘つて根ざさせれる必要があるのであろう。

(5)　ＳＴ 今日の日本の社会に於いて、くわしくは日本の文壇に於いて、この問題が中心

---

[95] 魯迅（2005）《关于翻译的通信》《魯迅全集》第 4 巻 p. 391 を参照されたい。

興味となるであろうことは、寧ろにわかに予期しがたいのが当然であるとさえ言ってよい。

ＴＴ 在现在的日本的社会上，仔细说，是日本的文坛上，这问题之将成中心兴味，可以说，倒是难以豫期的事；

回訳　今日の日本の社会に於いて、詳しく言えば、日本の文壇に於いて、この問題が中心興味となるであろうことは、寧ろ予期しがたいのだとさえ言ってよい。

試訳　在现在的日本社会，具体来说在日本的文坛，甚至可以说这个问题难以预期成为中心论题。

回訳　今日の日本社会に於いて、詳しく言えば日本の文壇に於いて、寧ろこの問題が中心論題となろうことは予期しがたいのだとさえ言ってよい。

ＴＴ全篇から見ても、魯訳はほぼ原文を一歩一歩踏んでおり、いわゆる逐語訳の傾向がきわめて強い。とりわけ主部と述部の転位はできる限り控えるように取り扱われている。そこで、違和感を覚えることになる。

ただし、例外もある。次の例（6）と（7）は、長文を崩し、再び組み合わせ、いわゆる分訳という技法を用いて訳されている。ただし、このような訳し方は文芸論の魯訳において極めて少ない。

(6) ＳＴ およそ各の支配階級がその文化を､随ってその独特の芸術を造就して来たことは過去の歴史の明証するところであるから、無産階級もまた自己独特の文化と芸術とを造就すべきであるといふ道理であるのだが、あらゆる文化の造就は、極めて久しい間の経過を要し、幾世紀にも亘っているのが事実である。

ＴＴ 凡各支配阶级，都造就了他的文化，因而也造就了那独特的艺术，这是过去的历史所明证的，所以无产阶级也将造就其自己独特的文化和艺术，是当然之理，然而在事实上，一切文化的造就，须要极久的经过，至于涉及几世纪的时光…。

回訳　およそ各の支配階級が、その文化を造就し、随ってその独特の芸術も造就して来た、それは過去の歴史の明証するところであるから、無産階級もまた自己独特の文化と芸術とを造就する。それは当然であるのだが、事実上、あらゆる文化の造就は、極めて久しい間の経過を要し、幾世紀にも亘っているのも…。

(7) ＳＴ　西ヨーロッパの諸国の農民の間に久しき間に亘って滲み込んでいる土地所有の

観念に立脚する個人主義思想を眼中に置いて見るときには、この過渡期の終結が容易に来ないことは察せられる。

ＴＴ　个人主义思想的立脚之处，是在久经沁透于西欧诸国农民之间的土地所有的观念上的，倘将这思想放在眼中来一看，就知道这过渡期的终结，殊不易于到来。

回訳　個人主義思想の立脚するところが、西ヨーロッパ諸国の農民の間に久しき間に亘って滲み込んでいる土地所有の観念にあり、この思想を眼中において見ると、この過渡期の終結が、容易に来ないことは分る。

試訳　倘从长期渗透于西欧各国农民间的个人主义思想植根于其土地所有观念当中这点来看，可知此过渡期终结的到来并非易事。

回訳　西ヨーロッパの諸国の農民の間に久しき間に亘って滲み込んでいる、その土地所有の観念に立脚する個人主義思想から見ると、この過渡期の終結が容易に来ないことは分る。

魯迅は完全な帰化翻訳がないと見ており、ＳＴの異質性を保つべきだと主張すると同時に、ＳＴ本来の姿の保持と分かりやすさが両立できるＴＴは最も望ましい[96]と考えている。ただし、それが両立できない場合は魯迅は常に前者のほうに傾けている。即ち魯迅は常に「形式上の等価」を重視しているわけである。

しかし、例（6）と（7）から、ＳＴが複雑で難解な場合は、読者のことを考慮に入れ、折衷的な訳し方を採るのもやむを得ない、という魯迅の妥協的な態度も微かに伺える。換言すれば、常に「再現的翻訳倫理」を重んじる魯迅は「サービス的翻訳倫理」をも意識しているのである。

2.1.3　訳語の採択

周知のように、魯迅の言葉遣いには、個性的なものも多ければ、「和臭」が伴うものも数多くある。

（8）ＳＴ 彼等の出身は無産労働者階級からであるのだが、その初期の詩には、争闘の意志などはすこしもなく、神への信仰、神助の希望、我が家、我が馬、我が村への復

[96] 魯迅（2005）《题未定 草》《魯迅全集》第 6 巻 p.364 を参照されたい。

帰を希ふ心などがうたはれているのである。

ＴＴ 他们的出身，是从无产劳动者阶级的，但在那初期的诗中，绝无斗争的意志之类，却横着对神的信仰，神助的希望，向往我家，我马，我村的复归之心。

回訳　彼等の出身は、無産労働者階級からのであるのだが、その初期の詩には、争闘の意志などはすこしもなく、神への信仰、神助の希望、我が家、我が馬、我が村への復帰を希ふ心などがうたはれているのである。

試訳　他们出身于无产阶级劳动者，但其初期的诗里丝毫没有抗争的意志，而是诉说着对神的信仰、对神助的期盼，以及回归对自家、自家的马、自己村子的渴望之心。

回訳　彼等は無産労働者階級出身なのだが、その初期の詩には、争闘の意志などはすこしもなく、神への信仰、神助の希望、自分の家、自分の馬、自分の村への復帰を希ふ心などがうたはれているのである。

(9) ＳＴ いわゆる過渡期が階級争闘のための衝突破壊の時代であるということもある程度までは事実である。

ＴＴ 所谓过渡期者，在或一程度上，实在也就是为了阶级争斗的冲突破坏的时代。

回訳　いわゆる過渡期が、ある程度では、実は階級争闘のための衝突破壊の時代であるということである。

試訳　所谓过渡期，在某种程度上，事实上也就是为了阶级斗争的冲突和破坏的时代。

回訳　いわゆる過渡期が、ある程度では、事実上階級争闘のための衝突破壊の時代であるということである。

“我家”は「私の家」の意味であり、本来であれば、所有関係を表す“的”を入れて“我的家”と書くべきであるが、慣用として“我家”は許される。しかし“我马”の場合は、“的”を入れないと規範に反することになる。そのため、読者が抵抗感を覚える可能性も高ければ、読解のスピードの低下にもかかわっているのであろう。

2.1.4　「死訳に近い硬訳」

梁魯論争が進む中で、梁実秋は「魯迅の硬訳は死訳に近い」証拠として、次の三つの訳例を取り上げて批判した。そういう意味では、この三つの訳例は当該魯訳において最も難解なものだと捉えてもよかろう。

(10) ＳＴ それも単にイデオロギイが現実社会からその唯一可能なる材料を受けて、そしてこの現実社会の実際形態がその中に組織されている思想若しくはイデオロギスの直観を支配しているという意味に於いてばかりでなく、更にこのイデオロギストが一定の社会的興味から離れ去ることが出来ないという意味に於いても、イデオロギイは現実社会の所産である。随ってイデオロギストは常に傾向的である。即ち彼はその材料を一定の目的を以て組織すべく努力している[97]。

ＴＴ 这意义，不仅在说，凡观念形态，是从现实社会受了那唯一可能的材料，而这现实社会的实际形态，则支配着即被组织在它里面的思想，或观念者的直观而已，在这观念者不能离去一定的社会底兴味这一层意义上，观念形态也便是现实社会的所产。所以观念者常常是傾向底的。他竭力要以一定的目的，来组织那材料[98]。

回訳　その意味において、イデオロギーが現実社会からその唯一可能なる材料を受けて、そしてこの現実社会の実際形態がその中に組織されている思想、若しくはイデオロギストの直観を支配しているばかりでなく、このイデオロギストが一定の社会的興味から離れ去ることが出来ないという意味に於いても、イデオロギイは現実社会の所産である。随ってイデオロギストは常に傾向的である。彼は一定の目的を以てその材料を組織すべく努力している。

試訳　这不仅意味着意识形态从现实社会中接受其唯一可能的材料，现实社会的实际形态支配着组织在其中的思想或意识形态的直观，而且意识形态无法与特定的社会兴味相脱离，观念形态是现实社会的产物。因此意识形态总是傾向性的。即它竭力以一定的目的来组织这材料。

回訳　それは、単にイデオロギイが現実社会からその唯一可能なる材料を受けて、現実社会の実際形態がその中に組織されている思想若しくはイデオロギストの直観を支配していると意味するばかりでなく、更にこのイデオロギストが一定の社会的興味から離れ去ることが出来ないと意味することになる。イデオロギイは現実社会の所産である。随ってイデオロギストは常に傾向的である。即ち彼は一定の目的を以てその材料を組織すべく努力している。

(11) ＳＴ 問題が思想の組織化に関している場合には、直接イデオロギイとそれを生み出し

---

[97] ルナチャルスキイ著昇曙夢訳（1928）『マルクス主義芸術論』白揚社 p. 7

[98] 鲁迅（2008）《艺术论》《鲁迅译文全集》第 4 卷　福建人民出版社 p. 198

た生活上の事実若しくはそれ等のイデオロギイを把持している社会的集団とを結びつけることは可なり容易である。それに反して、問題が芸術の最も特色的な特質を成している組織化に触れている場合には、それが極めて困難である[99]。

ＴＴ　问题是关于思想的组织化之际，则直接和观念形态，以及产生观念形态的生活上的事实，或把持着这些观念形态的社会底集团相连系的事，是颇为容易的。和这相反，问题倘触到成着艺术的最为特色底的特质的那感情的组织化，那就极其困难了[100]。

回訳　問題が思想の組織化に関している際に、直接イデオロギイとイデオロギーを生み出した生活上の事実若しくはそれ等のイデオロギイを把持している社会的集団とを結びつけることは可なり容易である。それに反して、問題が芸術の最も特色的な特質を成している情感の組織化に触れている場合には、それが極めて困難である。

試訳　当问题与思想的组织化相关联时，比较容易把意识形态与生成意识形态的实际生活以及掌控着这些意识形态的社会集团直接联系起来。与之相反，当问题涉及到最具艺术特色特质的组织化时，那就极为困难了。

回訳　問題が思想の組織化に関している場合には、イデオロギイとイデオロギーを生み出した生活上の事実若しくはそれ等のイデオロギイを把持している社会的集団とを直接結びつけることは可なり容易である。それに反して、問題が芸術の最も特色的な特質を成している組織化に触れている場合には、それが極めて困難である。

(12)　ＳＴ　内容の上からすれば縁遠いものでも、形式的に完成されている作品は、受動的見地から観る時には、労働者若しくは農民に対し半肉感的性質の漠然たる満足のみを與えることが出来る、然し芸術的化身の深奥に対して興味を持っている労働者及び農民には観念的には敵視さえせねばならぬ作品でも、彼らが解剖的に分解し、その構成の本質に透徹するならば、非常に大なる教訓となることが出来る[101]。

ＴＴ　内容上虽然不相近，而形式底完成着的作品，从受动底见地看来，对于劳动者和农民，是只能与半肉感底性质的漠然的满足的，但在对于艺术底化身的深奥，有着兴味的劳动者和农民，则虽是观念底的地，是应该敌视的作品，他们只要解剖底地加以分解，透彻了那构成的本质，便可以成为非常地大的教训[102]。

回訳　内容上近くなくても、形式的に完成されている作品は、受動的見地から観る時

---

[99] ルナチャルスキイ著昇曙夢訳（1928）『マルクス主義芸術論』白揚社 p. 11

[100] 鲁迅（2008）《艺术论》《鲁迅译文全集》第 4 卷　福建人民出版社 p. 2008

[101] ルナチャルスキイ著　茂森唯士訳（1925）『新芸術論』（第四章『ソウェート国家と芸術』）至上社 p. 194

[102] 鲁迅（2008）《苏维埃国家与艺术》《文学与批评》《鲁迅译文全集》第 4 卷　福建人民出版社 p. 360

には、労働者と農民に対し半肉感的性質の漠然たる満足のみを與えることが出来る、然し芸術的化身の深奥に対して興味を持っている労働者及び農民には観念的には敵視せねばならぬ作品でも、彼らが解剖的に分解し、その構成の本質に透徹さえすれば、非常に大なる教訓となることが出来る。

試訳　内容上虽陌生，但形式上完成了的作品，从被动立场来观察时，只能给予劳动者或农民半感性的模糊的满足感。但对于艺术性化身的深奥感兴趣的劳动者及农民，在观念上甚至要敌视的作品，如果他们解剖性地加以分解，深切理解了其结构的本质，就可以成为很好的教训。

回訳　内容上でよく見慣れなくても、形式的に完成されている作品は、受動的見地から観る時には、労働者若しくは農民に対し半感性的漠然たる満足のみを與えることが出来る。然し芸術的化身の深奥に対して興味を持っている労働者及び農民には、観念的には敵視さえせねばならぬ作品でも、彼らが解剖的に分解し、その構成の本質をよく理解できるならば、非常に大なる教訓となることが出来る。

上記の例のように、確かに難解で読みづらい。筆者の試訳によってその読みづらさがある程度解消されているであろうが、やはり難解である。なぜこれほど晦渋なのであろうか。考えられる原因は次のように示しておく。

① それが底本としたＳＴに由来したと考えられる。

ＴＴの難解はＳＴが専門的、学術的であり、構文も長々と分かり難いというようなことに起因する。特に、魯迅が使った底本は、ルナチャルスキーの原文ではなく、昇曙夢と茂森唯士の日本語訳である。ただでさえ難解な文芸論であるが、重訳のため、より一層難しくなっている。『現代新興文学の諸問題　小序』において魯迅は次のように語っている。

「…しかし、著者の文体はきわめて錯雑曲折しており、訳す際にも、三つ曲がっていたら、二つに減らし、二つ曲がっていたら一つに改めるといった具合に、時として曲折を減らしたが、依然として訳文が拙劣だし、またもとの語気をあまり変えたくなかったために、やはり重苦しく、くどくなっているところが多い。この点、読者にぜひお許しを願いたい…」[103]と。

『マスクス主義芸術論』を訳す際に、ＳＴが生物学的社会学に依拠し、生物、心理、物理、

[103] 丸山昇　訳（1985）『現代新興文学の諸問題・小序』『魯迅全集』第 12 巻学習研究社 p. 361

化学、哲学に亘った学際的なものであり、とりわけ美学や科学的社会主義に関する論述が多いため、魯迅は茂森唯士の『新芸術論』および『実証美学の基礎』の外村史郎の訳本と馬場哲哉の訳本を参照したが、自分の限界を感じ取っている。文芸論の場合は断然直訳すると主張した魯迅もさすがに、他の人が原文から直接訳すか、有能な人が分訳の技法や意訳の方法で訳してくれればと妥協の態度を示している[104]。

② 魯迅の翻訳ストラテジーや翻訳法が働いているためである。

ＳＴへの忠実と読者の受容の間に置かれた魯迅は、前者のほうに寄せた可能性が考えられる。即ち、魯迅は難解だと知りつつも、「サービス的翻訳倫理」より「再現的翻訳倫理」のほうを重んじているわけである。

コミュニケーション重視の訳し方より、文献記録としての語義重視というべきこのような魯訳では、ただでさえ難解なＳＴを、更に抵抗・異化ストラテジーで形式上の「等価」を求めながら、訳されている。従って、翻訳法が直訳法となり、採用できる翻訳テクニックも限られている。

「形式的等価」にこだわる魯迅は、ＳＴの論理性を保つために、長文の語順をできるだけ調整せずに、合訳や分訳といった翻訳テクニックを控え、翻訳シフトを最小限に絞りながら訳したのである。それによって、訳さなくてもよかったところが残っており、読者の即理解に支障をもたらすことになる。しかし、それは魯迅が序文で述べたように、承知の上での選択である。

すでに触れたように、「的」の多用、そして「的」、「底」、「底的」の使い分けは難解な原因にもなる。

例（10）の「随ってイデオロギストは常に傾向的である。」は「所以观念者常常是傾向底的。」と訳されている。それは日本語からの干渉か、若しくは魯迅の意図的な行為のいずれかによるものだと考えられる。

当時、白話文はまだ熟しておらず、西洋文法から来た「的」や「底」の使い分けがまだ固定化されていない。魯迅は当時の影響を受けている一方、自分なりに使い分けている。そのため、現代を生きている我々の目からすれば、違和感のある使われ方となっている。

1924 年に発表された『苦悶の象徴　序言』で「的」と「底」に使い方について、魯迅は次のように説明している。

---

[104] 丸山昇　訳（1985）『芸術論　序』『魯迅全集』第 12 巻　学習研究社 p. 366-367 を参照されたい。

「文言はたいてい直訳で、極力、原文の語調をそのまま保つよう努めた。だが、私は国語文法について素人なので、規範に合わぬ文章がたくさんあると思う。その中で特に断っておかなければならないのは、何か所か『的』の字を使わず、特に『底』の字を使った理由である。

つまり、およそ形容詞と名詞とが連なって一つの名詞を形成しているものは、すべてその間に『底』の字を使った。例えば、 Social being は社会底存在物とし、Psychische Trauma は精神底障害としたなど。また、形容詞で他の品詞から転成した、語尾が-tive,tic の類のものは、語尾に『底』の字を使った。たとえば、Speculative,romantic は思索底、羅曼底とした」[105]。

魯迅が述べたように、当時の白話文は西洋言語、そして「欧文脈」の日本語から両方の影響を受けて形成されているが、未熟なものであった。とりわけ西洋文法に合わせ、形容詞、形容動詞及び副詞の語法を模倣した結果、“的”、“地”、“底”が使い分けられ、それに“底的”、“的底”、“的地”、“底地”といった使い方も現れ、濫用されている。

③ 意味把握という問題も考えられる。

魯迅自身の理解の問題も考えられる。当時、無産階級文学理論は魯迅にとって文字通り、新興の文学理論である。『マルクス主義芸術論　序』における魯迅自らの苦労話から分かるように、当時の魯迅がマルクス文芸論についてまだそれほど知らなかったのであろう。

このように、「硬訳」の原因はＳＴの難解さ、重訳、訳者の把握理解、翻訳方法の選択にあると考えられる。

2.2　「硬訳」にこだわる理由

『現代新興文学の諸問題・小序』において、魯迅は自らの翻訳動機について、次のように述べている。

「これを翻訳した意図はきわめて単純である。新しい思潮が中国に入ってくる場合、それはいくつかの名詞だけのことが多い。それを主張する者は敵を呪い殺せると思い込み、敵対

[105] 丸山昇　訳（1985）『苦悶の象徴　序言』『魯迅全集』第 12 巻 p.300-301

者のほうも呪い殺されると思い込んで、一年か半年騒ぎたて、結局、火が消え、煙もなくなってしまう。たとえばロマン主義、自然主義、未来主義…、いずれももう過去のものになってしまったように見えるが、実際そんなものはかつて出現しなかったのである。現在、この文章を借りて、理論と事実とを見てみれば、必ずそうなるべき流れなのであり、ごく当たり前のことなのであって、やたらとわめきたてるのも、力で禁じるのも、ともに無駄なことがわかる。まず外国の新興文学を中国で『呪文』から解き放たなければ、それに続く中国文学には新興の希望は生まれない――というだけのことである」[106]。

すでに指摘したように、当時新月社や太陽社と魯迅の間に、無産階級文学の問題をめぐる論争が起こり、魯迅は無産階級文学について無知だと言われている。それも契機となり、魯迅はロシア（ソ連）文芸論をはじめとする無産階級文学理論をそれまでより力を入れて読み漁りながら、中国語に訳している。そういう意味では、このような翻訳の営みは、魯迅にとって、無産階級文学理論に対する認識を深める手段でもあり、論敵に対する反撃の武器の一つでもある。

ところが、さすがの魯迅も、手を出して初めて想像以上の難しさに気付かされたのである。学術論文を訳す場合は、できる限り原文の形を保ち、語気を損なわないように努めるべきだと魯迅は主張している。どうしても困難な場合は、長文を崩してから再構成するという技法を採っても構わないとも述べている。しかし、それは彼の本意ではなく、あくまでやむを得ない折衷の選択肢なのである。「文芸と批評・訳者附記」において、自分の「硬訳」について、魯迅は次のように語っている。

「…しかし訳者の能力不足と中国語本来の欠点のために、訳しおえて一読してみると、晦渋であり、難解なところさえきわめて多い。もし仂句を分けてしまうと、もともとの精悍な語気が失ってしまう。私としては、やはりこのような硬訳以外には、『手を束ねる』という道――つまりいわゆる『出口がない』――しかなくなってしまう。残った唯一の望みは、やはり読者が我慢して読み続けてくれることだけである」[107]。

ここから、魯迅の翻訳法の流儀も、「宁信而不顺」（「すらすら読めなくても忠実に」）

---

[106] 丸山昇　訳（1985）『現代新興文学の諸問題・小序』『魯迅全集』第 12 巻 学習研究社 p. 361-362

[107] 丸山昇　訳（1985）『文芸と批評・訳者附記』『魯迅全集』第 12 巻　学習研究社 p. 370-371

という翻訳倫理観も垣間見ることができよう。「宁信而不顺」の徹底化によって、文芸論の後期魯訳はより一層「硬訳」の傾向を見せている。では、同じ後期における小説の魯訳はどのようになっているのであろうか。

3　小説の魯訳

本節で前節から得た結論を小説というジャンルにおいて、逆方向で検証してみる。できるかぎり恣意性を持たずに、より客観的な用例が得られるように、同じ時期にできた魯訳の小説の中からそれぞれの始まりの一文を取り上げて検討し、文芸論の訳出と比較した上で、前節の結論と照合してみる。それによって、文芸論の魯訳の特徴は小説の魯訳に見て取れるかどうかを考察してみる。また、仮に同じような特徴が見受けられる場合は、その程度の差についても触れてみる。

3.1　文芸論における翻訳シフトの再確認

まず、1929 年に発表された文芸論『現代新興文学の諸問題』と『芸術論』の本文の始まりの一文を抽出し、語、句あるいは一つのまとまりのレベルで翻訳シフトを観察してみる。

（13）ＳＴ　無産階級文学が　日本の文壇で　問題になったのは、

ＴＴ　无产阶级文学　在日本文坛　的成了问题，

震災以前の　一二年にも足りない　わずかの　間のこと　であった

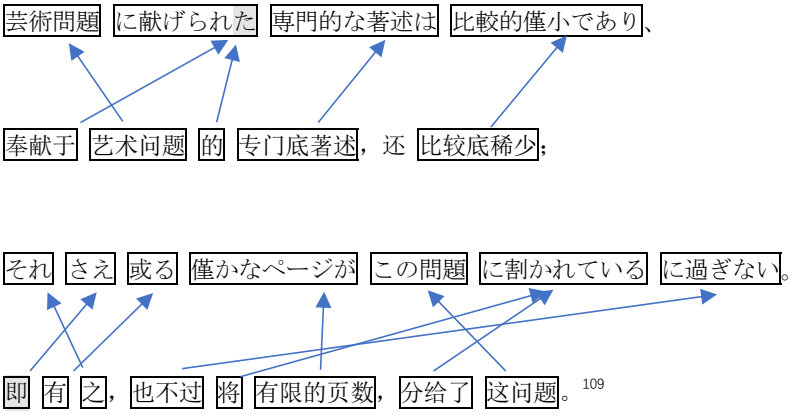
仅　是　地震以前　不到一两年　之间的事[108]。

回訳　無産階級文学が日本の文壇で問題になったのは、震災以前の一二年にもならないわずかの間のことであった。

（14）ＳＴ　マルクスから　現代までの　マルクス主義文献　に於いて、

ＴＴ　在　从马克斯起，　以至现代的　科学社会主义的文献　中，

[108] 片上伸（1926）『無産階級文学の諸問題』『文学評論』新潮社 p. 38
鲁迅（2008）《现代新兴文学的诸问题》《鲁迅译文全集》第 4 卷 p. 162



回訳　マルクスから、現代までの科学社会主義文献に於いて、芸術問題に献られげられた専門的な著述は、比較的僅少であり、それさえあっても、僅かなページが、この問題に割かれているに過ぎない。

例文を見て分かるように、魯迅は加減訳を意識的に控え、語や句を基本単位にしてＳＴと形式的に対応させている。逆訳、反訳といった転位手法は、やむを得ぬ場合を除けば、ほぼ見当たらない。そのため、ＴＴは流暢性を重要視するコミュニケーション志向の訳出ではなく、抵抗式翻訳という性格を持っており、語義重視、原文志向の傾向が極めて強い。その結果、中国語らしくない文言となっているのである。

例（13）のように、魯迅は主部と述部の順序を調整せずに、「无产阶级文学在日本文坛的成了问题」をＳＴの形に合わせて主部にし、「仅是地震以前不到一两年之间的事」を述部にしている。仮に「地震发生前的一两年左右，无产阶级文学就在日本文坛成为问题。」というように、語順を調整して逆訳すれば、簡単に解決できたはずであるが。たとえ主述の調整をしなくても、「的成了问题」を「的问题化」に置き換えさえすれば、「无产阶级文学在日本文坛的问题化，仅是地震以前不到一两年之间的事」となり、比較的に中国語らしくなるのであろう。しかし魯迅はそれに抵抗しているのである。

文の主部と述部の調整をしない理由はすでに第 4 章 4.2 で引用しているが、再度その魯迅の考えを示す。ハイレベルの教育を受けた読者層に対し、文芸的な訳出を提供する際は、直訳を出すべきだと魯迅は語っている。例えば、「山背后太阳落下去了」（山の背ろに太陽は落ちて行った）スムーズに読めなくても、それを「日落山阴」（日は山かげに落ちた）と訳

---

[109] ルナチャルスキイ著昇曙夢訳（1928）『マルクス主義芸術論』白揚社 p. 3
鲁迅（2008）《艺术论》《鲁迅译文全集》第 4 巻　福建人民出版社 p. 197

さない。なぜなら、原文は焦点を山に置いているが、「日落山阴」と改めると、焦点が太陽に変わってしまうからだという。

一方、例（14）で見受けられるように、「それさえ或る僅かなページがこの問題に割かれているに過ぎない」を、さすがの直訳主義の魯迅もそれを調整し、分訳という技法を用いて訳出している。本来魯迅の流儀であれば、「即便有着那类的极有限的页数也不过是被匀到这个问题里了而已」と訳しても無理はなかったであろうが。

分訳という手法を用いたにもかかわらず、訳文はやはり「和臭」が伴うものである。魯訳の多くはこのような雰囲気を漂わせている。

ところで、中国語の受身表現では、“被”を用いるのが一般的であるが、文脈によって使わない場合もある。魯訳では「芸術に献げられた」が“奉献于艺术的”と訳されていると同様に、「僅かなページがこの問題に割かれている」も“将这仅有的页数分给了这个问题”と訳されている。即ち、受身表現を訳す際に、魯迅は強引に“被”を当て嵌めるのではなく、融通をきかせて訳している。

最後に、「において」は、「在…中」のように、転位法で訳されている。それは両言語システムの相違に起因するものであり、ある意味では動かせない規範なのである。

3.2　小説における翻訳シフトの確認

続いて同じ 1929 年に訳出された小説から抽出した言い出しを分析し、3.1 で得た結果と比較してみる。

（15）ＳＴ夜が　襲った　ので　彼等は、

ＴＴ昏夜　已经袭来，他们　便

截ちきった　山と山とが　挟んでいる　切通しの　底　で　止った。

停　在　夹在　劈开的　峭壁之间的　孔道的　底下　了[110]。

---

[110] ピオ・バローハ著　笠井鎮夫訳（1925）『バスク族の人々　流浪者』『海外文学新選　西班牙文学』第 13 巻 p. 144
鲁迅（2008）《跋司珂族的人们 流浪者》《鲁迅译文全集》第 7 巻 福建人民出版社 p. 461

回訳　夜が襲ったので、彼らは截ちきった崖と崖が挟んでいる切通しの底で止った。

（16）ＳＴ放浪の子　エリサビデ　あの廃園で　働いている時に、

ＴＴ　放浪者　伊利沙辟台　在那荒園里　作工的时候，

教会帰りの　マイントニが　通るの　を見ると、よく　独り言を言っ　たものだ。

看见　从教堂回家的　玛因德尼　走过，是　往往　自言自语　的[111]。

回訳　放浪の子エリサビデあの廃園で働いている時に、教会帰りのマイントニが通るのを見ると、よく独り言を言ったものだ。

例（15）と（16）を見て分かるように、小説の魯訳おいては、ジャンルが異なるものの、文芸論の翻訳と同様に、形式上の対応も合訳と分訳の控えも見受けられる。それに加訳や減訳も少なければ、逆訳や反訳も稀である。

即ち、小説の魯訳においても調整が控えられている。強いていうと、見て取れる翻訳シフトは、まず「夜」が“夜”ではなく、“昏夜”と、そして「放浪の子」が“放浪之子”ではなく、“放浪者”に、また「山と山とが」が“山与山之间的”のかわりに、“峭壁之间的”と訳出されているほか、「～でとまった」が“停在…了”と訳されたぐらいであろう。

因みに「～で止まった」の訳し方は一つとは限らない。厳密にいうと、“在…停下了”のほうがより正確であろうが、“停在…了”もよく使われている。従って、いずれに訳されても良かろう。

以下の用例も同じ『バスク牧歌調』に収録、発表された短篇小説である。ただし、書かれたのは 1933 年（１篇）、ほかは 1934 年であった。ここで留意すべきは発表年別である。

魯迅は 1932 年の初め頃に、小論文 1 本を重訳した後に、ほぼソ連文芸論の翻訳を手放した。換言すれば、魯迅が 1928 年 6 月から本格的にソ連文芸論の翻訳に取り掛かったが、1932 年の初め頃という時点でほぼ終わっているということである。左連（当時、共産党が実際に主導権を握っている中国左翼作家連盟）の解散、そして梁魯論争の盛りを迎えて徐々に弱まっていくと同時に、魯迅は再び小説翻訳のほうに転向していくのである。

---

[111] 鲁迅（2008）《放浪者伊利沙辟台》《鲁迅译文全集》第 7 巻 福建人民出版社 p. 405
ピオ・バローハ著　笠井鎮夫訳（1925）『放浪の子エリサビデ』『海外文学新選　西班牙文学』第 13 巻 p. 14

そういう意味で、下記の例を通じて、ソ連文芸論の翻訳を手放した後期後半の魯訳の姿を垣間見ることができよう。

（17）ＳＴ ガライスは目が醒めると、小屋を出た。断崖の直ぐ縁を縫って走る小径を辿って、森の中の禿地へ降りて行った[112]。

ＴＴ　喀拉斯醒过来，就走出了小屋子。顺着紧靠崖边的弯弯曲曲的小路，跑下树林中间的空地去[113]。

回訳　ガライスは目が覚めると、小屋を出た。崖のすぐ縁を走る、曲がりくねっている小径に沿って、森の中の禿地へ降りて行った。

下線部は中後期の魯訳の中において、めったに見られないパラフレーズ（別の表現でＳＴの内容を置き換える）手法で訳されたものである。このような翻訳法は、魯迅の基準に従えば、既に意訳の範囲に入るのであろう。

（18）ＳＴ　なあ、貴女、貴女に一寸した出鱈目をお聞かせし度えんぢやが[114]。

ＴＴ　喂，姑娘，正有一点乱谈想给您讲讲哩[115]。

回訳　なあ、貴女、一寸した出鱈目を貴方にお聞かせし度えんぢやが。

例（18）で「貴女」が二回出ている。一回目は“姑娘”と、そして二回目では形式上の敬語のことも考慮に入れ、“您”と訳されている。中・後期前半の魯訳と比べると、直訳（場合によっては逐語訳）のイメージはある程度薄まってきたと言えよう。それは、下の中期の『羅生門』の訳例と照合すれば明らかである。

ＳＴ 「成程な、死人の髪の毛を抜くと云う事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。じゃが、

---

[112] ピオ・バローハ著　笠井鎮夫訳（1925）『バスク牧歌調　炭焼男』『海外文学新選　西班牙文学』第13巻 p. 32

[113] 鲁迅（2008）《山民牧歌　烧炭人》《鲁迅译文全集》第7巻 福建人民出版社 p. 417

[114] ピオ・バローハ著　笠井鎮夫訳（1925）『序　昔囃に倣って』『バスク牧歌調』『海外文学新選　西班牙文学』第13巻 p. 4

[115] 鲁迅（2008）《序 -拟讲故事体-》《山民牧歌》《鲁迅译文全集》第7巻 福建人民出版社 p. 405

ここにいる死人どもは、皆、その位な事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。現在、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりづつに切って干したのを、干魚だと云うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ[116]。

ＴＴ　“自然的，拔死人的头发，真不知道是怎样的恶事呵。只是，在这里的这些死人，都是，便给这么办，也是活该的人们。现在，我刚才，拔着那头发的女人，是将蛇切成四寸长，晒干了，说是干鱼，到带刀的营里去出卖的[117]。

回訳　「成程な、死人の髪の毛を抜くと云う事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、皆、その位な事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。現在、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりづつに切って、干したのを、干魚だと云うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ」。

すでに論じたように、魯迅は老婆の話のたどたどしさを再現させるために、話の区切りまで考慮に入れ、ＳＴを一歩一歩踏んでおり、あえて流暢なものにしなかったのである。同じ例は中後期前半の魯訳に多く見受けられるが、紙幅のため、それ以上例示しないことにする。

(19) ＳＴ　ビダソア川の流域では、鉱山師でも、鳩を追う狩人でも、鮭と鱒を漁る漁夫でも、バサヘスエ・イルンのエチェコパル商会の才取レコチャンデギほど顔の通った者は、ただの一人だってあろうとは思われない[118]。

ＴＴ　在别达沙河流域一带，无论是矿师，是打野鸽子的猎户，是捉海鱼的渔夫，能够像巴萨斯・亦・依仑的厄乞科巴公司经手人莱哥羌台奇那样，熟识人们的，恐怕是一个也没有了[119]。

回訳　ビダソア川の流域一帯では、鉱山師でも、鳩を打つ狩人でも、海魚を捕る漁夫でも、バサヘスエ・イルンのエチェコパル商会の才取レコチャンデギほど知れ渡っている者は、ただの一人だってなかろうとは思われる。

「追う」、「顔の通った」が適合手法により、それぞれ“打”、“熟识人们的”と訳され

---

116 芥川龍之介（1923）『羅生門』新潮社　p. 13

117 鲁迅（2008）《罗生门》《鲁迅译文全集》第 2 巻 福建人民出版社 p. 93

118 ピオ・バローハ著　笠井鎮夫訳（1925）『剽軽者レコチャンデギ』『海外文学新選　西班牙文学』第 13 巻 p. 84

119 鲁迅（2008）《促狭鬼莱哥羌台奇》《鲁迅译文全集》第 7 巻 福建人民出版社 p. 439

ている。「鳩を追う」を“追野鸽子的猎户”と直訳すると不自然な中国語表現になる。また「顔の通った」と合致する中国語表現が不在のため、魯迅はあえて直訳しなかったと考えられよう。

また「ただの一人だってなかろうとは思わる」という形式上の否定文は反訳手法で肯定文に訳されている。

(20) ＳＴ　ディトゥルビデ・フアン（当人自らこう名乗っていた）は戦争が始まる約二年前にベーラ・デル・ビダソアに現れた[120]。

ＴＴ　迭土尔辟台孚安（他自己这么称呼的）是战争开头的前两年的样子，在培拉台别达沙出现的[121]。

回訳　ディトゥルビデ・フアン（彼自らこう名乗っていた）は戦争が始まる約二年前にベーラ・デル・ビダソアに現れた。

ここでの「名乗る」は“自报姓名；自称”の代わりに、「自己这么称呼」と訳されている。訳し方の自由度が比較的に高いため、いずれの訳語が採用されても無理はないと思われる。

(21) ＳＴ　給仕（「エラルド」紙を読む紳士に）昨晩は皆さん大分遅く迄いらっしゃいましたよ。後からドン・フリオが来らっしゃいましてな、さようですな、すっかりお引き上げになったのは、かれこれ二時になりましたかな[122]。

ＴＴ　堂倌（对着看报纸的绅士）昨天晚上，大家都散得很晚了。后来是堂・弗里渥来了，对啦，等到散完，这么那么的恐怕已经有两点钟了[123]。

回訳　給仕（新聞紙を読む紳士に）昨晩は、皆さん大分遅く迄いらっしゃいましたよ。後からドン・フリオが来らっしゃいましてな、さようですな、すっかりお引き上げになったのは、かれこれ二時になりましたかな。

---

[120] ピオ・バローハ著　笠井鎮夫訳（1925）「レコチャンデギの盟友　-秘密結社『ロス・チャベラウンディス・デル・ビダソア』結党余聞-」『海外文学新選　西班牙文学』第 13 巻 p. 96

[121] 鲁迅（2008）《会友》《鲁迅译文全集》第 7 巻 福建人民出版社 p. 444

[122] ピオ・バローハ著　笠井鎮夫訳（1925）『若き日の分かれ』『海外文学新選　西班牙文学』第 13 巻 p. 121

[123] 鲁迅（2008）《少年别》《鲁迅译文全集》第 7 巻 福建人民出版社 p. 451

「エラルド」紙はスペインの日刊地方紙のことである。本来、魯迅はそのことを知っているのであれば、彼の流儀で恐らく音訳した上で注釈を付けたりしていたであろう。しかし、ここでは固定名詞を普通名詞にし、いわゆる一般化の方策を採ったわけである。恐らく話の焦点が新聞紙ではない為、調べる必要がないと魯迅は判断していたと考えられよう。

例（17）～例（21）を見て分かるように、翻訳後期の後半に入った後に、文芸論の訳業を手放したころを境として、魯迅の極端的な直訳法がある程度緩まってきたことが分かる。とはいえ、それはあくまで局所的な調整であり、文レベルからすれば、魯訳が相変わらず直訳だということに留意すべきである。

4　童話魯訳のストラテジー・翻訳法・動機

『小さいペーター』の中国語訳『序』（1929）において、魯迅が外国語をマスターするのには、童話から始めてもいいが、翻訳の場合となると、相応しくない。なぜなら、訳し手がとかく原文にこだわり過ぎて、あえて意訳しようとしないからだというような旨を語っている[124]。先行研究においてすでに言及したように、魯迅の翻訳を研究している顧が、魯迅の言う通りに従い、彼の言説を鵜呑みにしている。

では、初期の前半を除けば、生涯を通じて直訳法を推奨する魯迅は、童話翻訳に当たっては、本当に自分の言う通りに意訳法を採っているのか、だとすれば、その訳文の姿が如何なるものなのであろうか。

図表 5-1　魯訳童話リスト

作品別	原作者	国籍	原文言語	日・独語重訳者	日訳タイトル[125]	使用言語	備考（訳文出処/頁数等）

[124] 魯迅（2008）《小彼得・序言》《鲁迅译文全集》第五卷 福建人民出版社 p. 2 を参照されたい。

[125] 魯迅が翻訳対象として使ったテクストだけを指す。

爱罗先珂童话集 1921-1923 9/13 篇	エロシェンコ (Vasely Eroshenko)	露	日		[126] 参照	日	《鲁迅译文全集》(2008) 第 1 巻 439-559
桃色的云 1922 （童話劇三幕）	エロシェンコ	露	日		桃色の雲	日	同上第 2 巻 101-216
小约翰 1926	ファン・エーデン (Frederik van Eeden) (望・蔼覃)	蘭	蘭	フレス (Anna Fles)	小さなヨハネス	独	同上第 3 巻 1-114
小彼得 1929 （6 篇）	ヘルミニヤ・ツール・ミューレン (Hermynia zur Muehlen) （海尔密尼亚・至尔・妙伦）	独[127]	独	林房雄	小さいペーター	日	同上第 5 巻 1-35
俄罗斯的童话 （16 篇）1934	ゴーリキイ (Gorky Maksim) (高尔基)	露	露	高橋晩成	ロシヤのお伽噺	日	同上第 6 巻 401-464
表 1935	パンテレーエフ (Л. Пантелеев),(Leonid.Panteleev) （班台莱耶夫）	露	露	アインシュタイン （Maria Einstien）		独	同上第 6 巻 337-400 槇本楠郎日訳『金時計』も参照

出所　筆者作成

[126] 『狭い籠』、『沼のほとり』、『春の夜の夢』、『魚の悲しみ』、『鷲の心』、『世界の火災』,また『夜の狂人』、『変り猫』、『二つの小さな死』、『人類の為に』、『ひよこの悲劇』、『時のお爺さん』、『愛という字の傷』、『赤い花』。計 13 篇。

[127] 国籍上独。奥・洪帝国　ウェーン出身。

上の「図表 5-1」で示したように、1921 年から 1935 年に亘り、魯迅は 5 人の 6 作の童話を訳出している。６作の中に和文中訳が 4 作あり、独文中訳が 2 作あるが、長篇もあれば作品集もあるため、量的には少なくないのである。以下より、日本語からの魯訳を中心に、ＳＴとＴＴの対照分析を行い、その翻訳方法（直訳か意訳か）を明らかにすると同時に、魯訳童話に関わる事項を概説しながら、その動機を追及する。

4.1　意訳か直訳か

魯訳の童話を全体的に見る場合は、意訳に当たるのか、それとも直訳に当たるのかを検証するために、エロシェンコの童話、『小さいペーター』及び『ロシヤのお伽噺』を例に議論し、ＳＴとＴＴから始まりの一文を取り上げて見比べた上で、独文中訳の『小さなヨハネス』の関連事項についても論及してみる。

4.1.1　《爱罗先珂童话集》の訳例

一部の動植物の訳名は、さまざまな訳し方で対応されている。例えば、『桃色の雲・登場人物の訳名について』の中において、魯迅が訳し方を採択する理由について次のように説明している。

「一、書物に現れる中国名を用いたもの。例えば蒲公英（日本語名はタンポポ）などがその類に当たる。

二、書物に現れぬ中国名を用いたもの。例えば月下香（日本語名は月見草）などがその類に当たる。

三、中国にも呼び名があるにもかかわらず日本名を用いたもの。これは美醜の差がはなはだしく、訳してしまうと作品の美しさが台なしになってしまうからである。例えば女郎花（中国語名は敗醤）、朝顔、昼顔、夕顔（中国語名は牽牛花、旋花、匏）などがその類に当たる。

四、中国名がなく、日本名を踏襲したもの。たとえば釣鐘草、雛菊などがそれに当たる。…ただし、意訳したのが一つあり、破雪草はもとは雪割草であった。新しく訳したものも一つあり、白葦とは日本の刈萱のことである。

五、西洋の名称の意味を訳したもの。例えば勿忘草がそれである。

六、西洋の名称の音を訳したもの。例えば風信子、珂斯摩などがそれに当たる。達理亜は、

中国の南方でも大理菊と呼ばれているが、ここでは雲南省大理県産の菊と間違われる（と[128]）いけないと思い、音訳したのである」[129]。

動物の訳名についても、その取捨選択の経緯について語られている。たとえば、雨蛙という日本語名を踏襲した理由を述べた後に、その動物の特徴を説明した上で、中国語名雨蛤、または樹蛤を採用しなかった理由について魯迅は説明している。

また、『春の夜の夢・訳者附記』において、「…露草は中国では鴨跖草というが、直訳すると文章の美しさを壊してしまうので、原名をそのまま用いた[130]」と、魯迅が移植と手法を採った理由について説明している。

要するに、植物（動物）の訳名は、移植、借用、音訳、創造、帰化、異化、適応といった様々なテクニックやストラテジーを用いて扱われている。

ここからは、自分の母国語力及び文学的教養を誇示し、読者の関心を集めるために、一途にＴＴの言葉遣いを美しくするのではなく、ケースバイケースで訳法を吟味すべきだという魯迅の翻訳態度が窺えるのであろう。

エロシェンコ童話の魯訳では、動・植物名は確かに異なる翻訳法で訳されているため、意訳法も当然その中に入っている。しかし、訳文全体が相変わらず直訳であることは、本文を見れば一目瞭然である。以下にその例を挙げる。

（22）ＳＴ　虎が疲れた……

毎日毎日同じこと……

狭い籠、籠から見える狭い空、籠の周囲に見渡す限りまた狭い籠……。

その列は何処までも何処までも動物園の囲を越えて世界の果てまでも続いている

ように思われた。

ああ虎が疲れた……虎が全く疲れて仕舞った。

毎日毎日同じこと……[131]

ＴＴ老虎疲乏了……

---

[128] ＳＴでは「と」が抜けたと思われる。

[129] 丸山昇　訳（1985）『登場人物の訳名について』『訳文序跋集』『魯迅全集』第 12 巻 p. 273－275 を参照されたい。

[130] 丸山昇　訳『春の夜の夢・訳者附記』『訳文序跋集』『魯迅全集』第 12 巻 p. 266

[131] 秋田雨雀　編（1921）『狭い籠』『エロシェンコ創作集・夜明け前の歌』叢文閣 p. 1

毎天每天总如此……

狭的笼，笼里看见的狭的天空，笼的周围目之所及又是狭的笼……

这排列，尽接着尽接着，似乎渡过了动物园的围墙，尽接到世界的尽头。

唉唉，老虎疲乏了……老虎疲乏极了。

毎天每天总如此……[132]。

回訳　虎が疲れた……

毎日毎日同じこと……

狭い籠、籠から見える狭い空、籠の周囲に見渡す限りまた狭い籠……。

その列は、何処までも何処までも、動物園の囲を越えて、世界の果てまでも続いているようだ。

ああ、虎が疲れた……虎が全く疲れて仕舞った。

毎日毎日同じこと……。

例（22）はエロシェンコ童話『狭い籠』の始まりの一文とその魯訳である。

このように訳文全体を見ても、この冒頭の一文と同様に、ＴＴがＳＴの形を一歩一歩踏みながら訳されていることが分かる。

勿論、20 年代に魯迅がまだ「童話翻訳は意訳したほうが相応しい」という発言をしていないのであるが、直訳こそこの時期の童話魯訳の特徴だということを強調しておきたい。

4.1.2 《小彼得》の訳例

『小さいペーター』の中国語訳は日本語学習の材料として魯迅が許広平に翻訳させたものであるが、許の日本語師匠である魯迅が全面的に添削をしたため、魯迅の訳作だとされている。以下にＳＴの始まりの一文とその魯訳を挙げる。

（23）ＳＴ　小さいペーターは、氷滑りをして、足を折りました。それで寝床の中にじっとして、一日中寝ていなければなりませんでした。たいそう退屈でした。お母さんは、終日外で働いているし、遊び友達は、外の雪の中で、遊びに夢中で、病人のお見舞いに来ようなど、まるで考えもしないからです。それでも、昼の間は、明るくて、

[132] 鲁迅（2008）《爱罗先珂童话集・狭的笼》《鲁迅译文全集》第 1 卷福建人民出版社 p. 446

窓から日の光が入って来て、壁の上に愉快な影をなげるので、小さい児は、いくらかひとりで楽しむことができるのでした。夕方が来て狭い部屋が、だんだん暗らくなってくると、小さいペーター—は、次第に心細くなって来て、お母さんの足音が階段の上に聞こえるのを待ちかねるのでした。その上、お母さんが帰らないと、小さいストーヴに火が入らないので、寒くて寒くてならないのでした[133]。

ＴＴ　小小的彼得去溜冰，把腿跌折了。就只好从早到晚，静静的躺在床上。非常之无聊。因为母亲是整天的在外工作，同队玩耍的朋友呢，又都在外面的雪地里，耍得出神，全不想到来看生病的人了。但是，白天的时候，亮亮的，太阳光从窗户间射了进来，将愉快的影子映在壁上，小孩子还可以独自有些喜欢。一到夜，狭小的房渐渐昏暗起来，小彼得便也跟着觉得胆怯，只等着在楼梯上面，听见母亲的足音。况且母亲不回来，小小的火炉里不生火，也是冷得挡不住的[134]。

回訳　小さいペーター—は氷滑りをして、足を折りました。それで寝床の中にじっとして、朝から晩まで寝ていなければなりませんでした。たいそう退屈でした。お母さんは終日外で働いているし、遊び友達は、みな外の雪の中で、遊びに夢中で、病人のお見舞いに来ようなど、まるで考えもしないからです。それでも、昼の間は、明るくて、日の光が窓から入って来て、愉快な影を壁の上に映るので、小さい児は、いくらかひとりで楽しむことができるのでした。夕方となって狭い部屋が、だんだん暗らくなってくると、小さいペーター—は、次第に心細くなって来て、お母さんの足音が、階段の上に聞こえるのを、待つだけでした。その上、お母さんが帰らないと、小さいストーブに火が入らないので、寒くて寒くてならないのでした。

例（23）のＳＴとＴＴを照合すれば分かるように、幾つかの訳語を除けば、意訳というより、やはり直訳というイメージが頗る強い。

筆者が資料として使ったＳＴ『小さいペーター—』はデジタル化画像から再度画像化したものである。ただでさえ字も小さければ、当時印刷の質も良くない上に、再度画像化したため、ぼんやりしており、見わけのつかないところが多々あった。ところが、魯迅の中国語訳と読み比べると、それが何であるか直ちに見当がつくものであった。この点からも、魯迅が如何に直訳しているかは想像できよう。

---

[133] ヘルミニヤ・ツール・ミューレン著　林房雄訳（1927）『小さいペーター・石炭のお話』暁星閣 p. 2

[134] 鲁迅（2008）《小彼得・煤的故事》《鲁迅译文全集》第 5 巻　福建人民出版社 p. 7

また、興味深いことに、魯迅がこの訳作の「序」で、「童話は意訳したほうがいい」と述べただけでなく、「この訳作にもそういう欠点（意訳ではなく、あまりにも直訳的だ）もあるので、私は大いに添削した。その結果、比較的流暢なものとなった」というふうに語っている。

つまり、例（23）のような、一般に直訳と思われるはずの訳し方は魯迅にとってはすでに意訳の範囲に入るということになる。従って、魯迅が考える直訳とは如何に「直」であるものかは、この発言から想像がつくのであろう。

4.1.3　《俄罗斯的童话》の訳例

『ロシヤのお伽噺』はゴーリキーが童話という名のもとで書いた大人向けの作品であり、それまでの魯訳童話に比べると、確かに意訳の雰囲気が多少増しているが、一般にされる意訳とは思えない。

（24）ＳＴ　或る若者は、醜悪なことであるとは知り乍ら、自分自身に言った――「俺は悧口だ。物知りになろう。そんなことは、俺達のところでは、至極、わけのない話だ。」そこで、彼は、部厚な書物を読み始めた、実際、彼は馬鹿ではなかったので、知識なるものは、多くの書物からなるべく手易く引証することであることを悟った[135]。

ＴＴ　一个青年，明知道这是坏事情，却对自己说---

“我聪明。会变博学家的罢。这样的事，在我们，容易的很。”

他于是动手来读大部的书籍，他实在也不蠢，悟出了所谓知识，就是从许多书本子里，轻便地引出证据来[136]。

回訳　或る若者は、醜悪なことであるとは知り乍ら、自分自身に言った――「俺は悧口だ。物知りになろう。そんなことは、俺達のところでは、至極容易な話だ」。そこで彼は部厚な書物を読み始めた、実際彼は馬鹿ではなかったので、知識なるものは、多くの書物から手易く引証することであることを悟った。

例（24）は『ロシヤのお伽噺』の始まりの一文とその魯訳であるが、全体からすれば相変

---

[135] ゴーリキイ著　高橋晩成訳（1930）『ロマンチック他十篇ロシヤのお伽噺』『ゴーリキイ全集』改造社 p. 323

[136] 鲁迅（2008）《俄罗斯的童话》《鲁迅译文全集》第 6 卷　福建人民出版社 p. 407

わらず直訳だと言えよう。また、この訳作が 1934 年に発表されたものであることに留意すべきである。即ち、魯迅が 1932 年から文芸論翻訳を手放し、小説の翻訳に再び転向し、直訳法もいささか緩まっているときに訳されたものだということである。

4.1.4　《小约翰》の翻訳法

『小さなヨハネス』を訳す際に、魯迅は「動植物の名称について非常に困難を感じた」ため、登場した動植物の訳名について友人にも協力を求め、関連資料や使用言語の異なる辞書を調べてもらった。その上、『動植物訳名小記』と１篇を付し、訳文の章立てに従い、それぞれの動植物の外国名、形、所属、特徴などを丁寧に解釈すると同時に、次のように、訳語の取捨選択の理由について説明している。

「第一章冒頭間もなくの植物 Kerbel はどうしようもなかった。これは傘形科に属し、学名を Anthriscus という。だが、中国の訳名が見つからないうえ、私はその意味が分からないので、凱白勒と音訳するしかなかった。幸いそれは一回出てきただけで、その後は出てこない。日本ではジャクといっている」[137]。

また『序文』の中で、「文章は直訳に近づけようと心がけたのと反対に、人名のほうは意訳した。…例えば、小人の妖精 Wiskit のことを最初「蓋然」と訳そうとしたが、結局『将知』と改めた。科学研究の冷酷な精霊、ドイツ語訳で Klauber というのを「挑剔者」に訳そうとしたが、当時陳源が別の文章で使った「挑発」という意味に誤解されないように、思い切って「穿鑿」と訳した。少女の Robinetta のことを最初に音訳しようとしたが、友達に調べてもらい、その語源に辿り着き、結局その意味から「栄児」と訳した」[138]と、魯迅は自らの翻訳法について説明している。

『小さなヨハネス』がドイツ語からの重訳である為、ＳＴとＴＴの対照分析は筆者の限界であるが、魯迅自らの説明から分かるように、動植物名の一部、そして象徴としての登場人物の名前の訳し方が銘々な方法で対処されている反面、全体は直訳であることが分かる。

4.2　「童話」翻訳の動機

---

[137] 丸山昇　訳『小さなヨハネス・動植物訳名小記』『魯迅全集』12 巻 p. 336

[138] 丸山昇　訳『小さなヨハネス・序文』『魯迅全集』第 12 巻 p. 326―329 を参照されたい。

無論翻訳方法は一口に直訳、もしくは意訳とは言い切れないものであるが、前述したように、全体的に見れば、魯訳の童話は意訳より直訳というべきである。

魯迅の童話翻訳の対象が決まるきっかけを、魯迅自らの判断や作者本人及び関係者の要請に分けることができるが、続いてその翻訳動機はどこにあるかについて、関連事項を概説しながら明らかにしたい。

4.2.1 《爱罗先珂童话集》の翻訳動機

ロシアの盲目の詩人、童話作家であるエロシェンコは、イギリス留学の経験もあるが、主に日本語とエスペラント語で創作をしている。1914 年に初めて来日し、秋田雨雀、神近市子らと友人となったが、1916 年に日本から離れ、凡そ三年間に亘り、タイ、ビルマ[139]、インドなど、東南アジアを放浪した。後に、ロシアの「十月革命」がきっかけで、エロシェンコはロシア人であるという理由で、「赤」だとイギリス政府に疑われ、インドから「やってきた日本へ戻れ」と追放され、再び日本に戻り、親友の神近から助言を受け、日本語で口述し、筆記してもらうという形で童話創作を始めた。しかし 1921 年に日本からも追放され、ロシアへの帰国も許されなかった。それで、中国の友人胡愈之の斡旋で上海に行き、その後、魯迅と同じ屋根の下で世話になりながら、北京大学等で教鞭を取っていた。1924 年にロシアに帰国。その作品が母国のロシア語に訳されたのは 1962 年であった[140]。

当時、エロシェンコの童話作品に対し、「観念が露骨的であり、子供には真面目すぎるし、大人には不真面目すぎる」と、早稲田大学や法政大学の人達からの批判があった。それに対し、親友の秋田雨雀が、観念の乏しい日本に火を投げてくれるのは寧ろ意味があると、エロシェンコのことを弁護していた[141]。

エロシェンコの童話は幻想に満ち溢れた世界を描き出し、童話という形を借り、「人間としての悲しみ」、「自由への憧れ」、「博愛」を訴えるものばかりであった。エロシェンコは他人のために溜息をつき、「博愛」を叫びながら愛するものが得られない悲哀を漂わせていながら、人々が悪夢の中で苦しんでいても、明るい未来への憧れを諦めてはならないとも懸命に訴え続けている。魯迅はその中からエロシェンコの純真な童心や美しい夢、大いなる

---

[139] 今のミャンマー。

[140] 高杉一郎　編訳（1993）『エロシェンコ童話集・解説』偕成社 p. 210－235 を参照されたい。

[141] 秋田雨雀　編（1921）『夜明け前の歌・序』『エロシェンコ創作集』叢文閣 p. 2 を参照されたい。

心を見て取り、その童話を訳して中国人に紹介している[142]。

たとえば、『狭い籠』の中で、自由精神に富んだ虎が羊、カナリヤ、金魚達を籠から放してやったが、自ら逃げようとしない相手達のことを見て、「人間の奴隷、自由を欲しくない見下げた奴隷」だと憤慨した。そして、夫の死後、妻も夫の死体とともに焚かれてしまうというインドの封建的習わしである、サティーのシーンを描写し、「人間こそ見下げた奴隷だ、人間こそ畜生だ、だが人間を目に見えない籠に入れて奴隷のように、畜生のように取り扱ってる奴はいったい誰だろう？」[143]とエロシェンコが虎の口を借りて問いかけている。

『狭い籠』について、エロシェンコは自ら血と涙で書いたものだと述べている。その際、魯迅はエロシェンコとまだ面識がなかったが、その国境を越えて他民族のために怒りの言葉を発し、悲しんでいるエロシェンコのことに対し、「インドに限って言っても、彼らは自分たちが人間らしく生きようと努めぬことを悲しまないばかりか、他人に『サティー』を禁止されると憤激するのであるから、たとえ敵がいなくとも、やはり籠の中の『下等な奴隷』なのである。広大なるかな詩人の涙は。私はこの他国の『サティー』を攻撃する幼いロシアの盲人エロシェンコを愛することは、自国の『サティー』を讃美してノーベル賞を受けたインドの詩聖タゴールより遥かに深いのである。私は美しくとも毒をもつ曼陀羅華を呪う」[144]と讃え、そして雨雀と同じように、エロシェンコが決して宣伝家、煽動家ではない[145]と弁護している。

魯迅が自らの意思で訳そうとしたのは、『狭い籠』、『沼のほとり』、『鶯の心』、『春の夜の夢』であり、それ以外はエロシェンコ自身の希望などに応えて訳した。とはいえ、魯迅自らが語ったように、それが翻訳に直面する際に、困難を感じ取って諦めようとしたものは多い。

例えば、『魚の悲しみ・訳者附記』の中で、魯迅が「この作品は特に天真爛漫とした口調で訳さねばならない作品であるのに、中国語では天真爛漫とした口調で文章を書くのが特にむずかしいときており、私が以前筆を擱いてしまった理由もここにあったのである。現在、訳し終わってはみたものの、本来のおもしろ味と美しさをずいぶん損なってしまっており、これは実に、著者と読者に対して申訳ないことである」[146]と語っている。

---

[142] 丸山昇　訳『エロシェンコ童話集・序』『訳文序跋集』『魯迅全集』第 12 巻 p. 259 を参照されたい。
[143] 秋田雨雀　編（1921）『夜明け前の歌・狭い籠』『エロシェンコ創作集』叢文閣を参照されたい。
[144] 丸山昇　訳『狭い籠・訳者附記』『魯迅全集』第 12 巻 p. 261－262
[145] 丸山昇　訳『沼のほとり・訳者附記』『魯迅全集』第 12 巻 p. 264 を参照されたい。
[146] 丸山昇　訳『魚の悲しみ・訳者附記』『魯迅全集』第 12 巻 p. 267－268

同じような趣旨を、『沼のほとり・訳者附記』中で、「残念ながら、中国語の文章はせわしない文章であり、童話の翻訳には最も不向きである。それに、私に才能がないので、原作のしっとりとした落ちつきと美しさを少なくとも半減させてしまっている」[147]とも、魯迅が述べている。

また『桃色の雲・序』の中で、魯迅が以下のように述べている。

「しかしながら、著者の気持ちとしては私がもっと早く『桃色の雲』を訳すことを望んでいたのである。…だが、これは私にとっては骨の折れることであった。もともと日本語というのはしっとりとした言葉であり、しかも著者はこの美質と特徴を巧みにものにしている。このため私は伝達の能力を大いに失ってしまっているのである。…やはり予想通り、原作の美しさの少なくとも半ばは損なわれてしまい、この仕事は失敗してしまった。言訳が立つのは『ないよりはまし』ぐらいのことであろう。ただその内容は、それでも残っているはずであるから、それによって読者の心も少しは慰められるかもしれない」[148]。

エロシェンコは純白な童心を持っており、赤の他人の不幸を目にすると、悲しんだり、憤慨したりする、いわゆる同情心に富んだ持ち主である。赤子の心を失わず、すべてのものに同情し、国境を越えて「自由」や「博愛」を訴え続けるエロシェンコの調和かつ寛大的な心に、魯迅は強く共鳴を起こし、その大いなる平和的な精神、及び「挫けずに努力すれば、いつか春が必ず訪れてくるだろう」というエロシェンコの信念を中国の人々に紹介しようと思うからこそ、その童話を翻訳対象にしたのであろう。それが魯迅のエロシェンコ童話翻訳のメイン動機だと思われる。無論、中国語はもっと改良すべきだというのも、もう一つの動機になるのであるが。

4.2.2　《小彼得》の翻訳動機

原文作者ヘルミニヤ・ツール・ミューレンは社会主義の作家の一人であり、人間の生きる権利、そしてその権利は闘いによって手に入れなければならないと主張している。

作品の中で、病気の子供ペーター―が石炭、マッチ箱、水瓶、毛布、鉄瓶、雪割草達との出会いをきっかけに、圧迫されている人々の様々な話を聞いた。ミューレンは童話という形を通し、人々が早く目を覚まし、団結して世の中の不公平と闘わなければならないと強く訴え

---

147 丸山昇　訳『沼のほとり・訳者附記』『魯迅全集』第 12 巻 p. 264
148 丸山昇　訳『桃色の雲・序』『魯迅全集』第 12 巻 p. 271

ている。

ミューレンの想定読者が同国の労働者の子供達であるのに対し、魯迅は子供ではなく、赤子の心を失っていない大人を想定読者に設定している。それは、作品が中国に輸入されると、事情がいろいろと変わったからである。

まず、中国の労働者の子供達には文章が読める者が少ない。たとえ読めても、数多くの見知らない事物が登場している上に、その作品に関する背景知識もないため、子供たちにはなかなか想像がつかないのである。とりわけ中国では童話作品の数が少ないため、反抗精神に富んだ原文作者の主張が一旦童話という衣を被ると、戦いの残酷さが幾らか隠されてしまうからだ[149]と魯迅は考えている。

世の中のあらゆる圧迫に反抗しなければならない。そのためには、まず目を覚まさなければならない。そして団結し、すべての不公平と闘って初めて、自由や平等を手に入れることが可能になるというのが、社会主義者のミューレンの訴えるところである。魯迅がミューレンのこの抗争精神に溢れる考えに同感し、翻訳対象として『小さいペーター』を選び取ったのであろう。

4.2.3 《俄罗斯的童话》の翻訳動機

ゴーリキーは決して童話作家とは言えないが、「童話」という名のもとで『ロシヤのお伽噺』16 篇を綴っている。そして、作品の中で「これがあくまでも童話であることを忘れないでほしい」と再三読者に念を押しているのだが、実はそれが子供に読ませるために書かれたものではない。「童話」という衣をかぶらせていながらも、各面からロシアの国民性の諸相を描いているのである。

筆はいつも一部の人の手の中に握られているが、ゴーリキーは下流出身ではあるものの、幸運にも文章を書くことに秀でている。また彼は上流社会の者との交際も多い一方、上流という立場から物事を見ているというわけではない。上流社会の様々なごまかしを鋭く見抜いていながら、その筆で暴いている。

このように、旧ロシア人の生き方や旧弊がゴーリキーの手によって容赦なくリアルに描き出されている。中国でも同じような問題を抱えていると考え、魯迅はそれが世界的な作品だと讃えている。

---

[149] 魯迅（2008）《小彼得 序言》《鲁迅译文全集》第 5 巻 福建人民出版社　p.5 を参照されたい。

『ロシヤのお伽噺』の翻訳動機は厨川の『苦悶の象徴』、『象牙の塔を出て』の翻訳動機と酷似している。ゴーリキーは『ロシヤのお伽噺』において、自民族の病を晒しだし、猛烈に批判している。それによって、民衆が目を覚まし、我が身を振り返って内省するようになればと、ゴーリキーは望んでいる。この点においてはまさに厨川の考えと合致しているのである。

魯迅はゴーリキーの考え方に共感を覚え、同じ持病を持つ自国のために、翻訳という手段で「良き薬」を中国に持ち込み、自国の病を治そうとしていた。従って、その翻訳動機は「民魂造り・社会改造」という魯迅の初心と繋がっていると思える。

4.2.4　《小约翰》の翻訳動機

魯迅は 1906 年に『小さなヨハネス』のドイツ語訳を丸善書店に委託し、取り寄せの形で購入した後に、訳そうとしたのだが、力不足と感じて放置した。結局 20 年後、友人の斎宗頤の協力のもとで訳了した。

その作者ファン・エーデン（F. van Eeden）（1860-1932）はオランダの詩人、童話作家であるとともに、精神医学者でもあり、17 世紀のオランダ哲学者スピノザの汎神論（自然神論）に共感を覚えたと同時に、インドの神秘主義の哲学にも興味をもっている。『小さなヨハネス』は長編童話であり、「象徴と写実の童話詩」とされている。1887 年に発表され、1900 年にドイツ語に訳され、1926 年に魯迅の手によってドイツ語から重訳され始めた。

『小さなヨハネス』の内容は現実と幻想の結合である。文言は子供の言葉遣いに近いが、哲学的な言い含みが多いため、大人にとっても難解なものである。ファン・エーデンが昆虫達の口で人類の持つ悩みを語らせながら、人間性の根本を問いかけている。魯迅は『小さなヨハネス』が大人の童話でありながら、一般の大人の童話を超越していると評価している。

因みに、『魚の悲しみ・訳者附記』の中で、魯迅が「この作品の一切のものへの同情は、オランダ人エーデンの『小さなヨハネス』と非常に類似している。『他の者が捕らえられて殺されるのを見ることは、私には自分が殺されるよりも苦しいのだ』というに至っては、私たちがロシアの作家の作品においてしばしば出遇うことのできる、かの地の偉大なる精神なのである」[150]と語っている。

ところで、1927 年 9 月 25 日に、魯迅は台静農への返信の中で、ノーベル賞受賞者候補を拒否していた。その理由としては、「ファン・エーデンのような優れた作品は私にはとても

150　丸山昇　訳『魚の悲しみ・訳者附記』『魯迅全集』第 12 巻 p. 267－268

書けないし、彼さえ受賞していないので、梁啓超はもちろん、私にもそういう資格がない。中国人だということで、特別な優遇で受賞させてくれるというのであれば、かえって中国人の虚栄心を増長させてしまう」のように語っている。ここからも魯迅が原文作者及びこの作品に対し、如何に讃えているのかが分かるのであろう。

ファン・エーデンが人間性の矛盾を登場人物の口を借りて語らせ、人々が人生の終着点まで如何なる姿勢で歩んでいくのかを冷酷な筆鋒で描き出しながら、悲しみの源、そして人間性の根本について人々に考えさせている。

ファン・エーデンは物事を冷静に語る一方、人々に問いかける形を取るだけで、故意に自分の主張をはっきりさせない。それに対し、魯迅は常に人間性の欠点を暴き出して猛烈な批判を加え、国民性の改善を強く訴えている。しかし、人々に人間性の根本について真剣に考えてほしいという点においては、両者は酷似しているのである。これこそ魯迅がファン・エーデン、及び『小さなヨハネス』を口惜しまなく讃える理由であり、そしてその翻訳動機ではないかと考えられる。

考察の結果、まず、童話の魯訳は、象徴としての登場人物や動植物名の一部だけが確かに意訳されてもいるが、文章全体からすれば、相変わらず直訳であることが分かった。具体的に言うと、時期的に早いエロシェンコ童話、そしてエーデンの『小さなヨハネス』が極めて直訳的である一方、『小さいペーター』の魯訳を皮切りにそういう雰囲気が多少薄まってきたが、いずれも直訳の範囲を出ていないのである。

それから魯訳の「童話」の多くが哲学的な言い含みに満ち溢れており、子供のための童話、いわゆる「童心童話」ではなく、まさに「優孟の衣冠を借って」人間性の根本を追究しながら訴えるものだということも分かった。

「国民性改善・社会改革」は、童話翻訳のみならず、魯迅の文学活動のメイン動機だといえる。ＳＴの中で訴えられる「人間性」、「自己批判」、「自由」、「抗争」、「博愛」が、魯迅が常に考える「立人」（個々の人間が独立性を持ちながら成長すること）、そして「立他」（いわゆる他人の「自己」を尊重する）と酷似するものであり、魯迅の中に強く響きを起こさせたため、それらの童話は魯迅の翻訳対象になったのであろう。

5　まとめ

上海移住がきっかけとなり、魯迅と新月社といった文学社団との間に論争が起こった。無

産階級の文芸論に無知だと批判された魯迅は不満を覚え、1928 年後半から、ソ連文芸論の訳業に本格的に取り組み始めた。魯迅は従来通り、直訳法・抵抗式ストラテジーといった翻訳方法で文芸論を翻訳している。しかし、STそのものの難しさや翻訳法の選択が原因となり、文芸論の魯訳は難解なものとなっており、梁実秋に「硬訳」、「死訳」だと指摘された。ところで、同様な翻訳方法で訳された小説の場合はそのような傾向がそれほど強くない。文芸論翻訳の難解さは、STそのものの難しさ、魯迅の翻訳方法、魯迅自身の理解の問題、そして間接訳に起因していると考えられる。ところで、後期後半（1932 年）に入ると、再び小説翻訳に転向した魯訳は、直訳・抵抗式翻訳の雰囲気が些か薄まってきている。

童話翻訳の場合は、直訳より意訳のほうがのぞましいと、かつて魯迅は反省していた。それに自らの一部の童話翻訳は意訳だとも語っている。魯迅自身の言説を鵜呑みにしてその童話翻訳の翻訳法は意訳だという研究者もいる。しかし、訳作の出来栄えは魯迅自らの言説とあわないものであり、花や動物の名前といったごく僅かなところを除けば、極めて直訳的である。そこから魯迅が考えている直訳とは如何に「直」であるかは想像がつくのであろう。また、魯迅の童話が読みやすいのは、意訳の上に子供がその読者層に当たるため、当然だと、魯訳の研究者である顧が見ている。しかし、魯迅が訳した童話の大半は、童話の衣を被らせた成人向けのものである。たとえ言葉遣いそのものはやさしいものでも、言い含みや哲学的な話が多々あるため、簡単ではないのである。童話という形で、登場人物（花や動物も）の口を借りて、社会の暗黒、反抗精神、人間性、悲しみ、苦しみ、平和、博愛を訴えている。このように、魯迅は社会文明批判のための訳業を続けていた。

第 6 章　魯迅翻訳の再認識

この章においては、魯迅翻訳について再認識してみる。1 において、魯迅の翻訳法の現実的意義を確認したうえで、現代中国語、現代中国文学及び現代美術の発展への貢献を検討してみる。2 において、魯迅の翻訳活動とその創作活動との相関について分析を試みる。3 において、中国で神格化された魯迅イデオロギーを議論したうえで、その訳材との相関を論じてみる。

1　魯迅翻訳の歴史的意義

魯迅の翻訳方法及び翻訳の動機付けを分析してきたが、その翻訳の営みがどのような現実的意義を持つものかを解明する必要がある。

魯迅は少数派的な存在であり、主流ではないが、その「持ってこい主義」は、中華中心主義に反対し、自文化の欠点について反省する姿勢で古今中外のあらゆる思想結晶から人類の発展に有益と考えられるものを採り入れ、批判しながら吸収するという流儀である。

そのため、専制、人道、民主、平等、革命のいずれの理論、理念、流派、思潮に対しても魯迅は常に懐疑的な態度を持ちながら、自分の考えや疑念を表に打ち出し、人々に考えさせている。

魯迅は勘の鋭い持ち主でもある。1927 年 2 月に、『声なき中国』という講演の中で、「中国で改革を進めるのがなかなか難しいことだ。壁に窓を作ろうと相手に相談してもなかなか乗ってくれないから、壁に窓を作ろうと思うならば、相手に天井に穴を開けようと相談したほうがいい。そうすれば、相手が妥協し、壁に窓を作ったらどうだと、自ら申し入れてくれるのだ」というふうに語っている。

即ち、魯迅は中国で改革が難しいことだと洞察し、過ちを正そうと思うのならば、思い切って度を過ぎたやり方でやったほうがいいと考えている。この考え方は、彼の「直訳」、「抵抗式・異化」翻訳に反映している。

1.1　「直訳法」・「異化翻訳」の現実的意義

ヴェヌティ（1995）[151]が指摘したように、度の過ぎた帰化は民族主義を表すものであり、

---

[151] 韦努蒂（Lawrence Venuti）著　张景华 白立平 蒋晓华主译 《译者的隐形-翻译史论》（2009）香港理工大学翻译研究中心编 外语教学与研究出版社

言語文化間の差異を抹殺することによって、本来ならば気付くはずだった原文作者の筆致、作品の本来の姿、或いは異質的なものが読者に知られないまま埋まってしまうことになる。

結局、訳者が読者の学力を信用せずに、勝手に読者の知る権利や学ぶ意欲を気付かれずに巧妙に奪ってしまうこととなる。

このような翻訳法に断然と反対している魯迅は、場合によっては、中国語として自然な表現を使わず、故意に見慣れない表現を採択し、自言語表現に慣れてきた読者に他言語、他文化への好奇心を惹起させながら人々に考えさせている。

帰化翻訳は「自然さ」を求めている。しかし、そもそも新しいものはいきなりに「自然的」になり得ることはない。当然、翻訳の場合も当てはまる。

しかし、通時的に考えると、不自然なものが時の経過とともに、受容されれば、自然なものになってしまう。一方、それがいつか優れたものの出現によって、淘汰され、自然なものからまた不自然なものになるのである。

魯迅は自言語文化に陶酔せずに、従来の中国語の語彙・語法・表現を豊かにするために、「直訳法」、「抵抗式・異化ストラテジー」といった翻訳方法を用いて異質なものを中国語に新鮮な血液を吹き込もうという試みを行っていた。そこには原文志向という翻訳理念もあるが、魯迅は普通に言われる「翻訳」より、もっと高い次元で「翻訳」を通じて自国言語を改良しようと考えているのである。規範を破るからこそ新しい規範が生まれるという「型破り」の試みは、未だに「目標言語文化側に近い、流暢かつ美しい」訳文が求められる今の翻訳界の実践場に異なる声を提供しており、有益なものだと思われる。

実は帰化・異化という二項目の対立ではなく、理想として流暢でわかりやすく、更に原作の風姿をそのまま保持できる訳文が望ましいと魯迅は述べている。結局両立ができなくなり、魯訳は後者の方に身を寄せた。

魯迅の翻訳に対する発想、即ちその「翻訳豊饒観」は異質的なものをオープンの姿勢で積極的に取り入れ、自文化と融合させ、それで「世界に落伍せずに、固有の血脈を保ち」ながら、「自分」が豊かに成長していくとともに、「他人」のことをよく理解し、異文化コミュニケーションの場で余裕が持てるようになると、我々に示唆を示しているのである。

無論、魯迅の翻訳は当時の歴史的背景とは切り離せないものである。ここで魯迅の訳文が現代中国語として「自然」かどうかを議論するのではなく、その翻訳実践の試し及びその発想そのものは、グローバル化が進んでいる今でも、依然として大中華主義という色濃い中国

社会、ひいては保守的社会には必要なものだと思われる。

1.2　現代中国語の発展への貢献

魯迅の翻訳は、翻訳界に示唆を示しているだけではなく、現代中国語の発展にもそれなりの貢献をしている。魯迅は翻訳という手段で日本語の語彙を中国語に移入しようと努めながら、句法の導入にも力を入れていた。陳（2017）が、魯訳から出た“可能”と“必要”のような「日化」同形語彙が 4060 もあると指摘した上で、中国語と日本語における使われ方についても触れている。また同研究で“关于”（～について）や“对于”（～に対して）といった７つの文法語から、欧化した日本語からの影響をめぐって考察を加えた。その統計から、翻訳によって魯迅が如何に日本語から積極的に語彙や文法を移植していたかわかる。

無論、そのような「日化」同形語彙の中には、“手续”、“假说”、“人气”といった現代中国語として定着化したものもあれば、“默杀”、“座长”、“大变事”といったそうでないものもある。その全ては魯迅が初めて中国語に導入したものでもない。しかし、魯迅はそういった数多くの語彙を意図的に自分の翻訳や創作に移植し続け、結果として、それほどではないが、現代中国語の発展にそれなりの影響を与えているのである。

現在では、魯迅の作り上げた新語や魯迅の影響で広く使われたもの、いわゆる「魯迅語彙」は《现代汉语词典》に収録されている。その中に「高慢 归省 措置 论难 同调 横暴 活气」のような､中国語としてまだ少々違和感の持つものもあるが､「捕杀 彻夜 触目 存放 定规 负疚 鄙弃　救助」のような、現在では普通に使われるものが大半を占めている[152]。

ニーチェの影響を受け、魯迅は精神的に痺れた人々の虚しさを痛感し、“超人”の反義語として“末人”という言葉を作った。それと同様に、同情心や反抗精神がない人々のことを“看客”と言っている。民衆の目覚めを願っている魯迅は、「立人」や「民魂」というような言葉も作り上げた。このような語彙は一般に中国語らしくないと思われるのであろうが、思慮深くて一理があるように思える。

魯迅の創作にも“笔祸”、“死火”、“碰壁”、“学棍”、“中间物”、“即小见大”のような魯迅の作った語彙や、“铁屋子”、“过客”のような魯迅の使用で意味が変わったり、広く使われたりする語彙も数多くある[153]。

語彙の移植と同時に、日本語の句法や表現及び欧化された日本語の句法や表現も魯迅の手

---

152 孔昭琪（2010）〈《现代汉语词典》对“鲁迅词汇”的收录过程〉《鲁迅研究月刊》を参照されたい。
153 张全之 徐璐（2018）〈鲁迅原创词汇（短语）汇释〉《鲁迅研究月刊》を参照されたい。

によってその翻訳や創作の中に持ち込まれた。語彙レベルと同じように、その中に違和感を覚えるものもあれば、現代中国語として完全に定着化されたものも少なくない。

後述のように、翻訳言語と創作言語が融合しつつある中で、個性のある「魯迅言語」は次第に形成され、中国の白話文運動に貢献をしている。絶えずに試みを重ねた魯迅の翻訳実践及びその文学活動が、現代中国語の形成に影響を及ぼしたという事実は否定できない。

ただし、魯迅の借用語の導入は現代中国語に影響を与えているものの、後述のように、主語の省略、多項目修飾、語順調整といった翻訳での試みは、中国語の形成にそれほど影響を及ぼしていない[154]。すなわち、魯迅の翻訳が現代中国語の形成への影響は限られたものであり、梁啓超のような者ほどではない[155]。中国語の形成に関しては、本研究のターゲットではないため、それ以上論じないことにする。

1.3　現代中国文学の発展への貢献

魯迅は自らの翻訳実践や創作に励んでいると同時に、「未名社」のような文学社団の結社や運営にも尽力し、翻訳対象の選択から製版や出版まで気を配りながら若手翻訳者達に協力していた。魯迅はロシアの文学作品を日本語経由で訳すと同時に、数多くの作家を翻訳（若しくは別の形）を通じて中国に紹介した。日本からいうと、芥川龍之介、夏目漱石、森鴎外、菊池寛、武者小路実篤、有島武郎らが挙げられる。世界からいうと、バイロン、シェリー、ニーチェ、ルソー、ユーゴー、トルストイ、ヴェルヌ、ゴーゴリ、ゴーリキー、ドストエフスキー、アンドレエフ、チェーホフ、ルナチャルスキー、トロツキー、ファン・エーデンらが挙げられる。このような現在では知られて当然と思われる作家達の作品は、魯迅の影響のもとで若手翻訳者によってロシア語か英語経由で中国語に盛んに翻訳されている。例としては、曹靖華の《铁流》、《烟袋》、《第四十一》、李霁野の《黑假面人》、《往星中》、《不幸的一群》《被侮辱与被损害的》、葦素園の《外套》、《黄花集》、《托尔斯泰底死与欧罗巴》、葦叢蕪の《罪与罚》、《穷人》などが挙げられる。『魯迅全集』に収録された『手紙』から分かるように、そのいずれも魯迅が翻訳対象として勧めたり、実際に添削したり、序言を書き添えたりし、関与したものである。魯迅及び魯迅翻訳の影響で曹靖華や葦叢蕪のよう

---

[154] この点に関しては、本章の 1.4 を参照されたい。

[155] 「新文化運動」が発足する前に、梁啓超がすでに「詩界革命」、「小説界革命」及び「史界革命」を提唱し、その中でわかりやすい話し言葉で書かれる「新文体」を推奨し、当時の社会で大きな影響を及ぼした。郭沫若が『文学革命の回顧』（1989　p. 88）で「文学革命の発端に関しては…清末の資産階級の目覚めに遡ることができる。その時代の代表者は、梁任公（梁啓超のこと）である。」と、梁啓超の貢献を高く評価している。

に、ロシア文学の訳介に大きな貢献を残した者もいれば、楼適夷、馮雪峰、胡風、殷夫、孫用、梅川といったような、後に有名になった部外者もいる[156]。

晩年、魯迅は茅盾や黎烈文と『訳文』月刊を創刊し、翻訳作品の刊行に努めた。『訳文』は一年間ほどで停刊したが、三人を主力として発表された多くの訳作が読者に大きな影響を与えた。茅盾や巴金のような文学巨匠も魯迅からの影響を受けていた。1953 に『訳文』は復刊し、茅盾がその編集長を務めた。それが今では広く知られている『世界文学』の前身である。

現代中国文学の発生は現代中国語の発生によるものである。梁啓超の言語学理論、胡適や陳独秀の白話文理論が、新文学の進むべき方向を現代中国文学に導くのには、大きな役割を果たした。しかし、それよりもっと重要なのは実際の言語使用と文学実践である。なぜなら、現代中国語と現代中国文学が実際の言語活動の中で形成されたからである。その実践者たる代表者は魯迅なのである。日本の「言文一致運動」における二葉亭四迷の『浮雲』のように、魯迅のデビュー作『狂人日記』は白話文で書かれた「中国現代小説の初作」[157]だという定評となっている。現代中国語は膨大な材料をもって規範化されつつあるが、逆に思惟様式から言語の使用まで文学活動を規定している。現代中国語と現代中国文学の発生は当時の文学者達が力を合わせた結果であるが、魯迅の翻訳実践ひいては文学活動はそれらに材料を提供しており、とりわけ現代中国文学の形成に大きく貢献している。そういう意味では、魯迅の翻訳や文学活動を研究することにより、現代中国文学の発生や発展のプロセスも覗える。現代中国文学を語るには、魯迅及び魯訳は欠かせない存在だと言えよう。

1.4　中国現代美術の発展への貢献

魯迅は中国現代美術の発展にも多大な貢献をしている。美術理論の翻訳はむろん、版画をはじめ、様々な美術作品も魯迅によって中国に紹介された。

すでに触れたように、魯迅は厨川の『苦悶の象徴』、ルナチャルスキーの『芸術論』、そしてドイツ画家グロスの『芸術都会のパリ』といった多くの文芸論を翻訳している。魯訳『近代美術史潮論』（板垣鷹穂　著）は、19 世紀前後 100 年ほどのヨーロッパの美術史を語ったものだが、その中に 140 枚ほどの挿絵が付けてある。また、魯訳のチェーホフの童話『悪い子』の中には版画の写真がたくさんある。それらを翻訳したのは、内容よりその中の絵や版

---

156 顧鈞（2009）《鲁迅翻译研究》ｐ.221-236 を参照されたい。

157 《鲁迅大辞典》编委会（2009）《鲁迅大辞典》人民文学出版社　ｐ.546

画を紹介しようと思ったからだと、魯迅自ら語っている。

魯迅は自分の訳品や創作、ひいては自分の編集する作品の表紙のデザインにもその中の挿絵にもこだわっており、作品の内容や趣旨に合わせ、友人や教え子達に頼んで適切な絵や写真を調達していた。刊行物に使われた芸術作品の中に、版画のほか、写真、彫刻、油絵、スケッチといった様々な種類がある。このように、魯迅は芸術作品にある生命力を洞察し、美術を文学活動と繋げてその効果を強め、民衆啓蒙の試みをしていた。美術作品に表現された精神を悟り、示唆を得れば人々の意識も変わるだろうと魯迅は願っている。

中国近代の版画運動は魯迅によって提唱されたものである。1928 年に魯迅は柔石らと朝花社を結社してヨーロッパの版画を紹介し始めた。それ以来魯迅は英、米、仏、伊、日、露といった各国の版画を絶えずに紹介すると同時に、版画展示会の開催や版画講習会の招集にも尽力していた。魯迅が所有した版画は 4000 以上だと言われている。自費で買い求めた外国版画は 2100 以上もあり、16 カ国 200 名の版画家の作品に及んでいる。画家陳丹青によると、魯迅は高い鑑賞力の持ち主だという。1931 年に版画学習者のために、版画講師の内山嘉吉に頼んで講習会をもうけたが、魯迅は版画を提供している上に、内山の通訳を務めながら、版画学習者達に詳しく説明していた。この 1931 年は中国版画運動の元年とされている。講習会終了後、魯迅はコルヴィッツの 7 つの版画作品をお礼として内山に贈った。また、学習者のために、魯迅は大金や労力を惜しまずに、ドイツのコルヴィッツ、メイフィールド、ベルギーのマーセレール、ソ連のファヴォルスキー、クラフチェンコといった一流の版画家の名作を買い漁って印刷し、12 冊の作品集を作り上げた。魯迅は《艺苑朝华》のような画集を 10 種類以上編纂すると同時に、多くの版画社団の指導をしていた。数多くの青年が魯迅の影響で版画創作という道へ足を踏み入れた。また、魯迅の出資により、青年達の作品の一部は中国初の木版画作品集として出版されただけでなく、海外でも展示されていた。劉岘、江豊、胡一川、夏朋、力群、陈烟桥、李烨のような、魯迅の影響を受けた版画家が多くいる。その貢献を記念するために、1991 年に中国版画界最高の賞『魯迅版画賞』が設立され、魯迅も「中国新興版画の父」とされている。このように、文学の伝播や影響の面においてだけでなく、美術啓蒙の面においても魯迅及び魯訳は大きな功績を残しているのである。

2　魯迅の翻訳活動とその創作活動との相関

魯迅の翻訳は現代中国語、現代中国文学及び現代中国中国美術に貢献しているだけではなく、その本人の創作にも影響を及ぼしているのである。

翻訳と創作が魯迅の文学活動の両輪であり、魯迅は翻訳を創作と同様に重んじている。1921年に、創造社の郭沫若が『時事新報』に人への手紙を公表し、「創作は処女であり、翻訳は仲立ち女に過ぎない」と主張した。郭の論調を猛烈に批判し、翻訳と創作を同様に重視し、片方を抑圧すべきではないと魯迅が主張し、翻訳を重視することが、実は創作を促すことでもあるという[158]。

かつて林語堂がユーモア小品の創作に夢中になっていた。魯迅は、そのような創作より、外国の優れた文学作品を訳したほうが中国のためになると林に勧めた。それは当時の中国では、創作にとって参考になる翻訳作品が足りないと、魯迅が実感していたからであろう。

翻訳は創作より簡単でもなければ、新文学の発展にとっても、人々の成長にとっても有益なものだと魯迅は見ている。また、魯迅は翻訳と創作だけではなく、軽視されがちな批評や紹介をも力強いものと見ており、その重要性を強調している[159]。

魯迅の翻訳の営みはその創作と深いつながりを持っている。創作の構文から描写の筆致までは、関連魯訳からその痕跡が見えるものが多い。翻訳がなければ、魯迅の創作の姿も違っていたのであろう。

2.1　翻訳が創作の内容に与えた影響

1903年に生涯初の訳作『哀塵』を発表して以来、魯迅は翻訳に力を注ぎ続けており、15年後の1918年に『狂人日記』をもって作家として世の中に名を馳せた。後に小説や雑文はたくさん出されているものの、思想面においては、その翻訳と相通ずるものが多く見受けられる。

例えば、藤井省三（2011）において『故郷』はチェーホフの『省会』をまねた創作だと指摘されている。崔琦（2015）において『端午節』は森鴎外の『遊び』と互文性を持っていると指摘されている。賀勤（2019）において雑文集『野草』で語られた「夢」、「存在」、「希望」、「愛」、「憎み」は、ファン・エーデンの『小さなヨハネス』の内容や思想と相通ずるものが多いと指摘されている。

因みに、ほかの学者が指摘したように、魯迅が多くの日本語作品及び訳品を読んだため、自らの翻訳に限らず、読んだものから示唆を受けて仕上げた創作もたくさんある。

例えば、ソログープの『蝋燭』は魯迅の弟周作人によって翻訳されたものである。その文

---

[158] 《关于翻译》《鲁迅全集》（2005）第四巻 人民教育出版社 p.568を参照されたい。

[159] 《新的世故》《鲁迅全集》（2005）第八巻 人民教育出版社 p.185を参照されたい。

語訳は『域外小説集』に収録されているが、白話文訳は1919年に『新青年』に再掲されている。魯迅の『明日』は『蝋燭』の主題と構造を模倣しながら、創造的に仕上げた創作だと、彭明偉（2008）が指摘している。

逆に、魯迅の創作言語がその翻訳に持ち込まれていると指摘されている。例えば、『死せる魂』の魯訳の中に“是聡明，聡明，第三个聡明。”（利口、利口、第三の利口だ）という表現が出てきている。かつて友人の張定璜が魯迅の小説の特徴について“第一个，冷静，第二个，还是冷静，第三个，还是冷静。”（第一は、冷静、第二は、やはり冷静、第三は相変わらず冷静だ。）と評価したこともある。が、後に成仿吾が『我が文学革命を完成せよ』という文章で当時の五・四新文学を批判する際に、「暇、暇、第三の暇だ」と揶揄したため、気になった魯迅は、故意にこのような奇抜な表現をまねて自らの翻訳に持ち込んでいたと、李松睿（2016）が指摘している。

また、『藤野先生』と夏目漱石の『クレイグ先生』、そしてシェンキェーヴィチ[160]の影響と魯迅の『阿Q正伝』との関りなどが挙げられる。このように、魯迅の創作はその翻訳と緊密に繋がっているのである。

2.1.1　ゴーゴリと『狂人日記』

魯迅は日本留学時代からゴーゴリの思想に共鳴を覚え、その作品について賛美の辞を絶たせなく、翻訳しようと思っていた。しかしその夢は生涯最後の訳作『死せる魂』をもって、未完成のままで終わった。

ところで、創作としてのデビュー作『狂人日記』はゴーゴリと深い繋がりを持つものである。

魯迅の『狂人日記』はゴーゴリの同名小説のタイトルになぞっただけではなく、同じく日記という形式をとっており、筆致もそれと似せたものである。魯迅は実際にゴーゴリの『狂人日記』を訳していないが、その影響を受けたことが明らかである。

ゴーゴリの『狂人日記』においては、封建専制社会の中で抑圧や苛めを受け続けた下っ端の役人の、嫌々ながらも上司にこびへつらう一方、自分より地位の低い人のことを見下す姿が描かれている。ゴーゴリは精神的に病んでいて、人格のねじ曲がった役人の奴隷根性を緻密な筆致で描写しながら、実社会の暗黒を晒させている。

---

[160] シェンキェーヴィチの作品は魯迅が直接的に訳していないが、重要視している。周作人が訳したシェンキェーヴィチの作品が『域外小説集』に収録されている。

それに対し、魯迅の『狂人日記』において、魯迅は主人公「私」に人間が人間を食う社会への恐怖感を語らせながら、暗黒時代を訴えている。「私」は加害者を批判しながら、自分が被害者であると同時に、その加害者の一員でもあることを悟っている。社会批判や自己批判の意識に満ち溢れた心理描写を通じ、魯迅は封建制度や道徳倫理を批判しながら、その虚偽を暴露しようとしている。

ただし、それぞれの主人公を見比べると分るように、ゴーゴリの描いた下っ端の役人は現実社会に不満を持っていながら、窮地に追い込まれた自分が上層社会に上がるのを夢見ている。それに対し、魯迅の描いた「私」は現実社会や封建道徳に妥協せず、戦い抜こうとする姿を見せている。

従って、ゴーゴリが実社会の暗黒さだけに着目しているのに対し、魯迅は社会を批判すると同時に、民衆を啓蒙しようと努めている。これが魯迅の文学活動の初心でもあり、思想の深さでもあると言えよう。

2.1.2　翻訳『沈黙』と創作『薬』

魯迅が訳したアンドレーエフの『沈黙』は周作人との共訳『域外小説集』に収録されている。『沈黙』において、冷血な牧師が自分のせいで自殺した娘や麻痺した妻に罪を感じて後悔し、沈黙のうちに正気を失うことが描かれている。

後の創作『薬』について、アンドレーエフの「陰気」を帯びていると、魯迅が自ら語っている。『薬』において、華老栓夫婦が息子の喘息を治すために、殺害された革命者の血で作られた「人血マントウ」を買い求めることが語られている。民衆のために命を捧げた革命者のことに無関心で麻痺している人間の諸相は、魯迅の筆によって巧みに描かれている。

アンドレーエフは『沈黙』の中で、死や恐怖を結びつけながら、墓場での心理描写などを通じて陰気な雰囲気を極力に醸し出している。魯迅の『薬』の最後のシーンにおいても、墓場の描写を通じて不気味な雰囲気を漂わせている。

しかし、アンドレーエフが単に陰気な雰囲気を盛り上げるために、環境描写や心理描写に着目し、主人公の後悔を語っている。それに対し、魯迅は民衆の迷信思想への描写を通じてその支えとなる封建制度の害悪を暴露すると同時に、殺害された夏瑜の墓の上の花輪で後継者がいることを暗示し、読者に希望を与えている。それが、魯迅の創造であり、思想の深さの表れだといえよう。

2.1.3　翻訳『労働者シェヴィリョフ』と創作『髪の話』等

1920 年に、魯迅はロシア個人的無政府主義者作家アルツイバーシェフの『労働者シェヴィリョフ』を訳した。

主人公シュヴィリョフは個人的無政府主義者であり、政府に対抗するストライキの発起に参加し、民衆のことを救おうとした。しかし、そのストライキが敗北し、彼は逮捕されて死刑を言い渡された。逃走中、彼は警察や自分の救おうとした民衆に追われた日々を送っていた。彼は自分の革命的行為を理解してくれない民衆に裏切られた気分となり、態度を一変して世の中のすべてを敵視しはじめ、結局劇場で人々を銃で撃った。この一冊に収まっているのが、絶望や憤慨に満ち溢れた作者アルツイバーシェフの厭世の感情だと、魯迅は語っている。

同年 10 月に魯迅の創作『髪の話』が発表された。魯迅はおさげ切りの問題に託して主人公 N に辛亥革命の不徹底さを語らせながら、革命者の犬死、そして支配階級に翻弄されている民衆の虚しさを描き出し、民衆の動かしがたい奴隷根性を批判すると同時に、民衆の目覚めを願っている。

主人公 N がアルツイバーシェフの言葉を借りて、理想主義者に「君達がこの人達の子孫のために黄金時代を予約してやったが、この人達に何をやれるのか」と追い詰めている。また、1923 の講演『ノラは家出をしてからどうなったか』においても、同じ言葉を引用し、魯迅は「もし道が見つからなければ、私たちに必要なのは夢だが、それは将来の夢ではなく、現在の夢なのだ」と語っている。

魯迅はすべての事物に対し、懐疑的な態度を取っており、常に批判的に物事を考えている。魯迅の懐疑主義は革命への態度においても明らかなものであり、その訳作と創作でも見受けられる。

創作『孤独者』の中において、主人公魏連殳の社会への復讐が描かれている。変わり者と見られる知識人の魏連殳は村八分にされながらも、弱い者に同情し、未来への希望を持っていた。しかし、自分の希望が現実社会に砕かれ、ついに周りの冷たいまなざしに耐えず、彼は次第に孤独の窮地に陥った。結局彼は自らの信念に背き、それまでと真逆な態度を取り始め、苦痛や絶望を抱きながら社会に復讐した後、自害した。魯迅はこのように、魏の口を借りて虚しい理想や社会変革の仕方への疑念を示すと同時に、自らの悩みを晒しながら、進むべき道を探っている。

創作の『示衆』において、麻痺した民衆の諸相はより一段と鮮明に描き出されている。革

命者が殺されるのにもかかわらず、無関心な態度を取っている人々の姿をきめ細かく描写することにより、魯迅は当時の国民性の醜悪を暴露している。このような民衆の悪い習性は無知、精神的な虚しさに起因していると魯迅は考えている。

創作『影の告白』において、闇に呑まれても明るさと暗さの間に生きようとしない、明るい未来のために身を捧げた「影」のことが描かれている。そこから当時魯迅の苦悶や覚悟が見受けられよう。

ところで、革命に対して魯迅は複雑な心境を持っている。革命に賛成する一方、それが人殺しの繰り返しにならないかと懸念している。つまり革命者が勝利を手に入れて支配者になると、服従しない人々を鎮圧し、逆に反革命者になった場合はどうしようかと、魯迅は考えている。

「民主」に対しても魯迅は同じ疑念を抱いている。「民主」の名のもとで、少数の人が多数の人に支配され、平等に取り扱われない場合はどうしようかと、魯迅は常に頭を悩ませている。

このように、魯迅は革命や民主の仕方に疑念を抱いているものの、反抗精神を呼びかけながら、国民性の改良に着目し、民衆の啓蒙に努めている。このような思慮は魯迅の翻訳にも創作にも観察されるものであった。

2.2　翻訳が創作の言語表現に与えた影響

魯迅の翻訳の中に、形式上で中国語として違和感のあるものが多く存在するが、そのような傾向は魯迅の創作にも観察される。そこで、2.2.1 で主語関連の用例、2.2.2 で修飾語関連の用例、そして 1.2.3 で語順関連の用例を取り挙げながら、魯訳がその創作の文体に与えた影響について分析を試みる。

2.2.1　主語に関して

日本語が主語のない言語だという考えがあるが、主語がよく省略されるという見方もある。それに対し、中国語の場合は主語を明示する傾向がある。従って、和文中訳の場合は、主語を訳文に付け加えることが多い。にも関わらず、魯訳においては、以下のように主語がＳＴと同様に省略される現象が見受けられる。

(1) ＳＴ　<u>ある日の暮れ方の事である</u>。（芥川龍之介　『羅生門』）

魯訳　是一日的傍晩的事。

回訳　ある日の暮れ方の事である。

(2) ＳＴ　駿河の府中から遠からぬ田舎である。天正の末年で酷い盛夏の一日であった。（菊池寛　『三浦右衛門の最後』）

魯訳　是离骏河府不远的村庄。是天正末年酷烈的盛夏的一日。

回訳　駿河の府中から遠からぬ村である。天正の末年で酷い盛夏の一日であった。

(3) ＴＴ　木村は官吏である。ある日いつもの通りに、午前六時に目を覚ました。夏の初めである。（森鴎外　『遊び』）

魯訳　木村是官吏。或一日，也如平日一样，午前六点钟醒过来了。是夏季的初头。

回訳　木村は官吏である。ある日、いつもの通りに、午前六時に目を覚ました。夏の初めである。

第 4 章においてすでに論じたように、例（1）から（3）の下線部はいずれも主語省略の判断文である。例（1）の「ある日の暮方の事である」は「（これは）ある日の暮方の事である」の省略である。例（2）の「駿河の府中から遠からぬ田舎である」は「（ここは）駿河の府中から遠からぬ田舎である。」の省略であり、「天正の末年で酷い盛夏の一日であった」は「（この日は）天正の末年で酷い盛夏の一日であった」の省略である。また例（3）の「夏の初めである」は「（今は）夏の初めである」の省略である。このような主語は日本語においてあってもなくてもそれほど違和感がないが、中国語においては明示化する必要がある。従って、和文中訳の場合は、一般的に主語を補足するか、判断文を時間的連用修飾節に改訳するというように対処される。ただし、判断文を時間的連用修飾節に置き換えれば、強調する焦点や語気が変わってしまう。従って、主語を補足する方がより適切だと思われる。ところが、魯迅はあえてこのような規範に反し、主語の補足もせずに、ＳＴを踏みながら形式上で対応させている。従って、ＴＴは確かに中国語らしくない文言となり、特別な雰囲気、いわゆるい異質性を読者に感じさせているが、それによって読者の興味を惹かせる「物語の前口上」という効果を保つことに成功していると思われる。

ところで、次の例のように、魯迅の創作においては、翻訳の場合と同じように、主語が省略されることがあるが、省略されない場合も見受けられる。

(4) ＳＴ　黑漆漆的，不知是日是夜。赵家的狗又叫了起来。（魯迅　『狂人日記』）

ＴＴ　まっ暗だ。昼間だか夜だかわからない。趙家の犬がまたほえ出した[161]。（『狂人日記』『魯迅選集』第１集ｐ.20）

(5) ＳＴ　这是民国六年的冬天，大北风刮得正猛。（魯迅　『小さな出来事』）

ＴＴ　それは民国六年の冬、強い北風が吹きまくっている。

(6) ＳＴ　这是未庄赛神的晚上。（魯迅　『阿Ｑ正伝』）

ＴＴ　それは未荘の祭りの夜であった。（『阿Ｑ正伝』『魯迅選集』第１集ｐ.94）

例（4）のように、魯迅は“（四周）黑漆漆的”「（周り）はまっ暗だ」を主語“四周”を省略している。ただし、この文は判断文ではなく、描写文である。例（5）と例（6）の判断文においては主語が省略されていない。ここから、魯迅の翻訳の原文志向も、そして「翻訳は翻訳であるべき、創作ではない」という態度も窺えるのであろう。

2.2.2　修飾語に関して

木坂（1988）が日本語は「欧文脈」の影響で連体修飾や連用修飾が複雑化されたと指摘している。従って、被修飾語の前に多項目修飾語（節）が来てもそれほど違和感がない。それに対し、中国語の場合は、西洋言語や日本語から同じような影響をうけたものの、例（7）の林訳のように、バランスが取れるように語順を調整されることが多い。

(7) ＳＴ　檜皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のような老婆である。（芥川龍之介　『羅生門』）

魯訳　是穿一件桧皮色衣服的，又短又瘦的，白头发的，猴子似的老妪。

回訳　檜皮色の服を着た、低くて痩せた、白髪の、猿のような老婆である。

林訳　一个身穿桧树皮色衣服的白发老太婆，又瘦又矮，浑如猴子。

回訳　檜皮色の服を着た白髪の老婆が、痩せていて低くて、まるで猿のようである。

(8) ＳＴ　戸を敲くのが気の毒なくらい大きな眼をしていらっしゃいと云う。（夏目漱石『クレイグ先生』）

魯訳　睁着使人不忍敲门的这么大的眼睛，说道：“请”。

回訳　戸を敲くのが気の毒なくらいな大きな眼をして、「いらっしゃい」と云う。

---

[161] 魯迅の創作の用例を取り上げる場合は、できる限り日本人による日本語訳をつけて示す。ただし、明確化のために、その日本語訳が直訳でないと判断した場合は、筆者による直訳の訳文をつける。出処が明記されていないＴＴは、筆者による訳文である。以下同様。

例（7）と例（8）の魯訳から分かるように、魯迅は中国語の慣習に従わずに多項目修飾語（節）をそのまま訳文に移入している。それによって、訳文全体の調和やバランスが取れなくなるが、形式上の「等価」に達成しているのである。後のドイツ語から重訳した『小さなヨハネス』の序文で、魯迅は次のように語っている。

「例えば末尾の重要にして力の込められた一句――“Und mit…”の後半を私は次のよう拙劣に訳している。『あの大きく暗黒な都会、すなわち人類とその苦悩が住まう地へと続くいばらの道に足を踏み入れた』。冗長でわかりにくいが、私にはこれよりましには訳しようがない。なぜなら分割すると、趣旨と緊張感が全く別のものになってしまうからである。だが、もとの訳は非常に明快である――いばらの道に足を踏み入れた、その道は大きく暗黒なる都会へと続く。そしてこの都会こそ人類とその悲しみの住まう所なのである」[162]。

即ち、このような取り扱いは魯迅の承知の上での選択である。ところで、多項目修飾の多用は原文志向の魯訳の特徴の一つであるが、その創作においてはどのようになっているのであろうか。

(9) ＳＴ　这是一个<u>身材高大，长头发，眼球白多黑少的人</u>，看人总像在渺视。（魯迅　『范愛農』）

ＴＴ　それは<u>背の高い、長髪の、白眼がちの男</u>で、人を小馬鹿にしたようなそぶりがあった。（『范愛農』『魯迅選集』第２集ｐ.252）

ＳＴを「这是一个身材高大的人，长头发，眼球白多黑少，看人总像在渺视（それは背の高い男で、髪が長く白眼がちで、人を見るとき、小馬鹿にしたようなそぶりがあった）。」に書き換えれば、下線部の多項目連体修飾語が分散され、中国語の表現としてはより自然に見えるが、魯迅はそのように処理していない。これは魯迅の創作の例であるが、例（7）の翻訳の例と酷似している。

(10) ＳＴ　那地方叫平桥村，是一个<u>离海不远，极偏僻的，临河的小村庄</u>。（魯迅　『宮芝

[162] 丸山昇　訳（1985）『小さなヨハネス　序文』『魯迅全集』12 巻　学習研究社　p.326

居』）

ＴＴ　そこは平橋村といって、海岸に近い、ごく辺鄙な、川沿いの小さな村である。

ＳＴを「那是一个叫平桥村的小村庄，靠海临河，极为偏僻（そこは平橋村という小さな村であり、海と川に近くてごく辺鄙である）。」にすれば、より中国語らしくなるが、魯迅はそのように処理していない。

(11) ＳＴ　阿Ｑ第三次抓出栅栏门的时候，便是举人老爷睡不着的那一夜的明天的上午了。（魯迅　『阿Ｑ正伝』）

ＴＴ　阿Ｑが三回目に檻から引き出されたのは、挙人旦那が一睡もできなかった夜のあくる日の午前であった。（魯迅選集　第１集『阿Ｑ正伝』ｐ.132

ＳＴを「举人老爷没睡着的那天的次日上午，阿Ｑ第三次被抓出栅栏门（挙人旦那が一睡もできなかった夜のあくる日の午前、阿Ｑは三回目に檻から引き出された）。」のように書き換えれば、中国語としてはより自然に見えてくる。ただしそうすると、述部が時間的連用修飾節に変わることによって、判断文が陳述文になり、話の焦点も語気も変わってしまう。

(12) ＳＴ　他腰骨挺直了，因为他根据经验，知道这一声“拍”是主妇的手掌打在他们的三岁的女儿的头上的声音。（魯迅　『幸福な家庭』）

ＴＴ　彼の腰骨は硬直した。この「パーン」という音は、主婦の掌が彼らの三歳になる娘の頭をなぐった音であることを、経験にもとづいて知っているからだ。（『幸福な家庭』『魯迅選集』第２集ｐ.132）

(13) ＳＴ　只见四铭就在她面前耸肩曲背的狠命掏着布马挂底下的袍子的大襟后面的口袋。（魯迅　『石鹸』）

ＴＴ　見ると、四銘は彼女の前に立って、肩をそびやかし、背をまげて、しきりに木綿の馬褂の下に着ている長衣の内ポケットを探っているのであった。（『石鹸』『魯迅選集』　第２集ｐ.51）

(14) ＳＴ　他一进门，迎头就看见中央的方桌中间放着那肥皂的葵绿色的小小的长方包，（魯迅　『石鹸』）

ＴＴ　はいってみると、すぐに眼についたのが、中央の角テーブルのまん中において

ある例の石鹸の緑色の小さな長方形の包みである。(『石鹸』『魯迅選集』第２集ｐ.63)

「…的…的…」という多項目修飾の表現は、すでに第５章の 2.1.1 で論じたが、例（13）～(15) のように、魯迅の創作においても多用されている。魯迅の翻訳言語も創作言語も「的」の連続使用により冗長性を持つものとなる場合がある。が、これも魯迅にとって、承知の上での選択である。

(15) ＳＴ　我吃了一吓，赶紧抬起头，却见一个凸颧骨，薄嘴唇，五十岁上下的女人站在我面前，（魯迅　『故郷』）

ＴＴ　びっくりして、すぐ頭をあげてみると、頬骨の出た、唇のうすい、五十がらみの女が、私の前に立っていた。（『故郷』『魯迅選集』第１集ｐ.78）

(16) ＳＴ　暖国的雪，向来没有变过冰冷的坚硬的灿烂的雪花。（魯迅　『雪』）

ＴＴ　暖国の雪は、これまで、冷い、堅い、キラキラする雪に変ることはなかった。（『雪』『魯迅選集』第１集ｐ.196）

(17) ＳＴ　是的，我也还记得我们同到城隍庙里去拔掉神像的胡子的时候，连日议论些改革中国的方法以至于打起来的时候。（魯迅　『酒楼にて』）

ＴＴ　そうそう、僕も僕達が一緒に土地廟へ行って神像の髭を抜いたとき、毎日のように中国を改革する方法について議論してしまいに取っ組み合いの喧嘩になったときを覚えてるよ。

(18) ＳＴ　于是就看见带着笑涡的苍白的圆脸，苍白的瘦的臂膊，布的有条纹的衫子，玄色的裙。她又带了窗外的半枯的槐树的新叶来，使我看见，还有挂在铁似的老干上的一房一房的紫白的藤花。（魯迅　『傷逝』）

ＴＴ　すると笑窪のある蒼白い丸顔と、蒼白い痩せた腕と、木綿の縦縞の上衣と、黒のスカートを目にした。彼女はまた窓の外にある枯れかけた槐の木の若葉も持ってきて私に見せてくれた。鉄のような古木に垂れている一房一房のうす紫の藤の花も。

例（15）～（18）のように、このような例は魯迅創作の随所に散見される。多項目連体・連用修飾語（節）の多用は、魯訳においてだけではなく、その創作にも浸透しているのである。

2.2.3　語順調整に関して

中国語は孤立言語であり、基本的に語順によってその意味が決まる。従って、語順が規範に合わないと、違和感が出てくるものである。しかし、語順調整に関して、魯迅はなるべくしないようにと主張している。

(19) ＳＴ　先生の白襯衣や白襟を着けたのはいまだかつて見た事がない。(夏目漱石　『クレイグ先生』)

ＴＴ　先生穿白小衫和白领子，是从来没有见过的。

回訳　先生が白襯衣や白襟を着けたのは、いまだかつて見た事がない。

試訳　我从来没有见过先生穿白小衫和白领子。

改訳　私はいまだかつて先生が白襯衣や白襟をつけたのを見た事がない。

主部と述部の調整について、魯迅はできる限り変えないようにしている。筆者による試訳は、「私」を主語にすることによって、中国語としての一般的な表現に変わり、ＴＴの魯訳よりは抵抗感がなくなるのであろう。しかし、魯迅は主部と述部とを置き換えずに、主題を際立たせる方針を堅持している。このような処理は、次の例（20）と（21）のように、魯迅の創作にもよく見受けられる。

(20) ＳＴ　我感到未尝经验的无聊，是自此以后的事。（魯迅　『呐喊 自序』）

ＴＴ　私が、これまで経験したことのない味気なさを感ずるようになったのは、それ以後のことである。（『呐喊 自序』『魯迅選集』第１集ｐ.10）

(21) ＳＴ　但他更觉得世上有些古怪，却是许多日以后的事。（魯迅『阿Ｑ正伝』）

ＴＴ　しかし彼がもっとも世間の様子が変なことに気がついたのは、だいぶ日がたってからであった。（魯迅選集 第１集『阿Ｑ正伝』ｐ.107）

(22) ＳＴ　前川と八弥の父とは又となき親友ではあったが、結婚して間もない新家庭を、前川は訪問する事をなるべく遠慮して居たのである。（菊池寛　『ある敵討の話』）

ＴＴ　前川和八弥的父亲，本来是无二的好朋友，但是结婚未久的新家庭，前川不敢草率，便少有来访的事了。

回訳　前川と八弥の父とは又となき親友ではあったが、結婚して間もない新家庭は、

前川が訪問する事をなるべく遠慮して居たのである。

試訳　前川和八弥的父亲，本是莫逆之交，但前川尽量避免去拜访结婚未久的新家庭。

回訳　前川と八弥の父とは又となき親友ではあったが、結婚して間もない新家庭を、前川は訪問する事をなるべく遠慮して居たのである。

盧（2000）[163]において、中国語は「文法化言語」だと指摘し、VO と OV の混在型言語ではあるが、VO 型が 9 割以上を占めていると記述している。即ち、日本語が SOV 型であるのに対し、中国語は SVO 型が一般的である。

従って、中国語おいては、対象語は基本的に動詞の後ろに来る。「対象語前置」という現象もあるが、その場合は「把」構文を用いて本来動詞の後ろに置かれる目的語を動詞の前に置くか、対象語を主題化させなければならないのである。例（22）のように、筆者による試訳は、「前川尽量避免去拜访结婚未久的新家庭」というように調整したことによって、中国語 SOV の語順となっている。しかし、ＴＴの魯訳は、形式上の「等価」を求めるため、中国語の規範を逸脱しようとしているように思われる。しいて解釈すれば、「结婚未久的新家庭」という対象語を主題化させたと言わざるを得ない。が、それによって SVO の語順は留めることになっている。例（23）のように、魯迅の創作にもこのような表現は散見される。

（23）ＳＴ　阿Ｑ<u>想在心里的</u>，后来每每说出口来。（魯迅『阿Ｑ正伝』）

ＴＴ　阿Ｑは、<u>心に考えていることを</u>、後にはいつも口に出して言ってしまう。（魯迅選集　第１集『阿Ｑ正伝』ｐ.92-93）

（24）ＳＴ　<u>世界の最大の抒情詩人であった彼は</u>、同時にまた大なる豫言者の一人であったのだ。（厨川白村　『苦悶の象徴』）

ＴＴ　<u>是世界的最大的抒情诗人的他</u>，同时也是大的豫言者的一个。

回訳　世界の最大の抒情詩人であった彼は、同時にまた大なる豫言者の一人であったのだ。

試訳　他是世界上最大的抒情诗人，同时也是大预言家之一。

回訳　彼は世界の最大の抒情詩人であったと同時に、また大なる豫言者の一人でもあったのだ。

---

[163] 盧濤（2000）「中国語における『空間動詞』の文法化研究－日本語と英語との関連で」白帝社ｐ.59

ＴＴの魯訳は、多項目修飾語で人称代名詞「他」を修飾するという形となっている。このような表現は魯訳に数多く存在するが、例（25）と（26）のように、魯迅の創作においても数多く見られる。

（25）ＳＴ 有了四千年吃人履历的我，当初虽然不知道，现在明白，难见真的人。（魯迅 『狂人日記』）

ＴＴ 四千年来、絶えず人間を食ってきた俺は、当初知らなかったが、今はやっとわかった。本当の人間がなかなかいないって。

（26）ＳＴ 本来对了庙门立着的他，也转过头来，对他们看。（魯迅 『常明灯』）

ＴＴ それまで廟の門に向かって立っていた彼も、こちらに振り向いて、彼らを眺めた。（『常明灯』『魯迅選集』第２集ｐ.69）

以上で述べてきたように、魯迅の翻訳は内容上においても表現上においてもその創作に大きな影響を与えている。魯迅の翻訳言語と創作言語、そして思想面のものが相互に融合しつつ、個性のあるものとなっており、また現代中国語や現代中国文学にも影響を及ぼしているのである。

3　魯迅像への再認識

魯迅の翻訳活動は当然その思想観念に緊密に繋がっている。政治上の理由で魯迅が中国で神格化されてきたが、この節でその経緯を記述した上で、魯迅のイデオロギを解明し、彼の翻訳活動との相関を論じてみる。

3.1　毛沢東による評価

毛沢東は魯迅と面識がないが、魯迅の作品を愛読していた。

1937 年 10 月 19 日（魯迅逝去周年）に、陝北公学学長成仿吾に招かれた毛沢東は学生達に「魯迅について」というテーマで講演をした。その中で「魯迅の思想、行動、著作のすべてがマルクス的なもので、魯迅は党外のボルシェビキだ」と語ると同時に、「魯迅は中国の一等聖人だ。孔子は封建社会の聖人であり、魯迅は現代中国の聖人だ」と語っている。

1940 年 1 月 9 日に、毛沢東が延安で「新民主主義の政治と新民主主義の文化」（後に「新民主主義論」と改題され、『毛沢東選集』第 13 巻に収録）というテーマで講演を行った。新

民主主義の文化は人民大衆の反帝・反封建主義の文化であり、いずれの他の文化思想ではなく、共産主義文化思想によって指導されなければならないと述べると同時に、魯迅のことを「魯迅こそこの文化的新鋭軍のもっとも偉大で、もっとも勇敢な旗手である。魯迅は中国の文化革命の主将であり、彼はたんに偉大な文学家〔文学者〕であるだけでなく、また偉大な思想家ならびに偉大な革命家でもある。魯迅の骨はもっとも硬く、彼には奴隷的な根性やこびへつらう態度は露ほどもなく、これは植民地の人民のもっとも尊い性格である。魯迅は、文化戦線で、全人民の大多数を代表しており、敵に向かって突撃し、その陣地を陥れるうえで最も正確で、もっとも勇敢で、もっとも果敢で、もっとも忠実で、もっとも熱心な、空前の民族的英雄である。魯迅の方向は、中華民族の新文化の方向なのである[164]」と高く讃えて、魯迅の位置づけを規定した。これで魯迅がいずれの党派にも属さず、独立性を持つ自由の知識人の代わりに、党の高く掲げるイデオロギーの旗となったのである。

馮雪峰の『魯迅を思い出して』（1952）によると、かつて魯迅を入党させ、表で仕事をしてもらおうという意見が共産党内にあった。それに対し、毛は「魯迅のことをちっとも知らないな、組織外での魯迅の役割はずっと大きいものだ」[165]と語っている。また、ある日本人が、中国のことをよく知っている人は二人半しかいない。一人は蒋介石で、もう一人は魯迅だ。残りの半人は毛沢東だというように言っている。それを耳にした毛沢東は笑った後に、この日本人はたいしたものだ、魯迅が中国のことをよく知っていると思うのは正確だ、とのように答えたという。

後の 1942 年 5 月 2 日に、毛は楊家嶺で延安文芸座談会の報告を行う際に、「我々には軍隊を二軍持っている。一軍は、朱総司令の軍隊で、もう一軍は、魯総司令の軍隊だ。即ち、銃を持つ軍隊と文化的軍隊だ」と述べている。また別の場で「文芸は一つの軍隊であり…魯迅、ゴーリキーがその総司令に当たる」とも語っている。

建国直前の 1949 年 7 月に、全国文芸芸術聯合代表大会が北京で行われた。毛沢東の提言で、参加者全員に毛沢東と魯迅二人の肖像入りの、一枚のバッジが配られた。

その後の 1957 年 3 月 8 日に、文芸の「百家争鳴・百家斎放」を推奨する毛沢東が「文芸界代表との会談」で「若し魯迅が今も生きていたらどうなる」という質問に対し、「魯迅は共産党員ではないが、マルクス世界観に詳しい。もし生きていたら、小説は無理かもしれない

---

164 毛沢東「新民主主義論」日本国際問題研究所中国部会編（1974）『中国共産党史資料集』第 10 巻　勁草書店　p. 199 を参照されたい。

165 冯雪峰（1952）《回忆鲁迅》人民文学出版社

が、雑文はまた書くだろうし、会議に出る場合は何かを話すだろう」と語っている。そして3月10日に、同じ話題でメディア関係の人々に、「若し魯迅が生きていたら、書く勇気があるかもしれないが、ないかもしれない。異常な空気のもとで彼は書かないかもしれないが、書く可能性のほうが高い。というのは、魯迅は真のマルクス主義者、徹底した唯物論者だからだ。徹底した唯物論者だったら、書く勇気があるのだ。魯迅の時代ではやっつけられることは投獄や殺されることだが、魯迅はそれを恐れないのだ」と言っている。

しかし、同年の7月7日に、上海で科学、教育、芸術、工商界の代表と会見している際に、毛は同じ質問に対し、「刑務所の中で書き続けるか、黙っているかだ」と答え、参加者を驚かせていた。これはまさに1942年の延安文芸座談会で話した「魯迅の雑文は国民党の暗い統治にふさわしいが、明るい陝甘寧地区や敵後根拠地にはふさわしくない」という毛の発言の裏付けだと考えられよう。

とはいえ、その後魯迅への評価は下がるどころか、右肩上がりである。戚义明（2016）『新中国成立後毛沢東自己評価四則』の記述によると、1971年11月20日に、武漢の軍隊や湖北省のリーダーとの面会で、毛沢東は、魯迅は中国の一番目の聖人だ。中国で一番目の聖人は孔子ではなく、私でもない。わたしは聖人の弟子で賢人だ、というように語ったという。

このように、一知識人である魯迅が亡くなった後に、中国で神格化されている。その後も引き続き無産階級の勇敢の戦士として宣伝されている。

しかし、従来魯迅に対する定説は疑いのない、すべて客観的な視点に立ったものであろうか。真の魯迅の姿は如何なるものなのであろうか。

3.2　魯迅のイデオロギー

1840年に起ったアヘン戦争で中国は敗北し、半植民地に陥る端緒が開かれた。その後、社会制度にも伝統文化にも激しい揺れが生じ、中国は危機に直面しなければならない窮地に置かれた。

1894年に日清戦争が起きた時、魯迅は13歳の少年であった。当時中華民族の運命はそれまでにない内憂外患という危うい状況に晒された。

そのような社会を生きている魯迅は、日本留学前の若い頃から既に、中国が直面する危機、そして伝統文化が臨む様々な挑戦を意識している。翻訳や創作をはじめ、魯迅生涯のあらゆる文学活動は当時の中国の諸問題と絡み合い、切っても切り離せないものである。内憂外患の状況や伝統文化の旧弊と外来文化からの衝突にどう対応すべきかといった問題について考

えに考えた結果、魯迅の中に彼なりの世界観や価値観ができた。

その中で、魯迅の生涯を貫く「立人」思想に特筆するに値する。伝統文化を含む従来の思想体系は上から下へという方向で成り立っており、いわゆる君主制・帝国制というものである。魯迅は個性解放と主張するニーチェに共感を覚え、個々の人間の成長こそが社会改革に繋がるものだと考え、人間の個性、精神面での改善に目を向けている[166]。その辺は 1908 年に発表された「文化偏至論」を見ると分かることである。その最後の一節を取り上げて見よう。

「この故に、天地の間に生存して、列国と競争して行くには、まず第一に、人間を確立することが大切である。人間が確立して後、始めてあらゆる事がその緒に就く。而して、その方法としては、何よりも個性を尊重して精神を作興することが必要である。かりに、そうしなかったならば、恐らく一代を待たずして枯死するであろう。そもそも、中国では、昔から、物資を尊び天才を憎んだ。先王の恩沢は、日一日と滅び、外力を受けるに及んで、すっかり萎縮して、もはや自存して行けなくなった。しかるに、猪口才な、豆知恵のはたらく連中は、又しても鳴物入りで宣伝呼号し、再び物質によってこれを殺し、多数によってこれを拘束し、かくて個人の性は、あますところなく剥奪されたのである。昔は、我が身から自然に起こった半身不随の病気であったが、今や、外国との交通によって伝来した新しい疫病を得たわけで、この二つの病患に、こもごも攻められて、中国の滅亡は、ついに、ますます速くなった。ああ、将来を思えば、亦た已んぬるかな！」[167]。

魯迅の翻訳から見ても分かるように、「立人」とともに、「立他」、即ち他人の「自己」を尊重しなければならないと魯迅は考えている。

『ある青年の夢』にある「国家の立場から見ずに人類の立場からものを見て、はじめて永遠の平和が得られるのです。しかし民衆から目覚めなければ駄目でしょう」という武者小路実篤の言葉に強く共感を覚え、『訳者序　その二』で魯迅は次のように述べている。

「…中国人自身は確かに戦争は得意ではないが、決して戦争を呪っているわけではない。自分は確かに戦争に行くのを望まないが、戦争に行くのを望まぬ人々に同情しているわけで

---

166 頽廃主義・無政府的個人主義作家アルツイバーシェフの無政府主義者シェヴィリョフを主人公とする『労働者シェヴィリョフ』を訳したことから、魯迅が「個人主義・無政府主義」だとも言われた。

167 魯迅著　増田渉・松枝茂夫・竹内好編・訳（1956）「文化偏至論」『魯迅選集』第 5 巻　岩波書店　p. 30

はない。自分のことは心配しても、他人のことまでは心配していないのである。例えば今日日本が朝鮮を併呑したことに話が及ぶと、よく『朝鮮は本来我が属国であり』と言った言葉が出てくる。このような口調を聞くだけでも、充分、人を恐れさせるに足るのである。それ故、私は戯曲が多くの中国旧思想の宿痾を治癒でき、その意味で中国語に翻訳する意義が大いにあると思うのである」[168]。

このように、魯迅は国境を超える「国際人」を目指す姿も見せている。

ところで、後に魯迅は「五・四」新文化運動の「主将」とされるだけでなく、梁魯論争で共産党側のものだと梁に暗示され、そして 30 年代の初めごろに発足した左翼作家連盟のリーダーともみなされている。

魯迅はそれを否認し、自分が「五・四」新文化運動の主将ではなく、胡適だろうと弁明している。魯迅歿後の 1937 年に、陳独秀が『私の魯迅認識』を『宇宙風』に発表し、「魯迅も周作人も『新青年』のメンバーで、もっともトップに立つ人物ではないが、多くの文章を出している。彼らには彼らなりの考え方を持っており、故意に『新青年』に合わせようとしたものではない。そのため、その作品は『新青年』の中で価値の高いものとなる」と語っている。

当時、中国の歩むべき道について知識人の見解により、ほぼ「保守派」、「西洋派」、「マルクス派」と三大別されているが、魯迅はむしろ少数派の存在でそのいずれにも属していないように思われる。というのは、すべての物事に対し、魯迅が常に懐疑的な態度を持つようにしており、自分の中でもう一人の自分と闘っているからである。例えば、大衆啓蒙という「五・四」新文化運動の目的の一つに魯迅は賛成する一方、その後如何に歩むべきかについて魯迅自身も悩んでおり、懸念しているのである。

保守派が擁護する中国の伝統的専制制度に強く反対し、魯迅は保守派と一線を画している。一方、西洋派が提唱する「民主」に基本的に肯定の態度を示しているものの、その「民衆」の中身を疑っている。即ち、「民主」に少数派が多数派の意見に従うべきだという意味合いがあるため、多数派の「専制」になる恐れがあるのではないかと危惧しているのである。マルクス派が保守派と西洋派のいずれにも強く反対しているが、魯迅はマルクス派に対しても態度を保留しているらしい。魯迅は「革命」を進化論の意味で「革新」と考えているため、

---

[168] 丸山昇　訳（1985）『ある青年の夢　訳者序　その二』『魯迅全集』第 12 巻 p. 257

「革命」に賛成しているものの、他方で、人が革命のために命を落とすことや、落としても無駄死にとなることや、また「革命」が人殺しの繰り返しにならないかと懸念している。創作『薬』の中で革命者が民衆のために闘って、最後に命を捧げた。にもかかわらず、その「民衆」たる華老栓がマントウにその血をつけて息子小栓の喘息を治そうとした。無論、民衆の痺れた姿を描写するのが主な目的だが、そこに魯迅の革命の役割への懸念も含まれていると思われる。革命は決して急ぐべきではない、人々の精神の改造こそ、根本的な策だと魯迅は考えている。このように、魯迅はいずれの派にも属さないこととなる。

左連が結成される前、魯迅と太陽社や創造社との間に論争があった。当時魯迅が「小資産階級文学者の代表・人道主義者」として共産党側の馮乃超らに批判されていた。その批判者の多くが日本留学の経験を持ち、当時日本におけるプロレタリア文学のブームの影響で文学は無産階級の武器として使われるべきだと主張し、文学の宣伝機能を強調している。それに対し、魯迅は文学の宣伝機能を認めているものの、それだけに使われるべきではないと反論した。そのことがきっかけとなり、「革命文学」論争となっている。生半可なプロレタリア文芸論しか知らない、マルクス主義者と自称した者に攻撃されるのが契機ともなり、魯迅は本格的にソ連文学やプロレタリア文芸論翻訳に着手し始めた。この時期から、魯迅は翻訳を通じてマルクスの文芸論への理解を深めていったのである。

ところで 1930 年に、共産党が主導権を握る中国左翼作家連盟は結ばれた。国民党当局の専制に抵抗するという同じ立場に立った魯迅は招きに応じて加入した。それで、共産党の上層部の調停によって馮乃超らとの蟠りを棚に上げて和解した。しかし、政治に文学がどう関わるべきかについては、合意に至らずじまいであった。

魯迅は左連における自らの立場を十分承知している。左連が発足する際に、友人への手紙の中で、自分がハシゴのようなものとして使われていることを承知しているが、それでも役に立つならばそれでいいと語っている。

後に統一戦線結成のため、共産党が左連を解散させた。そのことで魯迅の強い反発を買った。解散の口火となった「二つのスローガン」（「国防文学」と「民族革命戦争の人民文学」）をめぐり、左翼作家を代表する魯迅たちと共産党員作家周揚らとの間に激しい論争にまで及んでいる。

共産国際第 7 回代表大会の報告の方針に基づき、モスクワ駐在中国共産党代表団団長である王明の名義で発表されたが「八一宣言」を読んだ周揚が「国防文学」というスローガンを提起し、「国防という主題は売国奴以外のすべての作家の作品の中心的なものとならなけれ

ばならない。」と主張している。それに対し、胡風が（馮雪峰、魯迅、茅盾と相談の上）『人民大衆が文学に何を要求するか』という一篇を発表し、「民族革命戦争の人民文学」というスローガンを提起し、「国防文学」というスローガンと併用できると述べた上で、売国奴でない作家ならば、抗日統一戦線の旗のもとに集まり、国防を作品の主題にするほうが一番だが、しなくても構わないと、主張している。

この論争の本質は文学と政治の関係をいかに取り扱うべきか、というところにあると思われる。文学が政治のためのものでなければならないという周揚らの主張に対し、文学が政治に従属するものとして扱われることに魯迅らは反対し､作家の独立性を訴えているのである。

人への返信の中で、周揚らが自分こそ無産階級だというつもりでいるが、無産の大衆に対して乱暴に鞭をふるっていると魯迅は言っている。因みに、下層大衆の立場で常に物事を考える魯迅は、ソ連の革命に対しても、最初は讃えているが、後に保留的な態度も微かに見せていた。

このように、後世の我々が魯迅に対して何々主義、何々イデオロギーの持ち主だと、ラベルを貼り付けても、亡くなった魯迅にはすでに文句が言えないわけだが、実際のところ、彼は何々体制に、何々思想文化体系に属しているとは言い難い。魯迅が選択した翻訳対象を見てわかるように、その中に様々な流派があり、諸々のイデオロギーが包含されている。後期魯訳においてソ連の文芸論が多くなっているが、ここまで述べてきたように、翻訳を通じて多くの文学者、芸術家、主義、イデオロギーに出会ったが、彼は常に批判的に受け入れるようにしているのである。魯迅は一途にマルクス主義的作品を訳し、宣伝するのではなく、ロマン主義、人道主義、無政府主義の作家について論じたり、そのような作品を訳出している。しかし魯迅は自ら語ったように、必ずしもそれらに賛成するわけではない。ただ客観的に訳出し、その判断を読者に委ねている。従って、それだけの理由で魯迅のことを何々主義と決めつけるのは意味がないように思われる。同様に、魯迅は毛沢東が言うようなマルクス主義者ではなく、ただ何事に対しても常に独立性、懐疑意識を持つ人文活動をしている文学者であり、「マルクス主義的革命家」ではないのである。

ところで、翻訳を通じて諸家の長を批判しながら受け入れた魯迅は世界に名を馳せ、ほかの作家に大きな影響を与えた。

日本の例でいうと、同時代の作家に芥川龍之介、太宰治らがいる。後進の作家としては、ノーベル賞受賞者の大江健三郎、村上春樹が挙げられる。大江は『大江健三郎自選短篇　序』で、「世界文学の中で絶対に忘れてはいけない巨匠は魯迅だ。生きているうちは、魯迅先生

にすこしでもいい、近づきたいと思っている」、というふうに述べている。同時代の丸山昇は「西洋の人が島流しでもされる場合は、生活品のほか『聖書』を持っていくというが、わたしの場合は、『魯迅全集』を持っていくのだ」と語っている。

啓蒙者、作家、翻訳家、評論家であると同時に、魯迅はまた古典編纂・研究者でもある。これまで魯迅の作品はいろいろな言葉に訳され、約 50 ヵ国に伝播されている。世界中、魯迅を研究する者は 2 万人以上だと言われている。

そういう意味では、魯迅の翻訳活動及び文学活動は、異文化接触のプロセスそのものであり、異なる言語・文化間の理解疎通、そして融合に大きな役割を果たしているとは言えよう。

4　まとめ

この章は、魯迅翻訳と関連する項目を概説したものである。まず、魯迅の直訳法・異化ストラテジーの現実的意義についても再確認した。

世界の作家、文学作品、文芸思潮を中国に紹介した魯迅は、翻訳を通じて、民衆の精神面を改善し、社会を改造しようと、願っていたのである。

魯迅は「直訳法」、「抵抗・異化」翻訳で異質なものを中国語に取り入れ、多文化を理解し、異文化接触の中で中国語や中国文化を改善しようと苦心している。

魯迅の翻訳方法は、クローバル化社会において異質なものに対し、どう対応すべきかについて我々に考えさせている。「目標言語文化側に近い、流暢かつ美しい」訳文が求められる翻訳界の実践場に異なる声を提供しており、有益なものだと思われる。

魯迅は既に普通にいう「翻訳」を遥かに超えており、もっと高い次元で「翻訳」を捉えているのである。その翻訳理念そのものは、現在の翻訳界、ひいては異質的なものを拒否しがちな保守的社会には、必要なものである。

次に、魯迅翻訳の歴史的意義をめぐって分析を試みた。現代中国語の形成に魯迅翻訳の影響は限定的なものであるが、中国現代文学の発展に大きく寄与した。多くの文学者が魯迅の指導や協力のもとで翻訳活動をしていたことや、中に大きな業績を残した者も少なくないことを論じた。また、「中国木版画の父」とされた魯迅が中国現代美術、とりわけ木版画への貢献を例を挙げて議論した。更に、魯迅の翻訳活動が彼自身の創作に与えた影響について、内容上と表現上に分けて分析した。魯迅の訳作の趣旨、題材、筆致及び原文作者思想、観念をその創作にあるものと関連付け、例を取り上げながら論を加えた。そのうえで、魯訳とその創作から用例を抽出し、主語、多項目修飾、語順を項目別で分析を加えた。魯迅の創作の

思想、題材、形式、表現は、その翻訳から得た示唆が多い。創作言語も翻訳言語から影響を大きく受けている。最後に、毛沢東の魯迅評価と関連付け、魯迅が中国で神格化された経緯を記述した上、関連事項を述べながら、魯迅のイデオロギーを検討してみた。いつも独立性を持ち、懐疑的な態度を取っている魯迅はどの体制、どのイデオロギーにも属さないと分析した。考察を通じて、魯迅はマルクス主義的革命者ではなく、一人の人文活動者だということがわかった。それは彼の翻訳対象の選択からして分かることである。

終章　結論と残された課題

１　本研究のまとめ

本研究は、テクスト対照分析で魯迅の翻訳法を検討し、翻訳ストラテジー、翻訳動機を考察し、各時期の魯訳の特徴、さらにその翻訳思想を究明することを目的とした。それと同時に、魯迅翻訳の歴史的な意義を検討した。

魯迅に関する研究は多いのに対し、魯迅翻訳に関する研究は極めて少ない。それに、魯迅翻訳に関する研究は、観念論的なものにとどまり、原文と訳文のテクスト対照分析に基くものが皆無に等しい。魯迅自身の訳作の「序」における、日記、手紙、雑文の引用に基づくものが多い。そのためか、相互に重複する抽象論が大半を占めており、結論が酷似する研究は多かった。本研究の先行研究もそのような傾向があった。膨大な資料を踏まえた結論が導かれている一方、原文と訳文のテクスト対照分析は欠けている。魯迅の翻訳法や翻訳ストラテジーを実証的に考察するものもなければ、翻訳理論に関連付けるテクスト対照分析もなかった。従って、魯迅の思想面の考察にとどまったか、魯迅自身の言説を過信し、事実と齟齬する結論に到達する場合があった。

続いて本研究に有効と思われる翻訳理論を取り上げて概観した。等価理論、直訳と意訳、帰化と異化、翻訳倫理を記述し、魯迅翻訳との関連性に論及した。

更に、先行研究における魯訳の時期の分け方の問題点を指摘したうえで、訳業の特徴によって、魯訳を時期ごとに厳密に分けた。1909 年に発表された『域外小説集』が意訳・帰化ストラテジーから直訳・異化ストラテジーへとシフトする訳作であること、そして、1919 年に訳文体が本格的に白話文へと転換したこと、また 1928 年 6 月からソ連（ロシア）文芸論、そして文学へと転じたことを論じた上で、本論へと展開した。

まず、若き魯迅の生立ちや当時の社会背景と関連付け、初期魯訳の訳業との関わりを分析し、内憂外患の時代背景、家庭の没落、新式学堂への進学、先駆者や同士からの影響といった、若き魯迅を取り巻く事情を整理しながら、中国伝統文化、また西洋の近代科学や新思潮の受容のされ方について論じてみた。更に初期魯訳のリストと照合しながら、訳作が矢野竜渓、森田思軒、東海散士及びその作品との関わりを分析し、日本留学を通じて魯迅は日本と西洋の思潮の両方の影響を大いに受けたと論じた。

それから『月界旅行』を中心に各訳作から用例を抽出し、ＳＴ・ＴＴのテクストを照合しながら、翻訳のテクニック、方法、ストラテジーを分析し、初期魯訳【Ⅰ】、【Ⅱ】の特徴及び翻訳動機を明らかにした。

その中において外国人名、章タイトルや章結び「帰化」処理、弁言のリライトや局所的な自由訳並びにＳＴ全体の再構築などを例に挙げながら、初期魯訳の前半の特徴を考察した。

「白話運動」や「言文一致運動」に緊密な関係を持った魯迅は 1919 年をもって訳文体を白文体に切り替えた。初期魯訳の訳文体についても各訳作から始まりの一文を取り上げて分析し、1919 年が魯訳文体の転換の年であることを立証した。

そして中期初め頃の訳作『現代日本小説集』を対象に、外国人名や度量衡及び色彩語彙の訳し方をめぐり、その対処法を検討すると同時に、量的な統計をしながら分析し、中期における魯迅なりの「翻訳法則」の定着化について考察した。その後、中期終わり頃の鶴見祐輔著『思想・山水・人物』といったエッセイの一篇『断想』を対象に、その外来語の訳し方を射程に納め、訳語の取捨選択、形式の統一性をめぐって検討し、再度魯迅の「翻訳法則」の定着化を検証した。

また『羅生門』とその魯訳及びほかの 6 本の中国語訳から用例を抽出し、ＳＴとＴＴ並びにＴＴとＴＴを語彙・文・表現レベルに分類し、対照・対比分析を交差的に行い、用いられた直訳法を手掛かりにその抵抗式・異化ストラテジー及び翻訳動機を考察した。魯迅の直訳という「術」は、実は異化ストラテジーという「策」を反映している。「直訳法」、「抵抗式翻訳」、「異化ストラテジー」こそが、自言語文化に陶酔するのではなく、翻訳という手段を用いて異質な語彙、語法、表現を中国語に持ち込み、更に人々の思想まで豊かにしようという魯迅の苦心を物語っている。魯迅の直訳法、異化ストラテジーから、積極的に外来のものを取り入れ、新鮮な血液を吹き込むことによって、自国の言語・文化、思考様式、意識観念を改善し、結局社会改革に繋ごうとしている魯迅の「翻訳豊饒観」が窺える。

最後に、『苦悶の象徴』や『象牙の塔を出て』における厨川白村の文芸論を分析し、その中に溢れる「人間苦」に対する思索、生命の根本への追究、そして社会批判の精神などの思想に共鳴を起こした魯迅の側面から解読し、その翻訳動機を把握した。少数派の存在である厨川の自国批判精神に富んだ言説に魯迅は共感を覚えている。儒学などの伝統文化を利用し、個性を抑圧する当時の中国のことを批判すると同時に、痺れた国民性に対しても訴えている。「五・四」運動後、中国に個人主義、無政府主義、マルクス主義といった様々な西洋の思潮が入ってきた。「個性の解放」と訴える西洋思潮に共鳴を覚えていると同時に、自惚れの「大中華主義」の傾向に強く反対している。いかなる物事にも常に懐疑的な態度を持ち、中国が抱える問題に目線を向けている魯迅は、日本の微温、妥協、保守、虚偽などの世相に容赦なく批判している厨川の言説に「痛快」と言っている。人に自らのことを反省させることがで

きる「文芸」の喚起機能を利用し、「文芸」を「人生のためのもの」と主張する厨川と魯迅との間に共通点が多々見受けられる。原稿料獲得のため、というような外在的な要因による訳業も存在するように、『苦悶の象徴』も大学の教材として魯迅に使われている。しかし内在的な要因からすると、厨川が日本のために調合した「良き薬」を一服の下剤として、当時様々な問題を抱えており、精神的に患っている中国の持病を治してくれればと魯迅は考えていたのであろう。

その後、「梁魯論争」について論じ、魯訳が「硬訳」と言われる経緯を整理した。梁が当時の新文学運動に不満を覚え、文学が社会的功利性を有するべきではないと主張した。それに対し、魯迅は文学が文学のための文学ではなく、社会的効用を有するべきだと主張している。その論争は何時の間にか人間性、階級問題、翻訳論、文芸論に及んでしまい、ついに感情的なものが混在するようになっていくのであった。結局魯訳が「死訳に近い硬訳」とまで梁に批評されている。

そこで『無産階級文学の諸問題』、『マルクス主義芸術論』及び『文学と批評』とその魯訳を照合し、用いられた翻訳技法を考察しながら、文芸論における魯迅「硬訳」の特徴を分析してみた。また、小説に於ける魯訳の特徴を同時期出版の各魯訳から用例を抽出して確認した上で、文芸論と比較し、同じ翻訳方法を採った場合、文芸論ジャンルと小説ジャンルの差異を観察した。それに基づいて魯迅の「硬訳」をどう見るべきかを提示した。また、エロシェンコの童話集、『小さいペーター』、『ロシヤお伽噺』のＳＴ・ＴＴテクスト分析を行いながら、『小さなヨハネス』とも関連付けて、中後期の童話翻訳における翻訳法を検討し、先行研究における誤った見方を是正した上で、童話翻訳の動機を究明した。

続いて、魯迅翻訳の歴史的な意義をめぐって論を加えた。魯迅の翻訳は現代中国語の形成にそれほど寄与していないが、現代中国文学、そして現代中国版画の発展に大きく貢献している。更に魯迅の翻訳活動と創作活動の相関を議論し、魯迅の翻訳言語がその創作言語への影響、また創作が翻訳から得た示唆について検討した。最後に毛沢東の魯迅評価、魯迅が左連との関わりを手掛かりに、神格化された魯迅の「像」を見直し、魯迅のイデオロギーと彼の翻訳活動との関連性について論じてみた。

2　結論

以下、(1) 魯迅翻訳の時期分け及び翻訳方法の確認、(2) 各時期の翻訳動機、(3) 魯迅翻訳の歴史的意義、(4) 本研究で得た成果の 4 点から、本研究の結論を示しておく。

(1) 魯訳の時期訳及び翻訳方法

初期【Ⅰ】は加減訳といった技法を多用し、改訳や意訳法を採っており、翻案、帰化という傾向が極めて強い。訳文体は文語が主眼である。この時点において、魯迅の中に熟した「翻訳思想」がまだ形成されておらず、訳文も一種の「模倣訳」に過ぎない。

「初期【Ⅱ】に入ると、『域外小説集』を境に、意訳法から直訳法にシフトし、原文志向の傾向を見せ始めた。文体は相変わらず文語であり、一時的により古い古文体に戻ったことがある。そのため、直訳法を採っているものの、抵抗式・異化翻訳の傾向はまだそれほど強くない。初期【Ⅱ】は魯訳の「空白期」である。

「言文一致運動」、「白話文運動」に深く関わっている魯迅は、1919 年を境にし、訳文体を白話文に切り替えた。中期初期に入ると、自分なりの翻訳法則が形成され、直訳法、抵抗式翻訳、異化ストラテジーといった特徴も顕著になってきた。直訳法や異化ストラテジーは魯迅の「翻訳豊饒観」を反映している。

梁魯論争が契機となり、1928 年 6 月に、魯迅はソ連文芸論の訳業に本格的に取り組み始めた。文芸論自身の難解さや翻訳法、ストラテジーの選択が原因で、魯訳は難解なものが多い。その結果、「死訳」と指摘されている。しかし、同様な翻訳法を採った小説翻訳の場合は、そのような傾向はそれほど強くない。1932 年を境とし、再び小説翻訳に転向した魯訳は、直訳、抵抗・異化翻訳の雰囲気が些か薄まってきた。

(2) 魯迅の翻訳動機

初期魯訳では、「語学力アップ」、「仕事の都合」、「翻訳界の欠点を補う」、「異質言語・文化の導入」のいずれも確かに魯迅の翻訳動機に当たる。その中で、異国の情勢及び文化情報の伝達、文学の表現形式の導入という意識も高いと言える。しかし何よりも、「立人」思想の延長線にある「民魂造り」こそ、この時期における魯迅のメイン翻訳動機だと言うべきである。「圧迫への反抗精神」、「民衆の科学への意識アップ」、「集団無意識への反省」「個々の人間としての成長」のいずれもこの「民魂造り」の中に包含されているのである。換言すれば、各個人が独立性を持ち、豊かに成長していくという「立人」、更にそれが、民族の「魂造り」に繋がっているという思想がこの時点ですでに魯迅の中で確立され、しかも、魯迅の生涯において一貫した願いとなっており、訳筆によって（無論後の創作活動も）訴えられ始めたのである。

中期から、世界の文学者のプロフィールとその文学活動、世界文学界の思潮及び流派など

を、「訳者附記」などの手法で中国に紹介している。と同時に、「民魂造り」という思想がより一層深まっている。病んでいる社会諸相、いわゆる社会文明批判を、訳筆を通じてリアルに写し訴えている。

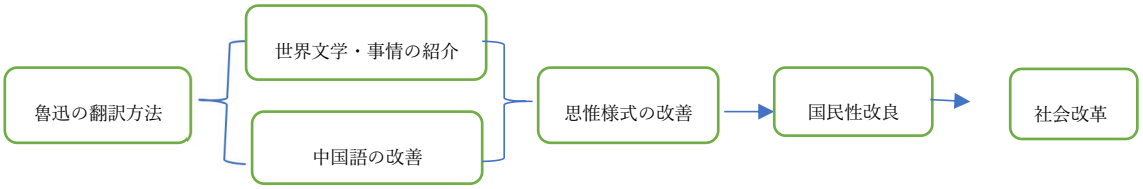
自言語・文化に陶酔すべきではなく、翻訳を通して中国の語彙、文法、表現を、ひいては思想まで豊かにしようと、魯迅は苦心している。異質なものの導入によって、中国語の改善はもちろんのこと、民衆の陳腐な観念を変え、社会改革に結びつけようとしたのである。即ち、「個人の成長」が「国民性の改善」と、また「国民性の改善」が「社会変革」に繋がるものだと魯迅は考えている。また、一方、他人の「自己」を尊重しなければならないという「国際人」の姿も翻訳を通じて見せている。「自由」、「博愛」、「自己批判」を主題とした訳作が魯迅の筆によって続々と生まれてきた。

後期に入ると、無産階級の文芸論に無知だと批判された魯迅は不満を覚え、ソ連文芸論の訳業に着手し始めた。と同時に、初・中期に続き、「世の中の不平との闘い」、「人間性の根本への問いかけ」などを訴えており、社会文明批判も続くのであった。

魯迅の直訳法や抵抗式・異化ストラテジーとその翻訳動機の関係を図にすると、図表終-1の通りになる。

図表終-1　魯迅の

直訳法や抵抗式・異化ストラテジーとその翻訳動機の関係



出所　筆者作成

(3)　魯迅翻訳の歴史的意義

魯迅の翻訳思想は既に普通にいう「翻訳」を遥かに超えており、もっと高い次元で「翻訳」を捉えているのである。その「翻訳豊饒観」そのものは、現在の翻訳界、ひいては保守的社会には、有益なものである。魯迅の翻訳動機は、中国語改良、文明批判及び国民性改造にある。魯迅の翻訳方法は、クローバル化社会において異質なものに対し、どう対応すべきかについ

て我々に考えさせている。「目標言語文化側に近い、流暢かつ美しい」訳文が求められる翻訳界の実践場に異なる声を提供しており、示唆を与えるものだと思われる。「直訳法」、「抵抗・異化」翻訳で異質なものを中国語に取り入れ、多文化を理解し、異文化接触の中で中国語や中国文化を改善しようと苦心していると同時に、世界の作家、文学作品、文芸思潮を中国に紹介し、翻訳を通じて民衆の精神改造、そして社会改良に繋げようと、魯迅は努めていた。すでに指摘したように、魯迅の翻訳を通じたの社会改革という最終的な目的はまだなしえていないものの、その努力がやがて社会的効果をもたらして来たのである。それは、世間の魯迅翻訳への反響や、他の翻訳者の魯訳の影響のもとで出した数多くの訳作からして、当時の社会に大きな影響を及ぼしたということが分かる。

現代中国語の形成には魯迅翻訳の貢献は限定的なものであるが、彼自身の創作に大きな影響を与えると同時に、現代中国文学の発展に大きく寄与した。魯迅とその翻訳の影響で翻訳活動をする者が数多くいる。また「中国木版画の父」とされる魯迅は中国現代美術、とりわけ木版画の発展にも大きく貢献した。

(4)本研究の主な成果

本研究は、従来の抽象論的な先行研究と違い、実証的な手法を用いて原文と訳文テクスト対照分析を行った結果、主に以下の5つの成果が得られた。

① 先行研究における時期の分け方の不適切なところを指摘し、魯迅の訳業をその特徴によって厳密に分け、各時期における魯訳の翻訳法、翻訳ストラテジー及び翻訳動機を解明した。

② 各時期の訳文体の特徴を明らかにしたうえで、意訳法から直訳法にシフトした年及びその代表作、訳文体が白話文に転換した年及びその代表作、そして魯訳の「空白期」を究明し、更に文芸論の魯訳が難解な原因を考察した。また、魯迅の翻訳観を「翻訳豊饒観」と定義づけた。

③ 魯迅自身の言説を過信した先行研究の誤りを是正し、テクスト対照分析に基づき、魯迅の童話翻訳は子供向けのものでもなければ、その翻訳法も意訳ではなく直訳であることを立証した。

④ 魯迅の直訳法、異化ストラテジー、抵抗式翻訳は原文志向を見せている。それがナイダの「形式的等価」と同じ発想に基づくものでもあり、同時代のチェスターマンの提唱した「再現的翻訳倫理」に合致しているのである。そして、翻訳の異質性の保持を重視し、翻訳の啓発の機能を重んじる魯迅の翻訳思想は、翻訳とは自国言語・文化の方向に訳すのではなく、起点言語文化の方向にするものだと主張した同時代のルドルフ・パンヴィッツの翻訳思想と共通するものである。更に、魯迅は一般に言われる翻訳よりもっと高い次元に立ち、翻訳を通じて言語の精密化を求める意図を示して

いる。従って、翻訳の究極的な目的は、「純粋言語」の形成を求める同時代のベンヤミンの翻訳思想と多少異なっているものの、そのストラテジーは酷似するものである。

⑤ 魯迅の翻訳が、現代中国語の形成にそれほど影響を及ぼしていないが、内容上においても表現上においてもその創作活動に多大な影響を与えると同時に、現代中国文学及び現代木版画の発展にも大きく寄与していることを立証した。その上、中国で神格化された魯迅のイデオロギーを検討し、魯迅「像」を描き直し、その翻訳活動との関連性を提示してみた。

3 残された課題

本研究は、以下のような課題が残されている。

(1) 日本語のほか、ドイツ語経由で重訳された魯訳の中に、翻訳研究に価値の高いものもある。例えば童話であるものの、言葉遣いは簡単だが、哲学的な言い含みが多いフアン・エーデンの『小さなヨハネス』、そして未完成のままに残された最後の訳作、ゴーゴリの『死せる魂』などは、魯訳の翻訳法及び訳文体を研究するに値するものだと考えられる。この点はドイツ語が読めない筆者の限界であるが、共同研究の可能性を求めながら進めていきたい。

(2) 魯訳に言及された世界各国の作家及びその作品群、そして各流派、各主義が極めて多い。それも筆者の限界であり、すぐに解決できる問題でないと認識しているが、今後、それについて引き続き研鑽すると同時に、翻訳者行動論という視点で、魯迅と他の翻訳者との比較研究を課題の一つにしていきたい。

(3) 本研究は中国と日本における先行研究を視野に入れながら、魯迅の翻訳の営みを分析したうえで論述を行なっているものである。しかし、欧米諸国や他の地域においても魯迅の翻訳を対象にしている研究者、そして研究成果も考えられる。それらは本研究では取り扱っていないのであるが、今後の課題として研究を展開していきたい。

参考文献

日本語文献

秋田雨雀編（1921）『エロシェンコ創作集・夜明け前の歌』叢文閣

芥川龍之介（1923）『羅生門』新潮社　p.1 - 13

井上勤（1885）『九十七時二十分間月世界旅行』辻本尚古堂・自由閣

R・JAKOBSON 著　井上嘉彦訳（1984）『言語とメタ言語』勁草書房

パース著　内田種臣訳（1986）パース著作集 2『記号学』勁草書房

ピオ・バローハバスク著　笠井鎮夫訳（1925）『バスク牧歌調』『海外文学新選』第 13 巻　新潮社

片上伸（1926）『無産階級文学の諸問題』新潮社

ロマーン・ヤーコブソン著　川本茂雄監修（1973）『一般言語学』みすず書房

木坂基（1988）『近代文章成立の諸相』和泉書院

厨川白村（1920）『象牙の塔を出て』福永書店

厨川白村（1924）『苦悶の象徴』改造社

工藤貴正（1989）「魯迅の翻訳研究（1）-外国文学の受容と思想形成への影響，そして展開 -　- 翻訳準備時期 - 」大阪教育大学紀要　第 I 部門　人文科学　第 38 巻　第 2 号 p.137-148

工藤貴正（1991）「魯迅の翻訳研究（2）-外国文学の受容と思想形成への影響，そして展開 -　- 翻訳準備時期 - 」大阪教育大学紀要　第 I 部門　人文科学　第 39 巻　第 2 号 p.117-125

工藤貴正（1992）「魯迅の翻訳研究（3）-外国文学の受容と思想形成への影響，そして展開 -　- 翻訳準備時期（日本留学期）- 」大阪教育大学紀要　第 I 部門　人文科学　第 40 巻　第 2 号 p.97－111

工藤貴正（1993）「魯迅の翻訳研究（4）-外国文学の受容と思想形成への影響，そして展開 -　- 翻訳準備時期（日本留学時期〈『哀塵』〉）- 」大阪教育大学紀要　第 I 部門　人文科学　第 41 巻　第 2 号 p.71－88

工藤貴正（1994）「魯迅の翻訳研究（5）-外国文学の受容と思想形成への影響，そして展開 -　- 日本留学時期（ヴェルヌ作品受容の状況）- 」大阪教育大学紀要　第 I 部門　人文科学　第 42 巻　第 2 号 p.129－140

工藤貴正（1995）「魯迅，ファン・エーデンへの共鳴 - 魯迅訳，パウル・ラッヘ『〔小さな

ヨハネス〕序文』とポル・デ・モント『フレデリック・ファン・エーデン』の記述を中心に‐」大阪教育大学紀要　第Ⅰ部門　人文科学　第44巻　第1号 p.23－31
フェルディナン・ド・ソシュール著　小林英夫訳（1940）『一般言語学講義』岩波書店
Eugene A.Nida　Charles R.Taber　Noah S.Brannen 著　沢登春仁　升川潔訳『翻訳-理論と実際』研究社
志賀正年（1955）「『魯迅翻訳研究』（一）‐訳歴総説‐」天理大学学報　第19輯 p.71-92
志賀正年（1956）「魯迅翻訳研究（二）翻訳理論‐初期‐」天理大学学報　第21輯 p.91-112
志賀正年（1956）「魯迅翻訳研究（二）翻訳理論‐初期補・中期‐」天理大学学報　第22輯 p.45-62
志賀正年(1957)「魯迅翻訳研究（二）翻訳理論-中期‐続」天理大学学報　第24輯 p.103-118
志賀正年(1958)「魯迅翻訳研究(二)翻訳理論‐後期(1)‐」天理大学学報　第27輯 p.100-111
志賀正年(1969)「魯迅翻訳研究(二)翻訳理論‐後期(2)‐」天理大学学報　第64輯 p.52-70
ルナチャルスキイ著 茂森唯士訳（1925）『新芸術論』至上社
単海林　(2015)「直訳手法から見る魯迅の異化翻訳」‐「羅生門」の中国語訳の比較を通して‐東アジア日本語教育・日本文化研究　第18輯 p.351－369
単海林　(2016)「魯迅の初期翻訳ストラテジー」‐「九十七時二十分間月世界旅行」の中国語訳を中心に‐　国際連語論学会　連語論研究〈Ⅴ〉日本語文法研究会　第39号 p.176－184
単　海林（2017）「中期における魯迅の翻訳法則の定着化について」‐『現代日本小説集』を例に‐連語論研究〈Ⅶ〉日本語文法研究会　第41号　p.188－196
単　海林（2018）魯迅中期翻訳における外来語の訳し方をめぐって：『断想』とその魯訳を例に‐国際連語論学会 連語論研究（Ⅸ）日本語文法研究会　第43号 p.177-185
高杉一郎編訳（1993）『エロシェンコ童話集・解説』偕成社
高橋晩成訳（1930）『ロシヤの御伽噺』『ゴーリキイ全集』第14巻 改造社
アンソニー・ピム著 武田珂代子訳（2010）『翻訳理論の探求』みすず書房
鳥飼久美子編著（2013）『よくわかる翻訳通訳学』ミネルヴァ書房
ナイダ著　成瀬武史訳（1973）『翻訳学序説』開文社
ルナチャルスキイ著 昇曙夢訳（1928）『マルクス主義芸術論』白揚社
鶴見祐輔（1925）『断想』『思想・山水・人物』大日本雄弁会
林房雄訳（1927）『小さいペーター』暁星閣
藤井省三（2011）『魯迅－東アジアを生きる文学』岩波書店

ベンヤミン著（1923）山口裕之訳（2011）「翻訳者の課題」『ベンヤミン・アンソロジー』河出文庫
モナ・ベイカー　ガブリエラ・サルダーニヤ編　藤濤文子監修・編訳　伊原紀子・田辺希久子訳（2013）『翻訳研究のキーワード』研究社
魯迅著　増田渋訳・松枝茂夫・竹内好訳（1956）『魯迅選集』1-8 巻　岩波書店
魯迅著　増田渋訳（1956）　『翻訳についての通信』『魯迅選集』岩波書店
魯迅著　増田渋訳（1956）　「『硬訳』と『文学の階級性』」『魯迅選集』 岩波書店
魯迅著 松枝茂夫訳（1956）『題未定・草』『魯迅選集』 岩波書店
丸山昇（代表）訳（1985）　『魯迅全集』学習研究社
丸山昇（代表）訳（1985）　『沼のほとり・訳者附記』『魯迅全集』第 12 巻 学習研究社
丸山昇（代表）訳（1985）　『エロシェンコ童話集・序』『魯迅全集』第 12 巻 学習研究社
丸山昇（代表）訳（1985）　『狭い籠・訳者附記』『魯迅全集』第 12 巻 学習研究社
丸山昇（代表）訳（1985）　『魚の悲しみ・訳者附記』『魯迅全集』第 12 巻 学習研究社
丸山昇（代表）訳（1985）『春の夜の夢・訳者附記』『魯迅全集』第 12 巻 学習研究社
丸山昇（代表）訳（1985）『ひよこの悲劇・訳者附記』『魯迅全集』第 12 巻 学習研究社
丸山昇（代表）訳（1985）『桃色の雲・序』『魯迅全集』第 12 巻 学習研究社
丸山昇（代表）訳（1985）『現代新興文学の諸問題』『魯迅全集』第 12 巻　学習研究社
丸山昇（代表）訳（1985）『芸術論　序』『魯迅全集』第 12 巻　学習研究社
丸山昇（代表）訳（1985）『文芸と批評・訳者附記』『魯迅全集』12 巻学習研究社
丸山昇（代表）訳（1985）『苦悶の象徴　序言』『魯迅全集』第 12 巻　学習研究社
丸山昇（代表）訳（1985）『ある青年の夢　訳者序』『魯迅全集』第 12 巻　学習研究社
ジュール・ヴェルヌ著　三木愛華　高須墨浦訳（1886）『拍案驚奇　地底旅行』　九春堂
三ツ木道夫編訳（2008）『思想としての翻訳　ゲーテからベンヤミン、ブロッホまで』白水社
毛沢東「新民主主義論」日本国際問題研究所中国部会編（1974）『中国共産党史資料集』第 10 巻　勁草書店
山田敬三（2008）『魯迅　自覚無き実存』　大修館書店
山本正秀（1972）『言文一致の歴史論考』　桜楓社
盧濤（2000）「中国語における『空間動詞』の文法化研究－日本語と英語との関連で」白帝社

中国語文献

白靖宇（2010）《文化与翻译》中国社会科学出版社

崔琦（2016）<从《游戏》到《端午节》>《中国现代文学研究丛刊》

方梦之主编(2011) 《中国译学大辞典》 上海外语教育出版社

郭沫若（1989）《郭沫若全集》第 16 卷 人民文学出版社

郭建中编（1999）《文化与翻译》中国对外翻译出版公司

顾　钧（2009）《鲁迅翻译研究》福建教育出版社

高宁（2014）《翻译教学研究新探》南开大学出版社

杨自俭 刘学云（2003）《翻译新论》湖北教育出版社

金隄（1989）《等效翻译探索》中国对外翻译出版公司

孔昭琪（2010）<《现代汉语词典》对“鲁迅词汇”的收录过程> 《鲁迅研究月刊》

鲁迅（1958）《月界旅行》《鲁迅译文集》人民文学出版社

鲁迅（1958）《鲁迅译文集》 人民文学出版社

鲁迅（2004）《鲁迅文集》黑龙江人民出版社

鲁迅（2005）《鲁迅全集》人民文学出版社

鲁迅（2005）《坟 题记》《鲁迅全集》 人民文学出版社

鲁迅（2005）《“硬译”与“文学的阶级性”》《鲁迅全集》人民文学出版社

鲁迅（2005）《关于翻译的通信》《鲁迅全集》人民文学出版社

鲁迅（2005）《关于翻译》《鲁迅全集》 人民文学出版社

鲁迅（2005）《新的世故》《鲁迅全集》 人民文学出版社

鲁迅（2005）《“题未定”草》《鲁迅全集》人民文学出版社

鲁迅 (2005) 《书信 340515 致杨霁云》《鲁迅全集》人民文学出版社

鲁迅（2008）《鲁迅译文全集》福建人民出版社

鲁迅（2008）《哀尘》《鲁迅译文全集》第 8 卷 福建人民出版社

鲁迅（2008）《造人术》《鲁迅译文全集》第 8 卷　福建人民出版社

鲁迅（2008）《红星佚史 译诗》《鲁迅译文全集》第 8 卷 福建人民出版社

鲁迅（2008）《裴彖飞诗论》《鲁迅译文全集》第 8 卷　福建人民出版社

鲁迅（2008）《地底旅行》《鲁迅译文全集》第 1 卷　福建人民出版社

鲁迅（2008）《谩》《域外小说集》《鲁迅译文全集》第 1 卷　福建人民出版社

鲁迅（2008）《默》《域外小说集》《鲁迅译文全集》第 1 卷　福建人民出版社

鲁迅（2008）《四日》《域外小说集》《鲁迅译文全集》第 1 卷　福建人民出版社

鲁迅（2008）《镫台守》《域外小说集》《鲁迅译文全集》第 1 卷　　福建人民出版社

鲁迅（2008）《爱罗先珂童话集・狭的笼》《鲁迅译文全集》第 1 卷福建人民出版社

鲁迅（2008）《艺术论》《鲁迅译文全集》第 4 卷　福建人民出版社

鲁迅（2008）《文学与批评》《鲁迅译文全集》第 4 卷　福建人民出版社

鲁迅（2008）《现代新兴文学的诸问题》《鲁迅译文全集》第 4 卷 福建人民出版社

鲁迅（2008）《小彼得・煤的故事》《鲁迅译文全集》第 5 卷　福建人民出版社

鲁迅（2008）《俄罗斯的童话》《鲁迅译文全集》第 6 卷　福建人民出版社

鲁迅（2008）《山民牧歌》《鲁迅译文全集》第 7 卷 福建人民出版社

《鲁迅大辞典》编委会（2009）《鲁迅大辞典》人民文学出版社

芥川龙之介著 鲁迅译（1958）《罗生门》《鲁迅译文集》人民文学出版社

望・蔼覃著 鲁迅译（1958）《小约翰》《鲁迅译文集》人民文学出版社

芥川龙之介著 吕元明译（1981）《罗生门》《芥川龙之介小说选》人民文学出版社

李长之（2009）《鲁迅批判》北京出版社

李松睿（2016）<是聪明，聪明，第三个聪明--试论鲁迅的翻译语言>《鲁迅研究月刊》

赖明珠訳（1997）《挪威的森林》时报文化

李得凤等译 杰里米・芒迪（2007）《翻译学导论---理论与实践》商务印书馆

罗新璋 陈应年编（2009）《翻译论集》商务印书馆

芥川龙之介著　楼适夷译（1998）《罗生门》译林出版社

芥川龙之介著　林少华译（2005）《罗生门》青岛出版社

芥川龙之介著　聂双武译（1998）〈罗生门〉《芥川龙之介短篇小说选》湖南文艺出版社

彭明伟（2008）<周氏兄弟的翻译与创作之结合>《鲁迅研究月刊》

戚义明（2016）《新中国成立后毛泽东自我评价四则》湘潮杂志社

孙迎春主编（1999）《译学学大辞典》中国世界语出版社

王德后编（2006）《鲁迅杂文全编》陕西师范大学出版社

吴钧（2009）《鲁迅翻译文学研究》齐鲁书社

芥川龙之介著文洁若译（2003）《罗生门》华夏出版社

芥川龙之介著魏大海译（2012）〈罗生门〉《芥川龙之介全集》第一卷山东文艺出版社

许钧（2003）《翻译论》湖北教育出版社

许钧 穆雷主编（2009）《中国翻译研究》上海外语教育出版社

许寿裳（2011）《亡友鲁迅印象记》岳麓书社

许广平（2010）《鲁迅回忆录》长江文艺出版社

韦努蒂（Lawrence Venuti）著　张景华 白立平 蒋晓华主译 《译者的隐形-翻译史论》香港理工大学翻译研究中心编 外语教学与研究出版社 2009

张全之 徐璐（2018）<鲁迅原创词汇（短语）汇释>《鲁迅研究月刊》

周作人（2014）《周作人谈鲁迅》北方文艺出版社

朱湘军（2014）<从迁移理论看鲁迅的翻译语言对创作语言的影响>《上海翻译》

周海婴 周令飞（2011）《鲁迅是谁》金城出版社

《翻译通讯》编辑部编（1984）《翻译研究论文集》外语教学与研究出版社

ネット・コーバス資料

青空文庫 http://www.aozora.gr.jp/

中日対訳コーバス　北京日本学研究センター　2003

謝辞

このたび学位論文を提出するに当たり、お世話になりました関係各位に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

主査の広島大学大学院人間社会科学研究科マネジメント専攻教授盧濤先生に、私の博士後期課程在学中の 6 年間に亘り、論文作成の基本から翻訳分野に関するヒント提示、そして関連文献収集に至るまで、ご指導やご協力を頂きました。研究面において叱咤激励してくださると同時に、家庭の事情で一時的に落ち込んでいた私のことを温かく見守ってくださいました。公私ともにお世話になりましたことに、心より感謝申し上げます。

副査を快く引き受けて頂きました広島大学大学院人間社会科学研究科マネジメント専攻教授小柏葉子先生、同専攻准教授松嶋健先生、そして異動されました同専攻教授村松潤一先生、定年退職されました同専攻教授戸田常一先生、昨年急逝されました同専攻教授星野一郎先生に厚く御礼申し上げます。先生方の研究ぶりを目の当たりにし、多大な感銘を受けたものであり、私の大なるエネルギーとなりました。同じくマネジメントといえども、先生方が専門とされている分野と直接的には関連しない研究テーマであるにもかかわらず、ご指導頂きましたことに改めて感謝申し上げます。

日本語の表現に関して、新潟県新潟市ご在住の堀正実様と宮崎県延岡市ご在住の齊藤素様に修正をして頂きました。厚く御礼を申し上げます。

また、在学中、事の大小を問わず、学業の面や生活の面において、広島大学東千田キャンパス支援室の関係各位、そして広島市留学生会館の関係各位の方々は親切かつ丁寧に対応し、便宜を図ってくださいました。衷心より感謝申し上げます。

そして、盧ゼミの皆さんにも貴重な意見を頂きました。共に歩んで参りました日々が一生忘れ難い思い出であり、宝物として大事にして参ります。皆さんに感謝するとともに、今後のご活躍を心よりお祈りします。

最後に、首を長くして私のことを待ってくれた家族に感謝したい。長年子供の面倒を見てくれた母、働きながら家庭を守ってくれた家内、涙ながらに私の帰りを待っていた娘、そして先日生まれてきたばかり、まだ会っていない我が子二人、とりわけ私が在学中亡くなった父に申し訳ないと言っておきたい。